

ダイヤのエース Plus Ultra

奇述師

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無名のピッチャー山元虹稀は中学校軟式野球天才打者雨宮 瑠偉との試合で青道高校スカウトの目に留まり青道高校へ進学を決めた。

そこで待っていたのは自分を遥かに越える実力者達との出会い、困難の数々……投手不足の青道に即戦力として期待されている少年は青道高校を甲子園に導けるのか？

期待も、重圧も、限界すらもはね除けて、更に向こうへ！

ダイヤのエースplus ultraxの再編成となります、多少の前作との違い

があると思いますがある程度文章力が上がっているかと思われるのもしよければお読みください。

また私自身多少の野球経験があり独自の理論を交えて話を進めていきます、間違いなど多いですが暖かく読んでくださるとありがたいです。

目次

運命の試合	1
プロローグ表	9
プロローグ裏	23
始動	35
出会い：沢村栄純	52
出会い：吉川春乃	59
真つ向勝負	74
現在位置	91
助走	111
軋む歯車	123
開かれた扉	139

夏の始まり	155
選ばれた責任	170
アカシア	185
●●●が目覚める日【前編】	204
●●●が目覚める日【後編】	218
暗雲	234
夢の舞台へ	247
夏の大会編	
梅檀の双葉	263
青道VS秋川 前編	281
青道VS秋川 後編	297
激闘：エキシビジョン	312
精密機械	335

V S 稲城実業：好機と試練	468
V S 稲城実業：均衡	448
V S 稲城実業：出陣	432
V S 稲城実業・開戦	416
嵐の前：万事順調	402
387	
ダイヤのエース：R I S I N G	
粉砕	372
崖っぷち	355

運命の試合

1

11時30分から始まった試合は2時間30分過ぎても終わらず両者4対4のまま延長11回裏へ。中学軟式野球全国大会の第2回戦は相応しくないほどの熱気を帯びて終盤に差し掛かった。

もしこの回で終わらなければ明日へ再試合になる予定で、そうなれば先攻チームに勝ち目はないだろう。

マウンドが最も暑くなるといつても過言ではない午後2時の時間帯、先攻チームのピッチャーが炎天下のマウンドへ向かう。

一人で10回を投げきり8回から始まった無死満塁のタイブレーク方式でも自責点を許さず投げ抜いている齡15の少年は、大きく肩で息をしていた。

球数は130を越え疲労の色は濃くなるばかり。

背中に背負ったエースナンバーはどこか頼りなく満身創痍の体は弱々しい、表情も虚ろで砂にまみれた姿なのに力強く、大きく見えた。

既に限界など越えているであろう少年は肩で息をしいニング始めの投球練習を始

める、制球が定まらずキャッチャーの前でボールが跳ね度々取りこぼしていた。

『もういい！打たれて帰ってこいお前は良くやった』

不意にベンチから聞こえてきた声、それに呼応するようにグラウンドからも称賛の声が聞こえる、そして父兄の人たちからも同じ声が。

相当信頼されてる投手だな、と青道高校副部長の高島 礼は思った。

もとよりこの試合を見に来たのは後攻チームのファースト、中学校通算15ホームーの怪物右打者、雨宮 瑠偉を見に来ていたのだ。

軟式ボールを普通の球場でスタンドインさせるのは難しい、理由としては硬式球よりも柔らかいためボールがつぶれてしまいスイングが速ければ速いほど、芯で捉えれば捉えるほどホームランからは遠ざかるからだ。

バットを柔らかい材質で覆い飛距離を伸ばせるバットも販売されてはいるもの。まだ今大会では使用することが許されていない。

しかし15HRを放つ中学軟式野球最強打者はそれを可能にした、金属バットを用いて規格外のスイングスピードとわざと芯で打たない技術によって1本出れば十分凄いはずの奇跡に近い確率をものにしたのだ。

伸び代も将来性も抜群の打者を見に来たはずの高島 礼はいい誤算が起こってしまったと鳥肌を立てさせて試合の行く末を一野球人として眺めていた。

優勝候補筆頭の強豪と注目度はたかが知れている初出場の無名校。

先攻の無名の中学校、背番号1を背負った山元 虹稀の存在が圧倒的な實力差を埋めたのだと思わずにいられなかった。

序盤の投球を見る限りは打たせて取るタイプの中々いいピッチャーだなと普通の印象を抱いていた、2回到雨宮に2ベースは打たれたもののその後はノーヒットで0点に抑える。

卓越した投球術と制球を生かし厳しいコースでの勝負、遊び球は一切なしの中学生とは思えない落ち着きぶりでテンポよく悠々とマウンドを行き来した。

だがそんな考えはイニングを重ねるごとに消えていく。

回を重ねるごとに増してくる球威と圧倒的な存在感、剥き出しの闘志、序盤の冷静で落ち着きを払った投手とは見る影もないくらいに全く別物へと成り代わっていた。

お山の大将でありながら投げる姿でチームを盛り上げ真つ向勝負で三振の山を築き上げる。

切れのよすぎるウイニングショットは捕手が取りきれぬほどに、打者が思わず振ってしまいうほどだ。

中盤に差し掛かると振り逃げが目立ち始め、当然リズムは悪くなる、だがスコアリ

ングポジションにランナーを置きながらも得点の気配を見せない投球は全てのピンチをねじ伏せていた。

お互いに0対0のまま突入したサドンデスでは無死満塁から自ら右中間を破る2ベースヒットで3得点をあげる大活躍。

これで決まったかと思いきやその回の裏、突然の2者連続の振り逃げで2失点、内野ゴロの間に1点、再び試合は振り出しに戻った。

その後も互いに1点ずつ獲りそして延長11回裏へ、灼熱の球場のボルテージが一層上がり球場がひとつの生き物のように蠢く。

『4番、ファースト雨宮君』

ウグイス嬢のコールにベンチやスタンドが一気に湧いた、それに伴って二人の間だけは冷たい緊張感で満たされていた。

雨宮瑠偉は中学軟式野球、もしかすれば中学野球最高の打者だと自らが理解している。

通算打率は6割を越え軟式球では芯で打てばボールは潰れて大きなフライが空に舞う中学生離れ、並みの高校生を越えるスイングができ、尚且つ身体能力も優れものだからだ。

努力をすれば必ず実る、とまでは言い過ぎかもしれないがそれに近い結果と能力がある。

客観的に見ても兩宮瑠偉は紛れもなく天才だと自負していた。

けれど、自分を遥かに越える化け物が突如として現れた、道端の石ころのはずであつた通過点のチームのエース。

現在対戦成績は3打数1安打・振り逃げ1・三振2。

完全に手玉にとられる屈辱、自惚れていた自分に対する怒り、自分を凌駕する才能への恐怖。

だからこそ思う羨望、出会えたことへの感謝、久々に感じる絶対に負けたくないという強い意思。

―感謝する、久々に燃えてきた

自分のためにも、チームのためにも打たなければならぬ場面でまわってきた巡り合わせに、自分と同等かそれ以上か計り知れない投手に出会えたことに兩宮瑠偉は思わず笑みがこぼれた。

何時以来かの雄叫びを上げて投手を見据える、殺気に近い打つてやるといふ思いが山元虹稀を射抜いた。

体が熱い、腕は鉛のようで一球投げただけで倒れそうだ。キャチャーがマウンドへくるが何を言っているか俺の耳には届かない。

グラウンドの選手、ベンチメンバー、監督、父兄たちが満足そうな顔をしているのが酷く気に入らない。

—なんで、勝手に満足してんだよ

だからか、バッターが人でも殺しそうな雰囲気ですべて全力で俺に向かってきていることが妙に嬉しかった。

無死満塁、ランナー無視で振りかぶる、右バッターにめっぴ強い強いカーブは完璧な指のかかり、リリースから理想的な軌道を描いて外角低めへ、審判のコールは…ボール。

今のは仕方ない、入れば儲けもんだった。

打者は雨宮、全国トップレベルのバッターらしい、そんな凄い奴と1対1で勝負出来るのなんてたまらない。

体が熱い、腕は鉛のようで一球投げただけで倒れそうだ、けれど…楽しくて仕方がない！

2球目、インコースヘストレート。

寒気がするほどの恐ろしいスイングはボールにかすることなくミットへ収まる、これで1ボール1ストライク。

3球目、外角ヘカットボール。雨宮が反応するがバットに当たらず1ボール2ストライク

捕手からの返球を受け大きく息を吸う。膝が笑い頭はポーツとしている、指先に力が入らずロージンを触った。

全てが今日の最高の球だ、自分でも打たれる気は全くしない、それでも雨宮瑠偉は口元に微笑を浮かべ語りかけてきた。

声は聞こえないけどわかる、最高のボールを投げてこいと言われていた。

4球目、史上最高の球を投げるために大きく振りかぶった、この一球で雨宮瑠偉を打ち取りに全身全霊をかけるために。

左足を高く上げ右肩を下げた、一度キャッチャーへ背を向けて右足へ全体重を乗せイメージは大きなたらいを投げるように無駄なく体重移動を行う。

体重の8割を後ろに残すイメージで左足を思いっきり踏み込んだ、同じく壁の役割をしていたグローブを思い切り左脇腹に引き付け同時に左右の肩甲骨を縮めた、胸は限界まで張り背中には鈍い痛みが走る。

上半身を左側に、腕をなるべく縦振りで出せるように傾ける、変に力が入っていないためか自分でも驚くほどに軽く、だか今までよりも強く、鋭くボールがリリース出来た。

投げた瞬間にベストピッチだと確信できた、一番自信のある外角低めのストレー
ト。

ミットに収まる瞬間を見ることはなく視界は暗くなり意識が遠のいた。

今まで聞いたこともない金属音が耳を貫く。

歓声が耳まで届いた、結果はどうなったか分からない、けれども結果なんてどうでもいいくらいに雨宮瑠偉との勝負が楽しかった。

プロログ表

3

試合に負けたと分かったのは病院のベッドの上だった。

- ・ 重度の脱水
- ・ 右太もも裏軽度の肉離れ
- ・ 第十二肋骨疲労骨折
- ・ 肩、肘、背中の炎症

これが地区大会からこれまで体を無理矢理使ってきた代償だ。

どうやら救急車で運ばれたらしく大会会場最寄りの病院に搬送されたそうだ。

その一方で散々酷使してきたのにそこまで大きな怪我がないことが不謹慎だけれども虹稀は少し嬉しかった。

「虹稀かっこよかったよ、姉弟じゃなきや惚れてたね」

「はいはい、ありがとう」

ほわんほわんと言う表現が一番似合う虹稀の3つ年上の姉である山元 奏虹は非常に明るい笑顔で虹稀と話していた。

山元奏虹は勉強ができ顔も非常に整っているまさに才色兼備を体現しているような人である。

しかし、天然というか不思議ちゃんというか、少々変わっており良くも悪くもマイペース過ぎるのが玉に傷でもある。

「いや〜最後のは凄かったよ！素人の私でもわかったもん、今までのがギューンだったのに最後はギューン！バットもった子もビュンじゃなくてバキョー！で「ごめん、何言ってるかわかんない」

「それからねー、会場もワーだったのが一瞬でシーンって」

「俺が倒れたからじゃない？」

「あ、そうかも。監督さんとか感動しすぎて虹稀にキスしようとしてたんだよ」

「えっ？」

一瞬で虹稀の顔が青ざめた、おそらく倒れたことによる応急措置として監督側もパニックになり人工呼吸か何かをしようとしたのだろう。

「それはそうと」

「いや、それはそうとではなくて、結局俺は監督に人工呼吸されたの？されなかったの？」

「なんかね、雨宮君？だっけ、あの子が監督羽交い締めにして止めてくれていたよ」
「よかった…本当によかった…」

感謝してもしきれねえと涙を浮かべて安堵したのか持ち上げていた上半身をベッドに任せ、暫くゴロゴロと寝返りをうって過ぎ去った厄災からの無事を嘸み締めた。

不意に虹稀がよく耳にする着信音がなぜか奏虹の方から聞こえてきた、一瞬間聞き間違いかと考えたものの間違いなく聞こえてくる。

「お母さんは今日の夜迎えに来るって、とりあえず大事に至らなくて安心してた」

「喋りながらブラインドタッチでスマホを弄っているところ申し訳ないんだけどスマホ返してもらっていい？」

「はいはい」

勝手に自分のものを姉に持ち出され過ぎて感覚が麻痺している虹稀は少しおかしなやり取りを当たり前のようにこなした。

主に持ち出される理由としては奏虹の友人の連絡先を入れられたり、立場的に強い虹稀の粗を探すためでもある。

セキュリティはしっかりしていたので対したことはできないと思っていたが優秀な頭脳を駆使してセキュリティをこじ開けられた、最も今扱われているスマホは最低限しか使わないので問題ではない。

また親もこの事を知っており奏虹が知らない2台目のスマホがあるので親もたまたま起こすアホな姉の行動は基本的に無視していた。

返してもらったスマホを見てみると通知画面に夥しいほどの通知と電話が、宛先は雨宮瑠偉と記されており「なんでそんなになるまで野球してたんだよ!」「もつと自分のこと考えろ」「これからがあるのになんでそんな無茶したんだよ」と仰々しい言葉の羅列が表示されている。

「色々突っ込みたいことあるけどさ、雨宮瑠偉にどういう連絡したの?」

「虹稀の状態聞かれたから足の筋肉が切れて、あばら骨も折れてて、肩・肘・背中も危なくて今寝たきりって」

「そりゃ心配するわ」

一先ず電話で荒ぶる雨宮瑠偉を宥めて誤解を解いた、姉の言葉足らずの説明と冷静さを取り戻すと罰が悪そうに今のことは忘れてくれ、と締めくくって電話を終える。

雨宮は結構お人好しな人なのかもなど試合で対峙しただけの選手と奇妙な縁を感じていた。

ようやく落ち着いて、やっと実感する「夏が終わった」という実感。だから考えないといけないこれからのこと、則ち本気で野球をするかしないかの選択だ。

まず、虹稀はバカではない。瞬時の判断力や先を見通す思考、ましては自分独自のスポーツに対する理論を持っている。その上で頭もいい県内No. 1の進学校普通科には普通に勉強すれば行ける程度に、だからこそ野球か勉強かどちらをとるか悩んでいた。

3年間野球漬けの日々を送るか、普通に勉強して将来へ向けて頑張るか。

どっちを選ぶうか悩んでいた、たかが全国大会2回戦で負けてしまうような投手がこの先野球で生きていけるのか。

「おっ、なに黄昏てんの?」

「これからのこと」

なるほどと言わんばかり納得する奏虹、顔が整っている分表情が非常に分かりやすい。

「野球やらないの?」

「野球はやるよ、でも姉ちゃんと同じ学校に行くかも」

「え〜！私が行っているとこ凄く弱いよ、それでもいいの？虹稀くらいの選手だったら推薦の話とか特待の話とかきつと来ると思うけどなあ」

たかが全国大会2回戦の投手に来るわけない、という言葉を飲み込んだ、全国大会に行かなくても来る選手は来る、ただの負け惜しみだと虹稀はわかっていたからだ。

「来たら、考えるよ」

「ふ〜ん」

つまらなさそうに答える奏虹、病院の中にあるコンビニで買ってきたおにぎりやら弁当やらを取り出して虹稀にわたすと、いつものようなふわふわとした柔らかい雰囲気は消え去り厳しい目付きで

「あんた、何で野球やってんの？」

そう、問いかけた。

久々に奏虹の真剣な顔を見て虹稀は本気で考える、こういう時の姉は異様に鋭く何か真理をつくような凄みをもっている。

「虹稀が野球を始めたのは中学1年から、だったよね。それまではバスケットとサッカーを

やっていてどっちにも専念しようとはしていないかった、多分何か違うなって思っていたんじゃない？」

「そう……だね、楽しくない訳じゃなかったけど」

「元々運動神経が優れていた虹稀はいつもバスケットクラブの監督とサッカークラブの監督がどっちかに専念させた方がいいと言いつ争っていたことを知っている？何度もうちに來て熱心に話していたよ、お母さんは虹稀のやらせたいようにやらせるって干渉することとはなかったけどね」

そんな中虹稀が小学校6年生で見たWBCの決勝戦細いバットで逆転のヒットをを放つ背番号51そして試合を決めてガッツポーズするマウンドの男。

そんな中一番心引かれたのはバスケットやサッカーにないピッチャーとバッターの一騎打ち、マウンドのピッチャーもボックスのバッターもパスを出す味方やサポートしてくれる仲間がいない闘志のぶつかり合い、その光景を見て少年はすぐに野球の虜となった。

自分もあなりたいと、あの人たちのようになりたいと憧れた。ボールを投げることも、取ることが、打つことが楽しくて仕方なかった。

出来ることならこのまま野球に触れながら生きていきたいと思ってしまう、一目惚

れしたかのようにとりつかれていた。

「本気でやれば虹稀は何でも出来る」

「それは買い被りすぎ、何でもは出来ないよ」

「だいじょーぶ、お姉ちゃんのは感は当たるから。少年よ、大志を抱けてね」

「大志、ねえ」

大志なんて大層なものは抱いていない、しかし昨日の雨宮瑠偉と対峙したときのよ
うな高揚を、胸が高鳴るあの楽しさは忘れられない。

互いが互いに本気を出してぶつかれる、怖いけれども踏み込む覚悟は整った、どこ
に行くかはわからないけれども先ずは甲子園。

あの熱い聖地を制覇して見せる。

「なんて現実見ろって話だよな」

無茶無謀、けれどもきつとそこには何よりも価値があるものがあるはずだから。

「でも決意は固まったんでしょ、虹稀はその顔が一番似合うよね。余裕綽々でどこか遠
くを見ている憎たらしい表情が」

奏虹は目を爛々とさせる虹稀を見て微笑んだ。

ただの感だ、希望的な観測なものかもしれないし、根拠も理由もない絵空事だ。けれどもきつと近いうちに虹稀は日本中に名前を轟かせるだろうと確信していた。

4

「山元、それ本気で言ってるのか？」

「はい、本気です。」

夏休みが明けての進路を決める三者面談で虹稀は野球をするといい放った。

教師の言い分は一切聞かず頑なに野球をすると主張し続けると教師はあまりにも言わずにそれじゃあ頑張れ、と言っただけだ。

「お母さんからは何もないのでですか？」

「私はこの子のやりたいようにさせるだけです」

「推薦来てるって言っただって静岡の桜山と大阪の東光だろ？遠いしほんとにやっていいのか？ここ何県だと思ってる？」

「埼玉県です。それにまだそこに決まったわけではないので。というかセレクションを受けに来ないかと言われただけで推薦ではないですけどね」

「いや、お前なら大丈夫だろう。間違いなく受かるよだって身体能力がおかしいもん。そうでなくとも8月にあったKボール？だっけ、あの大会でベスト16まで行っていただろ、そんなに自己評価を低くするな」

「俺選ばれていないですけどね」

怪我で参加できなかったんだよ、と悪態をつくど教師はおどけていた、生徒の進路を自由にさせるのはいいけどもう少ししっかりしてた方がいいだろうとため息を押し殺しながら虹稀は思う。

結局話は進まず、進路は決まらず見送りとなった。母さんはああは言うもののほんとは近くに行つてほしいのだろうと虹稀は薄々感じていた。

進路と比例するようにやたらと重い学生鞆を重りにして手首を返しながら家に入るとやたらと元気のいい奏虹が虹稀をお迎えしていた。

「虹稀、やっと来たよスカウトの人、しかもめっちゃ綺麗！デカイ！」
「情報が少なすぎよくわかんないよ」

そうは言いながらもリビングへウキウキしながら向かう虹稀。今までは野球部の監督からこんな話来てるぞーとパンフレットと手紙と書類が渡されただけだったので正直家にスカウトが来ることを嬉しく思った。

「初めまして、山元虹稀君ね。私は青道高校野球部副部長高島 礼と申します」

虹稀は何よりも先に考えた、この人メガネ外せば滅茶苦茶可愛いと。

無論姉の奏虹も虹稀と同じことを思った、本人等は否定しているが根本的な部分で

この姉弟はどこかに通っているのだ。

「あら、奏虹あんた以外と気が利くわね」

テーブルに置いてあるちよつとしたお菓子と高島礼の前に置いてあるお茶を見てそう呟く、そういったことくらい出来るんだから！と頬を膨らませ抗議する姉を少しだけ虹稀は見直した。

しかし、お茶とお菓子には手を着けず高島礼は単刀直入に切り出す。

「山元君を是非我が校の野球部へと思いまへーよかったじゃん断る理由ないしね、割かし近いし」

「こら奏虹、静かにしなさい」

この場に何故姉が同伴しているのかわからないが、それは置いて考える間もなく虹稀は躊躇うことなく返答をする。

「それは是非ともお願いしたいです、ですが何でお……僕なんですか？軟式野球の全国大会2回戦で負けてしまうようなピッチャーを欲しがる理由がわかりません」

「先日の試合を拜見して山元君のプレイに惹き付けられました、可笑しな話ですが一人の野球が好き人間として青道で成長する姿をみたいと思っただけです。そして貴方の力が絶対青道に必要なだと感じました」

「恐縮です、ですが正直僕のどの辺りを評価されたのか具体的に教えてもらうことはできませんか？」

「そうですね……一番は原石の大きさでしょうか」

「原石の大きさ？」

「つまりは伸び代とでも言えばいいのかしら。こう見えてスカウトをしているとわかるの、感覚的なことだから説明しにくいけれど……でも間違いなく君は特Aクラスに匹敵する逸材よ、間違いなく」

その証拠にと、とある資料を鞆から取り出して虹稀に渡した。

「これは？」

「私たちの誠意です、そこに書かれている通り青道高校野球部は貴方を特待生として受け入れます」

目の前に大金を積んでいるようなものだ、入学金と授業料は免除で寮のお金だけ払えばそれでいいと言う好条件（もちろん1年単位で結果を残さなければ破棄となってしまうが）

遠回し即戦力として見ていると言われていることと同意義であった。

「……その言い方ずるいですね。はつきりとした答えは今出せませんが、よろしく願います」

「話が早くて結構、うちにはいつきますか？」

「僕としてはいつでも構わないのですが」

何故か高島が一瞬表情を曇らせたのを虹稀は見逃さなかった。大変なんだなとその程度に感じていた。

虚ろに、焦点の合わない目でどこか遠くを数瞬眺めると嬉しそうに話を進めていく。

「こちらでも色々と忙しくなるのでなるべく早くが助かるわ」

「じゃあ、次の土日とかはどうでしょうか？ここから東京はだいぶ近いですし」

「あ、その時ちよっとおもしろい子も連れてくるんだけど、どう一緒に来ない？雨宮君と言うのだけれど」

「雨宮……雨宮瑠偉ですか？」

「ええ、そうよ。最も彼は本当にただの見学なんだけどね、私が君を特待生に選んだ試合で彼と勝負したでしょう？そう言えば雨宮君の間あったKボールの大会で驚異的な数学を残してチームを優勝に導いたのよ」

あの試合で凄い人だとは思っていたが予想よりも、自分の想像以上にいい打者だった

たんだと臆気な記憶からあの時を思い出した。

「やつぱり、凄い」

自己評価が低いのは自信がないからなのか、謙虚だからかの通常は2択で山元虹稀の場合は度が過ぎる後者であった。

決して強豪校とは言えない学校で図抜けていたために本人の自己評価としては強豪校の中の上程度の評価だったのだ。

県大会に出られる時点で奇跡的だったチームを全国大会に導いたのにか変わらずそこまで謙虚なのは1番以外は敗者と言う極端な考え方によるものだ。高島礼は知る由もない。

「凄いのは山元君、あなたもよ。その大会雨宮君の打率は7割を越えたわ、1試合に少なくとも3安打、多いときには5安打、そんな子から5打数1安打に抑え3三振を奪ったのだから自信を持ちなさい」

だが、山元虹稀の謙虚な姿勢の裏側には飽くなき上昇思考の塊の裏返しでもあると見抜かれていた。

賛辞を口にする瞳の奥に確かに燃える負けん気の強さがある。

高島礼はそんな底知れぬ才能とエース足りうる気持ちを目の当たりにして、さんざん反対されたりもしたがこの子を青道に連れてこれて良かったと嬉しそうに微笑んだ。

プロローグ裏

5

高島 礼に青道高校野球部に誘われた3日後、山元虹稀と雨宮瑠偉は青道高校へ練習の見学、また施設を確認するために東京へ向かっていった。

とは言え雨宮瑠偉は山元虹稀が来ることを知らず高島礼からは凄く才能のある子をつれてくるわ、とだけ言われているので誰が来るかわかっていない。

それに加え青道に行くつもりは然程ないため基本的に誰が来ようと関係は無かったのだ。

まあ東京都の高校に進めばもしかすると対戦するだろうなと言う他人事のように思っていた。

プロを目指す雨宮瑠偉は確実に甲子園に行く学校を選ぶつもりだ、軟式野球で最終的に17HRを記録し全国大会で優勝、そしてKボールの全国大会でも活躍をし既に全国に名前は知れ渡っている。

これから硬式野球チームに入り、硬式でも素晴らしい能力を見せれば確実に甲子園に

行ける道があるのだと信じて疑っていなかったからだ。

となると東京都内では成宮鳴要する稲城実業か東地区最強と謳われている帝東かの2択で青道は眼中に入っていない。

今日来たのも難癖つけて面倒くさいスカウトを追い払おうと考えているからでもある。

待ち合わせ場所は埼玉と茨城の県境付近の駅で、時間よりも早く来すぎて出来てしまった暇をもて余している。

住んでいる場所は山元虹稀は埼玉県の極東、雨宮瑠偉は茨城県の最西端、今まで練習試合などで面識がないのもおかしい程近くにいた。

灯台もと暗しとはこういうことを言うのだろうかそんなことはいざ知らず雨宮瑠偉は待ち合わせしていた場所でスマホ弄り時間を潰す。

車が止まったような音が雨宮瑠偉の目の前ですが、あまり気にせずスマホを弄り続けていた。

ようやくおかしいと思えば顔を上げると目の前には辛酸嘗めさせられた相手が、山元虹稀が物凄くいい笑顔で歩み寄ってきて。

「悪い、待った？」

と飄々と挨拶をしてくるものだから幾ばくか混乱しつつ疑問を口にした。

「は!?!いや、ちよつと待て。お前なんでここにいる?」

「そりや青道に行くからだけど、聞いてないの?」

「凄いやつが来る、とだけは聞いていたけど……まさかお前とはな」

「聞かされてなかったんだ。とは言え初めまして、雨宮瑠偉」

「ああ、この前はどうも。山元虹稀」

プライベートでは初対面の虹稀と瑠偉、ソーシャルネットワーク上で多少連絡を取ってはいるものの面と向かって話すのは初めてで双方ともに思うところはあった。

とは言え雨宮瑠偉は苦い思い出を思い出させる相手である、ちよつと敵意を向けては見るが恥ずかしそうに笑うのを見て毒気を抜かれる。

だが不思議と嫌悪感や苦手意識はなく差し出された手を素直に受け取っていた。

それよりも目の前の男が“あの”山元虹稀なのかと言う疑問の方が大きかった、マウンドでは凄みを感じたが今はなにも感じない、というか普通すぎる人であったことが意外なこと驚きを隠せてはいない。

―こいつほんとにあの山元か? マウンドとは別人だな…

それもそのはず、基本虹稀は温厚で優しさが顔に滲みでている、かつ基本的には真面目で優等生タイプの人間で人が思うよりも遥かに大人しめな人柄だ。

しかし、本人は自覚していないが極度の負けず嫌いで特に1対1での勝負には勝ちへの執着心がすごい。

だからか、雨宮瑠偉も虹稀のマウンドからの鬼気迫るオーラを、殺気といっても過言ではないほどの気持ち（しかも笑いながら出していた）を受け止めたのだから目の前にいる人が良さそうなやつがまさか：と言う気持ちが大きかった。

「お前、山元虹稀だよな…？」

「いやいや、じゃないと態々話しかけないだろう？あつてるよ山元で。さあ早くいこう、瑠偉、もうじき電車出る」

「お、おう」

「さあさあスマホから目を離して」

雨宮瑠偉は虹稀に最初からファーストネームで呼ばれることに違和感がなかった、寧ろ自分が『山元』と呼んでいることに違和感を感じていた程だ。

些細だが大きな違和感、奇妙なことだと思つたがあえて気にすることはなかった。だがこれが山元 虹稀かと瑠偉は改めて実感し、すたすた歩いていった虹稀の後を追う。

雨宮瑠偉の脳裏にふとある光景が脳裏に表れた、二人が一緒に甲子園に立っている絵空事でしかない、あり得るはずがない青写真。

全く我ながら馬鹿馬鹿しいと首を捻りながら改札口へと歩みを進める。

既に山元虹稀の運命の歯車は雨宮瑠偉をも巻き込み始めていることを彼は知る由もなかった。

6

「お久しぶりです、高島さん」

「久しぶりです、礼さん」

「久しぶりね、二人とも今日は青道高校を見学しに来てくれてありがとう」
「いえいえ、と二人同時に首を振る。」

一人は素直に、もう一人は内心いい迷惑だと思いつながら。

青道高校の野球部の施設を一回り見てきた二人は最後に選手たちが練習しているグラウンドへ向かった。

特待生（仮）が来ていると聞いているせいか威嚇のように叫びながら二人に圧を飛ばしている、思惑通り少しだけ面食らう山元虹稀と気合いだけで上手くなればどれだけ

いかねえと兩宮瑠偉は皮肉げに達観していた。

対照的な考えの二人は特に思うこともなく、来たときそのままの考えで山元虹稀は青道に進学しようと、兩宮瑠偉は難癖つけて断ろうとそれぞれの胸に違う思いを抱きつつ青道高校を後にしようとした時だった。

「あらくリス君今日は遅いわね」

「御幸と少し長く話していたので、その二人は？」

全く困ったものですよ、とでも言いたげに無表情の顔から僅かに笑みがこぼれる。

その様子を苦笑しながら申し訳なさそうに見ている様子を山元虹稀は首をかしげながら傍観していた。

「将来のエース候補と4番候補よ」

先程とは一転して今度は誇らしげに順に2人を紹介するとクリスの表情が変わる、特にエース候補と聞いたときに山元虹稀を値踏みするように睨み付けた。

「エース候補、ですか」

そう小さく呟くと見下ろす形で山元虹稀を見据えた、臆することなく見上げその状態が、沈黙が緊張感を増した頃にクリスは重い口を開いた。

「……同点のまま迎えた9回裏フルカウントフルベース、もし勝てば俺達は甲子園に行くことが出来る。山元虹稀といったな、もし来年この場面任されたとして何を投げる

？」

唐突な質問に山元虹稀は少なからず驚いた、もう一度問いただしそうになるがクリスが高圧的な態度で真剣に問うものだから一度大きく息を吸い足りない情報を引き出した。

「……打者は誰で右ですか左ですか？フルカウントまで追い込んだ配球は？その場面俺はその打者と何回目の対戦ですか？」

無表情な顔から驚愕、驚きが僅かばかり溢れた。

「……………君の持ち球は？」

「ストリートとカーブ、そしてカットボールです」

「……………バッターは史上最高の打者・バリーボンズ、知つての通り左打者だ。この試合4打席目対戦成績は3打数3安打四球1、ストリート・カーブ・カットボールがアウトロー・インロー・アウトハイのコースで痛打されている。先ずは外にストリートが外れて1ボール、次にもう一度外にカーブを投げ見逃され1ストライク、次はインハイにカットボールを投げて特大のファールをライト側に飛ばされた。その後ストリート2球続けカーブを1球投げたが大きく外れる……………次の1球君は」

何を投げるんだ？とあえて口にはしない。

甲子園出場をかけた試合でバリーボンズが出てきてたまるかよ、等と何時もの雨宮瑠

偉であればちやちやをいれる所だが隣にいる山元虹稀の雰囲気を押され何も言えずにただ回答を待っていた。

打者がバリー・ボンズ、詰まるところ投手としては投げる球が一切ない化け物相手に、大事な場面で対峙することになればどうするか？と言う問題だ。

殺気立つ、と言えばいいのか異様な雰囲気が彼らを包み込んだ。まるで実際にその場にいるような緊張感と一気にスイッチが入った山元虹稀が大きく深呼吸し大きく息を吐いたところで。

「外角低めの、ストレート」

重い沈黙を破って、力強く山元虹稀はそう答えた。

「外角低めのストレート、困ったらそこに投げればいいと言うセオリー通りの投球か？これまでのキャッチャーのリードの意思を無視してまでそれを選択するのか？」

「いいえ、違います。バリー・ボンズは俺の知る限り選球眼が抜群であり、ストライクゾーンであればどこでもヒットにできる。そんな打者にギャンブルを仕掛けるつもりもセオリー通りの投球をするつもりもありません」

「どういふことだ？」

「逃げることは不可能、勝負して勝たないといけない。それならば俺は自分が一番自信をもって、気持ちのをせて投げられるボールをそこに投げ込むしか甲子園に行く道は切り

開けない……と思います」

「例えばそれが、敗因になったとしても？」

「もし仮に、そういう場面になったときに、俺……僕はその場を任されたなら、イチローでもバリー・ボンズでも打ち取ります。虚勢でも見栄でも自己暗示でも、そう思うのがその場所を任された投手の責任つても……です」

「……そうか、お前になら俺達の3年間任せてもいいかもしれないな。頑張れよ、未来のエース」

それと、未来の4番もなど生気のない虚ろな目でグラウンドを後にした。

一瞬だけ灯る、生気のない瞳の奥に眠った熱い闘志を覗かせてクリスは今一度山元虹稀の姿を捉えた。

面白そうな投手だ。

もしかしたらバッテリーを組んでいたかもしれないとあり得ない事象を思い浮かべ自らを嘲笑する。

一方でさっきの質問はいったい何だったのだろうかとうとうやくクリスが去ってから考え始めた山元虹稀は考え始めて別の世界に入り込んだ。

生気のない不思議な上級生とこの状態になれば暫く戻ってこない山元虹稀を確認すると雨宮瑠偉は久々に口を開いた。

「礼さん、あの人が青道高校3年生、滝川・クリス・優さんですよね？」

何かを確認するような、自分の迷いを無くすかのような声音に言葉では返さず高島礼は頷いて答える。

「俺は、青道に進学しようとは思っていなかった、大きな理由の1つはあの人の境遇だ。期待され自らの怪我を言い出せずに将来を潰された。貴女の知るように、プロを本気で目指している俺にはそんな高校に行きたいとは思いませんでした」

御幸一也と言う逸材がいたこともあり傷口は大きく広がることはなかったが、周りも小さな怪我の時に気付かず大きな怪我を負わせてしまった事実は変わらない。

高校野球が終点ではなく、将来性のある選手をそうさせたとなると本気でプロ野球の舞台を目指す選手にとっては印象が悪いのは否めない。

「そう言われても仕方がないわね、クリス君をああしてしまった私たち首脳陣の責任は重いわ」

しかし、雨宮瑠偉はその事を責めるよりも困惑の色が色濃く出ており難しい表情で空を見上げる。

「けど、あいつを、山元虹稀を連れてくるのは予想外だった。青道には行かないって決断が揺らいでしまうくらいに……だからもう少しだけ考えます」

「ええ、それでも構わないわ。ちなみに山元君は青道に入学することを決めたわよ」

「ははっ、それは悪いことを聞いてしまったなあ。前向きに考えてしまおうじゃないですか……青道高校で1年生からレギュラー取ることって可能ですかね？」

真剣そのもの、嘘でもはったりでもなく本気で上級生を蹴落とそうと近い未来を見据えた眼光が高島礼を射抜く。

「それは君次第ではなくて？」

そのような夢を持つ選手は多い、誰しもがその夢の無謀さに、厳しさにチャンスをつとという選択をする選手はとても多い。

「そう言うことではなくて、1年の夏にレギュラーを取った選手っているんですか？」

だが、雨宮瑠偉は間違いなく自分は出来るがこの高校では年功序列ではなく実力主義なのかと念入りに質問をする。

「御幸一也、彼は1年からレギュラーになっているわ。ちょうど1年前にね」

例えそれが不慮の事故だとしても、チャンスがあるのならこの高校を視野にいれても構わないのかもしれないと考えはじめていた。

「なるほど、そういう方針ならこちらとしてはありがたい……おい、虹稀！さっさと遊びに行くぞ！礼さんありがとう、その時はよろしく！」

自分の世界に入りきっている山元虹稀を引き摺るようにして青道高校を勢いよく後にする。

甲子園に出れる確率は0・05%、甲子園で優勝出来る確率0・011%、この僅かな奇跡にも近い確率を限りなく100に近付けるためには特別な何かが必要だ。

その“何か”は明確にはわからない、けれども山元虹稀には間違いなく特別なモノがあると確信していた。

—お前と勝負したい気持ちもある、けどそれは今じゃなくてもつと先のステージでも遅くはない、根拠はないけどそう思わせる特別な“何か”を感じるんだ

まだ思い切り踏み切れない、けれども道なき道を見せてくれた1人の投手に出会えたことに感謝をしていた。

始動

1

3月16日、この日が基本卒業式で合格発表が3月19日頃になっていて、喜びと悲しみが、出会いと別れが盛んな季節だなあと虹稀は子供らしくない達観したようすで地元を後にしようとしていた。

青道高校野球部に推薦で受かった虹稀は合格発表が終わり、その後に推薦で受かった者だけで行われる練習に参加しなければならなく明日から始めるその日に備えて向かわなければいけないのだ。

皆が別れを惜しみ泣いていたり、第2ボタンが何やらと言っている連中を傍目に野球と勉強、大きな行事しか記憶に残っていない中学校を振り替えることもなく、虹稀は一人だけいつもと変わらず立ち去った。

荷物の確認や色々な書類を確認するためであって別に皆との別れが悲しいわけでの惜しいわけでもない、ただ一つの心残りは周りのレベルに合わせることはなく多くの時間を個人練習に当ててしまったり、小さいいざこざで揉めてしまい雰囲気悪くしてしまった罪悪感が少しばかり。

そのなかでたった一つだけ、虹稀の胸にチームメイトの言葉があの日から返しのついた針のようにずとくつついていて離れない。

—— たった1人じゃ野球はできないんだ。

本当に1人で勝ってきたような山元虹稀はその言葉が気になって仕方がなかった、よく意味がわからなかった。

野球はチーム競技と言う名前の個人競技で、確かにチームプレイもあるがエンドラ、バント、中継プレーにしても結局そのプレーの良し悪しを決めるのは個人であり、マウンド、バッターボックス、守備位置にいるのはたった1人でやるものとばかり考えていた。

それゆえ、チームメイトの言った『仲間』という言葉も少々歯痒く感じ、恥ずかしくもあり、しかし結果として殆どそこにいるだけの最低限のことしかこなさない人達と些細な揉め事が絶えなかった。

何だかんだで青道高校への出発当日、見送りは姉1人だった。

別にクラスの中や野球部だった頃の皆と仲が悪いわけではないが、特にいいわけでもない。それに虹稀は自分の進学先が青道高校野球部であることを教師以外には誰にも公言していなかったからでもある。

「じゃ、しばらくさよならだね。姉ちゃんも大学で頑張って」

「私も東京の大学行くんだし、さよならじゃないよ。あんたこそ身体には気を付けなさいよ、母さんや父さんだって心配してるんだから」

「まさか、見に来るとか言わないよね？」

「暇があれば見に来るかもね、試合とか虹稀が出るとこ見るの楽しいし」

「頼むから大学生らしくサークルだったり彼氏作ったりして来ないでもらえるとありがたい」

いい意味でも悪い意味でも目立ちまくる姉を多くの人に知られるのは色々面倒くさいため、余計な揉め事を避ける意味でもあまりそういった行動は控えてほしいかったのだ。

とは言うが結果は殆ど目に見えているために半分諦めて注意のような感覚で一応言ってみたに過ぎない。

「ほら、すぐ生返事する！良くないよそういう癖」

過保護な心配から来る面倒くさい小言を条件反射的にはいい言っている喉仏を突いて意識をこちらに向けさせる謎の行為によって虹稀は咳き込んだ。

結局いつも通りギヤーギヤーワーワー騒いでしまう、だがそんな姉との絡みが暫く無いというのも少しばかり慣れないと考えているうちに時間は出発20分前になってしまっていた。

暫くのお別れだと言うのにいつも通り話続ける姉の姿は少しだけありがたかった、虹稀を氣遣っているのかそうでないのかは定かではないが。

「姉ちゃん、見送りありがとう。一回本気で勝負してくるわ」

このままグダグダしているわけにもいかず、虹稀は一区切りつけるように旅立ちの決意を一言呟くと電車に乗り込もうとする。

「…頑張つて、最後に一つだけ言わして」

そう言つて奏虹は言葉を詰まらせた。

「こんな時にも見送りする友達一人もいないつて本当に悲しい学校生活送ってきたんだろうけど…グスツ…：虹稀なら絶対上手くやっていけるから、めげないで頑張つてね」

嗚咽と共に吐き出された姉の言葉に虹稀はとてつもない誤解が現在生じていることを確認、まさかそんな可哀想な人だと思われていたなんて思つてもいなかった。

「ちよ、まっ」

で、と言う間もなく奏虹は虹稀に泣きつ面蹴つたりとばかりに追い討ちを叩き込む。

「…怪我したときお見舞いに誰も来ないし」

——いやいやいや、俺が入院してたとき家族以外面談禁止だったじゃん…：…まあ来てくれるかどうかは実際に怪しかったけど

「…現にいまだつて見送り来ないほど人望無いし」

——まあ色々揉めたからなあ

「…それに」

「もうやめてマジで、これ以上言われると流石に気持ち下がる」

うんうん、辛かったんだねとばかりに勝手に納得され頭ポンポンされる始末、色々な意味で本当に泣きたかった。

『おい！やっぱりいたぞあの野郎！』

突如、奏虹の後ろに続々と現れる柄の悪い連中、奏虹も流石に後ろの騒がしさに気付き、ああ成る程とばかりに横腹をつついてくる。

「言つてなかったんだ」

「その必要はないと思つていたからね」

「行つてきなよ」

その言葉を背中で受け止めて、虹稀は彼らの方へ重い足取りで歩み寄った、今さら話すことはないし雰囲気に感化されて感動の見送りとか無いわーと過剰な警戒をしなから。

「何でお前ら……」

そんな疑問を皆に投げ掛ける、来る理由なんてないはずだと、意味なんてない筈だと。「べ、別にお前を見送りに来たわけじゃねえよ、お前のお姉さん見にきただけだ」

ツンデレは創作物のなかだけで十分だし、男がやっても気持ち悪いよ、そうジト目で訴えるとツンデレ発言をしたチームメイトが引き下がった。

そういえば目付き悪くて誤解されたことも少なくはなかったなあ等と思い出していると嘗ての女房役が一步前に出て緊張した面持ちで言った。

「確かに部活の時は足引つ張りまくったけどさ、お別れくらい普通にさせろよ」

「そうだぞ、水臭いな」

かつての野球部が口を揃えて口を言う、思いがけない雰囲気に戸惑いを隠せず虹稀は何をすればいいのかわからず狼狽えた、意味がわからなかった。

「お前とは色々あったけどさ、俺達、お前に認めてほしくて仕方なかったんだ。だからみんな必死に頑張つて、でもお前は俺たちを信用することはなくてさ……色々衝突したけど仲間だと思ってる」

——仲間？

「今まで色々迷惑かけてきたけど最後の夏、良い思い出ありがとな」

口々に愚痴や励まし、この事を叱咤激励とでも言うのかとばかりに言葉を投げ掛ける。気持ちが、感情が溢れ出すのを虹稀は止められなかった。

「みんなお前に感謝してるよ」

「頑張れよ、俺達のエース！」

自分勝手なことばかりやって来たし、チームメイトからは色物を見るような目で見られていたために避けられていると思っていて、自ら歩み寄ろうとはしなかった。

けれどもそうではなく、少しでも楽にさせてあげようと皆が頑張っていたからこそ、圧倒的な才能を目の当たりにしていたからこそ話しかけずらかったり、劣等感ゆえに食いついてしまったと知ることができた。

たった10分くらいの間互いに言いたいことを言い合い、なし崩し的に和解すると嘘のように、遠慮や負い目は消えていた。

そんな感動の別れも束の間、出発3分前になり電車へ乗り込まなければ行けなくなる、既に電車の席は反対向きに変えられ後は時間の経過を待つだけだ。

「みんな来てくれてありがとう、俺も頑張るからお前らも頑張れよ」

これ以上言うことはないにもない、くるりと背を向けて決別しようとしたとき、後ろから引き止められた。

「今までお世話になったからな、これやるよ。ほら渡してやれ」

背中を押されたのは1つ下の学年の女子部員だった、マネージャーと言う立場での入部が何故か認められず部員と言う立場での練習とマネージャー業を一生懸命頑張っていたのは虹稀からみても好印象である。

話したことは試合中のインニングに投げた球数であったり、ありがとうやお疲れ様と言った最低限のことでもあったが刺々しい雰囲気の中、彼女の笑顔は癒しであった。

両手で差し出されたのはかなり大きめの紙袋、重さからして2キロ近くある物を急に渡され首をかしげた。

「これなに？」

「え、あ、私たちからのほんのお気持ちです！青道高校に行ってもエースになつてください、応援しています！」

真つ赤な顔で俯く少女に対してどういう行動をとればいいのかわからない、なにか期待されているような気もするがその何かは考えてもわかるものじゃないし思考を放棄した。

代わりに、本音を、今までの感謝だけは伝えておこうと彼女と関わった約1年半を振

り返り言葉にする。

「スコアブック、変な注文つけて大変だったと思うけどお陰でとても助かった。あとピッチの時はただの練習試合でも泣きそうな顔で見ているし、押さえたら馬鹿じゃないかなってくらい喜んでくれたり、失点したら俺よりも落ち込んでるし。今でも意味がわからないけど……凄くありがたかった」

「あの……先輩、私は……」

泣く一歩手前の潤んだ瞳は、言葉では表せない思いが溢れたもののように思えた。

口に出せないもどかしさ、悔しさ、そんな感情が漏れてしまう。

そんな少女の肩を軽く叩いて皆にありがとうと伝えると電車の中へ足を踏み入れた。

かける言葉がなかった、と言うのもあるが虹稀の思い浮かぶ範囲ではどんな言葉を伝えても本当に泣いてしまいそうだったから。

少なくともこの場で少女の涙だけは見たくなかった。

袋の中を確認する間もなく、出発のアナウンスがホームに響き、ドアが閉まり電車は重い音を作って走り出す。

「エースになれよ！」

「他のやつらに負けんじゃねえぞ！」

口々に飛び交う声援を、激励を受ける、不思議と目頭が熱くなるのを感じた。

既に発車した電車を追いかける元チームメイトに向かい「甲子園で会おう！」

仲間に負けないように大声で叫んだ。

2

少しばかり早くついた虹稀は自宅送られてきた『修学旅行のしおり』と言う感じのいかにも『しおり』らしきものを頼りに自分の割り当てられた部屋へ向かう。

《青心寮》と書かれた門を潜り指定された場所へ向かう。時折干されている靴下や練習着の間を通り抜けると途中で悲鳴と笑い声が響き渡った。

手荒い歓迎を受けているなあと自分に降りかかることがないとでも言うように他人事として捉え自分の配属された部屋を探していた。

ちよつとばかり探検する感じで遠回り、途中でほんとにどこかわからないところへ出て本気で焦るが、無事部屋へ到達した。

山元虹稀はふうと息を吐き緊張をほぐす、何せ先輩との共同生活、最初の印象が大事だ。

ノックをして恐る恐るドアを開け大きな声で：

「失礼しま…す」

「おう、お前が俺の同室の1年か、よろしくな。あれ、どつかであつたけ？」

見覚えがあると言うのも、ちらりと見たことあると言う感じでどこか思い出せずにはたようだ。

「二度青道に来てますから、その時に見かけたんじゃないんですか？」

「あ……思い出した！今年の特待生か！俺は御幸一也、ポジションはキャッチャー、一応正捕手。よろしく」

「山元虹稀です。ポジションはピッチャー、青道高校にはエースになりました。よろしくお願いします」

御幸は一瞬呆気にとられるがあまりにも真剣な顔を見るとニコリと笑う、それがどういう意味なのかわかっていないようで本質だけは捉えている覚悟の宿る表情は本気だった。

「いいね、嫌いじゃねえよ。ところでその荷物はなに？」

「地元出るときに貰ったんですけど、なんなんでしょうか？」

「まさかラブレターとか入ってるんじゃないだろうか？」

その言葉に若干焦りつつ中を覗くと可愛らしい様子の小さな紙袋、長方形の段ボール、結構肌触りの良い生地 の袋、正方形の分厚い紙、グラブオイル、それらをかき分け

比較的可愛い小さいな袋を確認すると何事もなかったかのようにそつと戻した。

「何も、ありません」

「絶対なんかあっただろ、よし先輩命令だ！その中身見せてもらおうぞ」

「ちよつ、俺のプライバシー！」

「……山元、俺達はいずれバッテリーになるんだぞ？こういうこともキャッチチャーとして知っておかないと」

「確かに……ってんな訳ないっすよ！」

「ハハハッ冗談だよ冗談、そんなに焦んなって、今日は歓迎会も含めて一緒にDVDみようぜ。良いものが手に入ったんだ、そのテレビつけてくれねえか？」

「わかりました」

嫌な予感がしつつつ渋々とで電源をつけDVDレコーダーの電源をつけるとガサリ、と嫌な音と共に嫌らしい笑みを浮かべた御幸が山元虹稀の目にはいる。

「なになに？えつと『山元虹稀先輩へ、おはようございます？こんにちは？こんばんは？私には先輩が「ちよつとおおおおお!!」」

強制的に距離が縮まった。

直ぐに噂が広がり（主に御幸のせいで）他の部屋の先輩達からも手厚くいじられる、1年生に人権はないのだとメッセージカードに書かれた黒歴史に近いものだったり、甘

酸っぱいメッセージを音読されるといふ地獄を味わう。

先輩との親密度が深まったが大きな何かを失った虹稀の目から一筋の涙が流れ落ち、ついでに嫉妬のあまり何人かの先輩も涙を流す。

暫くの間おもちゃにされたのにも関わらず御幸と一緒にDVDを観賞させられ夜遅くまで話し合あうことに、殆どが御幸によるいじりであったがその間山元虹稀は画面に写る美女と笑いあっていた。

面白い奴が来たと喜ぶ先輩と初日から選手寮での厳しさを目の当たりにして枕を涙で流す1年生の姿が、そこにはあった。

3

使い慣れた目覚まし時計が鳴る前のカチリ、と言う音でアラームを止めると言う離れ業を2回ほど繰り返すと、ようやく選手寮で生活を始めたのだと思いだしガンガンと鳴り響いている頭痛を降りきって勢いよくベッドから飛び起きた。

どうやら電気をつけたまま寝ていたみたいで、目を開けようとするも蛍光灯から発せられる光が視界を塗り潰す、しかし時間のロスは許されないため布団のなかに時計を潜り込ませ時間を確認する。

案の定、しかし不幸中の幸いか急げばギリギリ間に合う時間が時計の針で指されてい

る、

「御幸さああん！何で起こしてくれなかったんですか!?!下級生の失態は上級生の責任でもあるんですよ！」

「ん〜……………今何時?…つておい！何で起こしてくれなかったんだ！」

「こつちの台詞ですよ！」

夜中までDVDを見ていた二人、起きたのは集合時間20分前、着替えも込みでギリギリの時間に起床してしまう。

急げばなんとか間に合うのは不幸中の幸いか真っ白な練習着を速攻で身に纏い部屋を飛び出した。

「あちゃー、昨日の夜DVD見すぎちゃったかな〜」

「早くしないと遅れますよ！」

ゆつくりと余裕かまして悠長にしている先輩は放っておき、念のため注意を促すことだけはする。

少し離れたグラウンドへ全力疾走で向かう、寝起きの全力疾走は体にくるものもあつたが、なんとか間に合い適当に列を作っている所に入り込んだ。

ほっと一息をつく間もなく、息を整える間もなく、青道高校の監督である片岡鉄心が

鋭い眼光を飛ばしていた。

堅気の人間ではない外見をしているのにサングラスが余計に印象を悪くする、只でさえ身の引き締まる気温なのに片岡鉄心の発する緊張感で1年生は体を震わせている選手もいた。

恐怖故か緊張故か寒さ故かはわからない。

「それでは順番に自己紹介をしてもらおう。じゃあ、左端から順に言つて貰おう」

外見通りの声音が飛び出すと虹稀は圧迫面接つてこんな感じなのかなあと覚醒しきつていない脳は的はずれなことを連想していた。

最初に片岡鉄心が目配せした先には1年生にしては堂々と、自信ありげに立つ1人の男だ。

一歩踏み出すと、胸を大きく反らせ閑静なグラウンドに響き渡る声で宣言する。

「平山東中出身！雨宮瑠偉！希望ポジションは特にありません！が、ポジションはどこでもこなせるつもりです！あと3ヶ月で先輩たち引き摺り下ろしてレギュラーの座をつかむ予定です！よろしくお願いします」

声音には緊張も自らを発奮させる意思もなく、当然のように告げるふてぶてしい1年生に対して歓迎ムードは一転し、1年坊主が調子乗ってるんじゃないやねえと口ほどに物を言

う目が一転に集中した。

それでも萎縮する様子を見せず、飄々としていると一触即発しそうなムードになるが片岡鉄心が「次」と告げれば萎縮した他の1年が自己紹介を始めこの場は有耶無耶になった。

しかし雨宮瑠偉が目をつけられたのは間違いない。

虹稀は結局瑠偉がどこの高校に行くのかを聞かされていなかったため二重の意味で声を上げそうになったが流石に場所が場所だけに無言の叫びを上げる。

その後も徐々に和らぐ雰囲気になり虹稀が自己紹介をする番になった、視界の端で不敵に微笑む瑠偉が目にはいる。

だからこそテンプレートな発言ではなく、自分の意思を再確認するために確固たる意思で宣言した。

「桜ヶ丘北中出身！山元虹稀！ポジションはピッチャー！青道高校にはエースを貰いに来ました！よろしくお願いします！」

再びの険悪ムード、隣の選手が「勘弁してくれよ」と呟くが虹稀の耳には入っていない。

未知数の奇才を持つ異色の打者、雨宮瑠偉。

底知れぬ鬼才を秘める無名の投手、山元虹稀。

運命の歯車は音を立てて回りだす、2人の巻き起こす大きな流れが行き着く先は栄光か挫折か。動き出した大きな流れがもたらす結果は今はまだ、誰も知らない。

出合い：沢村栄純

1

「あー……いつ遅刻したのに列に紛れ込もうとしてるぞ——！」

山元虹稀、雨宮瑠偉の挑戦的な自己紹介により発生してしまったただならぬ緊張感を突き破ったのは呆然と立ち尽くす新入生、沢村栄純と彼を囿にして列に紛れ込み自分の遅刻をなかつたことにしようとした御幸一也。

また沢村栄純同室の上級生が 責され、ただでさえ悪かつた空気が最悪なものに変質した、まだ連帯責任で全員で何かをしなければいけないよりは全然ましだと考える雨宮瑠偉は欠伸を噛み殺しながらグラウンドの設備を大勢の同級生と共に見て回る。

その後軽めに走つたところを寮で朝食をとるが、雨宮瑠偉と山元虹稀は慣れない視線に囲まれながら同級生より明らかに多い白米を掻き込んでいた。

「なあ、なんで俺たちこんなにしろじろ見られているかわかるか？」

先に疑問を口にしたのは瑠偉だ、まるで珍獣を見るような絡みつく視線に耐え切れずに胃の中のものが出そうになると同じくしてそのような疑問がポロリと漏れた。

「え？見られているって何が？」

視線に気づいていなかった虹稀は目の前に置かれている大盛りのだんぶりと格闘しながらおかずに既にあることに嘆いている、ただ共通していることはどちらともその視線に対しネガティブな印象を持っていないという事だ。

虹稀は気にしていないが瑠偉の言った言葉をなかなか呑み込めない口内のものと共に飲み込むと瑠偉の放った言葉の真意を理解してにやりと笑う。

「硬式出身のエリートさんが多い中で硬式野球より遥かにレベルの落ちる軟式野球から推薦・特待を貰ってきている俺たちは注目されて当然って訳ね」

「ああ、その通りだ。聞いたつーか聞こえてきたつーか、硬式野球の全国大会でベスト4に入ったチームの奴らも来ているらしいからな。この後能力テストがあるっていう話だからそこで品定めされるっていう訳」

「その通り、わかっているじゃないかお前たち」

周りから少し警戒、もとど避けられている節の合った虹稀と瑠偉の席は丁度2、3席ほど空いていた、そのため人が座れるスペースは充分にあったわけだが当人達をもってしてその男が座るとは予想をしなかった。

ただその張本人自体も気まぐれのようなもので目についたか少しだけ話してみようという簡易な思い付きでもあるが。

「山元、隣いいか？」

「ええ、もちろん。というか一也さん何で遅刻したんですか？」

「いや、今日監督がいつもよりも早くてき、時間は大丈夫だったんだけどシチュエーション的にアウト。沢村って1年を犠牲にしたのはナイスアイデアと思ったのに監督の目を欺くにはまだ何か足りなかつたみたいだ」

そう言えば最後辺りで列に割り込もうとした遅刻者がいて注目を浴びていたのを思い出した2人は、自分が助かるために何も知らない下級生を捨て駒にしたのに何の悪気もない先輩を目の前に苦笑いを浮かべることしかできなかつた。

「それはそうと雨宮？だよな」

「？そうですけど」

「お前入部早々先輩たちに喧嘩売つたらしいな！先輩たちみんなキレてたぞ」

確かに、何を言っているんだこの1年は、と思われたことは瑠偉も重々承知している。けれどもここは年功序列はさほど関係なく実力主義の学校、だから失態は直ぐに取り返せるだろうと、むしろ目に見える結果を見せつけ挑発や夢に近い言葉を本当の意味での宣戦布告に出来るだろうと踏んでいたのだ。

虹稀の場合は瑠偉に煽られるような形での発言だったために自覚はなかつたが、後で御幸一也が指摘すると露骨に驚いていた。

「御幸一也さん、大丈夫ですよ。この後身体能力テストあるみたいなんで結果であの言葉が嘘ではないことを証明してみせます。俺は一刻も早くメンバーに入らないといけないので、それではお先に失礼します」

「おう、楽しみにしているぞ」

好戦的に、狙っているかのように、周りに聞こえるような声で淡々と告げた。

もう、朝のような好戦的な笑みは浮かべられることは無く、冷たく自分を律するように冷静な表情で食堂を後にする。その後ろ姿はどこか危なく御幸の目には映っていたが毎年の風物詩でもあるし自分もたどった道の一つでもあったので気にはしないことにした。

「言っていることはかつこいいんだけどな」

「言っていることは？」

「こつちの話だ。山元、何杯目？」

「……2です」

「まだまだだな、エースを目指すんだつたらもつと食べる。お前は線が細すぎる、そんな体じゃ上で通用しても長くは続かねえぞ」

「うっ……はい、頑張ります」

最もらしい言葉で虹稀を奮奮させる御幸だが虹稀が3杯目を注ぎに行くと幸せそう

に顔を綻ばせた、御幸は自分が上級生になった時に食事で苦しむ1年を見るのが非常に楽しみであったために周りで悶えていたり、必死に喉を通らせていると真ん中で他人の不幸を、苦しんでいる姿をおかずにして幸せそうに食事を楽しんでいた。

2

その催しは一人の選手の全てを賭けて行われたといっても過言ではない。初めは嘲笑とあいつ何をしているんだ？と初日からやらかしてしまつた同級生を憐れみを含んで見下し無理難題をやろうとする一人の男の勝負が行われていた。

その選手の名前は沢村栄純、高らかに自分の名前と出身中学・抱負を（遅刻してきて朝言えなかつたからだろうか）宣言すると幾何かの助走をつけて玉を放つた。

投げたボールは無情にも綺麗に曲がりフェンスギリギリまでコロコロと転がっていき、大爆笑が起こつた後、監督からの無情な宣告。

当然泣きの一回などなく、取り残される沢村を見てただ、皆は同情するだけしかできない。

瑠偉は大多数とほとんど同じだが沢村を嗤っていた、実力も把握していなくて無理なことをして自分の可能性を潰すという行為は最も馬鹿らしいことだと思つているし、やるべきことをやらずに自分の主張を押し通すのは可笑しいと考えているからだ。

けれども、少しだけ評価というか瑠偉の記憶に沢村栄純という同級生が残つたのはい

い意味でも悪い意味でも事実だ。

ただ虹稀だけは少しだけ、ほんの少しだけ沢村の気持ちだが、沢村栄純という選手をこ
の中で一人だけ認めていた。

結果として80m程にしか到達しなかったボール、けれどもあんな癖玉で80m投げ
るのは、曲げながら投げるのは決して容易ではない。

感覚的で根拠はない、けれどもこの人はいつかきつと大きく成長すると感じ取る。

それは、恐怖と楽しみが入り混じった複雑な気持ちだ。今はずつと自分の方が先を
言っているという自負はしているけれども（身体能力、その中でも肩の強さ）すごい勢
いで追い上げてきそうな予感がするからだ。

沢村以外で行われたテスト、テスト言っても野球の技術ではなく基本的な身体能力を
見ることが大半だった。

・遠投

・50m走

・ベース間ダツシュ

・ロングテイク

・マシン使ったバツテイング

・ピッチャーはブルペンでの投球練習

・5000m走

と言う内容である。

あくまでこれらは体力測定と同じようなもので直接的に野球の上手い下手を見るためのテストではないのだが監督直々に見ているために誰も彼もが必死にやる、だからかその後も覚えなければならぬことや、同室の上級生の洗濯もしなければならぬので、息をつく暇もない。

青道高校野球部入部初日、特に何事もなく一日は終わろうとしている。

「雨宮瑠偉、それに山元虹稀、か」

突出して抜けている数値の持ち主を片岡鉄心は静かに読み上げる。数値だけでは何も言えない、けれども思わず笑みが浮かんでしまう結果だ。

早熟なのかこれからまだまだ伸びしろはあるのか、それは本人たちの努力次第でも資質の問題でもあるので定かではない。こうも面白い選手を見つけたのが得意なようだと呟くと高島礼は嬉しそうに微笑んだ。

出会い：吉川春乃

1

4月某日、新学期が始まって間もなく学校は急に慌ただしくなる。

新しい生徒が今年度も入学し、学校としても活気溢れ、各々の思いを胸に、新たなスタートを切る時期でもあるのだ。

新たなスタート、山元虹稀と雨宮瑠偉のスタートもすでに切られていて、と言うか既に始まっており厳しい環境に早くも適合しつつあった。

「さすがにまだ慣れねえな」

「確かに…走った後っていうのがまた嫌なことだよね」

「お前からそのわりにもう3杯目入ってるけどな！」

「お前らにだけは…負けねえ」

「沢村は、まあ俺たちよりもたくさん運動しているんだしゆつくり食べたほうがいいと思う」

「……慰めんなチクシヨウ」

目を虚ろに白米を何とかいに入れる沢村だがまだ2杯目の半分ほどしか食べていない、虹稀は面白いやつだし自分と同じ投手だし、と一緒に食事を共にしている。

沢村は言わば懐かない犬のようで弄ればしつかりと噛みついてくる、そのせいもあるのか反応が面白く、また遠慮をする必要もあまりないので沢村本人は認めていないにせよ親交はそこそこのものになっているのだ。

午前の練習を終えて、1年生は運動後の休憩を充分にと少し遅めの昼食を食べている、基本的には1年がすることは練習の準備や球拾い、それ以外はランニングなので上級生ほどきつい練習ではないのだが慣れていない環境という事もあるのだろう、全体的に疲労の色が少しだけ見えていた。

大きな変化と言えば食事の時に虹稀と瑠偉の周りには集団が作られていたことだろう、最初は色物として見られていた節が強かったが、話してみると、接してみるとライバルではあるものの普通の人であったというだけのことだ。

年頃の男子学生らしく端から見ればつまらない話題で盛り上がる、何気無い、何の意味もないこの時間が（食事のノルマさえなければ）彼らにとつて一番リラククスできる時間でもあったのだ。

「おゝ若いもんは成長が早くていいねえ」

どういふ訳か2年の枠からたまに外れて1年の方へ御幸が来ることは割かし多かつ

た、御幸としてはただの気まぐれであるのだが、感覚的などころで山元虹稀、雨宮瑠偉、そして沢村栄純とはコミュニケーションをとつても損にはならないだろうという考えがあったからだ

「あ、一也さん。こんにちは」

「「こんにちは！」」

「御幸一也！」

「おう、そんなにかしこまなくていいぞ…：沢村、お前は敬語を使え。つて山元こいつらお前の取り巻き？日に日に増えていかないか？」

「いえ、チームメイトです」

虹稀は友達としての線引きが未だによく分からないのでひとまず当たり障りがない発言をするが、野球部で、しかも寮で生活している以上最低限の関係と返答した。

「へ、へえ。それは…：そうだよな」

今の御幸を一言で表すなら困惑という表現が一番近いだろう、真顔でそんなことを言うとは思っていなかったし、実際に周りは驚いた顔をしている。唯一沢村だけがそうだろう！と元気を取り戻しているくらいだ。

同室でいつも話をしていて分かっていたのだが虹稀は瑠偉の事しか認めていない、当たり障りのないコミュニケーションは出来るし普通に良いやつなので嫌われることは

無く、むしろ好かれる方だと思つていたのもあつてこのような場でおかしな発言をするとは思つていなかった。

が、もうここまでこれば一種の天然だと思つたほうがいいだろう、と御幸は賢く切り替える。

「で、なにか用でもあるんですか？」

「ん、その事なだけで……ほらこれ」

御幸はそう言つて巻物を虹稀に差し出した。

「巻物？」

ノートとか、メモ用紙とかわかるがまさかの巻物を手渡されマイペースな虹稀のペー
スが少し乱された。まずどこに売つているんだよと尤もらしい突込みを瑠偉が入れる
もその意見に返答するものはいない。

「そうそう、クリスマスさんに渡されたんだけどさ。お前クリスマスさんと何かあつたの？」
「えつと、青道を見学しに来た時に少しお話したくらいですけど」

約半年前に交わした会話を忘れるほど虹稀も野暮ではないし、クリスとの会話の意味
を表面だけで捉えることは無く、意味深な言葉遣いをしていたのもあつてか深く考える
ことも多かつたからだ。

「ふーん、まあいいや。ここに書かれていることを毎日やるといい、だつてよ。それとわ

からないことは俺に聞け、ちゃんと対価は払ってもらうけどな」

「え、なんですかそれ？遠回しな先輩命令ですか？」

「正解く、いやく物分かりがいいやつって本当に楽だわ。さあかつこめかつこめ、この時間の代償はお前が頑なに見せない例のもので許してやるから」

「!?え、普通にググるんで……いえ了解です」

最近は虹稀もプライベートを守ろうと色々が悪知恵を働かせ御幸の非道な行いを未然に防いできた、だからか今回も自信をもって裏を書き壮絶な心理戦？を行うと腹をくくったのだ。

「クリスさんにそれだけ期待されているんだ……早く上がってこいよ」

急に真剣な表情で言ったものだから虹稀は面喰らってしまい言葉がでない。

「じゃないと……いいや、何でもない」

急に神妙な顔つきから何時ものお道化た表情で頑張れよと、軽く言葉を投げかけた。けれどもその異変を聞き流すほど虹稀も馬鹿ではない。

「俺は、夏までに先輩を引きずり下ろしてでも9人の中に入るつもりですから。安心してください」

周りにいる上級生が御幸だけだったのを確認して宣言する。

まっすぐに向けられた瞳を見て、御幸は何も言わずその場を立ち去った。

新学期が始まって1週間程経つがまだ冬の寒さは微かに残っており、少し肌寒い。

それでも青道高校野球部1年生部員はその寒さなど関係ないほど汗だくになりながらひたすらサーキットメニューをこなしていた。

「どう、目立つ子いた？」

つり目で髪を腰まで伸ばした3年生マネージャー、藤原貴子が呟いた。容姿も整っており正に大和撫子を体現しているかの彼女に1年生は話しかけてはいけない、という暗黙のルールがあった。

ただ自ら話しかけられない2年生がたまたま彼女と楽しそうに話す1年を目撃してできてしまった急造で哀しい暗黙のルールだ。

「結構豊作みたいですよ〜」

「松方シニアの東条くんと金丸くん、西浦の高津くん、やっぱり飛び抜けているのは山元くんと雨宮くん。それと降谷くんですかね」

口々に梅本 幸子と夏川 唯が呟く、互いに2年生マネージャーであり共に頼れる存在だ。

そしてもう一人、バケツ一杯に入ったボールをフラフラしながら運ぶ少女が千鳥足で

名に進んでいる。

「あ、春乃！足元見て！」

「へ？」

ガツンといやな音を立てて何か額にぶつかつた。

先程自分で置いていたトンボを踏んでしまったのだ。

「う~~~~~」

悶絶する春乃を見て3人は微笑んだ。

入部当初はボールを撒き散らしたり、氷を地面に落としたり、ドリンクを無いものにしてたりetc.

等々、大物の新人が入ってきたと思つたが、それ以来大きな損害は与えず一生懸命に不器用ながらも取り組んでいる1年生を見て成長しているなど親のような気持ちになつて3人は頬が緩んでしまうのだ。

もう見たくはないけれども、あの豪快な失敗の数々は彼女たちの記憶に残り続けた。

3

4月某日、入学式の日初めて2人は出会つた。

“やまもと”・“よしかわ”なので五十音順では前後、そして青道高校は男女混合で出席番号を連ねるので2人が入学式の時に隣に、又はごく近くになることはほぼ確実である。

そんな中で彼女、吉川 春乃は隣の席が、厳密に言えば自分の1個前の出席番号の人がまだ来ていないことに気付いた。

よくよく見ると自分のクラスに空席があと2つもあつて1年生が座つていなければいけない時間はとくに過ぎており、その理由を勝手に妄想し続けていたのだ。

『入学式に出ないなんて病気にしかつたのかな？はっ！まさかヤンチャな人たち……！うん、でも……』

彼女の勝手な妄想は暫く止まらず果てしないストーリーまで行きついたのは余談である。

虹稀達、もとい野球部が遅い理由はただ一つ今日は朝練がなく、学校行事であるからであつた。

珍しくない朝練、その理由は入学式に汗臭いまま出席したら回りの人にも迷惑がかかるからという片岡監督の粋な計らいでもあるが、生徒数が多い会場を設営するのに野球部はうつつつけの人材だったからだ。

花瓶がどうのこうの、来賓の席が曲がっている、すいません急遽ココ変更してもらつ

ていいですか？と要領の悪い会場設営が続いたことが原因で野球部の入場はだいぶ遅くなった、時間ギリギリに体育館に駆け込んだ男の集団は非常に目立つ。

席に座った野球部が他の生徒に質問され『野球部だから』という理由は波紋のように広がった。

そんな中で黄色い歓声が静かに上がったのを虹稀はしらない。

吉川 春乃はその歓声が上がった場所を見る。

身長は175cm位、高校1年生にしてはまあ平均より少し上の大きさで若干栗色の髪、幼さの残る顔立ち。

一般的に大ウケするはずのルックスに優しそうな雰囲気、春乃もみとれていた。隣の席に虹稀が座っても凝視するくらいに。

「あ、あの〜」

「ひゃ、ひゃいー！」

虹稀の咄嗟の声かけに春乃は冷静に反応ができなかったようだ。声は見事なまでに外れ恥ずかしさと、興奮で顔が赤くなる。

「俺の顔に何かついてる？」

ブンブンとばかりに首を左右に降る春乃を見て虹稀は春乃の焦りを察した、これは声を掛けるべきでなかったと少し後悔するものの終わったことは仕方がない、とりあえず

無難に言葉を返そうと余所行きの人当たりのいい笑顔で微笑んだ。

「いや、凄く顔見られていたから何かついてるのかなって。別に口説き落とそうとかそういうつもりはないよ、俺は山元虹稀、よろしくね。」

「は、(吉川) 『春乃』です!」

吉川春乃本人の何故この時に苗字ではなく名前以自己紹介をしたのかいまだにわかっていないという、とにかく軽いパニック状態に陥った彼女の口は自分のファーストネームを名乗った。

「春野」か、よろしく。」

結果的に初対面で名まえを呼び捨てで呼ばれるという青春の始まりをつけそうな出会い方をしてしまった吉川春乃はオーバーヒートし、この誤解は直ぐには解けなかった。

そして、新学期恒例のオリエンテーションでその小さな誤解は何とか解けるものずつといじらる種になってしまふのだが、本人は知る由もない。

「次、山元」

「は、」

やっとか、とばかりに女子の目が変わる。

それに気付いたのか虹稀は苦笑いをする、注目されているのか分かっていなく日本人

にしては悪目立ちしてしまう明るい髪の毛か、と自己完結してしまう。苦笑して周りを見渡してしまう、それがまたウケたようでよりいっそう私語が増えた。

「山元 虹稀、スポーツ推薦で入学しました。趣味、特技は野球です、お願いします。それと…」

一拍置いて沢村を見つめる、あくまで沢村に向けたメツセージのように声高らかに宣言する。

「俺がエースになって甲子園にみんなを連れていきます」

何故か、大きな拍手と口笛が教室を包んだ、クラブが何かに豹変してしまった。

雰囲気が変わりすぎた教室を教師が慌ただしく沈静している、何でかなくとインフルエンサーとして十分な機能を果たしているがあまりにも自覚がないため、恥ずかしそうに顔を赤らめながら席に戻りうつ向く、そんな虹稀を見て微笑ましく思った春乃は気分上々で自己紹介をした。

「吉川春乃です。野球部のマネージャーに憧れて来ました。お願いします」

吉川春乃はしっかりと自分の名前を言うと、ばつが悪そうに虹稀の方を見る。

そこには予想通り、というか予想以上に驚き、ガタつと音を立てて立ち上がり口をあぐりと上げて驚いている虹稀の姿があった。

そのリアクションがあまりにも以外で、まさかそんな反応するとも思っていなかった

ので吉川春乃は予想だにしない虹稀の姿を見て笑いをこらえきれずに吹き出してしまった。

名前を初対面から呼び捨てで（しかも下の名前で）馴れ馴れしく呼んでしまうという失態をしてしまった。申し訳ない気持ちとまず自己紹介で下の名前だけを言うやつがいるんだという気持ちが混じってしまうが前者を占める気持ちが大きかったため虹稀は素直に謝罪をした。

「ごめん、吉川。まさか春乃って名前だとは思わなくて……」

「ううん気にしなくてもいいよ、私だって悪いし……」

「だから席が後ろだったんだくおかしいと思っただけ……」

「いいよ、だって山元くん野球部でしょ？最初は驚いたけれど別にいやって訳じゃなくて……そんなに申し訳なさそうにしないでいいよ、私もそっちの方がうれしいから！」

「そう言ってくれるとありがたいけど……」

本当に申し訳なさそうに謝る虹稀を見て春乃は思い出したように呟いた。

「あの言葉、嘘じゃないんでしょう？」

「あの言葉？」

「うん、甲子園に連れてってくれるって。それが1年後なのか2年後なのかそれとも今

年なのか分からないけれど、私楽しみにしているからね」

「…ああ、もちろん、楽しみにしといて」

この時まで自分の実力も、この地区のレベルもよく知らないまま絵空事を口にした。本人はこのことを振り返ると、苦虫を噛み潰したような表情で自分が甘かったと決まっつて言うのだが、虹稀が「現実」を知り、もがき始めるのはもう少し先でもある。

4

「ナイスヘディング」

「……見てたの？」

「もちろん、いや、春乃は見てて面白いな」

なかなかしない、と言うか見たこともない光景にお腹を抱えて笑う虹稀を見上げると、恥ずかしさと不甲斐なさで顔を真っ赤にした吉川春乃が唇を尖らせてすねる。

そんな春乃を軽くあしらって虹稀は藤原貴子のもとへ行き、何かについて少しだけ話し込む、他の1年がくたくたになっつて休んでいるのに対し虹稀はまだ元気そうに見えた。

重そうなドリンクを勢いよくみんなのもとへ持つていく姿を見て、吉川春乃は『やっぱり山元君つて凄いな』と他の人達とは何か違うんだと、そう思つて駆け足で去つていく虹稀の後ろ姿を眺めていた。

「はるるるる」

心の中で悲鳴を上げながら、機械仕掛けの人形のように固い動きで後ろを振り返る。

そこには物凄可笑顔のだけれど、それが逆に恐怖を感じさせる表情でマネージャーの先輩がすぐそこまで迫っていた。

「な、なんででしょうか？」

「詳しく聞かせなさいよ！」

「何であんなに仲が良いのよ!?!」

先輩2人に問い詰められ戸惑いを隠せずただうろたえている、肩を掴まれガクンガクンと揺らされる中もう一人の先輩へと助けをもとめた。

「貴子先輩」

「あら、私もその話聞きたいわ」

残念ながら最後の砦だと思っていたはずの人も、実は最後の砦ではなく、もう彼女を助けてくれる人は周りにはいなかった。

その後根掘り葉掘り尋問されてしまうのだが、その時に虹稀は何だか寒気がするなあ、としきりにぼやいていたという。

スタートラインには立ったものの、勝負開始の笛はまだ鳴らされていない。

その笛が吹かれたときに待ち構える、現実という大きな壁が立ちはだかつた時に彼ら

はきつと自分の甘さに気付くだろう。

そこからそれを受け入れて諦めるか、足掻き続けるか。

何れにせよ勝負の土俵に立ててもいないのだから今はまだ何も起こる心配はない。

けれども2人は、最後の夏にかける思いと執念の恐ろしさをまだ知らない。

和氣藹々とした1年の集団をあきれた様子で一瞥するとクリスマスは少しだけ失望したようにグラウンドを後にした。

真つ向勝負

1

V S市大三高戦、強打を誇る両校によるノーガードでの撃ち合いを何とか制し青道高校は13対9で辛くも勝利を収めた。

どちらのチームにも見えた課題は投手力の不足だった、確かにどちらも魅力的な武器ではあるが安定性がない水物である以上思い通りの結果が出ない時もある。

夏の大会を闘い、勝ち抜くためには安定した投手陣の整備が大切なのだが青道高校の現状では言葉でいうほど簡単なことではなかった。

打の青道、と言われるほど攻撃的なチームで間違いではないが、裏を返せば投手陣は大したことではない、と言う意味と同意義であり、実際に投手陣はこの結果を招いた選手がベストメンバーだったのだ。

だから、試合に勝ったものの首脳陣の胸中はまだあまり好ましくはなかった。

「エースの丹波君は故障明けですし、きっかけさえあれば、すぐに立ち直ると思います」高島礼はきっかけさえあれば、その言葉がいかにかに希望的なものかがうかがえる、故障明けで調子が悪いのと、癖になってしまっている気の弱さは別物だ。

ボールが先行してしまい、ストライクを取りにいった腕の振りが甘い球が痛打される、ボール先行し、今度は厳しいコースをした結果制球が定まらず四球、そんな流れをズルズルと長い間引きずっているピッチャーにきっかけさえあれば、等と言う言葉は慰めではなかった。

丹波光一郎という投手の前々からの課題は夏の大会が3か月前に迫ろうとする今でも何も変わつちやいない、夏の大会中に変わるかもしれないが全てもしもの話だ。

「しかし、今日の試合の調子では……………」

太田部長が心配そうに訴える、現時点では投手陣を信頼できない、あくまで表面上には出さないが、直接的に言葉に出しはしないものの3人とも思っていることは同じだった。

「太田部長の心配も解りますが、夏の予選までもう3カ月しかありません。ここは全学年を対象とした、早急な投手陣の整備が必要かと思われませう」

本来ならばするはずのなかったチーム編成の見直しを高島礼は提案した、勝つことが全ての最後の大会に必要なパーツがあれば例え1年であれば戦力として見なければならぬ。

同じことを考えていた片岡鉄心はああ、そうだなと頷いて球場内の通路からジャリジャリとスパイク特有の音を響かせ球場をあとにする。

—さあ、上がってくる絶好の機会だ、俺にその実力を見せてみる

不謹慎ではあるが緩む頬を押さえて片岡 鉄心は届くはずのないエールを送る、中学校を卒業したばかりの小童に未知の可能性を期待して：

山本虹稀、雨宮瑠偉の2人をのせた歯車が今、動こうとしていた。

2

尻が上がれば右肩が下がる、右足に体重をのせて一回キャッチャーに背を向けてプレートを大きく蹴り出す。

後ろに体重を8割残すイメージで体重移動を始め、前に出たエネルギーをグラブを保持した左手で引き付ける。

ギリギリまで張った胸をから弓のようにならる背中は限界まで力を蓄えている、体は臀部を大きく上げ、右肩を下げたことよって縦回転を開始した。

そこから股関節、腰、背中、肩甲骨、肩、肘と1秒にもみたくない早さで伝わり、体の前で腕を支点にして恐ろしいほどになる。

そこから全部のエネルギーをロスなく伝えたボールは唸りをあげて寸分たがわず捕手の構えたミットへ向かっていくが、綺麗に収まることは無くミットの上に当たりつつも勢いよく後ろへと逸れて行った。

構えている場所よりも低いと予測したキャッチャーはグラブを下げる、しかし思い描

いた軌道と現実には虹稀が投げたボールとはボール3個分は離れていた。

「たまたま首脳陣の目に留まった球ではあるが、急激な変化はないものの中学3年のオフシーズンに伸びた身長と身体の、もつと言えば筋肉の変化に対応しきれていない。そのため一球一球を丁寧に確認して投げていたが、球威、コース共に納得のいったものが投げられたのもありしきりにフォームを確認している。」

偶然そのボールをみていた首脳陣は啞然とした表情で見えていた、5月に入り1年も僅かな時間ではあるが技術を衰えさせないように簡単な練習が始まる。

「たまたま通りかかったところで彼らを引き付けるものが、勢いのある若葉はより一層輝いていたのかもしれない。」

ブルペンの外では快音が轟く、バットの真芯でとらえた打球は一層高い金属音を取り残しバックネットへ刺さっていく、それは偶然ではなく彼の時間の時に何度も続くのだから太田部長は眼を見開いてその様子を眺めている。

「……一年生を集めて、チームを作るぞ」

片岡 鉄心はすぐさま自室へと足を運ぶ、それに呼応して太田と高島も片岡の意図を理解し小走りで監督室へ急いだ。

翌週に開催が決まった1年生vs2・3年生の一風変わったエキシビジョンマッチ、死ぬ気で勝ちに、実績に拘って牙を剥く2・3年生、それを相手にどれだけ臆すること

なく立ち向かつて一矢報いるか、実践で使えるかを見極める運命の一戦。

上級生の覚悟に、プレッシャーに臆することなく結果を残せるのならチャンスを与える1年と、これが最後のチャンスになるかもしれない最上級生。

この高い壁の更Puiss Ultraに向こうへ更に向こうへ、戦いの火蓋は切つて落とされた。

3

「けど、上級生と下級生をいきなりぶつけるのか」

「まあ、丹波がああ調子じゃ、片岡監督も不安になるだろう。一年生に有望なのがいたらの話だな」

OBとは五月蠅いもので、自分等のときはああだった、こうだったと何かしらにつけて首を突っ込んでくるめんどくさい輩でもあり、時には差し入れを持ってきてくれたりと、影で静かに見守ってくれる優しい存在でもある。

集合の合図がかかって、互いに礼をして1年生チームはベンチへと集まる。

簡潔にスターティングメンバーが発表されると1番を任されることになった瑠偉は自らを戒めるように、溢れ出そうになる気持ちの高ぶりを抑えるために冷静なふりをしてヘルメットをかぶった。

3番を任された虹稀は瑠偉とは対照的によくやくチャンスが巡ってきたと言わんばかりに口角を少し上げて気持ちをつくる、先発ではないが後から登板機会が与えられて

いるのもあり気持ちやだして投球する虹稀にとつては必要なことだ。

「ようやく、やっと巡ってきたか……正直この夏はないかとばかり思っていた」

ぼつりと、誰に話すのでもなく漏れ出た言葉を虹稀だけが拾っていた。

「……うん、そうだね」

既に準備を満遍なく行っている2・3年生の合同チーム、先発は現在エースの丹波、気合い十分にマウンドを馴らし投球練習を行おうとしていた。

「虹稀、先輩たちを蹴落とす準備は出来ているか？」

「もちろんさ」

大きな声では話せる内容でないためどうしても小声での会話になるが2人ともやらなければいけないことは決まっている、バッターボックスへ近づくと瑠偉とベンチに戻る虹稀はすれ違いざまに短い会話を交わしてすれ違う。

瑠偉はこの試合でどうすれば上に行けるか考えていた、結果を残すのはマストの事でもっと大きな印象を主審をする監督に直々に伝えなければならぬ。

二重の意味でいいチャンス状況、3割打てれば一流だと言われる打者が一発勝負で、一打席だけで光るものを見せることは博打に近い。

ブンブンと勢いよくゴルフスイングをしながら、瑠偉はVS市大三高戦で目の前のひ弱なエースの粗を隅から隅まで観察し、その結果を頭で反芻しながらイメージをしてい

た。

良くも悪くも気合の入り方からして日大三高の時とは全く違うエースをみてそのイメージはすべて忘れる、全く違う投手だと思わなければあつという間に瞬殺される気がしたからだ。

球種と特徴は分かっている、心構えも出来ている。

「……さて、いっちょやりますか」

バットを肩に担いで静かに投球練習を眺める、少ない情報を出来るだけ掬い対策をしなければならぬ、心は熱く、頭は冷静に。その教えを再現しているかのように、はやる気持ちを完全に抑えて打席に立つ。

【一番 レフト 雨宮君 雨宮君】

いつも通りのルーティーンワークをこなし、打席をまず自分好みにならしていく、軸となる右足の場所を深く掘り溜まった土を右足で綺麗にどかした。

先輩の横にカウントボードの操作を任せられ緊張して座っている春乃は虹稀と目が合えば、ヒラヒラと手を振って『が・ん・ば・つ・て・ね』と口パクで声援を送るも虹稀の目にはグラウンドの事しか目に入っていなかった。

例え目に入っていたとしても手を上げるくらいでまともなやり取りはしていないだろう。

「プレイツ」

短くコールされた試合開始の合図で、すぐさま浮わつた気持ちを引き締めてバットを握りしめる、バッターボックスの外で瑠偉は遠目で確認した球筋をイメージしなおして大きく息を吐くと体を大きく逸らした。

気合が十分に入った丹波に対し瑠偉は冷静でそれどころかりラックスして体をほぐしている。

「俺が上がる条件は、後ろにいる監督に強烈な印象を残さないといけない。最悪一打席しか立てないこの一度きりのチャンスでこの投手の一番自信があるボールを打たないといけない

ベースの手前と外角のギリギリを叩いてバットをまつすぐ立てた、立ち位置はベースに出来るだけ近くで若干ベースに覆い被さるようにスタンスをとる。

「カーブを警戒しての立ち位置か、それとも外角を狙ってますって言う誘いなのか：1年の癖に考えているな、丹波さん一球目はボールから中に入るかボールで打ち気を逸らせましょう

キャッチャーのサインに大きく頷く丹波をみて瑠偉は色々と巡らせていた思考を放棄した、目の前の投手の一挙一動を見逃さないように神経を張り巡らせる。

丹波が気合いと共に投げ込んだボールが自分に向かってくるように感じた瞬間、瑠偉

は大きく踏み込んだ。

曲がったボールに躊躇もせず、かといって合わせるような素振りも見せず、狙い済ませたスイングでボールを捕らえた。

カーブの曲がりどころを捉えたスイングには迷いはなく、思い切り振りきられる。

左中間に低めの放物線を描きショート頭の頭を越して、誰にも邪魔をされることはなくグラウンドへ落ち、そのままセンターのグラブに納まるのを確認すると矢のような返球が中継のセカンドへ渡ると大急ぎで一塁に滑り込む。

一瞬の静寂の後、驚愕の色で染められた歓声が瑠偉に浴びせられる、ベルトに挟まった砂を落としたところでしたところであろうやく安心できたのかこわばった表情から一転笑顔を見せてその声にこたえる。

本来の目的である丹波の一級品のカーブを見事にとらえることには成功したものの長打を狙っていたのもあり喜ぶ時間は短い。

塁審にタイムを取り肘当てをランナーコーチに渡すと驚きながらも素直に賛辞の言葉を貰った。

「……マジか、ナイバツティン」

「ああ、でも正直セカンドまで行きたかった」

丹波は茫然として暫く動けなかったが素直に負けを認めて切り替えた。

認めたくはないが賞賛せざるに入られなかった、まぐれでヒットは打てるのかもしれないが偶然であの速度の打球を飛ばすことは不可能だ。

力でなく技術で打った一塁打はあともう少し弾道が高ければ外野の間を綺麗に抜いて行つたであろう。

もしかするといけるかもしれないと淡い希望を抱き始めた同級生の姿を厳しい顔つきで見るとすぐに微笑みをつくり褒めてくれた先輩に返答した。

—あつぶねえー！まさかあんなに大きく曲がるとは……無理やり手首返してあそこまで持つて行けたけどもう少し低かったらショートゴロだった、流石に強豪校のエース張っているだけはある

エキストラ、ベンチメンバー、OBが称賛の拍手や声を投げ掛けたがペコリと一礼しただけ、内心打った本人も驚いてはいたもののすぐさま次の塁へと意識を向けた。

丹波は一度プレートを外し目で牽制をするが、リードは安全な範囲でとつている瑠偉を見ると打者に意識を向けたのか肩越しにその姿を確認する。

野球選手としての感か、培われた技術の出した決断か、とにかく根拠はない第六感かはたらき

—牽制は……投げねえ！

「走つた！」

足を上げた瞬間にスタートを切った。

決して悪くはないクイックではあるが、ショートートのクラブにキャッチャーの返球が収まることもなく土煙を舞い上げながらベース上に立つ瑠偉がいた。

文字通りの初球攻撃、バッターはストレートを見逃し、瑠偉はそのまま滑り込む、完璧に盗み、尚且つ、トップクラスと言っても過言でない速さでセカンドベースへ到達、警戒していないかったキャッチャーは投げる間もなく滑り込む姿を見ていた

再び、湧くグラウンド、今度はベース上で小さくガッツポーズして喜んだ

丹波の心に動揺が芽生えるが、自分に何かを言い聞かせ平常心を取り戻す。

しつこくなく、的確に、目で、プレートを外し、ベース上にいるランナーに牽制をかけるそのまま何も出来ずに、させずに

「ストライクツバッターアウト！」

2番バッターは三振に打ち取られた

1年相手とは思えない気迫のピッチング、雄叫びを上げ吠える姿は1年生を萎縮させるのに充分効果的だった。

―さすがはエース、見くびっていたけれど技術は相当高い。裏を返せばこの地区のレベルの高さが丹波さんの評価を過少にしているのかもしれない。けどな、今はそんな

の関係ない。こっちもリスク犯して点取りにいつてんだ、そして、次のバッターはなかなかやるぞ

【3番 センター 山元君 山元君】

いい意味でも悪い意味でも場の空気が一瞬にして変わる、1年生は盛り上がり2・3年生はひりつくような視線を注ぐ、当の本人はそんなのもどこ吹く風、淡々とルーティーンをこなし、バットを構えて、雄叫びを上げた。

—いいね、流石だよ

ベース上で瑠偉は笑う

—……凄い目で睨んでくる、今年は肝の太い一年が多いな

少なからずマウンド上で丹波は動揺していた。

人とは余りにも大胆不敵に佇んでいるとそれだけで相手に心理的なプレッシャーをかけることができる。

虹稀がそうと知っていてやっているわけではないが、闘志をむき出しにして打席に立つ姿は2番バッターが畏縮していたばかりに、丹波を精神的に揺さぶっている。

—握りは……いやリスクを負うのなら今だ!

待っていたのは丹波が虹稀に投じた3球目、それはストライクからボールに外れるカーブ

「走った！」

丹波はもう牽制球を投げれない、そして大きなたてに割れるカーブをキャッチャーは体で止めに行く、その結果ワテンポ遅くなった送球は高めに浮きタッチが遅れる。

悪いスタートでもなかったが決していいスタートではなかった、並の足ならば刺されていたかもしれない。

丹波がカーブを投げると確信はない中、勘により判断を行った賭けに近い走塁は瑠偉自身の思い切りの良さと、体力は無いが短距離だけは早いという特性を持った足で確実に盗むことが出来た。

「セーフ！」

三度、大歓声

―盗塁だけは中学の時も、部活終わって硬式やってた時も得意だったからな。さて、後は頼んだぞ、虹稀

―瑠偉がリスクを犯しての三盗、これは何があんでもホームに返さなくてはならない
まず虹稀はバントの構えをとり揺さぶりをかける、まだ1アウトなのでスクイズでも点は取れるし、ここで先取点を取れば試合の流れを持って行けるかもしれないと考えたからだ。

4球目、厳しく外をついたボールは外れてカウント2ボール、ツーストライク。

―外を2球、次は内にストレートでカウントを取りに行きましょう

キャッチャーのサインに首を振る、ピッチャーとしてはここまでカーブを連投してきたため腕の振りが良くはなっている、だからキャッチャーもストレートを要求したのが丹波は投手としての感でストレートを投げるのを拒んでいた。

本人も一年を威圧するために比較的多くのカーブを投げる予定であったが雨宮瑠偉には見事に捉えられた、2番打者は簡単に抑えられたもの見せ球として投げただけであつて打者を抑える目的では投げていない。

虹稀は自分が今の段階でエースの球を山を張らずに打てるほど優れたバッターではないことを理解している、絞っていた球種はストレート、コースは内角だった。

それを察してか丹波は一旦間をとってバックに声をかけてバッターへと集中する。

いくら嫌な予感がするとはいえ相手はまだ一年、力と技術は勝っているし気持ちでも負けると思わない、それに背番号1を背負っている投手として下級生相手に逃げるわけにはいかなかった。

虹稀に投げたストレートはインコース、少しだけ高めに浮いたが球威充分の球だった。

―来た!

当然虹稀も山を張ったボールを見逃さない、狙い澄ました場所に来たボールにバット

を素直に出し叩きつける。

快音は響かない、しかしバットの根元に当たるとも虹稀は迷いなく振り切った。

舞い上がった打球は丹波の頭を越えた。

センターは前進し、ショートとセカンドは後退する。

「バックホーム！」

完全に打ち取ったあたりだった。

丹波の気迫と球威が完全に勝っていたが、運だけは虹稀が勝っていたのかもしれない。

フラフラと上がったボールはセカンドベース後方にポトリと落ちた。

ギリギリまで判断を迫られた瑠偉はあの浅い打球ではタッチアップは不可能だと判断してハーフウェイを取る、打球が落ちたのを確認すると快足を飛ばして勢いよくホームベースを踏みつけた。

「「ナイスバツティイイイン!!」」

「「ナイスラン!!」」

たった2人でとった1点、OBもチームメイトも、2人のプレイヤーに惜しみ無い賛辞を浴びせていた。

これで流れが傾くかと思いきや、丹波は後続を2者連続三振にとり、流れに乗る1年

チームのムードを完璧に断ち切った。

浮かない顔でマウンドからベンチへと戻る、片岡監督は、丹波へ一軍へ戻るように告げる、丹波は納得がいかなかったようでもう一回投げさせてもらおうと抗議するが片岡監督は、理由を述べた上で丹波を説得した

その裏、1年生から一点とられたお返しなのか、必死にアピールしようとしたのか定かではないが一気に8点をとられ2死1、3塁のまま50球ほど投げ続けた東条は、自らマウンドを降りた、そして次にマウンドへ上がったのはセンターから引き締まった表情でマウンドへ向かう虹稀だ。

「ピッチャーの東条君に変わりました、山元君センターへ林くんが入ります、3番ピッチャー山元君、2番センター林君」

迎える打者は前の打席でレフト方向にホームランを放っている好調の増子。

本来ならば青道高校のクリーンアップを打つ打者との対戦、当然燃えないわけがなかった。

—瑠偉はエースの決め球を打って盗塁決めて、しつかりと実力を示した。最悪でも2軍には上がるだろう、俺も置いて行かれる訳にはいかねえ

手についたロージンを息を吹き掛けて落とす、燃える投資は内に秘め今日の調子を確かめながら7球だけある投球練習を始めた。

外野を守っていたこともあり肩は温まりきっていないが体は充分に温まっている。

2アウト1、3塁、増子の放つ強烈なプレッシャーを正面から受け止める、彼もまた1軍復帰を賭けて打席に臨んでいる最上級生の一人だ。

この打席に賭ける思いはこの試合に参加している誰よりも強い。

—ハハッ、流石だなあ。打者相手に怖いなんて思ったのは初めてだ。でも負けるつもりは毛頭もない

緊張か、高揚か、虹稀の心臓がうるさいくらいに騒いでいる。

僅かな制球ミスが命取りになる場面、躊躇なくプレートを踏んで足を上げる。

本人は気付いていないかもしれない、けれどもこの場面で虹稀は確かに笑っていた。

現在位置

0

「やあやあ、親愛なる後輩ちゃん。なにか収穫はあったかい？」

「その……ライン返ってこないんですよ。既読無視ならともかく未読のまままで……」

「あく、そういや虹稀はラインあんまり返さないからね。本人曰く『5分で済む会話を1日かけてするツール』って言っていたし、電話すれば出ると思うけど」

「で、電話ですか!?でも山元センパイ忙しそうだし、ラインも返してくれないし」

「はいはいー!山元センパイですー!山元センパイはライン返しているしこうやって電話もしているよ?」

「奏虹さんの事じゃないです!え、と。……虹稀センパイのことです」

「私と話すだけなのにそれじゃあ先が思いやられるなあ。ま、がんばりなよ。今日はきつと出てくれるはず……なんでわかるかって?ん、私は虹稀のお姉ちゃんだからかな?」

「いつも思うんですけど奏虹さんって悩み事なさそうですよね……」

「あははっ、虹稀にも同じこと言われたなー。ともかく夜も遅いし今日は寝よっか、頑

張つてね後輩ちゃん、私は応援しているよ」

1

優れたピッチャーと精密機械は似通つたものであるとも言えるかもしれない。

マウンドからホームベースまで18.44m、マウンドからキャッチャーミットまでの約19mに静止した後、そこから打者を打ち取るべく球をマウンド独自の傾斜だけを発条として体全体を使って投げなければいけないのだから。

その体の使い方は非常に難しく、力の伝達一つとってもそこには確かに持つて生まれた天性のものが存在し、指先の僅かな感覚を一つとつても持たざる者と持つてゐるもの差は非常に大きい。

確かに、努力で得られるかもしれないがある程度のレベルまでしか到達できない。

自分自身が納得がいったとしても、実戦で使えるかどうかは全く別の話であるしチームの勝利に貢献するために一番ボールを持つてゐる選手なのだから過程や中身など見える筈もなく、結果だけが全てを物語るのだから。

豪速球、変化球、それらのボールに同じ性質を持つ球は一球もない、僅かなズレ、コンマ何秒の世界でいい球と悪い球とに分類される、この僅かなズレと状況が見事に噛み合つてしまえば決定的な勝利の要因ともなりえるし、そうでなければ僅か一球で全部台無しになってしまうほどにこのポジションの責任は重たい。

プレートを踏み、静止し、足をあげ、全身を駆使して投げるのだから僅かなズレが大きなズレへと導かれてゆく。

そして一番修正が難しいといわれるオーバースロー、投法では直球の速度が出やすく、また、腕の角度が上向きであるので、フォークボールやカーブのうち縦の回転が強いドロップと呼ばれる縦に変化する球種などが投げやすい。

何より体の軸が縦ということが特徴的だろう、比較的安定するサイドスローとは違い、オーバースローは安定しない、横の回転を縦方向に変換しなければならぬし、踏み込みやリリースポイント、リズム、打者を確実に打ち取るための工夫はどのフォームでもするが、成長期真っ只中の虹稀にとって小さな成長は大きなズレを生み出し苦しめていた。

その日の体調、調子、その時のメンタル、少しの違いが絶不調を作り出すことも今まで以上に力を発揮させることも可能になる。

昨日投げていた球も投球練習中に1球しかいい感触が持てないこと、相手のバッターがチームのクリーンナップの一角であること、夏に繋がる道は今しかないということ、小さなプレッシャーは確実に虹稀を高揚させている原因の一つであるが、それと同時に蝕んでいた。

「プレイツ」

片岡 鉄心が始まりのコールを発する2アウト1・3塁、バッター増子。一回のミスでレギュラーを落とされたという彼の心に隙はない。現在3打数3安打、申し分ない成績を残し守備でも隙を見せなかった。

対照的に虹稀は数日前の球のキレはどこに行つたと疑いたくなるレベルでの投球に開き直りか苦笑いかは定かではないが笑うことで気持ちの安定化を図っていた。

体の変化、違和感を覚えており唯一の頼みは生命線であるコントロールと少しの期間で培つた未完成な投球術のみ、力と力では明らかに虹稀の方が分が悪い、しかし頭脳戦ならばまだわからない。

準備中に気付き、投球練習で悟つた今日の調子は最高時を10とするのなら6がいいところだろう、けれども虹稀は不適な笑みを崩さない。

—ストリートは伸びがいまいちないけれど、変化球はまだいける……まずは制御の効かないドロップをベース上に落とすか

—山元ちゃんはコントロールが抜群、らしいならファーストストライクを叩くまで投じた1球、オーバースローから投げ込まれたドロップは増子にボールが浮いたような軌道を見せて大きく縦に割れた、ブレーキがかかったかのように鋭く落ちたドロップに増子は手が出なかった。

丹波の大きく縦に割れるものとは違い、浮き上がって鋭く沈む、と言う性質を持った

ボールは全身を弓のように使い腕をしならせることによつて生まれる鋭い振りから生まれた回転量の多さによるものだ。

「ボール！」

手が出なかつたがベース上に落ちたドロップはボール球、内心舌打ちをし、虹稀苛立ったかのように演技をしマウンドを荒々しくならし始めた。

その間ファーストランナーがセカンドベースへと進塁するが仕方がないことなので気にはしなかつた。

—これで初球ファーストストライクが取れずに苛ついていると思つてくれたらそれだけで十分だ、問題は次の球、今のカーブで視点を変えさせる事は出来たはずだ、なら同じコースにストレートか？

対して増子は虹稀の変化球のキレに焦りを覚えた、今のボールがストライクゾーンに入ってきたら：そんな考えが脳裏をよぎる、加えてまだ虹稀の投げる球の情報が少ないためにまだ形勢は増子に分が悪かつた。

3打数3安打、その結果に満足はしていない、むしろその結果などはどうでもいいくらいに今日の前にいる山元虹稀という投手に打ち勝たなければならぬ。

たつた一回のエラーで外された原因は前の打席での失敗を引きずっていたから、それなら目の前にあることに全力で挑み続ける、それが彼の出した決断だつた。

「つたく、先輩も人が悪い…わざわざバットを短く持つなんてよ
—こい、山元ちゃん。次は打つ！」

プレートを踏むが長い間が空き耐えかねた虹稀が牽制を挟んだ、呑まれそうになつて
しまった自分を落ち着けるために、そして…大きく息を吸つて

「ツアアウト、ツアアウト…ここで抑えて勢いつけるぞ！」

叫んだ、何かを振り払うかのように

「…お、おう!!!」

「ハハハツ、ピッチャー楽に楽に！打たせてこーぜ！俺が守つてやるよ！」

瑠偉が外野から応える

「そうだ、俺たちに任せろ！」

「腕振つて、腕振つて！打たせてこー！」

「落ちついていこーぜ！」

「皆で守ろうぜ！」

次に守備についている面々がそれに続いた。

—バットを短く持った、強振せずにミートするのが狙いか。それなら届きにくくなつたアウトローを責めるか？いや、もしそれが狙いで踏み込まれる可能性もある、踏み込んだ時のことも考えてインコースに投げるのも悪くはない

キャッチャーの構えたコースはアウトロー、確かに悪くはないリードだと思ふ。けれどもスイッチの入った虹稀の頭にはその考えが過るも無意識にプレートを外していた。続く2球目、キャッチャーのサインはアウトロー、しかし虹稀は首を振る、次のサインも、その次のサインも首を振る、ようやく領いたボールは内角高め、ホームベースとバッターボックスラインを掠めるギリギリのストレート。

2死2・3塁、カウント1ボールノーストライク

高く足をあげ右肩を下げる、腕は脱力し一旦キャッチャーから目を離した。

次に股関節で体重移動重心を後ろに残し左手で壁を作る。

思い切り左足で地面を踏みつけ、左腕を抱え込むように体に巻き込む、上体を傾けしなつた腕から繰り出された渾身の4シーム

制球力、体の僅かな違いのなかつたこの行為はいいか悪いかで言えばいい。

正解か間違えかと言われれば何とも言えないこの行為は虹稀の覚悟をより強固にし、その結果

——いけ！

奇しくもその腕から放たれたのは、自信が投げれる最高の真つすぐだった。

寸分の狂いもなく、キャッチャーミットに吸い込まれていく、感触も抜群によくて虹稀は投げた瞬間に間違いなく空振りを取ったと確信したくらいに納得のいったボール

だったのだが。

キイイイイ……ン

金属バット特有のひとときわ甲高い音が何なのか、虹稀は最初わからなかった。

あり得ない、そんなわけがあるわけがないと受け入れられずにマウンドで呆然と立ち尽くした。

打球は一直線に瑠偉の守っていたレフトまで弾丸のように飛んでいきグラブに納まったところでようやく直進を止める、深い所を守っていたレフトが捕球するのを見ずにスタートを切っていたランナーはホームに帰還するまでにはいかなかった。

シヨートからボールを渡されてようやく結果を受け止めきれた虹稀はマウンドへボールを置くとみくちやにされながらベンチに戻る。

ナイスピッチ、との賞賛の言葉をどこか他人事のように聞きながら虹稀はようやく自分がどれだけ己惚れていたのかに気付いた。

打たれたことのない、打たれる訳のない自慢の真つすぐはあと2・3mm下を叩かれていたらスタンドまで間違いないく運ばれていただろう、それに加えバットを短く持つてもあれだけの打球を飛ばされたのだ。

結果的に勝負には勝ったけれども、それでも、虹稀にとつては決定的な差があることを思い知らされた1打席だ。

この日、彼の成績は打者9人に対し四球0、被安打2自責点0三振3。それが投手、山元虹稀が残した結果だった。

2

「片岡監督、こちらにいらつしやいましたか。どうでした今日の試合は？まあスコア的には大敗でしたが、結構収穫もあつたんじやないですか？」

煙草を蒸かさせた片岡鉄心を見つけた太田部長と高島礼は今日の試合を振り返って使える人材がいるかどうかの最終判断、また提案をしていた。

スコアは3対15と為す術もなく1年チームのが敗北したかのように見えるが1回2アウト1・3塁の場面を見事に切り抜けそのまま8点差の2、3回を0点でびしやりと占めた虹稀の投球は大きく目立った。

「まず、複数のポジションを転々としていましたが唯一1年でフル出場した雨宮瑠偉、あの降谷の球も難なくとっていましたし、盗塁も刺した、本職じゃないポジションを器用にこなせるセンスと天才的なバッシング、あの野球センスは本物です。それに2回と3分の1回を無失点で抑えた山元虹稀、2打数1安打と打撃も悪くはないですし、彼らは1軍でも十分にプレーできると思います」

高島礼は自分が推薦で入学させたお気に入り選手が期待以上の働きをしたので内心喜びながら高らかに報告する、虹稀は予想よりもいくらの結果がったが瑠偉に関

してはそれ以上だった。

丹波からは3打数2安打1HR、川上からは2打数1安打と猛打賞を記録し、盗塁も3つ決めた、複数のポジションをこなせるセンスの高さもあり、夏の大会では本人が望んだようにスタメンになれる可能性も見えてきた。

青道高校は現状レフトとライトが固定メンバーでないためその枠に入るチャンスは大いになる。

「あの小柄なセカンド……3年の小湊の弟のようですね、道理でプレーが瓜二つだ。それに四球やフィールディングに荒さが目立ちました。2回を1失点5奪三振で抑えた降谷暁「明日勝てば、関東大会でデビューさせるつもりだ」

「え!? 降谷をですか?」

「あの浮かび上がると錯覚するほど威力のある高めの高めの剛速球……あれを打てる打者は全国にもそうはいまい。それと山元虹稀……腕のしなり、天性の肩の強さは惚れ惚れするほどだ。球の切れ、伸び、変化球の絶妙な使い方、どれをとっても3年の平均には達している。だが、それだけで抑えられるほど甘くはないのを知ってもらうために中盤、3イニングほど任せてみる。場合によっては降谷と丹波か、山元と丹波か、それとも降谷と山元になるかわからないがこの3人を軸にしていくつもりだ」

片岡鉄心の考えでは虹稀はあくまで足りないものを気付かせるために登板させると

言ったところ、今のままでもそこそこやれるが、彼にはそこそのレベル以上のものを求めたいという思いもあった。

「……沢村君は使えそうですか？」

唐突に高島礼が切り出した。

「沢村？あの子は増子に打たれてたじゃないですか！」

太田部長は驚いた様子で反論する、沢村は確かに一番多いイニングを投げたが結果はあまりよくは無いものだったからだ。

「しかし、降谷君も増子君に打たれています。野手の間に落ちる不運なヒット、本人のフィールディングも含め結果3点取られました。またもに打たれたのは増子君の1発だけでしたよ……打高投低、ウエイトトレーニングやサーキットトレーニングの普及でパワー野球全盛の現代高校野球において、左のムービングボーラーは貴重な存在かと」

しかし、まだ太田部長は沢村を認めてはいない、それに沢村よりも目を見張る選手が何人もいたからだ、それに高島礼は推薦で獲ってきた選手をひいきする傾向（とは言っても大抵は優れたプレイヤーであるため認めざるを得ない）があるのでそれを盾に切り返す。

「た……確かにウチは左投手が不足しているが……」

その間に割って入るかのように片岡鉄心は間に入った。

「馬鹿正直な真つ向勝負にセツトプレーやカバリングの未熟さ、今のままじゃ正直使えんな……だが、おそらく誰にでも教わっていないであろうあの豪快なフォームに、ギリギリまで球の出どころを見えなくする柔軟な関節。原石のデカさだけで言えば、山元と同レベルかもしれない……とりあえず降谷、山元は1軍、雨宮。小湊と沢村は2軍で経験を積ませる」

そうまとめられると2人は納得するしかなかった、投手陣は1軍で登板、野手は2軍で試合経験を積ませるという考えだった。

沢村に至っては、まずは野球から勉強してもらわないと話にならないがそれでも未知数の戦力として期待していたのだ。

「夏の本選まであと2か月、最後にマウンドに立っているのは誰になるかな」

状況は好ましくない。

いくら点を取ってもそれを上回る点を取られたら勝てないスポーツなのだから投手陣が不安定な今では勝ち上がるのが難しいのだ。

しかし、ようやく期待できる投手が、片岡鉄心の望むエースと言う存在が現れようとしている。

期待もある、不安もある、当てが外ればそれこそ甲子園なんて夢物語だ。

それでも、自分の目に狂いはないと、真後ろで見ていた衝撃を受けた自分を信じてこ

の夏を闘っていくしかないんだと覚悟を決めた。

3

がむしやらに走って、走って、劣等感も敗北感も頭から離そうとすればするほどその苦い記憶は焦げ付いて離れない、脚は軽く攣り痙攣をしているがそれでも走るのを止めなかつた。

立ち止まってしまえば、途端に心が折れてしまいそうでただただ足を動かして何も考えないと、忘れようとしたけれど、結局何も忘れられずに疲労と時間だけが過ぎ去っていく。

虹稀が走り終わったのは、終わらせられたのは降谷の球を捕り終えてバットを振るために歩いていたら生まれたての小鹿のように震えながら走っている姿を御幸が偶然にも見つけたからだ。

「なっ、お前何時から走ってるんだ!?!それに試合の後だぞ!少しは体を休めろ!」
「でも……:「でももくそもあるか!お前が戦力として見られている以上俺は正捕手として勝手は許さねえ!」

もし御幸が見つけなければ虹稀を搜索するために総員で出向いていただろう。

疲労しきつて膝はガクガク、息は絶え絶えの虹稀を無理やり浴場へ押し込んで30分ほど集中してバットを振り込むと早めに部屋に戻る。

交わした言葉は少ないけれど、1軍に上がったというのに悔しさをにじませて走り込む姿には流石に危うさを感じていた、戦力として見られているのもあるのかここで過剰な練習で壊れてしまつては堪らないという考えなのか部屋にて虹稀を待つていた。

御幸が部屋に戻つた3分後によく虹稀が部屋へと戻つてくる、御幸の叱責が効いたのか大人しくストレッチをして体をほぐしている。

暫く気まずい沈黙が続くと、虹稀は重い口を開いた。

「一也さん、さつきは、その……ありがとうございます」

御幸に止められていなければ気付かずに体のどこかを痛めていたのかもしれないし、あのままみんなに迷惑をかけてしまつていただろうと思うと未然に止めてくれた御幸には感謝しなければいけなかつた。

「つたく、何がそんなに気に入らないんだ？1軍に上がったんだ、文句はないだろ。何がそこまで悔しいんだよ」

あくまで御幸は平静を装うが、ぶつきらぼうに問いかける、気まずいと言えば気まずいが、雰囲気的に明るく装うことが出来なかつたからだ。

虹稀は唇を噛むような仕草を見せると

「……降谷の球を見てつ、敵わないんじゃないかって思つてしまいました。瑠偉のプレーを見て、天才つてこういうやつのこと言うんだなつて、己惚れていた自分が、恥ず

かしくなって……でも、認めたくなくて……」

決して涙は見せないが、震えた声で絞り出した言葉を聞いて御幸は少しだけ虹稀のことが分かったような気がした。

沢村にしろ降谷にしろ自己主張はきちんと口ですが、虹稀はそれを今までしなかった、だから解らなかつたが今ようやく、御幸は虹稀が根っからの投手だと理解する。

―なるほど、口には出さなくて表情にも変わりはないけど、相当な負けず嫌いなのか……、まあ投手らしい負けん気の強さなのはいいけど、こういうタイプは限界まで抱え込むから難しい

「確かにお前は降谷のような剛速球を投げることは難しいだろうし、雨宮みたいな凄え野手にはなれない。けどな、そこで競い合うんじや一生かかっても降谷にも、雨宮にも勝てねえよ、お前はお前らしさを伸ばせ」

それ以上に、御幸は何も言えない、自分らしさというのは自分自身が決めることだ。制球力が素晴らしいのは確かだがそれだけに収まるような選手でないと期待しているからでもある。

「自分らしさ、ですか」

「答えは自分で探すんだな……それじゃあゆっくり休めよ」

「一也さん、ありが……明日からよろしくお願いします」

虹稀に考える時間をつくるため、もう無茶をすることがないだろうと確信し日課の素振りをおこなすためにバットを持って部屋を出た。

しかし、これが序の口であるという事を御幸が知るのもう少しだけ後になる。

（余談）

3 / 28

『先輩、私です！』

『高校でも頑張ってください、応援しています！』

『うん、頑張るよ。ありがとう』

『そつちも大変だろうけれど、野球大変だと思うけど頑張って』

4 / 8

『先輩、最近調子はどうですか？』

『私たちは先輩達がいなくなっただけで締まらない日々が続いています』

『私も最上級生の1人なので先輩みたく頑張っていきます！』

4 / 15

『先輩、元気ですか？』

『今日は練習試合でした、先輩がマウンドにいない試合ってなんだか新鮮です』

『私はやっとヒットが打てました！先輩と一緒に野球している時に見せたかったです！』

『こんなところで私の近況報告は終わります。それではおやすみなさい』

4 / 22

『センパイ、お疲れ様です！』

『寮生活はどうですか？やっぱり大変なんでしょうか？私はとてもじゃないけど寮生活なんて無理な人なので考えるだけで恐ろしいです……』

『でも、先輩ならすぐ適応しちやいそうですね』

『返信、たまにでいいので返してくれると嬉しいですよ。頑張ってください』

4 / 29

『不在着信』

『虹稀先輩、もしお時間あれば少しお話しませんか？』

『なんて、既読すらついていないのに夢のまた夢の話だね』

私は、週に一度だけ送っているセンパイのラインの画面を眺めている。

3月に初めて連絡先を交換した時からまだ一度しか返信が来ていなくて、4月に至っては既読すらつかないし、忙しいのは分かっているんだけどやっぱり悲しいというのが本音です。

私とセンパイの関係は結局のところ、ただの先輩と後輩という関係で、それ以上でもそれ以下でもなく、先輩が学校を卒業した時点でセンパイとの関係は、センパイと私との関係は完全な一方通行になっていたのかもしれない。

こんな風に画面を見続けていても何かが変わるわけがないのに、今日も一日中練習試合で、週末の課題を何とか終わらせて待つていたけれども結局今週も何も変わらない画面を眺めるだけで終わってしまう。

今日もやっぱり何もなくて、私は「なんて、冗談です。体を大事にして頑張ってくださいね」と打ち終えて送信する寸前。

眠ろうとしていたその時、私は目を疑うような状況に陥り少しだけパニックになってしまいました。

【返信返してなくてごめん、今なら少し話せるけど……】

あまりにも突然のことで、あまりにも嬉しくて、現実だつてなかなか受け止めきれずに心臓はとびでそうで、何度も何度も画面を見てこれは夢じゃないってことを確認していました。

【と言うか時間的に寝ているね、俺はまあ何とかやっていけているよ。運よく1軍に上がれてこれからが本番だけど、夏の大会までがむしやらしがみ付いていきたいと思う】

【応援ありがとう】

そんな通知を見ると、反射的に通話ボタンを押して電話をかけていました。

コミカルな音が1回、2回となる間は凄く時間が長くて、これを逃したら多分しばらくはこういう機会なんてないのだろうと思っていたのもあり、変な汗が自分でも驚くぐらいに噴出していたのです。

「あ、はいはい。お久しぶり、その、元気だった?」

「あ、えと、こんばんは!もちろん元気です!」

「そうか、そりやよかった。後輩ちゃんが元気で良かったよ、俺は、ちよつと色々あつて気分は良くなかったけれど、君の声で元気が出てきた」

「センパ……センパイでも気分が落ち込むことつてあつたんですね、いつも冷静で世の中見下したような感じか楽しそうに野球しているのしか印象がなかったので驚きです。それにいつまで後輩ちゃんです通すんですか!?私はもう後輩じゃないんですよ」

「それもそうか、そういう光ちゃんは俺のことを先輩呼びしているけどそれはどうなのかな?」

「ううっ……じゃあ、虹稀センパイで」

「先輩じゃないはずだけど?」

「虹稀………さん、で」

「まあ、どうでもいいんだけどね」

「どうでも!?!」

久々に話した先輩と、野球以外のどうでもいい話を出来るなんて思っていないなかったし（結局野球の話だったけれど……）、名前で呼んでくれるなんて思ってもいなかったのので私としてはとてもうれしい時間でした。

虹稀さんは初めて壁と言うやつにぶつかっただけ（虹稀さんでも挫折とかそういう経験を味わうことがあるんだなと驚きました）、少しだけこの人も人間なんだなあという感がわきました。

こうやって話せることはなかなか難しいことだけれど、返信はなるべく返すと虹稀さんから約束してくれたので、これからはもうちよつと遠慮なしに連絡しようと思つていきます。

もうすぐ5月になります、湿気の多いジメジメした時期が私は少し嫌いだったけれど、階段ダツシユとか、階段手押し車が多い季節は嫌いだけど、少しだけ頑張れそうです。

助走

1

決して、間違ふことは無く、間違えるはずもなく、悪くないボールだった。

ベストではないけれどベター、良いか悪いかで言えば絶対に良いと思つた出来栄の球が、あれほど簡単に真芯で捉えられ、あつという間に視界から消えていくのは山元虹稀にとつても初めての経験だ。

調子の善し悪しなんて言い訳にしなければならないけれど、この時ばかりは自分でもかなり調子がいい時だと感じていたのもあつて、誤魔化すことさえ出来ない。

それが一度ならず二度も三度も続いたのだから偶然やまぐれなんて事象ではなくてその事実が今の自分が高校では通用しないことを何よりも確かに物語っていた。

最後にマウンドを降りる前に、投じた一球。

どこまでも飛んでいくのではないかと疑いたくなるほど高く大きく舞い上がった白球の行方を、ベースカパーなどは考えずただ茫然と見送る。

一也さんがタイムをとりこちらへ向かつてくる、他の内野手の先輩たちから声を掛けられるけれど何も入ってこない。

冷たく、雪原のように真っ白な頭と身体とは対象に熱くなり始めた太陽がベンチへ戻るまでの間、重たくのしかかった。

1回2／3を投げて四死球1、被安打3、自責点4最後は満塁ホームランを叩き込まれる。対して6人連続奪三振とこの日衝撃的なインパクトを残した降谷暁。

その姿を虹稀はマウンドを降りた代わりについたレフトからその背中をただ見つめていた。

彼とは正反対の成績を残したままマウンドを降りることになった山元虹稀は、目もくらむような眩しい才能に押し潰される寸前だった。

モノが違うと、認めてしまうほどに、自分が飛びぬけてすごいわけではなく上には上がいると明確にわからされてしまい、心にひびが入ってしまった瞬間だ。

けれども、初めての完全敗北、挫折というものは山元虹稀が成長してゆく過程の中で必然と約束されていたのかもしれない。

このまま這い上がるか、そのまま負けを認めるか。

それは山元虹稀次第だ。

そこから立ち上がり、這い上がれるのなら彼は確かにエースナンバーを背負う資格を手に行っているだろう。

「……4点は取られはしたがお前は3ランホームランを打っている。その点では帳尻合わせをすることは出来るが、俺ははつきり言おうと思う。お前のためにもな」

純粹に投手としてではなく、野球選手としての総合力を期待され1軍に入った虹稀は打ち込まれた試合の後クリスのもとでの調整を余儀なくされていた。

結果が全ての高校野球、どれだけ頑張ったか、どれだけ努力したのかは確かに大事なことではあるけれども一度負ければそこで夏が終わってしまう彼らにとって結果が出なかつた言い訳などする事は出来ない。

「はい、慰めや氣遣いなんて一切いりません。僕は……俺は、どうすれば、いいんでしょうか？」

虹稀は思わず崩した言葉遣いを修正することは無く、珍しく感情的になっていた。

焦りか、劣等感か、それとも両方か。

クリスにとってはほとんどタメで尚且つバチバチに敵対している後輩（沢村）がいるため後期の些細な言葉遣いに気にすることは無かつたがその姿勢に危うさを覚えた。

落ち着かせるために一つ質問を投げかける。

「そうだな、じゃあ一つ質問だ。なぜおまえの球はあんなにも真芯で捉えられたと思う？ 決して甘いコースにあれだけ球が集中していたわけでもないだろう、調子も悪くはなかつた筈だ」

「多分、球質の問題だと思います。キレが、伸びが、重さが僕の球にはなかったんだと思います」

それなりに考えてはきたのだろう、すぐに答えは出てくる、しかし捕手目線で試合を見ていたクリスにとってはまだまだ不十分な回答だった。

「そうだな、間違っではない。ではなぜそのような事態が起こったのか、説明してみせろ」

思考を活性化させることによって焦りを緩和させるのが狙いだった。

今度は少し長い間を開けて虹稀は答えを出した。

「僕の球は、多分………今の時期の選手にとって打ちやすい速度だから」

クリスは一人称が僕となっていることを確認すると虹稀の頭がようやくいつもの調子に戻ったのだと判断する、関わった期間は短いが虹稀は恐ろしく理想が高い、丹波の下位互換とは言えども1年のこの時期にそのレベルに達していれば大したものだと評価はしている。

「まあ半分正解だ、ではヒントだ。なぜ初登板であるお前があんなにも早く、初っ端から叩かれたのかよく考えてみる」

「……それは、既に対応済みだったから」

丹波光一郎という投手と山元虹稀という投手は非常によく似ていた、片岡監督はこれ

を踏まえたうえで丹波が相手打線に捕まった後に虹稀を送り出したのにもこのような理由がある。

制球という点では虹稀に分があるかもしれないが、身長による角度や球速、変化球等々ほとんどは丹波が上回っている。

制球がいいのは間違いないが突出してよいわけではない、それ故綺麗にまとまった山元虹稀という投手は現時点では丹波光一郎という投手の下位互換でしかない。

「正解だ、やはり話が早いと助かる。……ああ、こちらの話だ、気にしないでくれ。さて本題に入ろう、これからどうすればいいか、という問いに対する答えだが………：知らん」

「………確かに」

クリスの意見は最もだ、これからどうすればいいかなんて無責任なことは答えられないし捕手の自分が投手にアドバイスしたところで成功すればいいかはわからない、それにどうするかを自分で決めなければならないのは虹稀自身もよく分かっていると思っ
ているからだ。

「俺はお前ではないし投手でもない、詳しいアドバイスは出来ん。それに、今は打者としての方での起用も考えられているだろう、とりあえず今は一軍で出来ることを探せ。今のままじゃせいぜい余裕のある試合での中継ぎでしか登板機会はないだろう。今アド

バイスできることはしつかりと身体を作り総合力の底上げを計れ。あとは監督にでも聞くんだな」

だが、クリスは見誤っていた。

山元虹稀という投手の本質を短い期間で見抜くのは言葉の自己主張の激しい方ではないので見破るのは難しいことではあるが、それでも被っていた羊の皮にまんまと騙されていたのだ。

「そうですね、甲子園準優勝投手ですし。お忙しいところすいません、リハビリ頑張ってください」

礼儀正しく、品行方正、普段の虹稀の人格という点ではそれは確かに間違っていないだろう。

幼少期から受けていた教育という事も関係しているとは思いますがまだプレイヤーとしての側面を分かってはいないばかりにクリスにはこの後の虹稀の行動は予想外であった。

しかし、あまりにも模範的過ぎる良い子であるよりも本質の方が一人の捕手として腑に落ちるけれども、だからこそ沢村よりも降谷よりも手のかかる後輩になることをこの時はまだ予想だにしていなかった。

「ああ、お前も怪我だけには気を付けて頑張れよ」

今のところ手のかからない、随分と落ち着いて大人しい後輩をから見送られクリスは父親の待つジムへと足を運ぶ。

しばらく歩いて直感に近い胸騒ぎがした、少しだけ後ろを振り返ると頼もしく見えた後輩の後姿がとても脆く、危ういものに感じてしまう。

決して誰にも見せない、見せたことのない虹稀の表情が表れているようでクリスの目には酷く脆弱な姿が映っていた。

3

湿気の多い季節がようやく終わりそうだ、ジメジメした暑さからカラツとした暑さに変わったけれども相変わらず夜風は気持ちがいいくらいに冷たくて心地が良い。

風が生暖かく、まどろっこしくなってくる頃には3年生の先輩たちがもしかしたら引退していると考えると少しだけ夏が来るのが億劫になつてしまう。

青道高校は甲子園が遠ざかっているとはいえ列記とした強豪校だ、だからというか、先輩後輩の関係は非常に厳しくてある程度色々されることは覚悟していたことだけど、思つた以上に俺が関わっている先輩たちは優しくかつた、というより年齢なんて関係なく一人のプレイヤーとして見てくれていているのかもしれない。

先に行つた虹稀を追うように必死で結果を残したかいかもあつてか俺はようやく1軍に入ることが出来た、代打や代走、守備だけといった起用法が多いけれど最近はず

試合目であれば外野手として先発で試合に出ることも少なくない。

まあ順当というか妥当というか、それなりの結果は残し続けているしそれなりの練習もしているから当たり前と言えれば当たり前のことなただけれど。

とにかく、宣言通りに事が運べて運が良かったと言えばそうなるだろう。

一人だつたら、誰もいなければこうして泥臭く頑張ることもせず順当に先輩たちがいなくなるのを待っていたかもしれない、けれどそれをしなかつたのは、させなかつたのは、いつだつて一歩前に虹稀がいたからだ。

ポジション的な問題もあるかもしれないけれど投手である虹稀と降谷は先に一軍に上がった、公式戦で二人とも登板するけど結果は正反対、三振の山を築いた降谷とは違い満塁ホームランを叩き込まれ途中降板した虹稀は、初めての壁にぶつかっていたようだ。

言つては悪いがきつとどこかでこうなることは承知でいた、理由は単純明快で投げ方に問題がある。

俗に言うアーム式投法という投げ方に問題があつた、今まで活躍できていたのは現段階ではストリートが早く、コントロールがずば抜けていたからだと思うけれど、やはり高校という舞台で強豪校にアーム式投法では通用しない。

前に投げていた丹波さんと非常に似ているという事もあつて打ち込まれたんだろう

けど、遅かれ早かれこうなることは正直分かっていた。

その中でフォームの改良に苦しみながらも投手としては最低限の仕事はしつかりとこなし、打者としても申し分ない実力を見せつけてくるんだからこっちも嫌になる。

打者としての能力は降谷に対しても同じことが言えるんだけれど。

それでも、こうなることが分かっても山元虹稀という投手と一緒にここに飛び込んだのには一つの理由がある。

中学の時全国の舞台で対戦した時、本人は気付いていないだろうけれど虹稀はアーム式で投げてはいなかった、疲れによる本能的なものか、それともセンスが導き出した最良の回答か本人にもきつとわからないんだろうけど、余すことなく全エネルギーを生かして腕をしならせていたのだから。

初めての経験だった、たかが中学生のストレートに恐怖を抱いたのなんて後にも先にもあの時以外にそんな経験はない。

軟式ボールでバットを押し込まれたことなんてなかったし、投げるコースがどこか分かっていたのに前に飛ばせなかったのは今でも屈辱的だ。

予選から一人で投げ抜き、灼熱のマウンドで疲労の色を最初から残しながらも100球を軽く超えていたあの場面であのボールを投げれる化物みたいな奴、現時点では降谷の方が確かにすごいと思う。

けど絶対に、間違いなく、虹稀は一回りも二回りも大きく成長して夏までには戻ってくる。

フォーム改良なんてすればもつと時間はかかるはずだけど無意識のうちに出来ていたことなのだから少しコツを掴めば簡単だろう。

今日も今日とて死ぬんじゃないかなと思うくらい我武者羅にあいつは走っている、体格には恵まれていない虹稀にとつてはとても大事なことではあると思うけれど正直俺も少しやりすぎだと思ってしまうくらいに酷くポロポロになりながらも、いつも死ぬ一歩手前くらいまで行くくらい。

努力が実るなんて保証はどこにもないけれど、きつとお前ならやれるって信じている。

そんな虹稀に負けないように、お前が走り終わって戻ってくるまでは絶対にバットを振り続けている、全てにおいて虹稀に負けたくないから。

お互いにフラフラだ、練習について行くのもやつとだし自主トレなんてやらずに本当は今すぐにも体を休めたい、でも互いに負けたくないから意地を張り合っている。

こんな刺激的に初めての夏を迎えられるなんて想像していなかった、まさか同年代に虹稀意外にすごいやつがいるとは思わなかったし、こんなに必死になるなんて考えもしなかった。

やっぱり、俺が想定していたよりも遥かに高校野球のレベルの方が高かったってだけの話だけだな。

いつもより10分くらい遅い時間に虹稀は走るのを止め、酷使した体に入れて何事もなかったかのように、あくまで軽く散歩してきましたよと装い寮に戻る姿が見えた、今にも崩れ落ちそうな擬態の癖に様になっているのが苛つく。

自分が凄エ奴だって思った男だつてあれだけやってるんだ、自分が今まで築いてきたものだつて3・4試合打てなければ何もかもが崩れ落ちる、ここまで来たなら後悔しないために俺も俺なりにやることをやるだけだ。

これまでに無いくらい振り込んだバットのせいでは血豆だらけ、振る度に痛むし潰れそうだ（潰れたとろでノルマまでは絶対降り続けるけど）。

この痛みが成長の糧となる、なんて俗な考えをしている自分が馬鹿らしいけれどちよつとだけ悪くないなんて思ってしまうほどには感化されていた。

己惚れていた自分が恥ずかしい、エースになるといったものの実力不足とかそんなことではなく争う土俵にすら立っていないかった。

打者としても投手としても中途半端なままでは1軍にいたことが申し訳ない。

今はとにかくできることを少しでも多く、人よりもつとつと練習して精度を上げる。

その上で更に効率的に要領よく努力をしないとイケないと、そうしなければいけない。

上級生に交じり自分の納得いかない結果が出ていると思うがよくやっていると。

その理想の高さには感心するがそれがかえって自分追い詰めていないか？

お前の目標はなんだ？エースになることか？1軍に残ることか？

目的と手段を間違えるな。

それを履き違えているのならこの夏お前を戦力として見る事は出来ない。

自分自身が何を求められて1軍に上がったのかももう一度よく考えてみるのも大事だぞ。

野球ノート No.1 山元虹稀 より抜粋

軋む齒車

1

雨の音が静かに響いていた、目覚まし時計が鳴る前にタイマーを切り同室の先輩、御幸一也を起こさないようにそつとベッドから出た。

寝間着から練習着に着替える、その間雨の音のおかげで布の擦れる音はうまくカバーできているのではないだろうか。

そんなことを考えながら着替えていると思つた御幸から不意に声を掛けられた。

「……朝早いな。今日もやるのか？ やめとけ、雨降っているし……最近何があつたかは知らないがオーバーワーク気味だ、焦りは禁物つてクリスさんにも言われているだろう？ 今日はずつかくの休養日なんだしもう少しゆっくりしている、体を休めることだつて練習の１つだぞ」

「そうですね、けれども今は時間が惜しいんです。もつと、もつと練習しないと、まともなことをやっていたら降谷には勝てないですから」

「いい加減、ちよつと落ち着け。お前の努力は認めるよ、けどな、無茶と無理は違う。お

前のは前者だ、1軍の戦力である以上体を壊されちゃ困るんだよ」

御幸は先輩としてではなく、正捕手としての意見を強い口調で言った。

今の虹稀には一番効果的な対応であることはこれまでの経験から学習済みであるし、それに言葉の重みも全く違うからだ。

虹稀は着替えるのを一旦やめた、御幸の言うことは確かに間違いじゃない。

寧ろ後輩の体を労わって無茶させないようにしている正しいことだというのは虹稀にも分かっていて、けれども、それでも

「じゃあ、今日はじつとしていろいろ言うんですか？折角の空いた時間をただ何もせずじつとしていろと？」

「そうだ、お前はとにかく体を休めることが大事だ」

「そんなの無理だ、俺にはじつとしていえる事は出来ない。立ち止まっている暇なんてないんです、誰よりも頑張らないと、誰よりも練習しないと、じゃないと」「いい加減しろ」

一際強い御幸の声が虹稀の言葉を遮った、互いが互いに顔を見合わせていないためお互いに表情はわからない、それでも強く、静かに、はつきりと告げられた言葉は怒りという感情が最も色濃く反映されていて虹稀を黙らすのには十分だった。

「どんなことをしているか詳しくはしらないけどよ、こんなところでお前が潰れるのは

見逃せないんだわ、だから今日はいつものメニューは止めろ」

「……………」

「別に練習をやるなって言っている訳じゃない、悪いが沢村と降谷との守備練習に付き合ってくれないか？俺たちだけじゃ色々と疲れるし……お前あいつらと大して話したことないだろ？同じ1年同士親睦を深めるのも大事だぞ」

「ライバルたちと馴れ合うつもりはありません」

「そういうな、第一何を塞ぎこんでいるのか知らないけど最近元気ないじゃねえか。息抜きもたまには必要だぞ。地元に置いてきた彼女とも最近連絡とっていないみたいだし」

休めという事だ、確かに焦りもあつたし結果を残しているほかの1年に比べ結果がないことで余裕もなかったのかもしれない、けれど……そんな先輩の氣遣いすらもこの時は余計に虹稀を追い詰める言葉でしかなかった。

「……………」

「わかった、そのいじりに前みたいに反応してくるテンションじゃないのはよくわかった。とにかくあれだ、先輩命令だ。とにかく今日は付き合ってくれ」

方向違いに沈黙を受け取った御幸だったがこの時虹稀は少しばかり安心をしていた、もし心の内がわかられていたら逆に意地を張っていつもみたいな無茶を強行したかも

しれないからだ。

「分かりました」

納得はいかないながら御幸はようやくその一言を絞り出させることに成功し、いつもよりずいぶん遅い起床時間まで浅い眠りにつく。

渋々といった感じでベッドに戻った虹稀は御幸が眠りにつくよりも先に屍のように動かなくなっていた。

2

地獄の合宿が始まるらしい、と野球部の皆がぼやいていた。

もうしばらく先の話ではあるけれど先輩たちは梅雨が明けると少し憂鬱になりそうと言ってそんな話題を口にしていたものだ。

山元君曰く、「ド天然」である私は野球部の事情なんかも知らずに先輩たちに何の配慮もなしにどういう意味か聞いてしまった、今思い返すと背筋が凍ってしまう。

それくらいこの合宿に込められたものを知らなかったし、失礼極まりない軽率な質問であつたと本当に反省している。

どの経路でその情報を知ったのか山元君は子供のような無邪気すぎるくらい笑顔でいじってきた。

『そういうところは良い所だけどそれを人に聞く前に自分で考えてから人に聞くともう

『こういうことは無いと思うよ』とこれまた難しいけれど的確？なアドバイスをくれた。

それはともかく、恥ずかし気に受け売りだけどね、とはにかみながら笑っていたつい先日とは打って変わって、その様子はどこかおかしかった。

いつもの山元君ではなかった、根拠は無い。

ただ理由付けするのであれば女の感というものだろうとは思っている。

授業中もどこか遠くを見ていて、時折後ろの席にいる私に聞こえるくらいの歯ぎしりを幾度となく繰り返していた、私が話しかけると気さくに答えてくれて笑っているがいつものような朗らかさは無く、ぎこちない笑顔はどこか無理をしているようだった。

凶々しいのは分かっている、これは自己満足の勝手な行いであることは分かっていた、けれども私は意を決して土足で踏み込むことに決めた。

入学当初の山元君は自信で満ち溢れていて明るかったのに、今は破裂寸前まで膨らんでしまった風船のように張り詰めていて、いつ破裂するかもわからない危うさと今にも崩れそうな笑顔は見ていて気持ちのいいものじゃない。

そう考えていると思わぬところから助け船が飛んできた、それは隣のクラスでいい意味で化物と呼ばれている野球部一年生の雨宮君。

『そ、それで、お話とは何でしょう!?!』

ガチガチに緊張している私を見て雨宮君はクスリとほほ笑んだ、他の同級生とは醸し

出す雰囲気全然違くて私は兩宮君のことが少しだけ苦手だった、嫌いじゃないけど話すのにとても気を使ってしまうからだ。

「そんなにかしこまらなくてもいいよ、とつて食おうつて訳じゃないんだし。話つつかなんていうか、虹稀……山元のことなんだけどさ、一言でいいから声かけてみてくれ『悩み事があるんだつたら相談に乗る』とか『話せば楽になるかも』とかそういう類の言葉でいい」

「あ、えと……それは丁度言おうとしていました、私もすごく気になったので……」

金丸とか沢村くんとかだつたらもう少し気を遣わずに話せるのに、何というかオーラが違うというか、そんな兩宮君はやっぱり少しだけ苦手だ。

凄くいい人であるとは思うけど。

「あ、そつか。余計なお世話だつたかな？」

「いえいえ！とんでもない！逆に私が背中を押されたというか、勇気をもらつたというか、逃げ道をもらつたというか……言い訳が出来たというか」

「……ハハツ面白いな吉川は！なるほどなるほど、虹稀の奴が気に入るわけだ」

「えっ!? 私はそんなんじゃない……」

「それなら、安心して任せられるな。もし虹稀の奴が吉川が心配しても話すことは何もなく塞ぎ込んでいるなら仕方ない！じゃあよろしくな！」

雨宮君は嵐のように私の心を荒れさせると何事もなかったかのように静かに立ち去ろうとしました、だけど最初から思っていたことをどうしようもなく聞きたくて雨宮君を呼び止めた。

「雨宮君！私なんかじゃなくて雨宮君がいけばいいのにどうして私なんかに？」

「……あいつは俺たちに弱みなんて見せないし見せたくもないだろうさ、……なんてかつこいいこと言っただけ、男のプライドってやつだよ。くだらないだろ？だからというか俺が言っただけで追いつめられるだけかもしれないし、言い方は悪いが消去法だよ。プレイヤーでもなく、しかし野球部で、一番あいつが気を許しているのは吉川だと思っているから」

「どうしてそこまで？」

「あいつと一緒に甲子園で優勝するためにわざわざ来たんだ、こんなところで勝手にこけられても困るんだよ」

これは秘密な、と念押しをして笑ってはいたけれど目は笑っていないかった、雨宮君の表情を表すならば怒りだ、とても怒っていいように見えた。

男の子は思ったことが顔に出やすいみたいだ、山元君だって表情に出るから分かりやすい。

けど、その怒りという感情の理由は男の友情だとかそういうことはわからないけれ

ど、この時ばかりはそれが自然と腑に落ちていた。

「つーわけでよろしくな！やばっ授業始まる！」

本当に慌ただしく、コロコロと表情を変えて嵐のように去っていった。

教室に戻ると、いつもは次の授業の教科書を読んでいる筈の山元君が、前の授業の机の状態のままグラウンドを怖い顔で見下ろしていた。

いつもは山元君の近くにいる人たちもそのピリピリした雰囲気を感じ取ってか誰も近づこうとはしていなかった。

今思い返すと最近の山元君はどこかおかしい、雨宮君の言う通り一人で塞ぎこんでいる。

授業中もどこか上の空で休み時間になると余計にその緊張感が増していた、私だつてできれば近付きたくないほど怖い、でももうすぐ合宿も始まるし、正直なところ雨宮君に頼まれたというのもあるし先延ばしにするというのは私にとつても好ましくない。

だから……本当はめちやくちや怖いけれど思い切つて話しかけた、もう斬るなら斬れ！という具合に思いつきり踏み込んだ。

「あの～山元君？」

「……」

「もしもし？山元君？」

「……………」

「や、やまもとくん……………」

「……………」

「ハ、ハ）うきくーん」

「……………」

心が、折れる音がした。

睨まれるくらいなら覚悟はしていたけど無視されるまでは想定していなかった。

あんたはよくやったよと、クラスの子からの慰めがすごく心にしみた。

心が折られて泣く泣く昼食を食べて皆に慰められていて昼休みも残り少なくなつた時に、不意にその時は訪れる。

「悪い春乃、なんか話でもあるの？」

掃除時間の少し前、教室に訪れた山元君はいつも通りで安心したけど、2時間くらい前に私が話しかけたことをついさっきの出来事のように尋ねてくる山元君は、きつと私よりも天然だと思う。

3

あの日、梅雨の終わりを告げるかのようにバケツをひっくり返したような雨が降った日から監督に投球禁止を言い渡されて1週間。

今までずっと考えていた、最近やってきたことの全ての意味を。

体幹トレーニング、自重筋トレ、バッティング、遠投、インターバル走、どれも基礎能力と野手としての能力を高めるものでピッチングには大して影響しないもので……むしろどれもきつすぎてピッチングのことを考える余裕なんてなかった。

意図して遠ざけさせているようにも思えた。

2軍のグラウンドで走ってこいと言われたけど延々と走るものではなくマネージャーをつけさせられてのインターバル走と体幹トレーニング（どちらもすぐきつかった）と動的ストレッチに柔軟、自主練なんてやらせねえぞといわんばかりのと常軌を逸したと言ってもいいほどの過酷なトレーニングメニュー。

それに加え、外野手としてノックを受けた、しかもアメリカカノックを集中的に、憂さ晴らしにバッティングが出来ただけは心の救いだっただかもしれない。

そんな一週間を過ごしてようやく、頭が冷静になったというか、落ち着いたというか、ともかく焦りや不安という感情が前ほど強くなくなってようやく冷静にピッチングのことについて考える時間が出来た。

課題は制球、球威、ノビ……まあ全部、総合的に低い、どれも必要不可欠でなくてはならないものでまだまだ上を目指さないといけないことを再確認しただけだった。

それでもマウンドにいる自分を想像して、思い出して、課題をひたすら洗い出した。

課題、というよりかはどうすればいいのか、どうしたら生き残るか必死になって考えた。

丹波さんのように現時点では経験も球速も足りていない、降谷みたいに豪速球が投げれる訳でもない、沢村みたいにとびぬけた特殊技能があるわけでもない。

そう考えると自分は、普通の、平均的な投手である。

確かに、高水準での平均かもしれないけれど、グラフ化したときに歪に飛び出るステータスのようなものが自分には欠けていた。

ひとまず、何か一つでもとびぬけたものを磨いていこう、と一通り考えがまとまって心を落ち着けると、そういえば2限目の休み時間春乃に呼ばれていたことを思い出した。

あの時は丁度悪い時の苦い思いを反芻していたせいと少しスイッチが入りかけていたこともあってスルーしてしまったような気がしなくもない。

そういえば少し泣き目になっていたかもしれないと思いだして教室に戻るとどうやらクラスのみんなに何故か慰められている春乃がいた。

「悪い春乃、なんか話でもあるの？」

その問いかけに、安堵したような表情を浮かべる春乃と春乃をもみくちやにするクラスメイトの謎過ぎる行動を微笑ましく眺めていると昼休みの終わりを告げるチャイム

が鳴る。

昼休みはもうない、この予鈴は昼休みの終了と同時に清掃の時間が訪れを知らせるものでもあった。

幸いなことに春乃とは同じ掃除場所なのであわてることなく話ができる、大した話ではないと思うのだけれど、けれどどこまで畏まられるとムズムズするというか、やりづらいついというか。

「どうした？何か話でもあるんじゃないの？」

先に耐え切れずに口を開いたのは俺の方だった。

すると春乃は何故かおもむろに深呼吸をし始め、先ほどの発言に後押しされるかのようにな意を決して春乃は俺を見上げた。

「その、さ。最近思いつめてることとか悩んでることとかあれば私で良ければ話を聞くらう出来るんだけど……ゴメンね、必要ないよね、何言ってるんだらう私、山元君に失礼だよね、何かの思い違いだよねきつと！」

「そんなに謝るなよ」

それは勇氣ある行動だ、俺であればだれかが悩んでいる時にそれに気付いても自分から声を掛けることが出来ない、そんな勇氣は持ち合わせていない。

だけど目の前の女の子は勇氣を振り絞って言ってくれた、これがもし御幸さんや瑠偉

といった野球部のプレイヤーであれば絶対に強がって何も無いと言い張っている。

でも、春乃ならまいっか、とそう思う自分もいた。

「ちよつと恥ずかしいから、絶対にこのことは秘密にするって言うなら話してあげる」

「そうだよ、私なんかじゃ全然力になれないよね……え!？」

「まだその話続いていたのかよ」

わしやわしやと悪戯で髪を崩すと恨めしそうに睨んでくる、でも本当に久しぶりに声を上げて笑った気がした、そうすると心も体も少しだけ軽くなる。

「で、約束出来る? 秘密にするって」

「うん、絶対!」

改めて念を押した、何故なら今から話すのは自分の弱さだから。

春乃に話す、という名目を得て自ら向き合うのだから。

誰にでもいえることじゃない、けど春乃にだけは少しだけ話してもいいと思ったのも俺の弱さなんだろう。

どこから話し始めたらいいか少しだけ躓いたけれど、緻密に構成されていたパーツがかみ合わなくなったあの日から、1年 v s 上級生の紅白戦から話し始めることにした。

そこから始まりだった、納得いかない結果で2軍入りその間1軍で登板させてもら

うも結果は思わしくなく、初めて不調の波にのまれていった。

そして遂には投手としての出場機会は貰えず遂には試合にも出れなくなった、それでもなんとかしがみ付き崖っぷちまで追い込まれた。

その経緯を事細かではないにしろ吐き出した、悔しさも不甲斐なさも未熟さも弱さも……全部は流石にプライドというものがあるので避けたが出来るだけ簡潔に要所を抑えて胸の内を吐露した。

ほとんど一人語り、けれども真剣になつて親身で一生懸命さに助けられた。

「そんな感じ」

特に大げさに話すつもりもなかったから何気ない一言で話を締めくくる、憑き物が落ちたような気がした。

その間、きつと面白くも何ともなかったただろう話を親身になつて聞いてくれて、悔しさできつと顔が歪んでしまった時もあったただろうけどそれでも嫌な顔をすることなく最後までいつものような笑顔で聞いてくれていた。

そのいつものような、ということが物凄くありがたかった。

この時にもし光であればなんて言ってくれただろうと（暫く余裕がなく連絡を取れないなかつたからかもしれない）、素つ頓狂な考えが頭を過つたのはどういふ原理か定かでない。

けれどもきつと、彼女の前では強がって話せなかったと思う、その点では春乃と話せてすぐく助かった。

何故かこの時、不思議と彼女の声が聞きたくなくなって、あのやり取りがとても恋しくなっていたのはつまらない話だ。

「片岡監督、それでは決まったのですか？」

「はい、今週の日曜日に花田東高校と試合をすることになりました、稲城実業の成宮鳴と同じく世代No.1左腕と呼び声高い大島和希を要する東北の強豪校と1試合できるのはとてもありがたい話です」

「それは選手たちにとっても良い経験になりそうですね、先発はもうお決まりで？」

「ええ、その件ですが、先発は山元虹稀でいこうかと」

「…っ山元ですか？最近調子が悪い山元よりも降谷、もしくは丹波に経験を積ませたほうがいいのでは？」

「もちろん山元が打ち崩されればリリーフさせます。しかし山元を夏どういう起用をす

るべきか決めるためにも、全国屈指の強豪校相手にどこまで通用するのか見る必要があるのです」

一度バラバラに崩された部品は、一回りも二回りもより強靱に大きく成長し再びあるべき場所に戻ってくる、それは予想よりもはるかに早く未熟なままに。

少年は力を手に入れようとしている、しかしその力が諸刃の剣であることをまだ少年は理解していない、それは一時的なドーピングとよく似ていた。

才能・資質につぶされるのが先か、気付くのが先か。

何れにせよ少年の前にはいばらの道しか用意されていない、入り口はあるが出口は無い、そんなところに少年は足を踏み入れようとしているのだから。

少年は今、大きな扉の前に立っている。

開かれた扉

0

「こんばんは、元気にしていた?」

「はい、こんばんは。お久しぶりですね虹稀さん……本当にお久しぶりですね」

「言うようになったなあ、悪い、謝るよ。ちよつと色々あつて連絡するの忘れていた」

「忘れてた、ですか。なるほどなるほど、別にいいんです、別に私は虹稀さんにとってどうでもいい存在なんでしょうから。未読無視なんて全然気にしていません」

「本当に言うようになったなあ、俺は光ちゃんの成長が微笑ましいよ。あんなに慕ってくれたのが随分と昔のようだ」

「からかわないでください、私だつて虹稀さんがこんなにも気さくな人だと知っていたらずつと前に話しかけてました!……第一なんですか、珍しく先輩から電話なんかかけてきて?」

「……うん、光ちゃんの声が聞きたいなーって思つてさ」

「……あの、熱でもあるんですか?」

「ないない、と言うか随分と辛辣だなあ」

「いや、まさかそんなこと先輩の口からきけると思わなかったので……」

「ちなみに聞くけど俺ってさ、どんな人間だと思っていたの？」

「人を信じたことのない冷血漢、ですかね」

「まあ、否定はしにくい」

「そんなことは置いといて一体全体どうしたんですか？頭でも打ったんですか？」

「頭を打つてもいないし熱も出ていないよ。ただ……光ちゃんと話すと結構落ち着くからさ」

「なにか、あったんですか？やっぱりおかしいですよ、柄にもなく弱気じゃないですか、それに元気だつてないように思えます。もしかして怪我かなんか、しちゃったんですか？」

「まさか、それならもつとテンション低いさ」

「でも、元気はありません」

「なんか調子狂うな、俺が知っている人じゃないみたいだ」

「そりやあ2年間も碌に話さなかった人のことなんてわかるわけないじゃないですか」

「あの、光ちゃん怒ってる？」

「もちろん怒っています。でもそれは先輩ではなく、私自身にです。今元気がない虹稀さんを励ますことも元気づけることも出来ない自分自身が不甲斐ないだけです」

「卑怯だ、その言い方はとても狡い」

「はて、何のことやら？ 私にはさっぱりです」

「ほんつと、この短期間に強かになったなあ。女の子って言う生き物は恐ろしい………なんつーかさ、試験があるんだ、俺が今どれだけやれるか見定められる試験が。一発勝負で相手は強敵、だからかな、柄にもなく緊張しているし初めて試合に出たくないなんで思っっちゃってさ」

「らしくないです、虹稀さんはいつだって冷酷で、チームメイトを欠片も信頼していなかった暴君で、凡人に興味がない酷い人です」

「やけに饒舌じゃないか、何かいいことでも」けれど、野球をしている時だけはいつだって大胆不敵、余裕綽々、別人のようにテンションが高くて、誰よりも野球を楽しそうにやっていた人が試合をしたくないなんてらしくないです」

「……………」

「虹稀さんが連絡してこなかった1ヶ月近く、何があつたのかわからないです。もしかすると自分よりも凄い人に出会っちゃって落ち込んだり、これまでにないくらい滅多打ちにされたかもしれません。でも、そんなことがあつても、あつたからこそ虹稀さんは絶対に誰にも負けなくらいに練習を重ねている筈なんです、だから自信をもつていつも通り野球を楽しんでください。そうすればきつとうまくいきますよ」

「根本的なことを忘れていたのも悔しいけど、光ちゃんにそれを指摘されるなんて。ああ、すっかり忘れていた。色々なものがすっかり吹き飛んだよ、悔しいけどな」

「それは良かった、お力になれてうれしいです。試合頑張ってください、誰よりも応援しています」

「そりゃ心強い。中学の時からあの応援には力貰ってたから……ありがとう、とても助かった。……お休み、光」

「つー……おやすみなさい、虹稀さん」

1

西東京青道高校VS岩手県花田東高校。

試合当日の天気は曇り空から時折太陽が顔をのぞかせる天候だ。

先攻は花田東高校のスターティングメンバーは

1番 遊 花村海斗

2番 二 川崎智

3番 右 児玉隆太

4番 左 神之川駿

5番 一 長友勇樹

6番 三 原田勝

7番 捕 富永雅人

8番 中 北村心

9番 投 大島和希

後攻は青道高校のスターティングメンバーは

1番 遊 倉持洋一

2番 二 小湊亮介

3番 中 伊佐敷純

4番 一 結城哲也

5番 三 増子透

6番 捕 御幸一也

7番 右 雨宮瑠偉

8番 左 坂井一郎

9番 投 山元虹稀

そして現在、マウンドには1年生のピッチャー山元虹稀が念入りの状態を確認しながら投球練習を行っていた。

「やけにいい顔しているじゃないか？何かいいことでもあったのか？」

試合開始直前、ブルペンで肩を作り終え体をゆっくりと解す虹稀に御幸は心配そう

に、それでもその感情を越えに乘せないようにしながら言葉を投げかけた。

この前までの鬼気迫り焦りを隠せない思いつめた表情とは一転して、妙に晴れやかに憑き物が落ちたかのようにすつきりとした面持ちの虹稀がいたからだ。

「色々あつて逆に吹っ切れました。この調子じゃ打たれて当然、自分に出来ることをやるだけです」

色々あるにもほどがあるだろ、と御幸は思ったが口には出さない。

今は虹稀に本来の力を発揮させるのだけに徹しないといけない、そんな思惑を知つて知らずか、虹稀はいつものように、初めて会つた時のように勝気な笑みを浮かべ御幸を挑発する。

「あれ？色々つて部分聞きたいんじゃないんですか？一也さんつてキャッチャーになるという人になりますね」

「そんなだけ大口叩けるなら問題ないな、相手は東北の強豪花田東だ。有名な投手の陰に隠れているが打線も全国屈指の攻撃力があるぞ、それを踏まえた上で今日はどうする？」

「改良中のフォームで行きます、そっちの方が球良かったでしょ？」

「ああ、気を引き締めて行くぞ」

明らかにいつもと違う様子だったのにもかかわらず御幸はこの状態の虹稀をどこか

頼もしく思っていた、言葉には出来ない感覚的なものに過ぎないが先にグラウンドへ飛び出す背中中は頼もしい。

「ガンガン打たれると思うので！ボールが飛んだらよろしくお願いしますー！」

自虐ともとれる大きな掛け声で野手陣に呼びかけた、戸惑いながらも初めてマウンドから大きな声を出した虹稀に野手陣は櫓を飛ばす。

プレー中ではしか後ろを見なかった虹稀は初めて後ろを振り返ってチームメイトを見渡した、中学校の3年間はそのようなことを一切行わなかった投手が取った何気無い行動はぎこちなかったが虹稀は崖っぷちに追い詰められているのにも関わらず楽しさがこみあげていたのだ。

そして試合が始まった。

1回表、花田東は二死から3番見玉、4番神之川の連続ヒットで先制のチャンスを作る。

見事としか言いようのない火の出るあたりでボールは簡単に外野まではじき返された、ここで5番長友がセンターに抜けるかという痛烈なピッチャー返し of 打球を飛ばすが、虹稀が素早い反応でグラブに収め一塁送球アウト。立ち上がりは無失点で切り抜ける。

「危ねー、ナイスキャッチだ山元。抜けたらそのままズルズルいつてただろうな」

「いや、正面来て助かりました。ボールめっちゃゆつくり見えたんで取りやすかったす」

虹稀は口調こそ軽いものの内心は安堵の気持ちでいっぱいだった、もし抜け散ればそれこそ大量失点に繋がりがかねないし吹っ切れて楽しむというスタンスでもやはり勝敗は気にしてしまう。

初回のピンチを乗り切り切り虹稀は先輩達から少々手荒なハイタッチをされながらも飄々として水分を取っていた、自分の役割を投手一本に絞ることにより余計な気兼ねが無くなったのか頭のことにはピッチングでいっぱいだった。

ベンチ前で円陣を組み終わると御幸を呼んでブルペンでキャッチボールをし始める、未だに完成形が見えていない新しいフォームの理想形を探そうと試行錯誤を繰り返す、ブツブツと1球ごとに何かを唱えながらもその表情は晴れやかで笑みこそは浮かんでないがとても明るい。

紅白戦の時にも公式戦の時にも見れなかった表情を御幸はどう判断するか迷っていたが立ち上がりだけでは判断できないため一先ず吉とみて声掛けとミットの音でのせていく。

1回裏は大島和希によつて3者凡退、続く2回表は鋭い打球がグラウンドを駆けるけれども全て野手の正面に飛んで3人でキツチリと抑えた。

動きが激しかった初回に比べ僅かな間ではあるが膠着状態が続く、試合が動いたのは2回裏に入ってからだった。

青道の攻撃、青道高校2死から1塁に四球の御幸をおいて、バッターは7番坂井。カウント2―1から見事なスライダーが外角に決まり、審判の手が上がりかけたが、結局はボールのコール。

一球の判定をきつかけに試合が動いた。

―今のは入っていただろ？流石にねえわ

自信を持って投げた球を取ってもらえず、リズムを崩し2者連続で四球を出した、燃えるように勝気な闘志を燃やして投げる大島和希は頭に血が上った状態で迎えたのが8番雨宮瑠偉。

―さて、今日何だかんだで相手打線を抑えてる虹稀のためにも点を取ってやるか。サウスポーの強気な投手、内角を攻めに来たストレートだけを狙い撃つ。それ以外はお手上げだし

―1年2人もスタメンに入れて勝負かよ、そんな凄えやつらなのか？少なくともピッチャーの方はそうは見えなかつたけどな

さっきのボール判定に抗議するかのよう外に2球続ける、先ほどの判定に罪悪感を覚えたのか外に外れた変化球をストライクと取られたった2球で追い込まれた。

追い込んでから投げる勝負を決めに行ったクロスファイア気味のストレートが内角に甘めに入る。

—あ、やばいかも

狙い澄ましたかのようなスイングでバットを振り抜く、迷いなく振り切ったスイングに乗せられるように快音を残し打球はレフトスタンドに飛び込んだ。

迂闊と言ってしまえばそれだけの話だ、インハイの遊び球でも投げてストライクを欲しがらなければ防げていた失点だった。2ストライクノーボール、一球外しても問題ではない。

ただこの場合はたった1球に絞った瑠偉に軍配が上がる。

それに、いつもなら多少甘めに入っても詰まらせていたであろう直球は長時間の移動による疲労と前日の試合の疲れのせいもありいつもの球威ではなかった。

「つしゃあー！」

なかなか様になっているガッツポーズをしながら3塁を周ると瑠偉は虹稀に向かつて拳を突き出した、5月以降会話は少なくなった、けれどもそれは仲違いなんかではなくお互いに目指す目標地点に一刻も早く到達するために余計なものだったからだ。

お互いにどれだけ努力しているかは分かっている、しかし大事なのはどう努力したのかではなく結果を出すためにどう努力をしたのか、だ。

だから瑠偉は交わす言葉は発さないけれども行動と結果で伝えた、次はお前の番だとばかりに強く目で訴える。

マウンドで瑠偉にホームランを打たれた大島和希は気を落としたわけでもなく感情を荒立てている様子もなくただただ雨宮瑠偉のバッティングに感心していた。

――1年の癖になんつースイングスピードだよ、打者の方は本物、失投とはいえあそこまで飛ばされりゃ文句は言えねえ。まあうちの打線なら2点くらいはどうかなるでしよ

逆に、この失投が大島和希のエンジンに火をつけてしまう。

虹稀、倉持、小湊を3者連続で三振を奪い、回をまたいで伊佐敷、結城にも打球を前に飛ばさせない5者連続三振でどんどん調子を上げていった。

花田東からすれば調子の悪いと聞かされている1年生投手から2点を取るなんて造作もないことだった、しかし僅かに傾いてしまった流れは徐々に尾を引いていく。

確かに1年の割にはいい球を投げてコントロールもいい、変化球も悪くない、でもまあいい当たりが出ているのだから打ち崩すのは時間の問題だろうという認識と練習試合という事も相まって花田東高校のメンバーは楽観的な試合展開を予想していた、そう思われてしまう程度の投手、それがこの時点での山元虹稀に対する評価だった。

回を増すごとに三振の山を築き上げる大島和希とは対照的に回を重ねるごとに鋭い

当たりが増えていく山元虹稀、それでも四球や単打で幾度もスコアリングポジションにランナーを置く大島和希と未だにヒットを3本しか許しておらずいい当たりを打たれるも野手の正面に飛んでいく山元虹稀は正反対の内容だった。

花田東の攻撃、4回には併殺で走者がいなくなつた後に6番原田が二塁打を打つも後は続かない、6回にも無死一、二塁のチャンスで大島に打順が回るが、ここでも初回と同様、ヒット性の鋭い打球は虹稀の正面に飛んでいく、巧く捌かれ投手ゴロ併殺。

次第に花田東ベンチから大した投手でもない1年から点が取れないという危機感が余計に花田東の焦りを加速させた。

この試合、花田東は3つの内野ゴロ併殺を記録した、今回は虹稀のフィールディング技術によるものがあつたが、いずれも少し間違えば外野に抜けて行つてしまうような強烈な打球が野手の正面に飛んだものだ。

中盤は青道高校と花田東高校どちらも攻め切ることが出来ず膠着状態で静かに試合は進んでいく、どちらも遊び球を使わずにゾーンで勝負しているため試合は緩やかに、だが速やかに進んでいく。

大島和希と虹稀の違いは今のところ三振の数だけだ。

—球速はMAXで130 km/h 中盤位しかないだろう、変化球も小さく曲がるスライダー、カットボールと目先を変える縦変化のドロップカーブ、フォーム改良を経て球筋

は格段に良くなっているけど回転はまだバラバラだ、だから逆に打ち損じが多いのかも
しれないけど。でも何と言ってもこいつの武器は正確無比なコントロール、けど今日ば
かりはそれ以外の大きな何かがあるとしか言えねえ。いい辺りは初回のヒット2本以
外皆野手の正面だからな

「ナイスピッチだ、次の回からは降谷に行かせる。今日はよくやった、この調子で夏も頼
むぞ」

7回を投げ許したヒットは僅か3本、三振は4つしかないが未だ無失点。

内容は不格好でまるで継ぎ接ぎだらけのドレスのようだが片岡監督の求めるどんな
不格好な投球内容でも勝てる投手、まだ試合が終わっただけではないが流れは確実に青
道側に来ている。

その流れを引き寄せたのは虹稀の粘り強いピッチングだ。

「……監督、ラスト3イニング行かせてください」

しかし、虹稀は満足などしていない。この結果に欠片も満たされてはいない。

練習試合でしかないこの試合は夏の大会とは違い虹稀がどれだけ試合を崩したとし
ても他の人に迷惑をかけることは無い、寧ろ1軍争いから離脱してしまうために喜ぶ人
が多いくらいだ。

だからそのせいもあってか、虹稀は何も背負うことなく純粹に野球を楽しむためにマ

ウンドに上がっていた、調子は良いけれども実力は伴わない、負けて元々、打たれて当然。

そんな考えで臨んだマウンドは十分に楽しめたけれど、山元虹稀という投手にとつてはやはり物足りない。

後輩の橘光との会話で野球を楽しむことを思い出した、だが楽しいという気持ちの根幹にはいつだって勝敗が付きまどつていたのを改めて思い知らされたのだ。

この7回までは隠してきた気持ちの高揚は遂に枷を外し目の奥に秘めた闘志の炎を激しく燃え上がらせる。

「このまま花田東高校相手にどこまで通用するのか試してみたい、試させてください」

その激情は留まることを知らなかった。不格好な投球でも、いくら打たれようともマウンドに立つて試合を最後まで締めくくりたい、勝つて終わらせたい。

「なら言うことは一つだ。任せたぞ、山元！」

「はい」

ほんのりと熱の立ち籠るマウンドで相対するバッターを見据えながら全身を総動員してボールを投げる、7回裏虹稀を侮つていた花田東ベンチからその様子はすっかり息をひそめていて、まるで公式戦さながらの執念と意志が見えた。

わざわざ東京に来て1年坊主にいいようにやられてたまるか、と思われていた中盤と

は異なつて打者全員が虹稀を強豪校青道高校で先発を任された投手として襲い掛かる。気持ちの入つた虹稀だが、気持ちが入つたからと言つて投げたボールが格段によくなるわけでもない。

「打たれて当然、自分はベストを尽くすので後はよろしくお願いします」という気持ちから「打たせてたまるか」と変化したのもあり、ほんの僅かな差ではあるが1球1球の重みは間違いなく違つていた。

その気持ちに応えるように御幸は打ち気になつているバッターの視線を変えることのできる虹稀独特のカーブをリードの中に多く組み入れ凡打の山を築いていく。

鋭く振り切るバットを掻い潜り、詰まらせ、押し込む。

一歩間違えればホームランというような大きなファールは何回も打たれたし、野手の正面ばかりに飛んでいた当たりはいつ抜けてくるかわからない、一瞬たりとも気が抜けない綱渡りのような試合運びは両校の選手に重圧を与える。

そんな均衡した状況を打ち破つたのは青道高校だ。

青道高校は8回裏、3年小湊は四球で出塁し伊佐敷のライトに抜けようかという当たりをセカンドが阻止している間に2塁へ到達、そして四番結城の外角のスライダーを捉えた一振りには右中間を見事に抜き去り試合を突き放す3点目をスコアボードに刻み付ける。

一方花田東は終盤7、8、9回、先ずはどうかして塁に出ようと試みるがカーブが面白いように低めに決まり打者を翻弄する。

初球を狙いバットを振りぬく者、カーブに狙いを定める者、ストリートに絞る者と狙い打てばヒットにするのはそこまで難しくないボールを花田東の打者は個人個人で考えて打席に向かうが御幸のリードによって抑え込まれる。

この日虹稀の投球数は113球。許したヒットは僅か5本。

試合時間は1時間45分。

常に速いテンポで投げ込み、花田東打線を封じ込めた。

奇しくも雨宮瑠偉の放った高校第一号ホームランは虹稀の勝ち星に直結した貴重な先制点となった。

少年は扉を開く、目の前にはどこまで行ってもはてのない道が広がっている。

勝つことでしか進めない険しい道が待っている。

少年はもう引き返せない、引き返してはならない。

結果を残したというのはそういう意味なのだから。

それでも少年は、きっと灼熱の小丘に立ち続けるだろう。

夏の始まり

0

「ガンガン打たれると思うので！ボールが飛んだらよろしくお願いしますー！」

発破をかけるわけではなく自分を戒めるために、申し訳なきと心苦しさを胸にこの大事な時期に組んだ全国屈指の強豪校との練習試合の意味を知らながら謝罪をするような気持ちで初めて後ろを向いて叫んだ。

慢心していたんだと思う、いや、思うじゃなくて慢心していた。

自分ならばどこへ行っても間違いない活躍できると思っていた、それだけの才能と実力、センスは持ち合わせているという自覚だけはあったから。

けれども結局、その都合のいい妄想は、思い込みは完全に打ちひしがれた、関東大会で登板したときに俺の自信は初めて打たれたホームランと一緒に嘘みたいで澄んで綺麗な青空へと飛ばされて、その自信を取り戻そうと必死に地べたを這いずり回った。

いくら地面を這いずり回ろうとも空に届くことは無い、でもどうしてももう一度取り戻したくて、そんなことは無理だつてわかっていたのにそんな考えすら浮かぶのが嫌で

我武者羅に体を動かした。

今日の試合の先発を任されたとき正直言つて投げたくなかった、マウンドに初めて立ちたくないと思つた。慢心で肥大した心を打ち崩された俺はその場所に恐怖を覚えるほどで口先や頭だけで理解つていたその場所を任された意味の本質を何も分かつていない子供だった。

後輩に励ましてもらつて、半ばあきらめのような気持ちで今日マウンドに立つ。

「色々あつて逆に吹っ切れました。この調子じゃ打たれて当然、自分に出来ることをやるだけです」

そんな事を言つた、どの口が偉そうに。と自分でも思つてしまふけれど初めは吹っ切れすぎてマウンドから降ろされるまで楽しんで野球をしようと思つていたのでから色々覚した情報は多いけれども決して嘘は言つていなかった。

非常に申し訳ない話で、立つているだけでも先輩たちには不愉快に映るかもしれないけれど、約束をしてしまった瑠偉を裏切つてしまふけれど、一周回つて暫く上がることはないマウンドを楽しんで来ようと試合に出ている先輩たちに失礼な気持ちで、でも確かに自分の全てを出し尽くそうと、どうせならば次につながる失敗をしようという思いで今日は試合に臨んでいた。

フォーム改良や走り込みをして納得のいくボールを投げ込んでも、案の定鋭い当たり

が内外野関わらず飛びかう、それでも後ろにいる先輩たちは俺に愛想をつかすことなく必死に守ってくれていた。

今までは聞こえてこなかった声が背中に投げかけられる、最初は違和感でしかなかったけれど、ふと昔のことを思い出した。

声が聞こえなくなっただけだ、声が聞こえていたのはいつだったか、声が聞こえなかったのはいつだったか、今となつては思い出せない。

無粋な話だけれどバツクを頼ろうと思ったことは高校に入つて一回もなかったし、というか今までずっと独りでやってきたようなものだからその選択肢自体無いような思いでマウンドに立っていた、だからそういう声もきつと聞こえなかったんだと思う。

聞こうと思わなかったんだと思う。

回を重ねるごとに命が削られるような、精神をガリガリ削るような打球が弾き飛ばされる。

楽しもうだなんて気持ちはいっしか消え去っていて、自分の力を全部出そうと、出切るうとそんなことが頭の中を埋め尽くして必死に投げた。

頭の中が晴れたのは瑠偉がホームランを打った時だ、ダイヤモンドを周る途中で確かに俺に向けて拳を突き出した、次はお前が結果を残す番だぞ、と何よりも雄弁に俺を見据えた眼が物語っている。

最初からここまで自分を追い込み、己惚れずに、本当の覚悟をもっていた瑠偉を改めてすごいやつだと思い、そんなすごい奴に期待されているのだから力が及ばずとも応える努力だけは、足掻くことだけはしようと思つた。

それだけが最後に残つた意地だつた。

灯された闘志の火を消さないようにマウンドへ向かう、その途中で見えたグラウンドはとてつもなく広く感じた。

そんな時に、ようやく気付いた。

久しく聞こえなかつた声が聞こえた。

「ガンガン外野に打たせて来い！」

「オラア！こつちに飛ばしてもいいんだぞ！ホームランボール以外は任せろ！」

「ピッチャー落ち着いて」

瑠偉が、伊佐敷先輩が、白洲先輩がそれぞれが投げかけてくる言葉は不思議と力に変わっていた。

ボールを貰い、サインを確認し、振りかぶる、あるいはプレートを踏む。

その間に投げかけられる言葉はあまりにも新鮮だつた。

声が聞こえる。

「ウガ！」

「ヒヤハハ！ガンガン打たせてこーぜ」

「うん、こつちに来る分は安心しなよ。全部取ってあげるから」

「いい球来てるぞ！安心して投げろ、バックを信じてな！」

増子先輩が、小湊先輩が、倉持先輩が、一也さんが土まみれになりながらも後ろをしつかり守ってくれていて、こんなにも捕らえられた当たりを飛ばされているのに、恐怖なんて感じなくなるほど勇気づけられた。

声を投げかけられる。

「思い切り投げろ、後ろは俺たちが守ってやる」

チームの柱、主将の結城さんは内心ビビりまくっている俺を落ち着かせるように、励ますように、背中を押すように頼もしく言ってくれた。

こんなにも心強くマウンドに立つのは初めてで、半ば吹っ切れて楽しもうとしていた気持ちにはなくなり、この試合だけは勝ちたい、最後まで投げたい、強く強く望んでしまっていた。

本気で投げたボールはことごとく耳を貫かんばかりの高音を奏でて右へ左へ弾き飛ばされる、けれども何も怖くなかった、どこに飛んでもアウトになるような気しかなかった。

不思議な感覚だ、こんなにも強い当たりが飛んでいるのに安心していられるのは。

初めてだった、ずっとこのマウンドで投げたいと思ったのは。

相手は強豪校、投手の大島さんは正直今手が付けられないレベルですごいし、打者も震えるような速い打球を遠慮なしに打ってくる。

この点差を守り切れるとは思わない、けれども、この人たちが後ろにいるのなら1点も入る気はしない。

今までは、中学の時は自分の力を出せば勝っていて、いかに自分の力を出すか、それが俺の野球だった。

でも今は、完全に助けてもらっていた。支えてもらっている。

どんな打球が飛んでもホームランにさええならなければ絶対に点を取られることがない、この人たちならそれが出来る。

心の拠り所となった信頼は、間違はなく背中を押ししてくれていた。

そして7回まで投げて無失点で試合をつくることが出来た。

「ナイスピッチだ、次の回からは降谷に行かせる。今日はよくやった、この調子で夏も頼むぞ」

この夏戦力として見てくれる、そう言ってくれているようにも取れる。驚いたし、うれしかったけれども今日の結果は自分の力ではなくバックの皆に、先輩たちに助けられた結果であって結果こそいいものの内容は酷かった。

そして、あの場所を今日だけは誰にも譲りたくなかった。

今までは打たれて当然、そんな気持ちで臨んでいたけれどこの試合はどうしても勝たいたい。

どうせ楽しむのなら勝って楽しみたい。

「……監督、ラスト3イニング行かせてください」

色んな理由付けや言葉を選ぶよりも早く、率直な気持ちが変わらず出ていた。

「このまま花田東高校相手にどこまで通用するのか試してみたい、試させてください」
根本にある気持ちはだれにもあの場所を譲りたくないだったけれど、言葉は嘘ではなかった。

とにかく勝ちたいし、この試合は最後まであの場所で投げ続けたいという思いだけが抑えきれない。

監督に直訴して続投を望んだ場所に立つと気持ちが入る。打者のスイングは鋭くてボールにバットが当たろうと当たらなくても怖いし精神的にきついものがある。

それでももう打たせてたまるものかと、実力以上のものを望み全身全霊をかけて一也さんのミットに投げ込んだ。

気持ちによるほんの僅かな球質の差、意志が乗ったボールは次第にバットを押し込み始めタイミングを狂わせる、激しい当たりは徐々に鳴りを潜め当たり損ねのゴロやポツ

プフライが多くなる。

後で聞いた話によると9回を投げ球数は113球、ヒット僅か5本に三振4つ。

試合時間はたったの1時間45分しかたつていなかった。

試合が終わると喜ぶ気力もなく、流れのまま整列して試合を終える。

「今日は完敗やわ、ナイスピッチ」

「あ……、その、ありがとうございます。でもたまたまです」

「確かに、でも運も実力の内。今日は君がすごかった、だから次やるときは負けねー

よ」

「次やるとき、ですか？」

「甲子園で、に決まつてるやろ。いい変化球持ってるし、制球も悪くない、あとは球速が欲しいな。まあ次にやるるときまでには本物になつとけよ」

何というか、言いたいことだけをずかずかと言つて颯爽と去つていった。

大島さんと握手を交わして張り詰めていた気持ちが緩んだ。

山元君のおかげでみっちり扱かれそうや、と聞こえたのはきつと気のせいだろう。

勝利の実感というものよりも無事に勝ち切る事が出来たという安堵感の方が強く整理運動をし終えると体ん疲れがどつと押し寄せた。

監督の前で円陣を組んでミーティング、試合の振り返りのようなものがあるが正直内

容は覚えていない、頭はボーっとしていて現実と夢の狭間にいるような状態のまま監督の言葉が右から左へと抜けていく。

まだ夏は始まっていない、いくら長くてもこのチームで野球をするのはあと3ヶ月しかなかった。

まだまだ実力不足だけれど力になれるのならなりたいたいと思った、少しでも長くやるために、大事なことを気付けさせてくれた先輩たちを笑顔で送り出せるように。

勝つことでしか報われない一発勝負の最後の夏、身の程知らずの望みを願う。

このチームで最後には笑っていたい、そしてその試合は全部一人で投げぬきたいという自分のエゴのために。

1

「昨日の今日だぞ？流石に休めよ」

「あ、もちろん休みますよ。だから体ほぐすためにジョギングしてくるだけですって」

「お前のジョギングはランニングじゃねーか！」

「え、あれをランニングとは言いませんけど。まだ寝ぼけてますか？」

「あのなあ……ちなみに聞くけど、お前の中のランニングの基準ってなに？」

「死ぬ一歩手前まで走り続ける。ですかね」

「そんなランニングがあつてたまるか！」

花田東高校との試合を終えた翌日、1軍メンバーはオフ、乃ち休養日に当てられ言わば自由練習の時間が与えられていた。

その分、と言つていいのか2軍にダブルヘッダーの試合が組み込まれており1軍昇格メンバー二人を決める最後の見せ場となる試合が予定されていた。

降谷と虹稀が1軍に入ったことにより3年の山崎邦夫と2年の田中が落ち、更に基本的に性能が高くどこでも守ることが出来る瑠偉が加わつたことにより樋笠が脱落し残る2枠を争う戦いは練習中ですら火花を散らし緊迫した雰囲気が続いている。

それもそのはず、特に3年の山崎は最後の夏であるというのについて1か月前に新入生に席を奪われただけに鬼気迫る雰囲気や練習に励んでいた。

そして最後のアピールチャンスである2試合にかける気持ちは並のものでもない、その他の選手も中学の時は名門と呼ばれるチームでエースで四番であったり、そのどちらかであったりするために残り2席を奪い合う椅子取りゲームは、2軍内に緊迫しすぎて不穏な空気が流れるほどに張り詰めていた。

その主な原因は1年生に奪われた、という事によるが降谷と瑠偉はそれなりの成績を残しているために（虹稀は微妙だが監督に認められたため）何も言えない。

そんな夏に懸ける思いから生まれた不協和音は雰囲気こそあまり良くないギスギス

したものになってはいるが、チーム内競争は激化しているため良いか悪いかで言えばよい状況である。

と、2軍は試合の準備をしている中、1軍メンバーは体を休めるもよし、動かすもよし、ということなので基本的に1軍メンバーは筋力トレーニングの時間に当てられていたが1年生3人だけは試合を見させられていた。

それぞれ1試合分のスコアブックのページを持たされて、だ。

「練習しないといけないのに……」

「ピッチングしたい……」

「お前からちゃんと試合を見ろよ。あ、小湊いい当たり……あいつ結構打つな」

1年3人が試合を見ている理由は結城からの指示でスコアをつけているのは御幸の提案、狙いとしては2軍の3年生の必死さをよく見てもらい責任感を持つてもらうことを目的として慣れないスコア付けをしながら試合を見ていた。

身体能力を上げたい、ボールを投げたい、トスバッティングをしたいという三者三様の欲望を抑え、先ほど始まったばかりの試合をスコアの基本的な付け方が記されている紙と降谷だけが睨めっこしてグラウンドを眺めていた。

「というか、2人とも付け方わかるんだ」

「常識だろ。おっとこれは？」

「野球やってたらねー、あ、やっちゃったね」

小湊春市が出塁するも後続のバッターがショートに強い当たりを打ちダブルプレーとなり青道高校は初回の攻撃を終えた。

ファーストから舞う砂ぼこり、悔しそうに突つ伏す打者、ベンチから飛びかう怒号。

試合に出たならばプレーで、出れないのであれば声で、最後のアピールチャンスを逃しまいと必死になっている先輩たちを遠くから眺めていた。

そこでようやく降谷も気づく、虹稀も焦り逸る気持ちを抑えて試合を見ることに集中した。

「ま、これが哲さんの見せたかったものだろうよ。スコアに関してはしつかりプレーのひとつひとつ、一球一球を確と見ろってことだろうな」

「結城先輩らしい計らいだね」

「さて、次はうちの守りか……先発は沢村、ねえ。同じ投手としてはどう？」

「どうって言われても、あんまり知らないし……けれどここまで登ってくるのは遅かれ早かれ決まっていたと思う、潜在能力は凄いもの持っているからね」

「あの人は、騒がしくて、鬱陶しい時もあるけど、投手として勝ったと思ったことは一度もないよ」

「へえ、そりや大層な評価だな」

「君はどう思うの?」

「口先野郎。最初の印象だけで言うとならぬ、まあこの試合でどうとも変わるさ」

一番バッターに対して沢村の投げたボールを見て虹稀と瑠偉は異変に気付いた、その異変は確固たるものではなかったけれども、何かがおかしいと思わせるのに十分な情報が目の前で流れていたのだ。

言葉の通り、瑠偉の沢村に対する評価は口先野郎から面白そうな投手、または勝負してみた投手へと変わっていた。ちなみに現時点での虹稀に対する評価は成長すれば面白いけれど、今は最低限の試合が作れる投手。降谷に対する評価は調子がいい時には是非とも対戦したいけれど守る側としてはかたつたるい投手、となっている。

そして2番打者にぶつけたデッドボールを見て、ようやくその異変の理由を想像することが出来た。

「そういう事か」

味方からブーイングが鳴りやまないのを苦笑する虹稀を他所に瑠偉がぼつりとつぶやき、降谷が尋ねた。

「どういうこと?」

「じゃあ質問、沢村の球を見た正直な感想は?」

「えつと……あんまりすくくない」

「そう、正解だよ。その凄くない球を相手のバッターが避けられなかった」
「凄くないのに、凄い……?」

「中らずと雖も遠からず」

青道高校には1軍にいる投手は丹波、川上、降谷、虹稀の4人であるが全員が右投手。左ピッチャーの存在というのはこの布陣において足りないものの一つ、異質な左投手の急成長を目の当たりにした虹稀は焦りを覚えた。

先日決めた自分のエゴを貫き通すためには少なくとも青道高校で1番信頼される投手にならなければならない、監督コーチからだけでなくチームメイトからも。

現時点の虹稀は4番目の投手、制球が良くコントロールも優れているが相手をねじ伏せるような投球をするにはまだまだレベルが足りていない。

それを自覚しているがゆえに急造の器を作ろうとするも、それなりの練習量が必要であり周りから釘を刺されて練習を十分に行えないため心の中には前に比べて落ち着いてはいるものの焦りは消えない。

そして目の前で急成長を遂げる左腕を見て、余計に加速した気持ちはよい方に転ぶか悪い方に転ぶか本人もわかっていなかった。

「こりゃあ恐ろしいなあ、虹稀」

「うん、ピッチャークビになるかも」

あえて焚き付けるように煽る瑠偉だが、虹稀も冗談で返すだけの余裕は持っていた。捕手がクリスに変わると流れが明確に変わる、そのまま流れは変わることなく沢村は3回を無失点で抑え、その後も国士館高校を寄せ付けることなく試合が終わった。

1年の3人は御幸にスコアを提出すると自主練をしても良いといわれ（ただし虹稀はマネージャーの見張り付き）瑠偉は直ぐに結城哲也にお願いしトスバツティングをしながら、降谷は御幸と一緒にウエイトルームへ向かった。

その後虹稀は2時間ぶつ続けで走った後、昼食を食べ、100球程度投げ込んだ後でポール間ダッシュをしようと試みたところで瑠偉に呼ばれ室内トレーニング場へ向かう。

瑠偉が内容を要約し虹稀に伝えようと、2人は会話することもなく、無言で移動を始める。

まさか2人も試合が終わった当日に最後の判断がされるとは思っていない、驚きと気持ちの整理がつかないまま急いで室内トレーニング場へ駆け込んだ。

静まり返る室内で、あまりにも早い残り2枠を懸けた最後の審判が下ろうとしていた。

選ばれた責任

0

残酷な話だ。

甲子園予選大会ですらベンチに入れるのは20人、そして甲子園本選ではたった18人しかプレイヤーとして戦う事は出来ない。

そこには1年も3年も関係ない、年の差は関係なく実力が全てものをいう。特にそこにいる1年は与えられた数少ないチャンスをものにしてそこにいるわけだ。確かに調子も関係はするだろう、人間である以上どうしてもそれは存在する、しかしそれでも年功者を押しつけて監督に認められ、背番号をもぎ取ることが出来るというのなら、その選手は確かな実力と才能を手に行っているのだろう。

1

「すいません、遅く……っ」

とても殺伐とした雰囲気、思わず謝罪の言葉を虹稀は中断してしまう。

心肺機能強化、そして精神面のタフさを鍛えるための持久走を終え、下半身の筋力強化に直結するダッシュを行おうとしたところで瑠偉がいつもに増して真剣な表情で虹稀に用件を伝えると、先ほども感想を述べた通り殺伐とした雰囲気で向かい入れられた。

綺麗に整列された列の一番後ろに並ぶと、上記が充満しているかのような重苦しい雰囲気の中、片岡鉄心は口を開いた。

「今から一軍昇格選手2名を発表する、選ばれたものは我が校代表としての責任と自覚を持ち……選ばれなかった者は夏までの1か月今から発表する2名を加えた計22名改め20名のサポートをしてほしい。」

一軍昇格メンバーは……1年小湊春市、同じく1年沢村栄純。以上だ」

風の擦れる音が聞こえるくらいに静かになった。

3年生は茫然とし監督の口から出た言葉を受け取るのに時間を要していた、2年生は呆気にとられ、1年は監督の口から出た言葉を信じる事が出来なかった。

名まえを呼ばれた当の本人たちでさえ、本当に自分なのかと言葉を疑う。

「この2名を加えた一軍20名で夏を闘う……明日からの練習に備え今日はこれで解散だ、選ばれなかった3年だけここに残れ」

選ばれなかった3年以外は大人しく食堂へ向かうが、沢村は最後まで立ち尽くしていた。

自分が選ばれるのならクリスが選ばれてもおかしくないという、いやそうではなくては可笑しいという感情がメンバーに選ばれた事実よりも受け入れがたかった。

倉持に文字通り尻を蹴られ一応は外に出るものの入り口でその様子を伺っていた。

虹稀と瑠偉は沢村の行動と、自分たちが出て行った後に膝から崩れ落ちる3年生の姿を目の端に捉えるとその映像を目に焼き付けて振り返りはしなかった。

2人には常に選ばれているものだった、正直にいつてどちらとも選ばれなかったものの気持ちはわからない。

けれども、3年生が夏にかける思いの強さと計り知れない悔しさを抱えて勝ち進まなければならぬことだけは理解していた。

「俺たちに出来るのは、結果で応えることだけだ。それも最高の結果で応えないときつと報われない」

自らに言い聞かせるように小さな声で、だがはつきりと言葉を紡ぐ。

「誰しものが納得せざるを得ないような結果を残すことでしか、俺たちが選ばれたことが正しいと証明できない。約束通り、望み通り獲りに行くぞ」

蹴落としてまで選ばれた意味、強迫観念にも近い使命を胸に抱き目の前にあるのはた

だ登ることしかできない階段。

登りきるか途中で落ちるか単純明快なルールの下で栄光を勝ち取れるのはたった一校のみ。

奇跡にも等しい栄光を掴み取るための夏が始まった。

2

合宿が始まったもののいつもの練習と比べて特に変わったことは見られない、はつきりとした違いと言えばここの練習時間の密度、例えば野手であれば人数の削減によりフリー、ロング、トスバッティングの回転の高速化、ノックの回りの速さくらいだ。

とは言っても練習量は2倍近くになっていて、選ばれたメンバーが感じているのは毎日これくらいやれたらなあと言うことくらいだろう。あくまで今までのことに関して

は。その一方で投手陣はクリスが指導役に付いたことくらい、あまり変わりは見られなかった。

「まずは降谷に沢村、お前たちは守備練習からだな。あと山元、お前は今日から5日間は野手陣に交じって練習するように」

「え、ちよつと！何で俺だけなんですか!？」

「説明を省いてすまない、一つ目の理由はお前が自分勝手に暴走しないことを防ぐためだ。ある程度練習が決まっている野手陣に参加してもらった方が安全だからな」

「えっ……でもこの前病院行つた時全然大丈夫って」

「幸いなことに、全くもって不思議な話だよ。頑丈さはうらやましい。その話は置いて2つ目。そのバカみたいな走り込みをして作った土台を最大限に生かすためだ、実際試合でも外野手を守ることが想定されるお前にはその練習をやつたところで有意義なものになるし、足、肩、打撃をみっちり鍛えられる。そして3つ目、ある程度フィールディングが上手いお前もつと時間を有効活用した方がいい、基礎は出来ているし、後半から練習しても大丈夫だろうという監督の判断だ。すなわち全部お前のためになることだぞ」

「喜んで!」

「よし、行つてこい!」

「はい!」

山元虹稀、信頼する人の言葉には（譲れないことを除いて）愚直に従う素直な男だった。

いつもこんな感じで従ってくれたらなあと遠い目をしてクリスはその後ろ姿を見届けた。

一通りの練習を終えて日が沈むころ、栄養補給と言われ一軍メンバーの前にはたくさんのお握りや果実などが提供されている。

本来ならばもう少しで夕食の時間なため空腹感は程よいものになっていた。

「と言うか、合宿と言ってもあんまりいつもとは変わってないよな」

瑠偉は練習の回転率が上がったこともあり満足げな顔ではあるが、それ以外大した変化はなく、どこか安心した様子で口に米を運んでいる。

「うん、そうだね。いつもと同じって感じ……練習内容は違うけど」

ピッチングができなかった鬱憤を、バッティングと外野からの返球で発散した虹稀は少しは満たされたような表情でバナナを食べていた。

これで終わりなのかなと話していたところに、御幸が見たものを決しているいい思いをしないといわれている満面の笑みを携え二人の正面に座り込んだ。

「ま、後になれば嫌でもわかるさ。さあ、2人ともしっかり食えよ。マネージャー！もつと持つてきてくれ」

表面上はいつもと変わりがないけれども、声の調子がいつもより明確に弾んでおり、嫌な予感がしつつも1年のマネージャーである吉川春乃にもつとたくさん持つて来て

欲しいと要求する。

「わかりました！2人とももつと食べてね！」

純粋な春乃は御幸が先輩らしく後輩を気に掛けるいい場面だ、青春だなあと樂觀的に考えながら大量の補助食をトレイに乗せて準備をしている。

「え、一也さん直々に優しくしてくる時いいことないのつて気のせいですかね？ま食べますけど」

「御幸さんのことだからな、多分苦しむ俺たちが見たいんだろうぜ、今のうちにたくさん食べさせて吐きそうになっている俺たちを見て楽しもうつて算段だろうよ、まあ食べるけど」

御幸がたくさん食べさせようとする意図を瑠偉は簡単に見破り少しだけこの後のことが億劫になった。

御幸がこういう時に優しさを装って接触してくる理由は、碌でもない、主にこれから苦しむであろうと思われる事柄を更にひどいものにしたからだ。

日常生活での御幸の優しさというものには2人の御幸に信頼度は0にも等しい、虹稀は実際に幾度となくラインの内容や電話をしている姿を他の先輩たちにリークされプライバシーを侵害されている。

と言うか、後輩の橘光と虹稀のスマホを使い会話もされているので諦めにも近い感情

が最近はや生えてきている。

瑠偉は直接的には被害を受けてはいないが、虹稀や沢村の被害を端から見ていることもあり直接的にそれらを被りたくはないため野球の話をするとき以外は警戒していた。

「全く、感のいい奴らめ、面白くねエ。何も知らずにたくさん食べてこの後のメニューで絶望し、苦し……悶えているところ見るのが楽しみだったのになー。ま食べるんだつたらしいけどさ」

「あの、言い直していますけど全くオブラートに包めてないっすよ」

上手く騙すことが出来ずに口をとがらせる御幸だが、ぶつくさ言いつつも自ら提案に乗ってくる分は構わなく、寧ろ喜ぶべきことである。

律儀に山盛りに乗せられたお握りや梅干しなどをどんどん下級生に進めている姿を見られたため、2人は頑張れよ、とたくさんの人から励まされる。

やっぱりあれだなー、走りだなー、とぼやく瑠偉は悲壮感をたっぷり漂わせて夕日が沈むのをしみじみと眺めていた。

「へい、山元GOー！」

「っしやあああああー！」

「オラア！一年山元を見習え！休むな！早く行け」

「え、まだ息が「沢村GO！」」

「おい、降谷！先に行け！」

「ムリ……」

「クソツ！小湊「おい！雨宮！順番後ろに回って楽しようとすんな！」

「や、先輩、マジで、ちよつ、タイム」

「雨宮GO！」

「降谷行け！「雨宮ア！」」

「パワハラだ！理不尽だ！虐待だ！」

「走りながら叫ぶ元気あったらスピード上げる！降谷GO！」

技術の根本となる基礎がしっかりできており、野球センスも優れている、加えて身体能力も高く経験も多く積んでいる瑠偉だが、長距離走だけは苦手だった。

肉体的な筋肉の成分組織の違いでもあるがここまで追い込んだことは無かったために疲労困憊している。

対照的に虹稀は技術や経験では敵わない、けれども極度に体を追い込んでも怪我や疲れを残さない生まれ持った身体機能と回復力、そして土壇場での成長速度は瑠偉の上を行く。

とは言え、いつもこれと同等、それ以上のメニューを自分自身に課していた虹稀は端から見ても体力という一点においては突出していたのだ。

「ハア……ハア……やっと、終わった」

息が絶え絶えの瑠偉、その他小湊春市、沢村栄純、降谷暁は地面に寝そべったまま死体のように動かない、死体との相違点を上げるつとするならばしっかりと息をしていることぐらいだろうか。

1年で群を抜いて体力がある虹稀ですらフェンスに凭れ掛かり肩で大きく息をしていた。

「最後グラウンド20周！全員で元気よく声を出していけ！」

「[[[[はい！]]]]」

「!?!?!」

「!?!?!」

沢村はショックのあまりに胃の中のモノが飛び出そうになる、降谷も小湊春市も茫然としていて虹稀だけが走るぞーと意気込んですぐに列に加わる。

瑠偉は絶望のあまり胃の中の物が飛び出そうになり、膝から地面に崩れ落ちた。

地獄と称された合宿はまだまだ始まったばかりだ。

2

「どうだ？一年の投手の3人は？そろそろ疲れがたまってくる頃だろう」

御幸、宮内、クリスの3人は監督室へ呼ばれて現状の投手の様子を監督に聞かれていた。

先ほどまで走っていた御幸、宮内はまだ息が整っておらず相当な疲れが見えている。

「はい、と言いたいですが一人居り……山元は疲れこそは溜まっているようにも思えますが他の2人ほどではありません。監督の指示通り山元は野手と一緒にメニューこなさせています。沢村と降谷は監督の指示通り合宿に慣れるまでは投球をさせません。そろそろペースを落としてブルペンやシートバッティングで投げさせるつもりです」

そんなベンチ入り捕手2人の代わりにクリスが少しだけ言葉選びながら答えた。

だが、その報告に片岡鉄心は動じる素振りもなくなるほどと頷く。

練習場一帯が見渡せる監督室からは選手の練習風景のほとんどが見える、山元虹稀はタイヤこそひいてはいないが沢村や降谷よりも日中から走り込みをしていたのは見えていたし、片岡鉄心が体力維持のためランニングをしてる時にも猛烈に走り込んでいる姿を見たことがあるからだ。

合宿の走り込みの量と大差ないのでは？と疑いたくなるような量をこなしていたのを見ていたせいしか感心こそはしたが、驚きは少なかつた。

それよりも片岡鉄心を驚かせていたのは驚異的な回復力と意志の力、そして生まれ

持った頑丈な身体だった。

あれだけの走り込みを経てなお、痛めた素振りはおろか前日の疲労すらも感じさせないことに舌を巻かずにはいらなかった。

「丹波と川上は？」

「順調です！」

「まだ先は長い、あまりとばさせるなよ」

「はい」

「合宿最後の土日、練習試合を3つ組んである。6月16日に大阪桐生は、先発山元で5イニング、リリーフ降谷で4イニングを投げさせようと思う。6月17日のダブルヘッドー、稲城実業と修北高校、稲城実業には川上と沢村、修北には丹波一人で投げ切ってもらおう予定だ。この試合に関しては勝敗を問わん……疲れがピークの中全員がどれだけ強い気持ちをもって戦えるか……ただそれだけが見たい。そのことを頭に入れて投手陣の指導を頼めるか？」

監督の狙いとして、この合宿で一番の強豪、大阪桐生に1年生2人を登板させる意味は彼らが疲労がたまっている中どれだけの投球ができるのかを確かめるためでもある。

夏の大会では気候による体力の消耗はもちろんのこと、精神的に、気力的にもきつくなる。

その消耗の種類は違えど、きつい練習に取り組んで消耗して体もあまり動かない中、どれほどの投球が強豪校を相手に通用するのか確認するためでもあった。

「わかりました」

「あと、山元には6月10日まで野手だけに専念するように言っていてくれ」

御幸や宮内ではなく、クリスに釘を刺すように言った。

「わかりました」

その意図を汲み取ってかクリスは慎重に頷く、きつい練習をこなしながらも授業態度は良く、一般生活で生徒からも教師からも評価が高い山元虹稀、表面上の評価を汲み取ると一番手がかからない人間ではある。

しかし、根っこは負けず嫌いで自分を過小評価する。

その癖、理想はそびえ立つほどに高い。そこに行きつくまでに辿る道は最短経路で効率よくいく事は出来ない不器用な選手だ。

だが、どれだけ遠回りをしようと山元虹稀という投手は立ち止まるといふ選択肢がなく、遠回りをしてでも到達するだけの能力がある分沢村や降谷に比べて癖が強くもあつた。

「時間をとらせてすまなかつたな、きちんと食事をとって体のケアを怠るなよ」

山元虹稀が1軍に入っている以上、無理をさせて戦線離脱にすることなど片岡鉄心は

考えていない。

そのためクリスともう一度念入りに話をするため疲労がたまっている御幸と宮内をひとまず退室させた。

「はい、失礼しました」

「わかりました、失礼します」

異例の選抜、確かに山元虹稀と降谷暁は外野手としての起用法も十分に考えられるが、それでも投手は5人。

そのうち1年3人という青道高校のような強豪校と言われる高校では異例の選出である投手陣5人でどう夏の大会を勝ち抜いていくのか。

全ては合宿での彼らの成長にかかっていた。

「ブハツ！あぶねー！危うく水死体に！寝るなよ！寝たら死ぬぞお前ら！つて降谷！雨宮！言ってるそばからあああああ！」

「おーい。小湊大丈夫かー？」

「……うん、大丈夫だよ」

「大丈夫じゃない人が使う大丈夫だな」

「つてこんな人数いるんだから誰か助けろよ！つて雨宮！言ってるそばから沈むなあああああ！」

「と言うか虹稀くんだけなんでそんなに平気なの？」

「んー、ランニング頑張ったからかなあ」

「とりあえず、触れないでおくよ」

安らかに水中で眠る瑠偉と悪夢にうなされてるように半分沈んでる降谷。

浴槽にしがみついて何とか水没を避けようとしている小湊春市と相変わらず元気よく叫ぶ沢村、多少ぐったりはしているが大して変化の見られない虹稀。

微笑ましい風景とは程遠いけれども、何だかんだで1年の親睦は深まっていた。

アカシア

0

6月7日に始まった中学体育連盟軟式野球地区予選、私達の所属する桜ヶ丘北中学校は分相応な第一シード、言うならば前年度のトーナメント覇者として大会に挑むことになった。

運命か偶然か、対戦相手は去年虹稀さんが完全試合で下した前々年度の地区代表校で立ち位置と戦力差が去年とは打って変わって真逆のまま迎え撃つことになってしまっていた。

私達にとっての初戦は2日目の6月8日、勿論勝つつもりで挑んだ試合だったけれども、一回戦を勝ち上がってきた勢いと去年の悔しさを晴らすために向かってきた相手に対し抗う術も実力も持っていない。

私達の最後の試合は勝利の女神がほほ笑むこともなく、番狂わせが起きるわけでもなく、当然のように、当たり前前に、普通に敗北した。

奇しくも、と言つていいのかわからないけれど6対0で負けていた最終回の7回裏2アウトランナー無しの場合。

去年の繰り返しのように私たちは誰一人として1塁ベースを踏むことなく終えようとしていた試合の最後の打席、記念にと立たせてもらった中学校最後の打席では完全試合だけは絶対にさせないと決意し挑んだ。

1球目の直球には手が出なく、2球目の直球に対しバットを振るも当然のように空を切った。しかし、3球目。通称SFFと呼ばれる速いフォークボールを何故か捉えてしまった。

綺麗にショートの頭を越えたヒットになるも私にはどうして飛んだのかすら訳が分からなかったし、相手バッテリーはもちろんベンチも、打った私自身でさえ驚きだった。私が塁に出れたのすら奇跡に等しくて、当然のように次のバッターは凡退。

真つ青な空の下、手も足も出ず、為す術もなく、私達の夏は終わった。

と、そんなことがあったのは昼間。

実質虹稀さんがいたから去年と昨年は良い所に行けていたわけで、平均かそれ以下化の集団でしかない私たち桜ヶ丘北中学校はあっけなく敗退した。

顧問のやたらと長い話をどこか他人事のように聞いて、いつもと同じように帰路につく。

最後の試合だったけれども私は最後に一打席立っていただけで、基本的にずっとスコア付けていたのもあって、疲れていない。その筈なのに家に帰って、シャワーを浴び

て横になるといつの間にか眠りについていた。

その眠りから引き戻されたのはいつだったか思い出せない。

覚醒しきっていない思考の中、ほとんど反射的に画面をフリックして寝ぼけまなこでスマホを触ると、どうやら虹稀さんに電話をしていた。

けれどもほとんど眠っている私はしばらく寝ぼけたままだった。

もしかすると、今日の結果を報告したかっただけかもしれないし、それを口実に虹稀さんと話したかったのかもしれない。そんな自分の理性の歯止めが効かない中でしてしまった思わない行動だった。

電話の向こうでは聞いたことあるような人の声でその人が言わなさそうなことを口走っていて、よく分からない状況を飲み込めないままその騒ぎが収まるまで惰眠を謳歌する。

何を話せがいいのか、私は何を話したかったのか、何で態々連絡してしまったのか。それらの意味は解らずに、ようやく覚醒した頭で考えるまでもなく、口から零れた言葉が本心だと思った。

1

合宿が始まってようやく5日が経過した、明日からようやくピッチャーとしての練習に参加できることが出来る。これまで基本的に外野手として練習してきたけれど、クリ

スさんの言っていた通り身になるものが多い時間であったことは確かだ。

ダツシユとノックを組み合わせたアメリカンノックや、ホームまでの返球などの遠投は足腰も鍛えられ、尚且つダイナミックな投げ方の体験や肩力強化（たかが5日でそう簡単に変わるとは思わないけれど）にもつながったと思う。

バッティング練習もいいストレス発散になったし、いいことだらけだった。

だから、と言うか野手としての練習はこれからもやっていつて損はない、寧ろ推奨される練習だからこれからもやっていこうと思った。

閑話休題。

今日から投手としての練習が解禁されたけれど今日は投げ込みではなく、ノックが中心だった。

正直言つて守備に関しては自分の中ではピッチングよりも得意で（次に得意なのはバッティングで一番得意でないのはピッチング）。

一番好きなのはピッチングなのに一番出来が悪いというのは自分で鑑みても悲しいし、偶に凄い嫌悪感に陥る（中学時代の周りが功を奏してか他人の尻を拭うくらいのフィールディングが自然に身に付いていたことは喜んでいいことだと思う）。

逆に、沢村と降谷のフィールディングの酷さに驚きを隠せなかつたくらいだ。

まあ話を聞いてみるとそれなりの環境のせいもあったと思うけれど、試合の中で一番

ボールを持っている投手というポジションとして流石にあのレベルはどうかと思う。

合宿中恒例となっている夜のベースラン、ポール間ダツシユ、ランニングを終えて恒例になっているストレッチを十分にすると、大体いつも2年生の風呂の時間が終わる時間帯になっている。

寮の暗黙の了解で、3年生が1番風呂、その次に2年生、そして1年生という順番なのもあつていつも部屋に戻るころには一也さんは先に寛いでいた。

部屋を開けていなければ少し待とうかな、なんて考えて一先ず部屋の方へ向かう。

風呂上がりだけど、まあボールを捕るくらいじゃほとんど汗なんてかかないだろうし、多少我儘を言つてもそれ以上の迷惑をこちらは受けているわけで、そのくらい手を煩わせることは問題ないだろう。

それに、今日から投げ込みが解禁されたけれどブルペンやマウンドからは投げていない。久々に一也さんにボールを取ってもらおうと思つて一度部屋に呼びに行こうとした時だった。

「なんで？ クリス先輩に受けてもらえばいいじゃない」

「るせ！ あの人には丁寧にお断りされたんだよ!!」

「じゃ…：僕が先に」

「あく悪い、降谷、沢村。今日は俺が先約なんだよね。今日からピッチング解禁つてこと

もあつて、一也さんには朝から話を通してある」

全部嘘だけれど。

降谷は降谷で投げることに對しての執着がすごいし、沢村も向上心の塊と言うか、2軍から1軍が上がったきつかけになつていふ新しいフォーム固めをするのに非常に意欲的らしいので、この二人と一緒に練習するのだけは今は避けたい。

「何やつてんだお前ら……さつさと風呂入つて来いよ」

結構長い髪をタオルで拭きながらキョトンとした表情で俺たちの待ち人は現れた。

「いや……最近全然ブルペンに入つていないんで受けてもらおうと……」

「俺はクリス先輩に断られたから仕方なく!!」

「一也さん、この二人のことは無視してさつさと行きましょう。先約は俺が取つていて一刻も早くキャッチャーミット持つて来て受けてください」

だが、そんな事情は知つたことではない。

風呂上がりでさつぱりしていふようだが、これから寛ぎたいとか、そんな事どうでもいい。この合宿の目的は個々のレベルアップで、俺がそれを望むのならば捕手として受けてくれるのが道理だろう。

「は？今から？沢村と降谷は今日もベールランで死んでたじゃん。それにお前とはそんな約束一切した覚えは」一也さん、100球だけでいいんで」

「こつちの都合は無視かよ」

「人の人権無視するんだから都合の無視くらい目瞑ってくださいよ」

「ああ、わかったよ。それだけ元気なら大丈夫そうだな……とりあえず、風呂入ってから俺の部屋に來いよ」

「え？」

「こつちの都合は無視ですか？」

「そんな怖い顔で睨むな、絶対に、間違いなく、確実に投げるよりもきつとためになるから」

「絶対に、間違いなく、確実にっていう言葉を連ねれば連ねるほど信憑性は落ちますよ？」

「とりあえず、マジで頼む。な？」

割と真剣な雰囲気ながら片手を立てて懇願するように頭を下げる、ふざけるようにお茶らけてくれれば勢いで押し通せるけれども、こうなつた時の一也さんは手ごわい。

それならば、一旦退いて、とりあえず体を休めて自室に戻り、いつものように少し接待をして、軽くキャッチボールをしましょうと外に誘い出して投げ込めばそれでいいか。

とりあえず俺たちはしぶしぶ風呂に入ることにした、合宿が始まって5日目。流石に疲労の色は濃くなり、俺自身も体がだいぶ重くなっているのは自分でも感じている。

残り少ない時間を効率的に使うためには、流石に休みを取ることも大事かもしれないと、水面に器用に浮かびながら風呂場で眠る瑠偉を見て切実に思った。

2

「お邪魔します……」

「遅いじゃねえか、早くしな」

「お前から元気余ってんだろ？この人たちのお相手よろしくな。毎日俺の部屋に集まられて困っているんだ」

「で、大事なことって……このことですか？じゃあ、キャプテン始めましょうか、今日はどうします？」

「もちろんハンデ無しだ、今日こそは粘らしてもらおうぞ」

「それじゃあ、よろしくお願ひします。手加減は出来ませんよ」

「望むところだ……よろしくお願ひします」

「おいコラ、足揉めコラ！一年」

「沢村ー、ジュース」

「な、自分だけ狡いんだな」

「哲さんや、中田はいつも通いだからな。合宿の時はいつもこうして付き合わされんよ、淳さんにはいつもマツサージさせられるし……倉持と中田はゲーム仲間だつてよ、つーか、増子さん何でここで寝てんだ？でもまあ、お前たちの後ろを守っている人たちがどんな人たちか知つとくのも悪くはねーだろ？」

非常にいいことを言っている、多分沢村と降谷は「まさか、この人……」とか思っているんじゃないだろうな？俺も初日はこの言葉に若干感情を揺さぶられ感心したけれども

「そんじゃ、後はよろしくな！俺はゾノの部屋で寝る」

「ええ、!？」

あの人はそういう人だ。

逆に良いことをいう時には気を付けた方がいい、清々しいほどに性格悪いから。

しかし、この二人を身代わりにして逃げるとは思わなかった……。そこだけは予想外だ。

性格が本当に悪い、この人キャッチャーで野球上手くて本当によかったな、まじでクソ人間だよ、この人から野球取つたら。

この何日間でもうやく結城さんの接待が一番楽なことに気付いた、ちなみに溜偉は別

の部屋に幽閉された。どうも伊佐敷さん曰くマッサージが上手いらしい。

相変わらず結城さんはほぼほぼルールしか知らない俺には予想もつかない不可解な手を打ってくる。まるで自分の首を差し出すように。

「知ってます？ 沢村の野郎田舎に彼女がいるんすよ」

「こらーそこお！……あつ、いやその、あいつはただの幼馴染で……」

「ほう、どういふことか詳しく聞きてえな」

「……詳しく、な」

「だから彼女じゃないっすよ！メールだつて全然返せていないし」

というところで、俺のスマホが電話の連絡を告げた。

「あ、ん？、山元のスマホか。電話来ているぞ……ふうん」

パスワードを掛けているのだから、そう簡単にセキュリティを突破できるわけがない、なんて一瞬でも思ってしまった自分を叩きたい。

電話がかかってこればパスワードなんて何の意味もなきないのは俺自身が一番よく知っていたはずだ。

コミカルな機械音は紛れもなく、LINEの通知を、正確にいうなればLINE電話をかけている音がスピーカーを通して広がった。

「あの、なんでそんな邪悪な笑みを浮かべているんです？」

「そうだな、この橘光つて子について話してもらおうか」

「ああ、ただの後輩ですけど」

「ただの後輩がこんな時間にかけてくるか？」

「さあ、来るんじゃないですかね？ 実際来ているわけですし。あつ」

まさか本人の目の前で勝手に電話を取るなんて、2週間ぶりだ。嫌な予感しかしな
い。

『……もしもしいい、お久しぶりですねえ』

ご丁寧にスピーカーにしたこと、その声は部屋中に拡散されてしまっていた。

眠っていたのだろうか、機械を通して発せられる声音にはおっとりしているも言葉ひとつひとつがしっかりとっている聞きなれた彼女の声ではなくて、どこか不安定ではつきりとしていない音だった。

と、そんな感想はさて置いて、優先事項が先にある。

「とりあえず、返してもらって」さて、山元虹稀くん。噂の後輩の光ちゃんのことについて洗いざらい吐いてもらおうか」

「黙秘します」

『ん〜………こーきしちゃん？』

「光ちゃん！ 後でかけなおすから今は切るんだ！ ちよつと、倉持さん？ なんで俺の後ろ

にいつ！」

そもそも、この合宿に入って連絡し忘れてることすら忘れていたって言うのに、悪戯半分でここまでやられるとは……！

それに、疲れ切った今の状態では、（いやもしかすると万全の状態でも）倉持さんの拘束から抜け出してスマートフォンを奪還することなんて不可能だ。

判別はしづらいが、寝息のようなものが聞こえてくる。

逆にこれはチャンスかもしれない、頼むからそのまま眠ってくれ……

「第一先輩たち、よく考えてください。俺がここで彼女と上手くいくのが望みなんですか？ 違うでしょうか？」

「彼女って、お前……」

「あ、彼女って言うのはSheという意味合いで、Girlfriendという意味・概念は全くないです」

「ボロが出たなあ。さあ、観念して洗いざらい吐いてもらおうか？ それと1年のマネージャーともやたらと仲が良いらしいじゃねえか、それについても詳しく教えてほしいな」

「いや、別に春乃とは普通に仲が良いだけで」

「ほおう、下の名前と呼ぶなんて大層仲がよろしいようぞ」

「えっ、名前くらいで敏感になりすぎでしょ……」

別に、やましいことは無い筈だけど、無い筈だけど、第六感が間違いなく告げている。これ以上まともに受け答えすると何かとんでもない、大事な何かを失ってしまいそうな予感がする。

具体的に言えば非常に不名誉なレッテルを貼られる気がする。

よく考えるんだ、先輩たちは何を求めているのか。俺が都合よく女の子と仲良くしてそれをからかうだけなんて幼稚な考えに至るわけがない。その程度のことではしゃぐのは中学生までと相場が決まっている。

それならば出会いの欲しさか？ あるいは先輩たちに彼女がいるという噂は聞いたことがないし、寧ろ野球が彼女なのではないかと疑ってしまうほどに野球にのめり込んでいる。だが、いくら長くても夏はあと2か月ほどで終わってしまう、その後を考えて予め策を練っておいてもおかしくはない。

だが、後輩の後輩に手を出すか？ 馬鹿な、そんなことはあり得ない。

クソツ、何をすれば！

『終わっちゃいました……意外と悔しいものですね』

混乱の中、何とか最善策を見つけたために、この状況を乗り切るために必死に思考を巡らせていた時に、彼女の口から漏れた一言が空気を変えた。

思わない言葉に、想定していたことと全く真逆の話の内容。それも確かに理由の一つだと思うけれど、色のついた浮ついた話ではなく、もしかすればこの夏迎えるかもしれない結末を先に経験してしまっていた彼女の言葉に、ふざけた空気は霧散した。

「……ほらよ、きちんと話を聞いてやれ」

伊佐敷さんは急に興が削がれたと言わんばかりにスマホを俺に手渡した。それとほとんど同時に倉持先輩の拘束していた力も弱くなった。

「いや、でも」

「でもじゃねえよ、彼女が真剣に話したいことがあるんだ。聞いてやるのが男つてもんだろ」

「いや、彼女じゃないですけど……ありがとうございます。キャプテン、ちよつと席外します」

「ゆつくり楽しんでくれ」

別に、本当に、そういう間柄ではないけれど、それでも俺にとつては数少ない友人と呼べる間柄の人間の1人のうちに入る。だから何だという話になるが、自分自身も一方的に彼女に話してしまった過去がある以上、この件を無視する事は出来ない。

その意味では、伊佐敷さんの催促は非常にありがたいものだった。

「とりあえず、お疲れ様。あの環境で3年間続けられたのは本当に尊敬に値するよ」

『どっかの誰かさんがそうさせたんですけどね、おかげで最後の1年は面白くありませんでしたよ』

「それは、誉め言葉として受け取っておこう。で、どうしたんだい？いきなり電話なんてかけてきて。負けたのが悔しいから慰めてほしいって？」

『いきなりとは失礼な、連絡すら碌に取れない人が良く言いますね。でもまあ、元氣そうで安心しましたよ。負けたのは確かに悔しいですけど、慰めてくれとなんて頼んでいましたか？』

「それは、俺の知ることじゃないよ。けど、何かの掃け口にはなると思ったんだけどね」
『なるほど、なるほど。いつかの時の恩返しがしたいと』

「あく、あの時は助かった、おかげさまで何とか……結果的にベンチ入りできたよ。それよりも本題に移ろうか、話したいことはそういうことじゃないだろうか？」

『女性との会話の基本は共感と同意です。全く、女心をちつともわかっていませんね』

「ご生憎、彼女なんていたことないし、友達すら少ないからそういう事には疎いんだよ。知っているくせに。で、この時期に終わったという事は2回戦、つまり君の代では初戦敗退という事か」

『はあ、釣れないですね。そうですよ、去年先輩がポツコボコにした前年度優勝校にポツ

「ゴゴにされ返せました」

「ふーん」

『ふーん、つて。そんなに興味ないですか?』

「ああ、ちつとも。最初に言ったようにこの話で湧き上がる感情は光ちゃんに対しての尊敬と労いだけ、他の奴なんてほとんど関係なかったし、第一俺がただ在籍していただけの組織に愛着を持つとでも?」

『むう……それはそれで悪くないです。紆余曲折したんですけど、虹稀さんに電話を掛けた理由は、気まぐれです。無意識のうちにかげちやつて、多分、声が聞きたかったんだと思います。男の人にとってこんなに嬉しいことは無いでしょう』

「うん、嬉しいよ。感謝カングキ雨嵐」

『ああ、そういう人でしたね。わかってましたけど。やっぱり、奏虹さんの言う通り押しが足りないのかなあ』

「ちよつと待つて、最後らへんあんまり聞こえなかつたけど、姉の名前出てこなかつた!?!」

『さあ?気のせいじゃないですか?』

「あいつ……とにかく、もしあの人に何か吹き込まれているんだったら、気を付けた方がいいよ。あの人は人が苦しむのを見るのが好きなヤバい人だから」

『ハイハイ、善処します』

「わかってないやつだ……」

『そんなことはともかく、さつき他の人達の声がたくさんしたんですけど何かあったんですか?』

「そんな事……。今合宿があつてね、いつも通いの先輩たちの接待をしていたんだ」

『おお、もしかして、それはお邪魔しちやいましたか?』

「いや、今回ばかりは助かったよ」

『そういえば、もうすぐ甲子園に行く予選が始まっちゃうんですね。もしかして、私の話つて結構センシティブな話題だったり!?』

「甲子園で優勝するから全くもって無縁な話だね、先輩たちはちよつとセンシティブになつていなければならないから」

『なんか、調子戻つて来てますね。前はとつてもかわ……。羨らしい感じだったのに』
「ぐつ、あの時は、マジで挫折してた時だったから……」

『私はどちらも嫌いじゃないですよ』

「今日一元気な声で言うな」

『出来ればいつもの調子と羨らしい時の比率が8：2だと最高です』

「ツンデレつてやつか!?絶対しねえから!」

『よく知っていましたね、その言葉。無関係に生きているとばかり』
「姉さんのせいだよ……、使う機会があるとは思わなかったけどさ」

『それなら良かったじゃないですか！おめでとうございます』
「全く喜ばしくもないし、めでたくもないよ」

『でもやっぱり……私はあの時の虹稀さんよりも、今の虹稀さんの方が好きですよ』
「急に真剣になつてどうした？個人的にはそりゃもちろんあの時の方がいいと言われるのと平常時がいいと言われるのは後者の方が圧倒的にうれしいけれど」

『今日話して思ったことです。やっぱりこうでなくちゃ、らしくないですからー』

「何だよ、急に。でもまあ、光ちゃんだつてそういう風にコロコロ感情が変わる方がずつと君らしいよ。話を始めた時より少しは、元気が戻ったんじゃないかな？」

『さあ、どうでしょう？でも、おかげさまで前向きになれました。本当に忙しい時間を取つてしまつて申し訳ありません、ありがとうございます』

「どういたしまして。お嬢様の力になれたのなら光栄です」

『良いこと言つたと思つたらすぐそれなんですから、そういうところ他の子にしないでくださいよ』

「出来るような間柄の人は光ちゃんしかいないよ。ともかく、部活が終わつたのならこれからのことを真剣に考えるといいよ。そっちの方がよっぽど大事だ」

『んんっ、恥ずかしいことをサラツと言いますね……らしいっちゃらしいですけど……。それでは、お時間とらせて申し訳ないです。虹稀さんの活躍、心から楽しみにしていますよ』

「うれしいこと言ってくれるね、期待にこたえられるように結果を残すよ」

『はい、頑張ってください！誰よりも応援していますから！忙しい時にありがとうございます』

「ああ、うん。精一杯応援してくれよ。光ちゃんの応援つてとても力になるからさ」

『っ……！からかわないでください！それでは、おやすみなさい』

「うん、おやすみ。本当にお疲れ様」

●●●が目覚める日 【前編】

1

〔Q〕自分の体に合った投球フォームとは、どういうものか〕

その質問を初めて聞いたとき、2つの答えがよぎった。

まず1つ目、感覚的に投げている自分が気持ちいいフォーム。つまりは投げやすい、しつくりくる、リリースの時に指にかかりやすい等々。

大前提として、体に負担がかかることなく、気持ちよくいいボールが投げられるのならそれは自分の体に合ったフォームと言えるだろう。

だがしかし、勝敗が関係するスポーツという事を踏まえると感覚的なことを優先するのは間違いではないけれども、その行動の末に結果に結びつかなければ全くもって意味がないと思う。

だから2つ目は、結果が出せるかどうか。単純に興味程度のキャッチボールやただ単に速い球を投げたいというだけであれば、このことは全く気にする必要はないけれど、俺に今必要なことはその結果にアウトをしつかりとれるかどうかだが非常に大事な問題

になつてゐる。

その問いに、もし答えるのならば、少しばかり答えとしては不十分で不的確な返答になつてしまふが、そのクエスチョンへの回答は

【A. 一番いい結果が得られる動き】

が俺の解答だ。

スポーツを始めるきっかけは憧れや環境に大きく左右される、だから前者の場合は特に理想の、憧れの根源に少しでも近づこうとして1つ目に述べた感覚的に投げていて自分が気持ちいいフォームだけを追い求めていると、自分が気持ちいいだけで（それで結果が出れば理想的ではあるけれど）何の生産性もない。

それに一発勝負の夏に文字通り蹴落としてまで戦力として選ばれたというのにそのような態度で臨むのは不敬なことだ。

でも、そんな回答を導き出しておきながらも俺がやれることはまずは感覚に頼ることだった。

「まずはギリギリまで走つて来て、体の声を参考にしようと思うんですけど」

朝食を摂り終わり久々のブルペンに入るころにはこの結論が出ていた。

「お前、時々馬鹿になるよな」

「馬鹿とは失敬な、これでもいろいろ考えて行きついたんですよ？体の声に耳を傾ける

という事は確かに些か原始的で理性の欠片も無いような奴のやることだと思えますけど、本来人間というものは「そういう御託は良いから。この前改良中といったフォームがあつただろ？花田東とやった時の奴あれでまずは投げてみるよ」

「でも……あれは結果的には良かっただけで」

結果的には0が並んだけれども内容でみれば良くはない。確かに結果は大事だけれど、内容なんてどうでもいいという訳ではなく、次のステップに上がるにはそこから色々なものを学び直さなければならない。

その点で言えば花田東戦においては味方の援護と運によって生まれた偶然の産物、すなわちゼロの並んだスコアで、反省点しかなく寧ろ良い所は一つもないと思っていた。

「そうだ、あれが結果的に一番良かったんだ。一から作り直すのには時間が足りない、しかし修正前のフォームじゃ物足りない。それなら出来が悪くても将来性のある方を選ぶの俺の判断を間違いだと思うか？」

突如として現れた監督は、相変わらずドスの利いた声で一也さんの言いたいこと説得力を兼ね備えて言う。

「いえ……、はい、わかりました」

急がば回れとはいふものの、回り道が出来る場合と出来ない場合がある。確かに、少し極端過ぎたかもしれない考えたけれど、花田東戦の時のフォームではしつくりこ

ないというのが本音だ。

軽くキャッチボールをして体を温めた後、一也さんは立ったままで30球ほど投げ込むことになった。隣ではクリスさんがフォームチェックをかねて動画を撮影しており、横では監督が見ている、しかしながら意外と練習中にこうも注目されると気恥しくもある。

右肩を下げて左肩を上げる、右腕は限界まで脱力し、重心が前に移動した際に肘を上方へ反動を利用して動かす。この時に注意するのは肘より上にボールを持つ手がないことだ、あくまで意識的な問題で、実際には平行に近い位置になっているが。

左肩を上げ相対的に右肩が下がった結果、右足に全体重が乗った。その体重を全て、余すことなく前に伝えるためにプレートを思い切り蹴る。踏み出した左足は力の奔流を防ぐために自分の体がある方へ思い切り踏ん張った。

肘か先は頭の後ろで時計の6から12のように時計回りで弧を描き、その時点で前に出ている肘を支点として弓のようになりそのままの勢いでボールは発射された。

ドン、と重い音を立ててミットに飛び込んだ自分のボールは想定よりもボール3個分は情報へ飛んで行ったけれど、勢い、重さ、キレだけを切り取れば以前とは比べ物にならないほどの威力で放たれた。

確かに新しいフォームにしてからは指のかかりがやたらと良くなり、花田東戦を終え

ると気付いたら中指に血豆が出来ていたほどだったけど、1球を投げただけでここまで明確な熱をもっているのは初めてだった。

それに……

「何を驚いている?」

30球程度投げ込んだ後、まるで心境が聞こえていたかのように、逆に何で驚いているのかわからないとでも言いたげに監督は言った。

「いや、まさかたった何日間でこんなに変わるなんて思ってもいなくて」

「……40日、これがどういう日数かわかるか?」

「40?いえ、全く……」

「40日間倒れる直前まで走り込んでいただろう。普通なら怪我の一つや二つは可笑しくない、しかし結果、怪我することなく作り上げた強靱な下半身がある以上俺は今の球はとんでもなく酷いボールだと思うが、何をそんなに驚く必要がある?」

「っ!」

然も当然のように、かつこいことを言うなあこの監督は。

「だがこの程度で満足してもらっては困るな……クリスマス、今の動画を見せてもらえるか?……あくまで、このアドバイスは俺の中の良いと思う事でお前に会っているかどうかは俺にはわからん、だから合わないと思えば無理に修正しようとするなよ」

「はい、もちろんです」

その後いろいろと手ほだきを受けた。主に言われたことは下半身の使い方、発達していた下半身の力を効率よく使えていないのが投げるたびに、修正するたびによく分かるくらいに自分がいかに使えていなかったのかが分かって少し悲しくもある。

上半身の使い方、主に肘の方は今のままでいいとのことらしい。というよりもそこは感覚の問題であるからあまり口を出せないのだそうだ、強いてアドバイスするなら今までもりリリースを遅くすればいいかもしれないとのこと。

あとは修正前にやっていた背中を一度キャッチャーに見せる形になる動作。原点となつているフォームの特徴の一つなのでやってみるといいかもしれない。

注意されたのはまずは4〜6割の力でフォームを固めること、100球越えても問題はないくらいに体にしみこませること。

その後で色々足していけば大丈夫だと言われたけれども本当に大丈夫なのだろうか？

監督の指導が終わり1時間ほど注意事項を確認、クリスさんにも今のところは問題ないと言われブルペンの後ろ側で休憩もかねて沢村、降谷、川上さんのピッチングを眺めていた。

やはり相当疲れているのか降谷はボールが全然走っていないし、沢村はいつもに増し

てコントロールが酷い、ただ宮内さんが降谷の時以上に捕りにくそうにしていたのは気になって仕方がないけれど。

「山元、沢村、降谷、今日と明日はブルペンとシートバッティングで調整だ。山元は無理がない程度にフリーバッティングでも投げて良いらしい。ただ投げるときは俺が見張りとして付くがな。土曜日の試合、山元と降谷で投げてもらうから準備しておけよ」

「……！はい！」

「……どつちが先発ですか？」

「ちよつと！クリスさん俺は!？」

「先発は山元だ、降谷と合わせて1試合。沢村は日曜日に川上と二人で1試合投げてもらう、さあ時間はないぞ。あとはどれだけやれるかだ」

「畏まりました！この沢村、クリス先輩の期待に応えられる、否、期待を越えられるように「それではクリスさん、俺は御幸さんと打ち合わせしてきます」

「ああ、その方がいいだろう」

「あ、僕も……」

「え、降谷はストレートしか投げれないのに打ち合わせに行くの？別にする必要なくな
い？」

「………行く」

もっともな意見を言っただけなのにガーンとでも言いそうな悲しそうな顔をしたのはなぜだろうか？真っ直ぐしか投げられない自覚はあっただろうに。

案の定一也さんのところに行くのと降谷は散々いじくりまわされた後ブルペンに戻された。捨てられた子犬のような表情をしていたけれどきつと気のせいだと信じたい。

時間はないけれど着実に前に進んでいる実感がようやく湧いてきた。土曜日の試合である程度の手ごたえが得られれば夏の大会までには間に合わせる自信しかない。

今までは中学校のしようもない成績が心のどこかで誇らしいものになっていた、ただ自分の力を示したいだけの独りよがりな舞台で……はじまりは、天才が俺に吹っ掛けてきた約束だった、今となれば気軽に受けてしまった悪魔の契約のような約束。

それでもあいつは、本気で奇跡にも等しい確率の高校野球をやっている人の誰しもが夢に見るあの舞台の頂点に立つことを踏み台として既に見据えている。

努力の仕方が、覚悟の重さが最初から違ったのだ。最初から目の色が違うなどは思っていたけれども、同じチームになって見えるあいつの動きを、試合に臨む態度や入部当初の宣言を現実にしてしまったすごい奴。

肩を並べる資格もないほど、比較することすら烏滸がましいほどの天才との約束を果たす。

そして大事なことを気付かせてくれた先輩たちを笑顔で送り出せるように、このチー

ムで最後には笑っていられるようにするために、俺は力を手に入れる。

2

6月16日土曜日、青道高校は関西の強豪校大阪桐生高校との練習試合を組んでおり、合宿で疲れた体に鞭を打ち準備に取り掛かっている。

その中で一人、表情は落ち着いており、飄々とした出で立ちの選手だけが他の選手が気持ちを高めて試合に臨むなか、恐ろしく冷静に、物事を俯瞰したような冷めた眼付きで淡々と準備していた。

その選手はブルペンで準備を終えると表情を変え、ことなく一旦ベンチに戻り、スターティングメンバーの発表まで体を冷やし過ぎないようにしたまま体を休めていた。

普通ならば今頃は彼に声を掛ける選手が多いのだが、今日に至っては誰も話しかけなかった。

昨晚、秘密裏に行われていたミーティングも原因のひとつではあるのだが、それを差し引いても虹稀の纏う空気がいつもとは違った、異質だった、特殊だった。

主将の結城哲也だけはその異変に気付かず「気合が入っているな、いつも通り後ろには俺たちがいるから安心して投げろ」と檄を飛ばす。その返答はいつもと変わらず朗らかで冗談も交えたものだったが、結城哲也が離れた瞬間スイッチが切り替わったように表情は変化している。

他の三年生は緊張もしているだろう、集中したそうだから触れないでおこう。程度の認識だが御幸だけは別の印象を受けていた。

比較的頻繁にバッテリーを組んでいる間柄だからか、ただの感か。本人にもどちらか分かっているが、今までとは明らかに別人だと考えた方がいいと思いを切り替えてしまおう。

言葉に表すなら、不気味なほどに落ち着いている、いつもよりも大人びていると言ったところか。

その様子を知るものが一人だけ、心躍らせてその様子を眺めている。以前とは状況と環境、そして雰囲気すらも違うが、何かとんでもないものが溢れだそうとしている、という比喩的表現でしかない感覚的なものが雄弁に物語っていた。

スターティングメンバー発表が終わり整列を経て、後攻の青道高校は守備位置につく。

こればかりはあくまでじゃんけんの結果により左右されるため先頭打者の倉持洋一と2番打者の小湊亮介はグラブを一旦取りに戻り守備へ向かった。

また、先発投手である虹稀は念のため軽く水分補給をした後で体を軽く解して、軽いダツシユでマウンドへ向かおうとしたところで、悠々とした背中にかける言葉も見つからないまま片岡鉄心は呼び止めた。

その声に呼応して振り返ると、まだ幼さの抜けきらないいつも通りの表情で立ち止まる。

クエスチョンマークが頭に浮かんでいるように小首を傾げるが、用意していた言葉を口にした。

「今日は思いつきり打たれてこい、合宿の疲れもあるし結果は求めるな。思い切り、投げこい」

変に気負わせないために投げかけた言葉だったが、言い終わった後で悪手だと気付く頃には遅すぎた。

精神的には繊細である虹稀にかける言葉は、そう思う頃にはすでに手遅れで、言葉を選び直す暇さえなく虹稀は強い意思を込めて言い返した。

「この試合に投げさせてもらう以上、全力で臨みます」

気楽に、との思いを込めて言われた言葉は、虹稀にとつて「お前じやまだまだレベル不足だから、胸を借りて経験を積ませてもらえ」という意味に受け取れた。

虹稀には打たれるつもりもこの試合に負けるつもりもない。だが、レベル不足なのは、信頼が足りていないのは否めない。もし、自分がエースであればそのような言葉は選ばなかったのだらうと思うとその悔しさが余計に虹稀に火をつける。が、すぐにその炎に水をかける。

片岡鉄心の言う通り、今日の自分は結果は求めない。だが、必ず次に繋げるための成果は手にしなければならぬ、それには自分の感情を制御しなければならない。

帽子を深くかぶり、気持ちを飲み込むと真つすぐマウンドへ向かった。

綺麗な傾斜を自分好みに荒らしていく、任されたポジションは勝敗を握る大事な場所、ここに立っている以上結果を無視する事は出来ない。しかし、目的と手段を間違えるわけにはいかない。

だから、達観する・俯瞰する・観察する・把握する、そしてそれら全てを余すことなく自らの糧にする。

始まりの掛け声とともに大きく振りかぶり、まだ噛み合わない歯車を無理やり噛み合わせてボールを投げた。アウトコースに構えたミットとは右側に、真ん中よりに入った甘い球はいとも簡単に捉えられる。

肝が冷えるような打球がファウルゾーンへ飛び込んだ、コースが甘すぎたのが幸いして今回はフェアゾーンへ入らなかつたが、一歩間違えば初っ端からピンチを招きかねないあたりだ。

虹稀の表情には内心冷やりとはしたものの表情には一切の変化も見られなかつた、心情としてはやっぱりそうなるか、といった乾いた感想程度。

淡々と事実確認を繰り返し、その結果から経験値を汲み取っていく。

御幸が次に出したサインはカーブ、だが首を横に振り拒否した。頷いたサインはストレート。

この試合、コースは御幸が指定するが球種は自分で選んでいいと事前に通達されていたからだ。

—意識を向けるのは自分自身。結果という指標を基に分析、修正、最適化、それのみに没頭する。

再び振りかぶる、今度は別のところに意識を向けて細部が異なる同じ動作を繰り返す。

今度は要求通り外角低めを掠めるようにミットに納まるも判定はボール、御幸は厳しいな—とぼやくが虹稀には一切気にした様子はない。

虹稀にとつてはこの試合はただの実験のようなものに過ぎない、フォームを実践の中でより完成に近づけるのが目標であり、上手く投げれたときのボールは大阪桐生という全国屈指の強豪校にも通用するかを試しているのだ。

全体重を乗せ指にかかったストレートはどの程度の威力があるのか、カットボールは、上手く抜けたカーブにどう反応するのかを。

その考えは胸に隠したまま誰にも告げていない、この試合は疲労がたまっている状態でどれだけ投げられるかという監督の意図を知っているからそれならば最大限利用して

やると判断したまでだ。

実戦というピリリと痺れる様なプレッシャーと割り切っていないながらも、マウンドで投げている以上無様な姿は見せられないという意地、そこから生み出される程よい緊張と最高濃度の集中力が虹稀の成長を急加速させている。

—前よりも更に上手く、更に鋭く、更に速く、更に効率よく……悉くを凌駕しろ。その先に行くために。

プライドもある、恥じらいもある、悔しさもある、申し訳ない気持ちもある、それでも今は向上心が勝っていた。

だからといって、感情が動かないことは無い、虹稀は気持ちを前面に出すタイプの投手であり現在も様々な感情が激しく渦巻いている。

だが、それらは今はいらぬもの、全てを飲み込むように大空を仰ぐ。

大きく振りかぶった、見据えるのは自分自身。ぞつとするような無機質な瞳は大阪桐生の1番打者を簡単に見下ろしていた。

●●が目覚める日 【後編】

3

「すいませーん、遅くなりました!! テーピング買い忘れて戻ってたら、今度は麦茶のパック忘れて、そしたら今度は捨て猫が現れて、学校に帰ってくるとき随分と運転の荒い車に轢かれそうになって……………あれ? どうかしたんですか?」

あまりにも静かだった、選手たちが、ではなくギャラリーといつも声を張っている先輩たちが。マネージャーの先輩たちは青ざめており、心配そうに一点を見つめている、その視線の先には虹稀がいていつものように投げているように見えるが少し見るといつもと違う、見たこともない姿の虹稀が視線の先にいた。

「何だよこれ、ほとんどあの投手の自滅じゃねーか!」

「桐生相手にどういふ試合をするか楽しみに来たのによ、レベルが全然低い投手を投げさせるとはどいうことだ!」

「ヤジる気すら起きねーよ、帰ろーぜ!」

「俺たちはこんな青道の姿見たくねえ…………」

ざわつくギャラリーを端目に虹稀の姿を春乃は追うが、その様子に全く別人であると

思うほど以前とは異なっていた。

打者を睨みつける様な鋭い視線は、今は何の熱も帯びておらず無機質で冷たい。

剥き出しにしていた闘志は見る影もなく、淡々と落ち着きすぎているのが逆に怖い、まるでマウンドだけが季節が逆転しているかのように冷たく、凍てついているように見えていた。

しかし、プレートを踏んでいるときは無表情に徹してるが、ベンチに戻るとき、マウンドを降りてプレーしている時などは悔しさが（本人は隠しているつもりだが）浮かんでいる。

だからか、独りよがりで孤立しているようにも見える虹稀には後ろからの声掛けが絶えていない。

1回表に刻まれた数字は4・2回表に刻まれた数字は2、打者はすでに2巡目に入っており2アウト3塁で4番打者の館が不気味な笑顔を浮かべ嬉しそうに打席に立っている。

ちなみに青道高校は1回裏に小湊亮介の四球、伊佐敷の進塁打、結城のレフト線へのタイムリーツーベースヒットにより1点を獲得している。

「さすが桐生打線ですね……制球こそは悪くないですが球威とスピードのない山元を普通に打ち崩しています」

「……球数は？」

「60球を越えました」

「成程、そろそろか……」

「そろそろ？」

「明日の試合、お前らは1年2人をどうリードする？」

「とりあえず、山元は低くコーナーに集めてガンガン攻めていくつもりです」

「ふむ、御幸は？」

「山元には……コースは指定しますが投げたいボールを投げさせるつもりです。相当打ち込まれるのは承知です、今のあいつはフォームも安定していませんし、今の出来栄えから夏までにどの程度成長するのか逆算するためにも、あいつの本当の今の実力を確かめるつもりです」

「……明日は御幸、お前が受ける。相手はあの大阪桐生、ハードな試合になると思うがお前らも付き合ってくれるな？」

「「「はい!!」」」

館のセンターへ抜けそうな打球はショートの内野手の巧みな守備により阻まれた、インコースのカットボールで詰まらせたと思つた打球だが、大阪桐生の4番はバットの根っこでもすさまじい打球を飛ばす。

ただの汗か冷や汗なのかわからないものを拭い、大きく深呼吸すると先ほどファインプレーをした二遊間に感謝の言葉を述べた。

「倉持先輩、小湊先輩、ありがとうございます！」

「気にすんなって、いつものことだろ？ガンガン飛ばしてこい！」

「うん、いつも通り良い守備練習」

「あはは、厳しいっすね」

励ましているのか、弄っているのかわからない、いつ始まったかわからないやり取りを終えると虹稀は御幸を探す。が、丁度二遊間の二人と話を終えたところで御幸は意地の悪い顔をしながら話しかけてきた。

「はははは、バックに助けられたな。まあお前の今日の出来なら10点以内に抑えれば上出来だ」

「まさか、もう……1点も、やるつもりはないです」

御幸が声を掛けたとたんに冷える声音には妙な自信に満ち溢れていた。

—こいつ、まさか……!

御幸は打席に立った後にプロテクターを付けなければならぬためにスコアブックを事細かに見る事は出来なかったが、ずっと引つかかっていた違和感の正体に思い当たる節があつた。

そして始まつた3回表、違和感の正体によろやく気付かされる。

ヒット1本許し、進塁打と犠牲フライで3塁を踏ませはしたものの、ホームベースは踏ませない、この回4人で切り抜けることに成功、球数は僅か15球。

「なんや?あのピッチャー?急にしつかりとしたリズムになりおつて?」

大阪桐生高校の監督がぼやくのもその筈、この回の攻撃時間が短すぎたのとあまりにも簡単に打ち取られる様子を見ると1・2回の様子とは明らかに違う。

だが理由はわからない、この回三振して帰ってきた打者に問うと彼はこういった。

「初回よりも、ずっとボールがキレています。それも、全球種」

4

「おい、山元。一体どういう考えだ?」

「何がですか?」

この期に及んで、この後輩投手は涼しげな表情でとぼけた顔を作ってみせる。

この変化に気付かなかった俺も悪いが、好きにさせると判断したことも悪いが、大事な試合であるのに関わらず手を抜けといた覚えは一つもない。

全国制覇を狙える高校相手に、全力を尽くさずにただ実験的に球を放るのはしてはならないことだ。

「とぼけるな、初回はほぼストレートのみ、2回はストレートとカットボール、3回は持ち球全てでストライクゾーンに投げ切るなんて狙ってないといけないだろ。それにこの回はキツチリ抑えているし……なんで最初からやらなかつたんだ？」

「いや、自由に投げていいって言うから自由に投げたんですけど」

「それはそうだけども、わざわざ点を取られていいと言った覚えはないし、手を抜いて良いと言った覚えもない」

「でも、初回到4失点したから、2回を2失点、3回を無失点で抑えられたんです。要するに、初回におそらく40球程度投げたおかげでだいぶ感覚掴めました。だから2回にスライダーを織り交ぜた投球で2失点、カーブを混ぜて無失点という結果です」

俺はこの試合は山元の出来栄えを確認して、ここから夏までの日にちを逆算してなるべく弱点を補えるようにする判断基準の材料にするためだった。

監督やクリスさん、宮内先輩ともそのことについては話していたし、降谷や沢村のよ

うに大胆で凶太くなく、繊細な印象が強い山元を知るにはいいきっかけになると思い球種判断は本人に任せていた。

それに、甲子園優勝が狙える強豪相手にどこまでやれるかを見れば大体の基準は作れる。

そう言えば最初はストレートでガンガン押すなど、打球の飛距離がだんだん伸びなくなっているなどは感じたが、それでもカーブとカットボール（本人はスライダーと言いつ張っているけど）は見せ球として多投していた。

それでも、やはり140km/hにも満たないストレートでは大阪桐生相手に太刀打ちできるはずもなく、打者1巡し6失点。

だが、2回はストレートもカットボールもストライクゾーンにガンガン出し入れし、結果的に内野ゴロやひっかけたフライを打たせるなどして失点は2点。

この間、変化球を投げはするものも初回はカットボールはワンバンするわ、ちよつと低いわ、ゾーンから外れるわ、カーブはキレすぎてて制御ができないのかほとんど、と言うか全くゾーンに入らないし……

「……まさか、大阪桐生相手に試したのか？」

「まあ、そうですね。言っただけですけど、別に今回は勝たなくても夏は終わらないじゃないですか、何だったらひとつでも多くのことを学ぼうと思っ……まあ非常に遺憾な

んですけど」

少しきつく言おうと思ったが、最後の言葉で悔しさの色が山元の顔に浮かぶ。涼しげな表情と、どこかの王様エースを彷彿とさせる目が消え去り、降谷や沢村と同じ、いやそれを越える激情の炎が渦巻いているように見える。

「そ、そうか……」

だから、俺は何も言う必要はなかった。かける言葉がなかった。

「そういえばこの試合は自由に投げがいいと言われているんですけど、残り2回はきちんとリードしてもらっていいですか？折角2番から始まるのでどこまで通用するのか確かめてみたいです。それに、一也さんも俺が今どの程度なのか、大阪桐生相手に試す必要があるでしょう？」

それでも、その感情を押し込んで少しでも上に早く行こうとする姿勢には流石に感服だ。本来、どこまで出来るか確かめるだけの、現時点から逆算してあと1ヶ月ほどどこまでやれるかを確かめるテストのような日なのにもかかわらず、山元は更に、もつと上のステージに立とうとしている。

もちろん、階段を一步一步確実に上るような努力はさせるつもりだったが、この試合での成長速度、特に繊細な部分での修正具合を見ると礼ちゃんがいっつをここに連れてくる理由はよく分かる（ちなみに片割れの雨宮の方は今日は既にヒットを打っており絶

好調だ)。

沢村や降谷はどちらかと言えば階段を飛ばすことなく、着実に一步一步前進しているが、山元はそれに加え恐ろしい頻度で段を飛ばして成長する。

それに、自分勝手にいつも進んでいって、リードし甲斐があるとかないとかじゃなくて、リード出来ないというか。

暴れ馬に乗っている気分になるというか。気に食わないのは俺以上に練習試合の意味を解ってるってことなんだよなあ。

「まったく、調子のいい奴め。あと2イニング、気持ち切らさずに行けよ」
「もちろんですよ、一也さんこそ」

勘でしかないが、今はまだ成長途中、それもまだまだ初期段階。

導火線に火がついていて爆発を待つだけの爆弾のように、もし、このまま……そう考えると恐ろしい。

鳴と同レベルか、それ以上に。

それはあくまで可能性、先ず目の前のことを片付けねーとな。

「2・3番はストレートのみで攻めるぞ、4番からは流石にやばいし、変化球混ぜていくからな」

「了解です」

バットを担ぎ、ネクストバッターズサークルに向かう。

案外打撃もいいこいつには、正直塁には出てほしくないけど、点差が点差だし。

なんて思っているのと2塁にいる雨宮をホームに返すタイムリーヒットを打つ当たり、こいつやべー奴だなど思う。

案の定、予想通りと言うか、結論から言えば山元のストレートは通用しなかった。

伸びや重さ、キレと言った的確な表現がしにくい部分で言うところと確かに良いボールは来ているが、如何せん球速が足りない。

調子が良ければ130後半は出る球速が、今は出ても130そこそこ、更に沢村とは違い腕がいきなり出てくるというフォームでもないのが当然捉えられる。

僅か3球でノーアウト1・3塁。いや、もしかすると相手もストレートだけに狙いを絞っている可能性も考えると長打がないだけでまだましか。

現状、ストレートは通用しない。それじゃあ次、変化球を織り交ぜると？

こつからは、俺の仕事だな、だから見せてみるよ片鱗を。

投げられる球種はストレート、遅いカットボール、速いカットボール、曲がりの小さい

カーブ、縦に大きく落ちるカーブの5種類。

青道高校の中ではノリに匹敵するほど制球が良く、ノリ以上に度胸はある、失投も少ないし一番安定している。

打撃もいいし、野球もわかっている。そう考えると山元虹稀という投手は総合力ではNo.1の投手だ。

だが、決定的にかけているものがある。それは投手の生命線である決め球。

だが、ないならこの試合で完成させれば問題ない。いつもお前は逆境があれば成長してきた、ならこの場面、最高だろ？

打者は4番、エースにして4番の館さん、球は重いし、打撃は良いし、顔はただでさえ怖いのに、不気味に笑うし。聞くところによると試合が大好きでたまらないらしい、まあだから何だという話だがな。

そんなそうでもないことはさておき、ただでさえ重い球が回を重ねることにさらに重くなるんだから性質が悪い、ここまで4打点のエースで4番、まさにこのチームの柱。「フオアボールだけは止めるよ一年坊主！」

ははは、本当に試合が好きなんだなー、この人は。

地獄に咲く一輪のラフレシアのようだぜ。

けど、3打席もやられっぱなしっていう訳にはいかないよな？心配すんな、フェア

ゾーンには入らねえよ。

攻めるのは外角低め、速いカットボール。

ストレートに張ったスイングでは当然フェアゾーンには入らない、山元のカットボールの特徴だが、変化こそ小さいもののストレートと見分けがつきにくい（速い方は）。

そのため、バットの先に当たりファースト後方のファウルゾーンへ飛んでいく。

「あれが、カットボール……」

「あの一年坊主成長期真つただ中なんですよ。いやあ若い者の成長はおそろしいですよ」

更に怖い笑顔になった、うわあ、怖つ。

あくまで今のはストライクカウントを稼ぐためのボール、チームの柱であるこの人は出来れば三振、もしくは引つ掛けさせてダブルプレーを狙いたい。

最悪、ヒットだけはま逃れたい。

殻を破るなら今、お前のまだコントロールできていない縦に大きく落ちる自慢のカブ、外角低めに決めてこい！

ばっ！こりやインハイの抜け……………っ！

一度浮き上がり、すっぽ抜けた曲がらないものと判断し腰を上げて捕球動作に移った瞬間、そのボールは、地面に吸い寄せらせるように急降下する。

「……ボール！」

あつぶねえ！捕れはしたものの腰を浮かさせられるとはな。きちんと取れてればストライクだったのに……、前に投げたのとは別もんじゃねーか。一度浮いたと思えばブレーキが利いたかのように鋭く落ちあがる、高校1年生が投げる変化球じゃねえぞ。けど、問題はこれが意図的に投げられるかどうか。

……が、そんな心配は必要なかったな。

今まで気の抜けたように全てを見下していた目が変わる、まっすぐと前を見据え、あふれる闘志はそれだけで伝わってくる、堂に入っている様子を見る限り……なるほど、これが山元虹稀という投手の本来の姿か。

3球目も縦に大きく落ちるカーブ。セットポジションから放たれたボールは一度浮きバッターはその軌道を追うために一度顎を上げてしまふ、その瞬間、おそらく館さんの目にはボールが消えているように見えているだろう。

現に俺も一度腰が浮くし、捕るときはまだミットでは捕球できない。

ただ、気味の悪い笑みは館さんの顔から消えた。ただ驚愕の感情だけが現れている。カウントは2ボール1ストライク。それなら次は、小さく曲がるカーブ、これなら制

御できるだろ？

今度は浮かずに半円を描くような綺麗な弧を描き、アウトローに吸い込まれる。

「ストライク……2ボール、2ストライク、プレイツ！」

ここまで全部変化球、これで大分ストレイトに対する意識は薄れたはずだ、ストレイトを張っていたとしても変化球は頭を過る。だから最後は最高のボールを投げ込んで来い。

サインは考える必要もなく決まっていた、思わず漏れてしまったのか山元の口に笑みが零れた。好戦的な表情でありながらも楽しそうにしている様子を見るとこいつも野球が本当に好きなんだなと目に見えて分かる。

面白いのはさつきまで笑顔だったバッターの笑みが消えていることだ、嬉しいことにうちの山元はここからが本領発揮ですよ？

セットポジションから素早い体重移動を経て、右足に一度乗った体重をそのまま前へ押し出すようにプレートを蹴る、体の回転は縦、十分にしなった腕からはそのままボールが放たれる。

狙いは内角、しかもコースはギリギリ。この付近に投げれば俺の技術でどうかなる。

案の定、館さんは体が固まった、ほとんど内角に投げていなかったという事もあるが、

この軌道ならば張つていても手を出しづらい。

脳裏に残るあの残像を覚えているなら、外角ばかり意識していたのなら。

「……ストライツ！ バッターアウト！」

今日一番、重い音と衝撃が手に伝わる。思わず腰が引け手が出なかった館さんは俺のミットを見ると目を伏せた。

「……ナイスボール、最高だった」

きつと、その賛辞は山元に届くことは無いだろう、ボソリと呟いた称賛は夏を匂わせる風へ溶け込む。

小さく握った拳、噛み締めた唇、キラキラと輝く目、それだけで山元がどれだけ苦しんだかを雄弁に物語っていた。先の見えない暗いトンネルから抜け出したのは良いが、こんなところで満足してもらっては困る。

その意味を込めて、いつもより断然速く山元へボールを返す。しかし、驚く素振りすら見せずに難なく捕球するところを見ると、その心配はなかったようだ。

1アウト1・3塁、与えられた制限はあとアウト5つ。

剥き出しの闘志は嘘だったかのように霧散している、帽子を深くかぶりなおし、後ろを振り返ってアウトカウントの確認をしていた。

ピンチはまだ続いている、バッターは未だクリーンアップ油断も隙もありはしない。

山元はサインを確認すると同時に打者を見据える、表情は何えず、感情はわからない。打者を睨みつける様な鋭い目線は、今は何の熱も帯びておらず無機質で冷たい。それでも俺の目には、一回りも二回りも大きくなつた投手の姿が映っていた。

暗雲

1

合宿最終日は青道高校・稲城実業高校・修北高校の3チームによる総当たりのダブルヘッダーである。第1試合は青道対稲城実業。

先発は川上憲史。

夏の大会を前にして同じブロックで戦うこととなる両校にはお互いの手の内を見せる道理などあるはずもない。両校ともに主力はベンチに入っており控え組が試合をするという試合だった。

しかし、全国屈指の強豪校同士の控えなためそこら辺の高校よりははるかにレベルが高い、先発の川上は息を切らしながらも決して崩れない粘りの投球を続けていた。

「6回3失点………実際よく投じているよ、合宿の疲れもピークだろうけどな」

「球威も落ちているだろうし、コントロールもばらついていてる筈。こういう時に腕振って投げれるかどうか、監督は見ているんだろう」

数少ない2年生の同級生がベンチで見守る中、思い切って攻める姿勢を見せる川上だ

が打者も一筋縄ではいかない。ボールを捉えきれないファールで粘られる。

フルカウントから厳しいコースを突いた球は、一瞬の静寂の後

「ボール、フォア！」

そう、宣告されランナーを一塁に送り出してしまふ。川上の長所はコースを突ける制球力、弱点は気の弱さ、とにかく一度捕まってしまうと途端に崩れてしまうのが特徴だ。上手くいけばリズムに乗ってトントン拍子で抑えることが出来るが、その逆の時は見事に火達磨になる。

「でも、今のは仕方ない。腕も振れていたしコースも厳しかった、問題はその後」

宮内は一旦タイムを取り徐に川上の股間を触り始めた、1年生、特に虹稀と瑠偉と小湊春市はドン引きである。

しかし、その後ランナーを溜めながらも最少失点で切り抜けてみせた。そのこともあり1年3人は余計に川上と宮内の関係を邪推し、あることないことを想像して共有した挙句その誤解が解けるのには川上の必死な努力があつたという。

「……………ナイスピッチです」

「ああ、ありがとう」

虹稀は後輩投手としてベンチに戻ってきた川上にスポーツドリンクを渡すが、先ほどの行動による偏見が僅かな間をつくるが然程気にした様子はなくコップを呷った。

「これで相手が主力じゃないんだから、恐ろしいよな」

「そんなことありませんよ。合宿の疲れもある中でこれだけ少ない失点で投げているんですから。僕なんて昨日5回6失点ですよ」

「よく言うよ、後半あれだけ圧倒的な投球していたのに」

「たまたまですよ、5回6失点と7回3失点、夏にどちらが大事な戦力になるのかを考えると先輩には及びません」

「誉め言葉として受け取っとくよ」

鳴物入りしてきて最初は結果も全然よくなかったが、最近異常な勢いで成長を遂げる後輩の言葉を素直に受け取れることは出来なかった。

「そう悲観的になるなよ、ノリ。山元の言う通り控えとはいえ稲実相手に3失点、それも隔回の失点なんだ、もっと自信持つてもいいんだぜ」

確かに、この土日の内容だけを見れば虹稀の方がはるかに上だ。しかし、川上には今まで今の立ち位置を、青道高校の比較的安定しているリリーフとしてのポジションを守ってきた実績と比べると虹稀はまだまだ及ばない。

安心しているからこそ弱みを見せたくない稲城実業高校相手に、川上を片岡鉄心は安心して送り出したのだ。この回で降板するも「夏も信頼しているぞ」と片岡鉄心の言葉が山元虹稀という投手と川上憲史という投手の信頼の違いの全てを物語っていた。

虹稀の口から出た言葉に嘘はなく、皮肉でもなんでもない。どこか少しだけ、羨ましそうに口をとがらせる虹稀をみてありがとうと微笑みを返した。

2

「うーん、暇！」

清々しいほのぼのとした笑顔で毒を吐く瑠偉は、道具の片づけをしながらようやく暇な試合が終わったと背伸びをしながら本音をぶちまける。

「でもまあ、瑠偉は今日も出れるじゃん。俺なんて今日は体を休めろとか言われてピッチングも出来ないし試合にも出れないんだから」

「はっはっは、昨日あれだけ打ち込まれて、あれだけ球数投げればそりゃあ休まされるわな。正直特に1回とか大変だったな」

「ぐう……」

「それに、試合の後体のケアもせず阿保みたいに追い込む奴は目の届く範囲で管理するのが当たり前だろ。あれだけ投げた後に投げ込みしようとするしな、チームの戦力になりたいのか戦力を削ぎたいのかわからねえな」

「ぐう……」

「さすがにあれはないわ。最近は夜のランニング終わった後膝ガクガクなんだから休むときは休まねえとな」

「……瑠偉はいつも死んでるくせに」

「しゃーなし、体力はないんだよ。おかげで打率が下がってきたし、本当にまじ走るの嫌い、ちなみにあのクソも嫌い」

あのクソと言われているのはいつもダツシユの時に掛け声を出している3年生のことである。

「ほんつといい笑顔で毒を吐くことだこと」

早くもバックネット裏で弁当をつつく先輩たちを端目に捉え、テキパキとベンチを片付ける。

するとチャラそうな白髪の手と体格のいい高校生離れした顔面の2人の前に現れた。

「ねえねえ！君青道の一年だよな？降谷ってやつ今日投げるの？1年なのにとんでもない球投げるんですよ？」

そこにいたのは稲城実業高校のエースである成宮鳴。瑠偉は成宮鳴という投手のことを本当に事細かに知っているが虹稀は全くの無知である。

青道高校で甲子園に行くならば、打ち崩さなければ、越えなければならぬ大きな壁。

「どんだけ速いか、見てやろうと思つてさ」

「自分より早いか気になるだけだろ、相変わらず器の小せえ奴……」

「うるさいな！ 純粹に興味があんの！」

「小せえ小せえ」

勝手に話が進められているので、2人はアイコンタクトをとると自然なくらいスムーズに目の前にいる稲城実業の選手を無視してその場を立ち去ろうとした。2人の出した結論はこの白いのに関わるとめんどくさそうというもの。

事実二人の勘は正解である。

「ちよつと！ 何ナチョラルに立ち去ってんのそのこの2人！」

「ほう……青道の1年は賢いな」

「ちよつと雅さん、何感心してるの！……ねえねえ、今日は投げるの？ 横学相手に6連続三振取ったんだろ？ ねえどうやって？ MAX何キロ？ 変化球は？」

「MAX160キロで変化球はスライダー、シュート、カーブ、フォーク、シンカーと全方向に曲げれる球種と四隅に投げられ尚且つボール一個分の出し入れができる正確無比なコントロールを兼ね備えた完全無欠の最強ピッチャーですよ。どうもたったの6球で全ての打者を三振に仕留めたそうです。凄いですねホントに、同じ一年とは思えないな」

口から湯水のように誤情報を口走る相方を、さっさと立ち去ろうと決め込んでいた虹稀はあり得ない言動で受け答えをする横の人物を糾弾する勢いで振り向く。こいつ何

言ってるんだ！と物語る表情で訴えるが何食わぬ涼しい顔で立っている。

「……ねえ、雅さん。俺すつごい馬鹿にされていると思うんだけど気のせい？」

「気のせいだ、そもそも夏鬪うかもしれない相手に簡単に情報教えるかよ」

「すいません、冗談です。降谷はMAX148キロのストレートの左腕で鋭く落ちるフォークとスライダーを併せ持つお手本のようなピッチャーです。緩急が使えればもう手を付けられなくなると思いますけどね」

「雅さん、やっぱり俺ら馬鹿にされているよね!？」

「すまん、うちのヤツが。急いでいるところ申し訳ない」

「いえいえ、とんでもない。おい、瑠偉！さっさと行くよ!」

「へいへい、先行つといてよ。すぐ来るから」

「ほつとけるわけじゃないじゃん！まじでこれ以上は」

「わーつてるって………さっきのは本当に冗談です、それと降谷は今日は投げません。さて、稲城実業のエース・成宮鳴さん。キャッチャーの原田雅功さん。一つだけ、覚えておいてください。確かに降谷もすごいですけど、もつとすごい奴がいるってこと、頭に入れておいた方がいいですよ」

「ふーん………そんなにスゴイの？」

「そりや凄いですよ、成宮さんなんて目じゃなくくらいに」

「ん？俺よりすごいって？」

「はい、おそらく対戦したら成宮さんは十中八九打ち込まれるくらいに」

「……まさかオタクらのキャプテンのこと？まあ確かにすごいけど」

「いえいえ、結城さんなんて「雨宮、挑発もほどほどにしておけよ」……ちつ」

「おい、今舌打ちしただろ」

「気のじゃないっすか？」

「あ、一也！ねえ、この1年の教育どうなってんの！超生意気なんだけど！」

「悪い、悪い。こいつ常日頃から生意気でさ、俺も手を焼いてんだよ、許してやってくれ。

そういうや、お前今日投げんの？」

「ささ、早く行こう。瑠偉は次の試合出るんだから昼食取らないと」

「うくん、それもそうだな」

御幸と視線で「さつさとこの野郎をどこかへ連れて行け」「ナイスタイミングです、さすがつすね」と言葉ではない会話を一瞬で終わらすと強引な形で瑠偉をその場から引きはがすことに成功した。

この男が何か企んでいる時は必ずと言っていいほど碌なことが起きない、だが意味がないことはしないやつだと虹稀は知っている。興味がなければ（嘘でも）あんなに饒舌に話さない。

「あの人、誰？瑠偉が煽ってた、白髪の人」

暫くしてから先ほどの試合出場していなかった2人を振り返り、虹稀は瑠偉に尋ねた。あまりにも無知すぎる虹稀ではあるが、何か感じ取ったものがあつたのだろうか。

自分と同じくらいの小柄な選手をやたらと気にかけているが不器用にその様子を隠している。

「稲実のエースの成宮鳴。俺が知る限り現時点では高校最強投手だ」

今度は目の端に時折捉えるのではなく、しっかりと振り返って御幸と話している稲城実業高校のエース、成宮鳴の姿を確かに捉えた。

「あれが……」

そう言われて虹稀一度立ち止まる。

「あの人は左投手だしお前とは違うけど、投手のお手本みたいなピッチングをする。まあ参考にはなるだろうよ」

最強投手、それは瑠偉が甲子園優勝するためには絶対に欠かせないと言っていた絶対的条件だった。絶対的に必要な選手を知りながら、その高校にはいない。非情なまでに合理的である男がそのような選手を知っていながら、青道高校にいる理由が虹稀にはわからなかった。

虹稀は軟式野球出身の、実績も大して残していない自分を評価してもらい、特待生と

して破格の待遇された恩義があるが実績も実力も兼ね備えている溜偉とっては古豪と言われている青道高校にくる理由はなかった筈なのだ。

その筈なのに、この男は今日の前に、同じユニフォームに袖を通していている。付き合ひこそ浅く、表面的な部分でしか、いや表面的なこともわかっていないのかもしれないが、それでも雨宮溜偉という個人の野望を知っている数少ないうちの一人として、虹稀はずっと理解できなかった。

希望通りの選手が比較的近くにいるのにわざわざ青道高校を選んだ理由を聞いてはいないもののずっと引つかかっていた。

「あくまで現時点、俺はお前が成宮鳴に勝てると思つたから青道に来たんだぜ」

後ろは振り返らない、数メートル後ろにいるのはもちろん分かっているから聞こえないように語りかける。期待していたことは程遠い出来栄えではあるが、この停滞がいつかきつと大きな飛躍になると信じている。

だから言わない、そこに言葉は必要ない。

教科書通りなんて枠には嵌まるわけがない規格外の投手だと信じているから。

3

青道高校はかつてないほどいい雰囲気にもまれていた。新入生を加え更に厚みを増した打線、急成長を見せる投手陣、特に最上級生の丹波に芽生えたエースとしての風格。

士気は上々、雰囲気も耐えなく声が続いておりベンチ内も明るい。片岡鉄心としては想定以上の最高な状況で合宿は終わりを迎えようとしていた。

ここ数年遠ざかっていた甲子園を射程圏内に捉えている。もしかしたら甲子園に行けるかも、ではなく間違いなく行けると選手全員同じ考えを抱いているのだから。

その点で言えば青道高校のこの二日間は大成功と評価してもいいだろう。しかし一方では青道高校とは真逆の収穫をしたチームもある。

—なんでだよ……あいつらと俺では何が違うんだよ。

8回裏1アウト。

「珍しく大口叩きあがって、これで打ち込まれたら責任取ってもらうからな。その頭てっぺんまで剃り上げてスキンにしてやる!」

「あはは、それいい。のった」

「のった」

「ヒヤハハ!ロン毛になってもらってもいいすけど?」

「こら!お前たち!」

「1点取られたらスキンヘッド、2点目取られたら眉毛も剃るといふ事で決定だな。メモしておこう……3点目は長髪、か」

公式戦であれば既にワールドで決着が付いている点数に、修北のエース投手は負の感

情の連鎖に巻き込まれていた。どこで差がついたのか、何で差がついたのか。自問自答に答えは出ない。

自信があつた。東地区の新興勢力と呼ばれるまでに強く成長したのにもかかわらず、今まで培われてきた自信は木端微塵に打ち砕かれた。

まるで手も足も出ない、中学生が高校生と試合をしているかのような、今までの努力は全て無駄だったのではないかと、この錯覚に襲われる。

勝てるビジョンは最早ない。新興勢力だ、甲子園を狙えるかもしれない、そんな風に騒いでいたのは自分たちの周りだけで、井の中の蛙だったと痛いくらいに思い知らされた。

打ち砕かれた自信とともに失われるチームの活気、それに対して盛り上がる相手ベンチ。自分たちも頑張ってきたはずだ、なのに……どうしてここまで。

憤り、虚無感、怒り、悪い感情だけが混ざって胸の内を埋め尽くす。

8回の裏、1アウト2塁。一人は打ち取ったものの1年生だという打者に対してはボールはしっかりと捕えられ外野を破る2ベース。

「次のバッター早く打席へ！」

打席に立ったのは青道の投手丹波。渦巻いていた感情が暴れはじめた。

別に当てようとしたわけでもない、ただただ悔しさを滲ませ八つ当たりするように無

造作にボールを放ろうとする。

事実、キャッチャーのミットなど見もせず、鬱憤を晴らすためだけにど真ん中に渾身のボールを投げ込もうとしただけだった。

刹那、修北の投手は自分の時間が止まったのではないかという錯覚に襲われる硬直を味わう。

投手としての勘が警報を鳴らす、人としての感情が心臓を凍てつかせる。

指先から離れたボールは、制御を失いある場所を目掛けて真つすぐ進んでいく。感情は急速に温度を失う。

打ち気満々な丹波は小さなテイクバックの後思い切り踏み込んだ、ボールが向かう先はストライクゾーンではなく自分の顔面だと、脳が認識した瞬間には取り返しがつくことは無く……ゴツ、と鈍い音がグラウンドに響いた。

夢の舞台へ

1

「大丈夫か先輩方？昨日からずつと暗いぞ？」

「丹波さんの怪我は確かに痛手だけど何とか本選途中には間に合いそうなんですよ??そんなにシヨックがデカいのかな？頭に当たったのは確かにシヨックな出来事だったけど……勝てば済む話だよね」

「間違いねえ」

チームプレーなんてものを碌にしていなかった二人は著しくチームメイトの離脱による士気への影響への知識が欠如していた、だからというか完全に丹波が復帰できないのではなく暫くはチームに合流できないだけなら何が問題あるんだ？と異常なくらいに楽観的だった。

もちろんある程度空気は読めるので小さな声での会話だったが、沈んでる3年生が不思議で仕方がないという風にトーナメント表を見ている。

片岡鉄心が口を閉じたまま立っていると、やがて自然に雑談の音は消える。部員全員が何かを察し、閑静になったところで片岡鉄心は口を開いた。

「お前らも聞いていると思うが、丹波の顎の骨にひびが入っている。幸い骨折には至らず、脳の方にも影響がないようだが、予選には間に合わないかもしれない。正直俺自身まだ戸惑っている部分もある、ようやくエースとして目覚めつつあっただけあって本人も悔しくて仕方がないだろう……これはチームの監督としての意見であり、決して一人の感情で決めたわけではない……エースナンバーは丹波に渡す！あいつが戻ってくるまでチーム一丸となつて戦い抜くぞ！」

士気が落ちたチームを鼓舞する目的も含め、強い言葉で部員に意志を伝える。3年目にしてようやくエースとしての自覚が芽生えた丹波の代わりに他の選手にエースナンバーを渡すのは主力メンバーへの精神面に大きく影響してしまう。

それならば、復帰の望みがある丹波にエースナンバーを与え、これ以上チームに影響がないようにするのが得策だと考えた。もちろん、前置きで個人的な感情はないとは言ったが、あくまで方便に過ぎない。

そうやって意識しないようにしてはいるものの、片岡鉄心の丹波への期待と信頼は高かったのだ。

「その上で川上はもちろんだが、降谷・山元、そして沢村！この一年生たちの投手としての出番が回ってくる機会が多くなるだろう、その時は3年が中心となりバックアップをしてほしい……頼んだぞ」

「「はー」」

そしてもちろん、丹波がいけないという事で先発を任せられる投手が一人減ってしまったという事になる。丹波は自ら崩れることが多いがそれは大体7回あたり、投球数が100球を越えたあたりから。それを踏まえると6回までは充実に試合が作れる投手であると言える。

2年の川上は片岡鉄心の中では既にリリースとしての役目を頼もうと決めてはいるが、そうなると先発を任せられるのは類まれな直球を持つものの制球難がある降谷か、制球にはある程度定評があるが未だ実力が計れない山元虹稀の2人しかない。

直球一本、気持ちで投げる沢村を投入するには半分博打のようなものだが、チームを鼓舞、雰囲気を変えられる投手と云うのは短期決戦において非常に大事になってくる。

そう言った意味で、序盤こそは良いが強豪校だけが残り試合感覚も短くなる決勝戦間近ではすべてお投手が鍵となる。

―丹波君が万全の状態に戻ってこれるか分からない、でも、こういうアクシデントが逆に選手の心を一つにすることもある。それが出来れば……

高島礼はそう望むが、現状では心は一つになつてはいないとみていた。動揺の方が大きく見え、最上級生はあからさまに気落ちしている。実際この場の雰囲気がそうだ、3年生の絆は思いの外つながりが強かったのは良くも悪くも誤算だった。

「御幸、わかつていると思うがもう時間が無いぞ。沢村と降谷は守備と制球力・山元は制球力とフォーム調整、無理なオーバーワークをさせない事に絞ってこの3人を鍛え上げるしかない」

3年で一番冷静だったのはクリス、丹波のを復帰させチームの戦力として合流させるにはそれまで負けることなど許されない。

「ですね」

必要になるのは負けない投手陣、既に5人（野手兼も含めて）もの投手がベンチ入りしている時点で継投して勝つというチームの方針は固まっていた。

「夏までに、間に合わせるぞ」

力強くクリスは宣言する、時間が足りないのはどのチームも同じ、その中でどれだけ最高の状態で夏を迎えるためにクリスは全身全霊を尽くし送り出そうと決意し、強く言い放った。

「とういかですね、俺こんなことしていいんですか？」

片岡鉄心の話があった次の日、虹稀は温水プールに浸かっていた。

「お前はまず疲れを取ることが先だ、このくらいが丁度いい」

場所はクリスの父の知り合いが経営しているプール付きのジム、クリスが虹稀の状態がどの程度か詳しく見てみたものの予想以上に全身が固まっていたため青道高校かかりつけの病院の医師と話し合いプールで体を解すという結論に至ったのだ。

「そういう事じゃなくて、なんか俺だけ特別にこんな事させて貰っていいんですかね?」

とはいえ自分だけと言うのも少しだけ億劫であった、特別扱いされるのは嫌いではないがこうもあからさまだと申し訳ないという感情が少しだけ顔を出してしまうからでもある。

「これは俺の独断によるものだし監督やコーチにも了承は取ってある、2〜3日はこのメニューで疲れをとる」

「え、2〜3日っすか!？」

「そうだ、また無理な走り込みをさせるわけにはいかないからな」

クリスはどこか遠い目をして笑っていた。目を離せばすぐいなくなり、阿保みたいに走り込んでいる後輩を止めるのは大変だったなあとしみじみと思い返していた。

「いやいや、もうしばらくはしませんよ。これからは持久力よりも瞬発力を重視してやっついていくんで」

そんなクリスのこともいざ知らず、朗らかに笑いながらぶかぶかと水面に浮き虹稀は

器用に話を聞いていた。クリスは肩まで浸かれと注意を促す、ほんの一言で大人しく応じる様子を見ると余計に頭が痛くなってきたので昔のことを思い出すのは止めた。

極端的過ぎる練習をしてきた虹稀の意見を聞くと苦笑を浮かべながら問う。

「となると、今度はまたダツシユをやり続けるんだろう？」

「……ははは、そんなわけないじゃないですかあ」

この怪しい間をどうとつていいのかわからないが、気にすると負けだと思い一旦流す。

「だが、その考えは俺も賛成だ。闇雲に走るだけではなく下半身の瞬発力強化は俺たちも考えていたからな」

「ほー、じゃあ「だが、無理は絶対にさせない。こんなところでお前に変わってもらっては困るからな」

「了解です、俺も折角メンバーに選ばれたんで怪我するわけにはいかないっすからね。その他諸々は試合中に身に付けていくしかなさそうですけど」

大分心にゆとりが出来た虹稀はこの時期に無理をする気なんて毛頭もない、一度失った光が見えてきたのだから躍起になって探しに行く必要が無くなったためだ。

「そうだ、時間がないのは前も言った通りだからな……まさかお前が、こんなに手のかかる奴とは思ってもいなかったよ。最初は一番手のかからないいい子だと思ったが、ふ

たを開けてみればとんだじゃじゃ馬だった」

「何ですか急に？まああの時は結構焦っていてどうにかしないといけない気持ちで周りが見えてなかったのは確かですけどね。その顔見ると色々と察します、お疲れ様です」
「だが、結果的にお前はようやく力を身に付けた。その点に関していえばお前はよくやったよ」

クリスは去年の11月のことを思い出した。初めて山元虹稀にあった日、未来のエース（仮）に小言を言うつもりで中学生に投げかけた質問に、斜め上の解答をされたのを覚えている。

稲妻が走る、とまではいかないが衝撃的な出来事だったのは今でも鮮明に脳裏に浮かぶ。

「そうですね？正直実感は全くないですよ。ストレート、とは言っても癖のあるナチヨラルムービングですけど、まっすぐ一本の沢村に結果は及んでませんし、降谷のような圧倒的なものも持っていません。川上さんのように積み上げた実績もないし、丹波さんのように行動だけで先輩たちの士気を挙げることも出来ませんから」

「お前は、自分に厳しいな」

飽くなき向上心、野球そのものが楽しくて仕方ないが誰よりも負けず嫌い、そんなことしかまだわからないけれども。

「何笑ってるんですか、結構これでも悩んでいるんですよ」

「いや、すまない。器だけならエース級かもしれないなと思ってな。やはり俺の目に狂いはなかったようだ」

「何ですかそれ」

こう見るとまだまだ中学を卒業したばかりなんだと実感させられる、十分に体が出来ていないまだ細い背中に全てが乗ると思うと少しばかり心許ないが……

「少なくとも俺は、お前の力を認めているからな」

「いったいさつきから何なんですか」

口ではとぼけているがわかりやすく喜ぶ姿はやはりマウンドとは別人だ、と改めてクリスは思った。

2

合宿に参加できたメンバーは丁度20人、ベンチ入りメンバーは確定しているとみてもいいが、いよいよ背番号を手渡されるとなるとチームの主軸以外のメンバーには緊張感が走っていた。

特に雨宮瑠偉、降谷暁、山元虹稀が（後ろ2人は兼業だが）参入し競争の激化した外野陣は心中穏やかではない。

「今から背番号を渡す、呼ばれたものから取りに来い。まずは背番号1……丹波光一郎」
戦列を離れている自分が……？そんな思いもあったが、片岡鉄心の表情には何の揺らぎも見えない、チームメイトも驚いた様子はなく、困惑しているのは丹波一人だけだった。

「どうした？早く取りに来い」

「は……はい……」

「焦らずじっくり治せよ……」

「つかテメエ何で頭剃り上げてんだよ」

「いや……最後まで投げれなかったからな」

「まじめか!!」

「ヒヤハハ！似合ってますよ丹波さん」

「マユゲは剃らないの？」

盛り上がりを見せる主力の面々だが当然のように切り替えも早い、片岡鉄心が目で制すまでもなく一瞬で静かになる。もともと自分の背番号は不動のものだという自信と自負もあるからだろうか。

「……続けるぞ。背番号2、御幸一也」

「はいー」

「背番号3、結城哲也」

「つつしんで！」

「背番号4、小湊亮介」

「はい」

「背番号5、増子透」

「ウガ！」

「背番号6、倉持洋一」

「あざす」

「背番号7、雨宮瑠偉」

小さなざわめきが起こった。本来ならばそこは3年の坂井のポジション、だが今大会その背番号を背負うのは入ってきたばかりの1年生。だがしかし、背番号を奪われた坂井も、チームの面々も納得するしかなかった。

生意気、凶々しい、協調性がない、だが結果を残していてチームと監督の信頼を實力ひとつで挽ぎ取った瑠偉を認めざるを得なかった。

「ありがとうございます！期待していてください」

「元気がいいのは良いが、追試は受けるよ。それと、今後こういう事は無いように」

「あはは、大丈夫ですって」

「笑い事じゃないぞ」

「……はい」

野球しかしてなかったせいも勉強の方は悲惨の一言だった、チームを代表し先輩を退けて一桁を背負っているのだからやれることはしっかりとやれと釘を刺す。

もしも背番号登録の前にテストの結果が分かっていたならこの背番号は貰えてないだろう。

金丸や東条、小湊春市や沢村は必死に声を出さないように笑いをこらえている。まるで借りてきた猫みたいに本気で落ち込む瑠偉は場が場でなければ爆笑ものだった。

ただ、虹稀と吉川春乃だけは2人であれだけ教えたのになぜ？と瑠偉が赤点を取った理由を後で問い詰めようと決意していた。

一瞬で天国から地獄へ気が落ちた瑠偉を尻目に片岡鉄心は大きく咳ばらいをして仕切りなおす。

「背番号8、伊佐敷純」

「しやらああ！」

「背番号9、白洲健二郎」

「頑張ります！」

「背番号10、川上憲史」

「はい！」

「背番号11、降谷暁」

「……！」

「追試は受けるよ」

まさか自分がこんなに早く呼ばれるとは思っていなかった降谷は驚きながら背番号を受け取った、自分ではなく他の3年生か、もしくは虹稀が取るとばかり思っていたこともあり、嬉しそうにホクホクしているが、瑠偉と同様に赤点を回避できなかったためしょんぼりしていた。

「背番号12、宮内啓介」

「ンフー！」

「背番号13、坂井一郎」

「は、はい……」

瑠偉に背番号を取られてしまった坂井は悔しさを噛みしめてその番号を受け取った。

「背番号14、門田将明」

「はい！」

「背番号15、楠木文哉」

「はい！」

「背番号16、遠藤直樹」

「はい！」

「背番号17、山崎邦夫」

「うすっ」

「背番号18、山元虹稀」

「ありがとうございます」

背番号18、それは甲子園のベンチ入りメンバーの最後の一人がつけられる番号でもありプロ野球ではエースがつける番号だ。片岡鉄心の意図は虹稀にはわからない、だが虹稀はギリギリ戦力になる程度の評価と受け取った。

虹稀自身も妥当な判断だと思うし、その評価にいちやもんをつける気は毛頭もない。だが初めて大きな番号を受け取った虹稀は逆にメラメラと負けん気を燃え上がらせる。

「背番号19、小湊春市」

「はい」

「そして最後に背番号20、沢「はい!!」」

「……早いな」

「ありがとうございます!!」

合宿には参加できたが、自分の現在地点と実力を思い知った沢村は本当にもらえるの

だろうか？と半信半疑になっていたが背番号20を大事そうに抱え込んで列に戻った。各々が自分の背番号を見つめ気持ちに整理をつける間もなく片岡鉄心は言葉を繋げた。

「記録員はクリス……お前に頼む」

「はい……」

「それからマネージャー、お前たちも本当によく手伝ってくれた。お前たちもチームの一員としてスタンドから選手と一緒に応援してくれるな」

そう言って渡したのは、選手と同じユニフォーム。本来ならマネージャーは買う必要のない代物でマネージャー全員が持っていなかった。

そのことを把握していた片岡鉄心の粋な計らいは、藤原貴子の心を動かすには十分だったようだ。

「あく貴子先輩泣いてる！」

「鳴いてない」

「わかります、私、わかりますよ」

「うるさい！」

マネージャーが戯れる様を微笑ましい目線で部員が見ていた。3年の藤原貴子が可愛らしく涙を流しながら怒っているところに自然と視線が集まる、時間が経ちようやく

落ち着いたときには今度は耳を真つ赤にさせて顔を覆い隠していた。

逆にそれが部員たちの彼女に対する評価を上げたのだが本人は知る余地もない。

「みんなもわかつていると思うが、高校野球に次ぎはない……日々の努力も、流してきた汗も涙も、全てはこの夏のために」

「よし！いつものやついけ!!」

「はいー」

一年の5人はどうやるのか詳しくはわからず必死に周りを見て合わせる、たった20人だけが組む円陣で右手を他の上級生たちと同じ場所へ置くのを確認すると、結城哲也はそうだと言わんばかりにこくりと頷いた。

「丹波は大声出すなよ」

主将の結城哲也は、丹波に注意を促すと右手の親指を立て胸をトントンと叩く。そして、決して大きくはないが、厳格な声で切り出した。

「俺たちは誰だ——……」

「「王者 青道!!」」

「誰よりも汗を流したのは」

「「青道!!」」

「誰よりも涙を流したのは」

「『青道!!』」

「戦う準備は出来ているか!？」

「『おお』」

「我が校の誇りを胸に狙うは全国制覇のみ!いくぞお!!」

「『おおおおお』」

東西合わせて260校、僅か3週間足らずの間に選ばれる代表校はたったの2校のみ。

名門復活を懸けた青道高校の夏、3年生にとっては後がない最後の夏、雨宮瑠偉と山元虹稀の最初の夏が始まろうとしていた。

夏の大会編 梅檀の双葉

1

青道高校の初戦は一回戦を既に勝ち上がった米門西高等学校に決定した。

エースナンバーを背負うのは左のオーバースロー、菊永正明。急速は120km後半、変化球はカーブとスライダーの2つ。コントロールはさほど良くない、青道高校が攻略するのには何の問題もない普通の投手だ。

チームとしてはバント多用で守りが固く、ワンチャンスをものにする守り抜く野球とというのがクリスの分析結果だ。

「うむ、ご苦労だった。向こうは先に1勝を挙げ勢いがついている筈だ、油断だけは絶対に出来ん。どんな相手であろうと全力で挑め、そうすれば必ずと勝利はついてくる!!」
負けたら終わりのトーナメントで油断だけは絶対にしてはいけない、特に初戦は万が一という事もありえなくはないので相手が格下であろうと全力で臨まなければ足を掬われる可能性があるからだ。

「それから、初戦の先発だが……1年、山元。お前で行く」

片岡鉄心は制球力に長け、格下相手には絶対的に強い虹稀を先発に選んだ。

練習を見ていると川上は丹波がいないことでプレッシャーを感じエラーが多くなる気の弱さが垣間見える川上よりも、落ち着いてはいるがどこか抜けていて更には調子がいい日は良いが悪ければ四球を連発する安定感に欠ける降谷よりも、虹稀が初戦の先発にふさわしいと判断したのだ。

今まで結構な試合で炎上してきたものの虹稀が炎上するのは決まって強豪校、期待の表れとして投げさせていたこともあり燃え上がった回数は数知れないが、2〜3試合ほど投げている格下相手には未だ20イニング無失点という結果を残していた。

そして大阪桐生戦での成長、現在時折投げるフリーバッティングでの球筋とその球を打った3年生の反応を基に決めたこと、だから主力メンバーは何も言わず納得の表情で先発が虹稀であることをすんなりと受け入れる。

騒ぐのは練習のサポートよりも夏に向けての応援の準備やその他雑用の多い1・2年の選手が多かった。

「初戦の大切さは充分にわかっている、だが今年の夏を勝ち抜くためには継投せざるを得ない……川上！お前は試合中いつでも行けるように肩を作っておいてくれ」

「え……？」

「これだけ大事な役割を頼めるのはお前しかないからな。頼むぞ」

「はい。」

川上を先発から外したのは信頼していないからではなく、信頼しているからこそリーフ経験が豊富な川上をあえて後ろに回したのだ。

ずっと曇っていた川上の表情も役割が確定した為に心なしか明るくなっている。

サインの確認と試合運びのおおよその流れを話した後でミーティングは終わった。

大会で、しかも初戦で先発のマウンドを任されるといふ大役を任された虹稀は内心ウキウキで、それが顕著に外に漏れ出てベンチメンバーから少し激しい激励を受けていた。それが終わり部屋へ戻ろうとすると御幸に呼び止められる。

御幸と虹稀、そして片岡鉄心と高島礼だけが残った食堂で、何をするのかと思えば言われたことはただ一つ。

「後ろに川上もいる、胸を張って堂々と投げろ。明日はお前がエースだ」

と片岡鉄心は一言だけ檄を飛ばすと背中をポンと叩き食堂を後にする。

中学まではチームを勝たせてきた、という意識が強かった虹稀。チームを勝たせるために、何かを背負ってマウンドに立つことはほとんど経験のないことだった。

そのことは当然承知の上で、それでもチームの命運を託せる器があると判断して決めたのだから、背負ったものを力に変えることが出来る選手だと思っただけから初戦を任せようと思っただけだ。

だから、余計な心配など皆無。たった一言で充分だった。

2

『ただいまより西東京大会2回戦青道高校対米門西高校の試合を始めます』

両校のスターティングメンバーは

青道 米門西

6 倉持	7 蓮沼
4 小湊亮	5 蜂田
8 伊佐敷	9 嘉味田
3 結城	6 福田
5 増子	8 宮嶋
2 御幸	4 柴田
7 雨宮	1 南平
9 白洲	3 上園
1 山元	2 林田

1回の表青道高校の攻撃から始まる試合、マウンドで投球練習をしているのはエース

の菊永ではなく、背番号10の南島守。意表を突いたアンダースローの投手が先発だった。

「1年の時に投手として試合に出ていましたが、それ以降投手としての公式戦出場はありませんね……。まさかとは思いますが、この夏のためだけにアンダースローを習得してきたとしか……」

クリスの予想は的中している、青道高校に奇襲を、データに全くない選手を送り込むことで情報戦では不利な戦いをさせようという米門西の戦略だ。

甲高く全ての声援をかき消すようなサイレンが鳴り響き、プレイボールという宣告と共に試合が始まった。

「フハハハハハ！見たかあの顔！青道の奴らめデータにないこの状況に目を白くさせておるわ!!」

米門西の監督、千葉は悪役じみた笑いほとんど野次の大声をベンチから出している。

横にいるマネージャーや部員はドン引きだが、実際に青道側が困惑しているのも事実。

——千葉流勝負の鉄則その1……：……という形であれまは先手を取る。初戦で堅くなっている相手チームに少しでも動揺が生まれればしめたモンよ

リードオフマンとして、積極的に打ちに行かず、データにない投手の球を少しでもみんなに教えなければならぬという役目を担うと決意した倉持はあつという間に２ストライクに追い込まれる。

格下相手とはいえど、初っ端の一番バッターから三振と言うのは出だしが悪い。避けようとすればするほど気付かないうちに力が入ってしまい本来のパフォーマンスからかけ離れてしまう。

そして強豪校にいるがゆえに遅い球に対する免疫が薄いこともあつてタイミングもあつてなかった。

ワンバウンドする変化球について手が出てしまい先頭打者の倉持は三振で抑えられた。

「亮さんすいません!!」

「あの変化球を見ただけでも十分だよ」

あつさりーアウトを取られるのを見送ると虹稀はもしかするとこの回の攻撃早く終わってしまうかもしれないと思ひ裏の守りに備えて準備を始めることにした。

「二世さん、一応キャッチボールやるときましよう」

「おう、いいぞ」

―体が温まつて40球は思い切り投げていたな。最初からフルスロットルにギアを上げて投げるつもりか? まだ表情に出てないから分かんねーけど、多分大丈夫だろう。

出来れば先取点取っておきたいんだけど

続く小湊亮介は甘く入ったボールを十分に引き付けてはじき返すが、惜しくもサードのグラブに飛び込んでアウトがもう一つ積み重なった。

「右打席からだとのアウトコースの球相当遠くに感じると思うますよ、あと想像以上に遅いっす」

「うむ……」

倉持はなるべく自分が得た情報をメンバーに伝えようと数少ない特徴を拾い集めてアウトプットしている。

続く3番の伊佐敷はいつもながら吠えて強振をする、大きな飛球がライト方向に上がり一瞬ホームランかと思われたが

「くそつたれ……徹底してアウトコース勝負かよ

あと一つ伸びが足りずにフェンス直前で捕球され青道の攻撃が早くも終了した。

あっさり終わった1回表、攻撃力が持ち味の青道だが完全に相手の、千葉の想定通りに事を運ばせてしまう。

「相手を舐めていたわけじゃない、むしろみんなちゃんと自分の仕事をしようとした結果だ……けどやつぱり、先取点は欲しかったな

1回の表に0という文字を見つめて御幸はないものねだりをしていた。

「山元、もしくは降谷が先発でどちらかがリリース、そして川上が抑え。これが現状のベストオーダー。最悪の場合、これで山元の立ち上がりが悪かったら……最悪のスタートになるぞ」

先取点を取るか否かで勝率にも影響してくる、特に先攻で初回に先取点を取ったチームは約53%、逆に無得点だと40%まで引き下がってしまう。

これで後攻が先に先取点を獲得した場合、勝率は約65%。数字はあくまで統計的なものに過ぎないがこれで得点を取られると厳しい戦いをしなければならぬ。

「フハハハハハ、油断だよ油断。頭では分かっているけど潜在意識の中でウチをナメてやがんだよ！だがそこにこそ弱者の内が付け入るすぎがあくくする!!その証拠に見てみる!!相手の先発は1年でしかも背番号が18だ!!いくら名門とはいえ大事な初戦に1年を先発させるかよ。フハハハハハ!!」

大声で青道を煽る千葉に対抗したいのか、さらに煽りたいのか沢村も負けじとヤジを飛ばした。

「おい！お前が打たれてもいつでも俺が準備しているからな!!即 代われ！お前はえつと……」

「何もないんだね……」

「山元、ああ言われているが気にするな」

「ああ、別に気にしてないですよ。中学の時の方がもつと野次凄かったんで。それより、俺はこの試合5回で終わる予定なので、最初から本気で投げます」

「奇遇だな、俺もそう思っていたとこだ。全打者三振狙いで行くか？」

「いいっすね、それ」

虹稀はロジンが付きすぎた指に息を吹きかけ余分な粉を落とす。帽子を少しだけ緩くしてプレートを踏んだ。

気にしてはいないとは言うものの、虹稀は冷静を装っていただけで怒りは充分に持ち合わせている。

サインに頷き大きく振りかぶる。

「付け入る隙？んなもんねーよ！

気持ちのスイッチは既に入っていた。流れるような1連の洗礼された動作、力感のない体重移動。

その腕から放たれたボールは放たれた瞬間、1番で右打者の蓮沼の頭を目掛けて飛んでいった。

初球から抜け球とは思ってもよらず蓮沼はボールを避けようと全力でしゃがみ頭に向かってくるボールを躲そうと試みる。

蓮沼が目を切った次の瞬間、ボールはその様子をあざ笑うかのようにブレーキがかか

りストライクゾーンへと吸い込まれていった。

「あんたらの監督、付け入る隙があるとか言っていたけど、そんなもんウチにはねーから」

無様にしやがみ込み、ストライク宣告を受け入れられない打者に向かい、御幸は審判に聞こえない程度の声で鋭く言い放った。

頭に向かってきたはずのボールが、ストライクだった。

その事実を飲み込めないまま1番の蓮沼を3球で仕留め1アウト。

「だからその球をー」

2番、左打者の蜂田には、外角低めのストレートでファーストストライクを取り、2球目斜めに変化するカーブで2ストライク目を、最後にインコースを突き一球も振らせず見逃し三振。

「何故避けるんだー！！！！」

3番の右打者嘉味田は2球続けてインコースを責めた後

「ストライク！バッターアウト！」

右打者には一度頭に向かって見え、そこから落ちる斜めのカーブで尻もちをつかせて見逃しの三振。

三者連続3球三振、青道高校側としては最高の立ち上がりを演出した少年は何事もな

かったかのようにマウンドを降りる。

米門西のベンチは監督が大声で怒鳴りながら選手たちに守備につけと叫んでいるが、目の前の状況に呆気を取られしばらく動けなかった。

その姿は堂々と淡々と、それでいて圧倒的。

無名だった少年は、たった1度の登板で怪物になろうとしていた。

3

2回の表、最初の打者は4番結城哲也。ショートがセカンドベースの近くまで移動している極端な右シフトを敷いていることから徹底的にアウトコースで勝負する姿勢が垣間見える。

虹稀の投球により盛り上がりを見せる青道スタンドからの応援はより一層熱を増し、相手チームに大きな重圧を与えている。そして、打者の結城は後輩の力投に応えるかのように打席へ臨んだ。

まだ一回戦なので応援は野球部のみ、多少の女子生徒や男子学生はいるものの美しい管楽器の音も華やかなチアリーダーも当然いるはずなく、野太イルパン三世のテーマが球場を熱気で包んでいた。

いやな雰囲気を感じ取った捕手はほとんど敬遠のつもりで厳しい所を突き続け、ダメ

なら歩かせるつもりでいたが、投手は厳しい所で勝負すると意見の入れ違いがあつた。投手として打者から逃げるというのはあまり気持ちのいいものではない。

投手の思考は強豪校の4番とはいえランナーはいない。

それなら勝負しても大丈夫だろうという樂觀的な考えが心のどこかにあつた。際どいコースも堂々と見逃され頭に血が上つていた投手の少し甘く入つたボールを結城は一薙。

いともたやすく外野の間をゴロで抜き青道高校初のヒットを2塁打で記録した。

続く5番の増子も鋭い当たりで1・2塁間を破りライト前ヒット、その間に結城はサードに進みノーアウト1・3塁。

—狙い撃ち—

自らの応援かを口ずさみ、打席に入った御幸は初球のコースと球種を見事的中させて振りぬいた。

バッテリーはスクイズを警戒して転がつても対応できるように緩い変化球を低めに落としたが、御幸の技術に軍配が上がりファーストの頭を軽々越えて外野へと運んでいく。

その間サードランナーの結城は楽々ホームイン、ファーストランナーの増子も重い体を揺らし一気にサードまで走り切つた。

そして7番、瑠偉の出番が遂に回ってくる。公式戦初打席、打席に入りいつものルーティーンでバッターボックスを均すと慌てて思い出したように打席から外れ片岡鉄心の方を見てサインの確認をした。

サイン自体を確認するのが久々だったため若干戸惑いつつも了解しました、とヘルメットの鍔を触り再び打席に入る。

―初打席は自由に振りたかったけど、まあいいや

サインはスクイズ、しかしこの男はただ転がすだけではなく自分も生き残ろうと考えた。

―球も遅いからその分状況判断の時間は多くとれる、狙いは前進してくるサードの横に強く！

ピッチャーが足を上げた瞬間、瑠偉はバントの構えを、増子は走り出した。

当然サードもその様子を見せ前進してくる。その姿を確認すると、狙い澄ましたかのようにバットを押し込みサードの横を抜いて行った。

当然投手も前進してきているため急なプッシュバントに対応できず、結局はショートのボールを捕球し再びノーアウト1・3塁の状況へ。

打力にものを言わせてぶんぶんバットを振り回すベースボールでは無く、高いレベルで行われている野球の前に米門西は太刀打ちできない。

その後5点を追加しスコアボードの2回の表に7という数字を刻んでようやく青道高校の攻撃が終了した。

「序盤は少し硬さがありました、山元のピッチングと結城のヒットで完全に勢いに乗りましたね。相手も山元の投球に手も足も出ていないようすし、このまま順当にいけば5回でコールド。最後まで山元で行けるんじゃないですかね？」

「いや、例えば短いイニングでもこの夏は継投で行く。いつでも行けるように川上には伝えておけ。その上で……」

「おい、沢村！監督が呼んでるぞ！」

——なんだよ！人がいい気分で投げている時に！

悪態をつきながら喧嘩腰で監督の元へ向かった沢村に告げられたのは、沢村にとつても、虹稀にとつても、チームにとつても意外な言葉だった。

「次の回行くぞ！沢村！」

「え!?!」

「ちよつと、監督！」

「準備は出来ているんだろ？」

「はい！」

「ちよつと待つてください、俺はまだまだいけます！まだヒットも打たれてないし、球数もそんなに多くないです！」

「だからだ、これ以上お前の情報を無暗に他の高校に与えてやる必要はない」

「でも、いずれにしろそれは遅いか早いかの違いです。せめてあと2イニング」

「山元、これからお前の力に頼ることが多くなる。だから休めるうちに休んどけ」

球数は確かに少ない、だがそれが全て全力投球であれば話は変わってくる。

登板前にブルペンで既に40球近くを全力で投げ、試合になると無理やりギアをフルスロットルへもっていった。

合計すると80球近くの全力投球をしたのだ、その影響は興奮した現在はまだわからないが、確かに虹稀の体に負担をかけていることには間違いない。

更には緊張感が高まり疲労も割り増して負担になる試合中で投げたボール全てが勝負球、厳しいコースに全力で投げ続ける精神的肉体的疲労、さらにはまだ抜けきっていない蓄積された疲れを片岡鉄心は見抜いていた。

「……っ、わかりました」

納得はいついていない、しかしこれからのこと、この先のことを考えたときに片岡鉄心の判断は正しい。それゆえに虹稀はそれ以上何も言うことはなかった。

山元の代わりにマウンドに上がった沢村は意気消沈していた相手の心を燃え上から

せる付け入る隙として十分な機能を果たしている。

故にその空気に一瞬のまれてしまったのか先頭打者にデッドボールを与えてしまった。

—死に物狂いで点を取りに来る相手にどういうピッチングが出来るか。監督は本気で戦いながら投手を育てていくつもりなんだ。沢村、気持ちで負けるなよ

米門西の野球は勝つための野球ではなく、自分たちのやってきたことを貫く野球へとシフトしていた。

点差は絶望的、望みはないに等しい。それでもランナーを1塁に置きバントの構えを2番打者蜂田は見せた。

だが、出どころの見ずらい沢村の球に対応できず強いゴロが沢村の正面へ。

短い期間だがしっかりと鍛えられたフィールディング、目での牽制をしていたため1塁ランナーが出遅れたことによりあつという間にチャンスの芽は潰れてしまう。

青道	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	R
	0	7	5	3	2						
米門西	0	0	0	0	0						
	0										17

コールドゲームの最終回、川上がしっかりと抑え17対0の完勝で青道高校は2回戦

を突破した。

山元虹稀の公式戦2回目の登板は3回被安打0失点0奪三振6。打者9人に対し僅か27球でマウンドを降りた。

僅か3イニングで何かを決めるには早すぎる。しかし、第一印象を語るには十分だ。山元虹稀はあつという間に包囲網に囲まれた。

「ほら、あの子じゃない？」

「なんかマウンドと全然違うね、優男ってかんじ」

「でも本当にすごかったんだよ！もうネットニュースで見出しがつくくらい注目されてるんだもん！」

「もう決めた！私あの子応援する！」

「あ、ずるーい。私が先に目を付けたんだからね」

「彼女いるのかな？」

「いても関係ないし！」

「うわ、怖っ」

「てか、囲まれてない？」

毎年この時期になると青道高校の風物詩として知られる野球部バブルが勃発していた。全校生徒が応援する時期ではないにしろミーハーな女子高生たちの一部は球場に足を運び野球を観戦、もとい品定めをしていたのだ。

その中でひと際大きな印象を残した虹稀を一目見に来ようと彼の教室の前には数人の上級生たちが教室の出入り口に集結していた。

吉川春乃や他のクラスメイトは虹稀に上級生たちの毒牙にかからないように努めていたが虹稀はなんで俺の席にこんなにも群がられるのだろうか？とその回答に行きつくことは暫くなかったという。

青道V S秋川 前編

1

青道高校野球部は初戦の勢いそのままに3回戦の村田東高校相手に5回コールドで勝ちトーナメントを生き残った。青道高校ほどの強豪校ならば実力的に然程の心配もないが、一発勝負の世界である以上は万が一が起こりうる、その可能性が無くなつたものの勝ち上がったら勝ち上がったで別の問題も発生する。

実力差も縮まつてある程度選手の情報が知れ渡る4回戦、ここから長い正念場の始まりだと選手も、監督も口に出さないながら思っていることだった。

5回コールドで2連勝。選手たちはほとんど疲れていない印象を周りには与えているが、実際には不穏な要因がいくつも転がっていた。

まず、エース丹波の状態が良くはないこと。けがから復帰したは良いものの2週間近くの離脱は顕著に投球に影響を及ぼしている。御幸は立ったままボールを受けているが持ち前のキャッチング技術で音を鳴らし、ポジティブな声を投げかけているが、その

状態の悪さをひしひしと感じ取っていた。

気持ちは充分に入っていることは分かっている、しかし、合宿最終日の時と比べると全てにおいて物足りなさを感じざるを得なかった。

エース丹波の復帰は市大三高と当たると予想されている準々決勝。選手の前で口約束したからにはその時には登板機会を与えなければならぬ、だが、今のままでは試合をひっくり返されかねないという印象を受ける。

丹波にはとにかく時間がない、そしてこのままエース不在の状況で勝ち進まないといけないというのが現状。

先発の役割を担う2人の1年生投手、降谷暁と山元虹稀にも不安な要素は見つかっていた。

まず、降谷だが体力がない。コントロールが悪い、その上で全球全力投球。

打たせて取る投手ではなく、三振の山を築く投手だからこそ直面する球数の問題。そして初めて経験する東京の夏。これまで住んでいた北海道とは機構がまるで違う東京の暑さに体がついていかずフリーバッティングや守備練習、ランニングでも日差しに体力を奪われ続けている状況だ。

しかし、マウンドに上がるとスイッチがはいるのかボールには力がある。御幸やクリスからしても判断の難しい状態だった。

150 km/hの剛速球でガンガン攻められる武器を持つ以上投げさせないわけにはいかない、強豪校が相手とは言えど調子が良ければ2・3巡目でもまともに捉えるのが難しい速さのボールを投げ込めるのだから戦力として見ないわけにはいかない。

だから、細心の注意を払い試合に送り出す必要がある。日が暮れ、涼しくなった夕方から夜にかけて調整をしているが本番のマウンドはもつと暑い。このどうしようもない問題と降谷は向き合っていかなければならなかった。

そして山元虹稀、青道高校にとつての初戦では3イニングスしか投げなかったが完璧な投球を見せた、しかしそれは格下相手に対してであつて降谷でも（調子が良く、ストライクゾーンにキツチリと投げられたら）球数こそ違えど似たような結果を出していただろう。

問題なのは体が出来ていない事。大会が始まる前、整骨院で身体のメンテナンス兼怪我の箇所がないか診られている時には怪我こそなかったが、言及されたのはまだ体が成長しきっていない状態での体の酷使、特に肩と肘について。

短期間のうちに下半身を鍛え、その結果球速は平均で2〜3キロ上がり、MAXは5〜6キロほど伸びた。だがそれを上回る球の質の向上もあつてのことか、新しいフォームに体が追いついていないのか、さほど球数を投げてはいないのに黄色信号を出されたのだ。

身長は入学前は約173cmであったが高校に入って3か月ほどで誤差をとつても2cmほど伸びていた、つまりまだ成長の真つただ中。

その状態で消耗品である肩と肘を酷使してしまうことの危うさは片岡鉄心も十分に承知している。確かに大事な戦力で間違いはないが、将来を潰すのは指導者としては最もやってはいけないことだと考えている。

だが、専門家でもなんでもない片岡鉄心にとつてはどのように判別していいのか、それはもう自己判断とクリス、御幸の意見も聞きつつやっていくしかない。

そして、未だわからない実力。強豪校相手にどれだけ通用するのかというデータがあまりにも少ない、最速140キロ近く、平均的に130中盤を投げる虹稀の主な武器は制球と緩急、降谷と比べると球速や球の威力は断然劣ってしまう。

この2人に加え、抑えの川上、リリーフの沢村を起用するとなると調子次第で試合を大荒れにしてしまう降谷を先発で行くか、ある程度試合が作れるだろうという希望的観測の混じる虹稀で行くのか。

降谷を先発にした場合、おおよそ5回までと考えるとリリーフには虹稀、川上もしくは沢村が投げることになるが打者側としては降谷に比べ球速が20キロ近くも落ちる選手が登板すると気持ち的には楽な部分も出てくるだろう。

もちろん球速だけが全てではないため一概には言えないが。

そして虹稀が先発した場合、どこまで引つ張れるのかがまだ未知数であった。

体力はあるが、体が出来ていない以上何が起こるかわからない。それに虹稀から降谷の順でつなぐと試合のリズムが大幅に変わってしまう。

それがどういふ影響を及ぼすのかいまだに計り知れない。

だから片岡鉄心は4回戦の明川との試合、どちらを先発に持つていくのかで頭を悩ましていた。

情報は既に入ってきており、降谷対策のために目を慣らしているのは知っている。

その上で、次の試合どうするのか……

目標は甲子園、目先の勝ちも重要で足元を見ないと掬われる可能性もあるが決勝戦まで勝ち抜かなければ意味はない。

だから……

「先発は降谷、引つ張れるところまで引つ張る。山元、川上そして沢村、いつ出番が来てもいいように準備しておけ」

「わかりました」

「はい！」

「イエス！ ボス!!」

下した決断は結果でしかわからない。

甲子園まであと4つ。本格的に何が起こるか分からない試合が暑さと共に始まろうとしていた。

2

「雨宮、次の回から行くぞ。キャッチボールをして準備をしておけ」

「了解です……………つたく、やつちまつたなあ」

それは対明川戦の初回のことだった。青道高校の先発は降谷、先攻の明川が制球の安定しない降谷からフォアボールを選び塁を2つ埋めた後、5番でエースの楊舜臣がレフト前にハーフライナーを放った。

普通に守備をするのならレフトは突っ込まず、安全に体で止めるか少し待って1点覚悟で2点目を防ぐのが正常な判断だ。

しかしこの試合レフトで先発をしていたのは坂井、背番号を1年の雨宮瑠偉に奪われ、更には瑠偉が勢いに乗って結果を残している中、与えられたチャンスをどうにかものにしレギュラーに返り咲こうという意気込みで試合に臨んでいた。

その気負いから無茶なギャンブルに彼は手を出してしまった。確かに成功すれば間違いないビックプレーとなり、試合の流れをグッと引き寄せていただろう。だがまだ初回、それに攻撃力が持ち味の青道高校の一員ならば自らの高校の攻撃力を信じ博打に出る必要などなかった。

その賭けに出てしまった結果、初回2点を献上してしまった。

片岡鉄心は挽回のチャンスを与え坂井を打席に立たせたが自分のミスを取り返そうと気負いに気負った結果、いい当たりは出たもののヒットにはつながらない。

しかし明川の投手、楊舜臣は青道高校も想像を絶する好投手で攻略には時間がかかりそう。それならば火力のあり、勢いに乗りに乗っている瑠偉を投入すべきと考えた。

「仕方ない、まだ点差はそこまでついていないし。けど流れが悪いのは不味いかも」

「降谷は御幸さんがいろいろ工夫して持ちこたえてるんだが、あの眼鏡かなりのやり手だな。まだ先輩たちが点を取れてないってことは。それに同じような状況からアウトにされたんだから流れは死んでいるよな」

「……3回も得点は入れられず、か。気温も上がってきたし降谷の球数も増えた。ちよつと本気で調整始めた方がいいかも」

「違いねえ、俺も呼びがかかったし行くとするわ」

3回の裏、早くも青道ベンチは動く。

『選手の交代をお知らせします。8番の坂井君に代わり雨宮君が入ります。8番レフト雨宮君・8番レフト雨宮君』

外野手の交代は置いといて、ここまでは楊舜臣の思惑通りだ、彼に言わせれば降谷はもう終わったも同然。4回に入ったばかりだというのに球数は100に迫ろうとし、そ

れだけではなくバントの構えをすることで体力も削る。

徹底的に降谷を潰す作戦は型にはまり、後は時間を待つだけになっていた。

—継投が早くなればなるほど、試合はうちのペースで進んでいるという事。そしてまだ一度も登板していない、ブルペンにも入っていないエース、同じく1年の技巧派右腕……向こうのベンチが抱える不安要素を引きずりだすしか活路はない

客観的に戦力を見たときに青道高校を10とするならば明川高校は楊舜臣という投手を見積もつてもいいところ4くらいだろう、楊舜臣は今のところいいピッチングをしているがそれがいつ崩れるかは本人もわからない。

そうなる前に完全に流れを断ち切るしか勝つための方法はなかった。

「この回、一人でもランナーが出れば降谷は代える。おそらく市大の選手もスタンドで見ているだろう、これ以上弱点を晒すわけにはいかない」

対して青道ベンチの判断は早かった。

「そ、それならば次は川上がですよね？ まだ序盤、長いイニングを投げることを考える
と……」

太田部長はあたふたとし、不安な表情で満ちていたが片岡鉄心は違った。その表情は険しいが決して焦りはない。

誰よりも汗を流してきた選手への信頼がなせるものだ。

「クリス、この場面任せられる投手は誰だ？」

「夏の大会で勢いに乗っているから、という理由では些か不安はありますが、この場面ではまだ1年の山元が出てくる方が嫌なはずですよ。もう川上しかいないという状況と、まだ川上がいるという状況では意味が違いますから」

その答えに片岡鉄心は不敵に笑う、あくまで心の中でだが。

丹波が不在の今、着実に階段を上がる者と出だしこそ遅かったが段飛ばしで成長していく者が頭角を現すのは負けたら終わりのトーナメントでは非常に大事になってくる要素だ。

だからこそ、言い方こそ悪いが、3年を切つて未知数の1年を大量投入した買いがあるというもの。

投手にも2人、階段を着実に上つていく沢村。

出だしこそ遅れたものの段飛ばしで駆けあがる山元。

こういう試合ではこの2人の投手が勝つためには必要な条件だと片岡鉄心は判断する。

「小湊、山元を呼んできてくれ。それと沢村にも準備をしておけ、とな」

「は、はい！」

『青道高校選手の交代をお知らせします。9番降谷君に代わりまして、9番ピッチャー山元君・ピッチャー山元君』

端から見れば降谷から虹稀への継投はそれぞれが違う形に映る、リードされているのにもかかわらず強気の継投、前回の登板でその片鱗を見せつけた投手に変わるといふことは少なくとも明川にとっては、楊舜臣にとっては一番の懸念だった。

交代を告げられても中々マウンドを降りようとしないう降谷、自分の責任でチームが追い込まれているのだから自分で尻拭いをしたいという気持ちは虹稀も十分わかっていた。

審判が注意を促し、マウンドに集まる内野陣が重い空気で降谷を見ている中、虹稀だけは前を向いて降谷に言葉を渡す。

「降谷、悔しいのはわかる。だけど、今の降谷じゃ明川を抑えられない」

「……………」

「そんなになるまで投げたんだ。誰も責めたりはしないし、試合はまだ終わってない。後はベンチで頑張つて声出せ、そして俺に任せろ」

「………任せた」

「肩肘のケアはきちんとな」

眼中になかったわけではない、決して自分が上だとも思つたこともない。だが、今はいつの間にか背中を眺めていた。期待に応えられるように、チームのために、そう思つて必死に投げた、不器用だから、これしかできないから全力で。

君がここに向かつてきたときに譲りたくなかった、それと同時にちよつとだけ安心した。

自分が今力不足なもの、スタミナロールがないから失点したのも、体力がないからこ
うやって狙われているのも、全部分かっている。

だから、悔しかった。

君になら任せられる、安心して。そう思ったことがとても、とても歯痒い。けれども、君に任せるしかなかった。

「あゝ……ムカつく」

ぽつりと漏れた本音は、陽炎の中に溶け込んでいった。

降谷がベンチに戻っていく一方で、マウンドに集まった青道メンバーはいつも通り変わらず、最近ちよつと頼もしくなった後輩を可愛がっていた。

「さつきはカツコつけすぎ」

「何が『任せろ』だよ。主人公気取りか！」

「ちよ……亮さん、倉持さん痛いっす」

円陣の中でちよちよこつと可愛がられるも内野陣の表情は僅かながら緩んだ、油断したわけでも諦めたわけでもないが、安心感という点での信頼を虹稀が勝ち取ったのが大きな要因だった。

「この前みたいな投球してくれると助かるんだけどね、出来るかな？」

「心配するな、構わずどんどん打たせていいぞ」

「それでは思い切って投げさせてもらいます、先輩たちの援護があるまではね」

「全く頼もしい限りだな」

バックに助けられ、何とか試合を作っていた投手の面影はもうそこにはない、誰もが口には出さないが、現時点では青道のエースに最もふさわしい投手としてマウンドに立っている。

最低限の確認事項を話し、御幸を除く全員が守備についた。

マウンドに残る二人、この状況にもかかわらず邪悪な笑みを溢していた。

「一つ聞きたいんですけど、降谷のおかげで俺の投げるストライクゾーン狭くなってないですか？」

「まあ、そうだな。際どい所は全部ボール球にされているし、でもそれなら広げればいいんじゃないやねえの？ 相手のピッチャーみたいに」

「なるほど、面白そうっすね、それ」

グラブで隠している口元を虹稀はスイッチを入れ替えて冷徹に徹するが、御幸はさっきまでと明らかに表情の柔らかくなった、その様子を見て楊舜臣は嫌な予感を感じ取った。

御幸だけではない、グラウンド全体を見渡すと重苦しい雰囲気が一掃されていた。まるで梅雨が明けた夏の晴れの日のように。

楊舜臣の予感確信に変わった、追い詰められたのは自分たちだと。

3

「ボ……ボール！」

それはまるで、鏡映しを見ているようだった。

際どい所に、捕手の要求通りに投げ続けられるボールが徐々にストライクゾーンを広げていくのが明川のベンチにも伝わる。

ただ違うのは、糸を引くような軌道とバットに当たって初めて分かる球の重さだった。

変化球こそ種類は少ないが制球は楊と同程度、直球、変化球のキレは山元に軍配が上がつている。

それを凶悪な頭脳が上手く乗り回しているのだから絞りが切れていなかった。

そして、飛びぬけているものは無いが高水準の能力に明川の打者は後手に回るしかない。そもそもその地力の差が明確に表れていた。

—このコースを戸惑うようになったか、ならあと少しでガバガバに出来るなあ！

先ほど内野陣が散っていったマウンドでニヤニヤといやらしい笑みを受かべて談笑

していた投手は前の試合と同じく冷静を装っているものの緊張感よりも楽しさの方が勝っていた。

それがあまり良くないことだとは自覚している、しかしながら漸く噛み合った体の感覚と予想をはるかに上回る球を投げれているという事が緊張感を飛び越している。

一方で捕手の御幸は意地の悪い笑みを浮かべながらサインを出す、打席でバットを構える打者にはただ来た球を打つことしかできなかった。

降谷に代わって2人目の打者に投げた4球目、外角低めの際どいコースに放たれた球を打者は中途半端なスイングで追ってしまう。

降谷とは対称的な投球が余計に制球力を際立たせる。

当然ボールに当たるとは無くミットに吸い込まれるた、ゾーンから僅かに外れたボール球。

フリーミングで若干動かしただものの審判の目に留まるのは中途半端なスイングの方。「ストライク！」

主審は一塁側の審判にハーフスイングか否かを尋ねることは無く、ストライクのコールを高らかに宣言した。

降谷とは対照的に御幸の構えたところに投げ続けることのできる投球スタイルは奇しくも明川の楊と同系列のものであり、悪い前例もあつてよく映えて写っている。

そこからは彼らの独壇場だった。

内へ外へ、速く緩く。変幻自在の投球と的を絞らせない御幸のリードが上手いくらいに噛み合わり勢いは完全に消え失せた。

背番号18の投手がこれだけの実力を持っており、まだ10番とエースが残っていると考えると2点差で勝つてはいるものの勝っている心地はしていない。

その後あつさり後続が打ち取られ、危なげもなくマウンドを降りる。見送ればストライク、振つても当たらない、当たったとしても投手の頭をノーバウンドで越えることは決してない。

空元気にも近い声で抑えられた打者を明川ベンチは迎え入れるがマウンド捌きとピッチを抑えても飄々としている態度に完全に飲まれてしまっていた。確かに速さはさつきの11番が上かもしれない、けれども、投手としては間違いなく18番の方が上だと打席に立った打者は感じていた。

つい最近まではバックに助けられていた虹稀が今度は自らの投球で相手の勢いを分断し、更には自分のチームをも盛り上げている。その姿は間違いなく青道の起爆剤になり楊舜臣に牙をむいて襲いかかろうとしている。

3番・伊佐敷 純から始まる4回裏。青道打線が精密機械を破壊すべく動き始めた。

青道V S秋川 後編

3

4回の裏、3番伊佐敷のツーベースヒットから4番の結城が四球を選びノーアウト1・2塁。続く5番の増子がバントで送り1アウト2・3塁、青道ベンチは得点圏打率の高い御幸に部隊を整え任せる。

しかし、明川の楊舜臣は依然として強気のままだった。前進守備のシフトに切り替えて御幸との勝負を試みる、が御幸に対しての4球目、勝負を決めに来たアウトローへの変化球をしつかりと読み撃ち。

ショートの頭を越え左中間を綺麗に破る、更には外野のもたつく間に3塁まで進みスリーベースヒットで2点を返した。

同点で盛り上がる青道スタンド、たまらずタイムを取りマウンドに駆け寄るが楊舜臣は口角を上げていた。日本に來た理由、いわゆる身体能力のぶつかり合いのベースボールではなく頭を使った野球をしに日本に留学している彼にとってはこれこそが望んで

いた状況だった。

だから、この程度で彼は崩れない。続く7番の白洲はスクイズを試み何とか前に転がすも思い切ったフィールディングで追加点を許さない。

その表情に一切の焦りも陰りも見えない、楽しそうに、望んでいたものを体験している。彼にとっては最後の夏を存分に謳歌している。

2アウト1塁、次の打者は3年の坂井に代わった雨宮瑠偉。バットを肩に担ぎ不敵に打席に向かっていた。顎を上げ見下すように楊舜臣を見下ろす、殺気立つともいうのだろうか。

4番の結城ほどではないが近いものを察し楊舜臣は唇をきゅつと引き締めた。

—制球が武器の投手、球威は普通くらい。しかし変化球は比較的多いが特段飛びぬけたものはない。せっかく御幸さんが流れを持ってきたって言うのにまたあつちに持っていかれそうだ。なら俺が引き戻す、投手さえいなければ何とでもないチームと接戦なんて1回きりで充分だ。

ピンチを迎え、抑えたことで心拍数は跳ね上がり更には1年ながら雰囲気感化された精密機械は僅かな狂いが生じている。

対して未知数の才能を搭載した異色の天才は静かに燃えている、それは後ろに控える鬼才の投手の跳躍に刺激されていることもあるが、心の奥底では先輩らがあまり打て

いないためにここで実力を示して虎視眈々と上位打線を狙っていた。

打席に入るまでに思考を終え、意識はフラットに楊舜臣を見据える。

楊舜臣は一つ間違えば痛打を浴びることを確信しており、兩宮瑠偉は自らが打てるビジョンしか浮かんでいなかった。自信過剰とも言うが中学時代に残した圧倒的な実績とここまで実力だけでのし上がった過程が彼の自信に結びついている。

チームを背負う理性的な投手と成功しか確信していない勢いのある打者、試合を決定づけるかもしれない場面で精神的な要素は大きく関係してしまうのだ。

実力以上のものが発揮できる選手もいるように、実力の半分も出せない選手もいるように、精神面は密接に関わってくる。現時点では実力は拮抗、勝敗を分けたのは頭のおかしいような成功を頭に描いていた兩宮瑠偉の勝利で、打たれる可能性を少しでも考えってしまった楊舜臣の敗北だ。

しかし、その敗北は楊舜臣にとっては心に何かを残したが、決して明川にとっては痛いものではなかった。

完全に、完璧に捉えられた打球だった。

内野は動く暇さえなく三遊間を軽く飛び越えレフトに到達する。あと数ミリ上に角度が上がっていれば、あともう少し左右に角度がついていればスコアボードに3という数字が刻まれていただろう。

楊舜臣は確かに個人的な勝負には負けたかもしれない、兩宮瑠偉は確かに個人的な勝負には勝ったかもしれない、けれども試合には影響が全くなかった。

「クッソ！ 捉え損ねた！」

―危なかった、あと少しずれていたら持つていかれてた

稲妻のように内野の間を引き裂いたあたりは左翼手の真正面、ツーアウト1・2塁。

ネクストバッターの9番山元虹稀はセンターに大飛球を舞い上げたものの定置にいた中堅手にしつかりつかまれ依然としてスコアボードには追加点は刻まれなかった。

ここまで来たのならもう意地しかない。留学生の彼にとつて今年が最後の夏、懸ける思いは明川の中で誰よりも熱く重く、青道の選手とも引けを取らない。

しかし状況は完全に青道のペースに持つていかれてしまった。

芯を喰った当たりが飛び出し始めた明川の守備に対し、哀愁が漂い始めたのが攻撃の方だ。

踏み込めば内角を挟られ、見逃せばストライク、振れば弱々しい打球が内野へ転がる。もう手の施しようが、打つ手すらなかった。

降谷対策をしていた分、球速差が10キロ近くある虹稀の球は明川の選手にとつては非常に見分けやすい速度だと言つても過言ではない。しかしそれが普通の投手ならの話だ。

低めと思ったボールがフレーミングと驚異的なノビによってストライク判定、当たりそうなカーブは手元で鋭くもう一段回変化し、甘い球と思つて振れば微妙に曲がり打ち取られる。

打者の目が慣れ始め、多少のボール球はカットされるが結果的に球数が多くなり疲労が溜まる、尚且つ攻撃時間の異常な短さに休憩に十分な時間がない。

蒸し暑い日本特有の気候で、一番熱いマウンドに立つ虹稀は涼し気な表情でテンポよく明川打線を見事に調理している。一方で明川の楊舜臣は熱さと球数による身体的疲労、勝ちの見えない中でただただ粘りの投球を行う、その対価となつて精神的な疲労がじわじわと押し寄せる。

その後2イニングをランナーを出しながらも無失点で切り抜ける好投を見せた。気持ちと投球術で何とか均衡を保つた楊舜臣だが、彼の全力を懸けた踏ん張りも空しく遂にその時は訪れた。

4

始まった7回裏の攻撃、先頭バッターは8番の雨宮瑠偉。

いつも通りのルーティーンワークをこなす彼はいつも通りであるが、スタンドの応援が異様な雰囲気を纏い球場を覆っていた。

1・2で太鼓をたたき3でメガホンを叩く、プラスバンドがない中100人近く野

郎の声で『WE WILL ROCK YOU』の熱唱が始まった。

『青道の！ 頼れる男！ 8番強打者雨宮瑠偉！ 打ってやれ！ 魅せてやれ！ お前のバットで決めてやれ！』

—8番強打者って何だよ。英語の離せない外国人みたいなききじゃねーか。こうなったら甲子園までにぜってークリーンナップ奪わねえと……そんなことは置いといて、狙うはファーストストライクだな、それしかねえ

盛り上がりを見せるスタンドの応援歌を冷静に聞き、分析、更には突っ込みを入れる余裕もある8番の強打者は、大きな声で自らに気合を入れるいつものようにバットをピンと立て投手を見据えた。

—さつきよりも……外に外れるスライダーで様子を見よう

強気にも見える逃げ、賭けそのものの読み、その覚悟があったからこそ結果は上手く転がったのだろう。

楊舜臣は決して悪い球を投げたわけじゃない、外角に外れるスライダーは理想的とまではいかないが、納得のいく感触で彼の手から離れる。

その球を、ストライクゾーンから外れたのを勘で把握しつつも一切不純物は混じっていないスイングがボールを捉えた。

真芯で捉えることは叶わず、当たったのはバットの先、鈍い音を立ててファースト後

方へ飛んでいく。

ただ、雨宮瑠偉はそのまま振り切らずにライト方向へ押し込むように手首を返す。そうしなければならぬと直感的に判断し、体が勝手に反応していた。

そのまま空気を切り裂く音を立てながらライト定置の真横に位置のフェアラインの上へ乗り、そして地面に触れたと同時に、加速するようにラインを跨いで跳ねていった。迷いのないスイングは驚異的な回転を与え内野の頭を越し、ライトはファールゾーン後方までボールを処理しなければならなかった。

予想外の打球の変化に僅かにライトが戸惑った、その隙を雨宮瑠偉は見逃さない。ボールが落ちた瞬間さらにギアを上げ僅か2歩でトップギアに入る、その瞬発力を生かし凶悪なまでに加速する爆発的な跳躍力でダイヤモンドを駆ける。

加えて成功イメージしか頭になくお花畑の思考を持ち合わせている瑠偉は、躊躇なくセカンドベースを蹴った。

迷いが一番の敵と言われる走塁で、暴走と好走塁は紙一重だ。すなわちギャンブルで走る奴は強い、雨宮瑠偉の走塁は勘や賭けだけの要素ではなく的確な状況判断と経験が混ざっている分余計に性質が悪い。

若干定置の後ろ似たライトは悠々と回り込んで捕球体制に入る、瑠偉はライトをファーストを回る前に確認、そしてそのライトの肩が大して強くないのは試合前のシー

トノツクで把握していた。

故に躊躇なくセカンドベースを回り、もたつく間にあつという間に3塁へ。

ギリギリのタイムミングではあつたが見事に3塁まで到達した瑠偉は大きく息を吐いた。

狂乱狂気に盛り上がる青道スタンドが球場の雰囲気塗りを替えた、しかし、本人は渋い顔をして素直に喜んでいなかった。

結果的には3ベースヒット、しかし当たりだけ見れば楊舜臣の勝ちだった。狙い澄ましていたのに関わらず、ボール球を打たされ、相手の未熟さを突いての走塁。

当然悔しさは滲む、しかし結果が良かったのでさほど気にもせず切り替えたのは流石と言うべきか。

打ち取ったあたりが3ベースヒットになった。1回とは真逆の事柄が起こり始めた7回裏、この1点が勝敗を決めると言っても過言ではない。

ノーアウト3塁、点を入れる方法はいくらでもある、ここで点を入れられ試合を決められるか、それともここから流れを全部巻き取ってあつてないようなチャンスをつか

……

その緊張感を楽しみに野球をしている楊舜臣にとって、少なくとも今は最高の瞬間に浸っている。

そして、青道ベンチもここで動いた。

『選手の交代をお知らせします。9番沢村君に代わりまして、代打・小湊春市君。』

3回途中から5回までを完璧に抑え込み流れを断ち切った虹稀だが、6回に先頭打者の楊舜臣にカウントを取りに行ったカーブを狙い打ち、センター前ヒットになりそうな打球を手で叩き落とし1アウトは取ったもののその後レフト前にヒットを打たれ、その次の打者には初の四球を許しやむを得なく片岡鉄心は交代させざるを得なかった。

そして虹稀代わり、更に勢い付こうと青道は背番号20の1年生左腕沢村（アピールが実った）が6回はランナーを2人抱えた登板だったが6―4―3のダブルプレーでピッチを脱出、7回はランナー1人も出さず、無失点で切り抜ける好投を見せた。

しかし、せっかくのノーアウト3塁のチャンス、打撃の良くない沢村で態々アウトひとつ献上するほど青道は優しくくない、代わって代打を送り込んだという事は青道側も勝負を決めに来たという事、沸き立つスタンドは更に沸き立ち、グラウンドではきゅつと引き締まる緊張感が流れる。

―ここまで完璧に抑えている投手に代わり代打……引導を渡しに来たのか

「はるつち頼んだぞ！ この俺の代わりにあのメガネさんを倒してくれ！」

「も、もちろん！」

代打だという事を告げられて沢村は不本意ながらもそんな表情は一切見せず、同じく1年の小湊春市を送り出した。

もつと投げたいという気持ちを抑えて

ポンと、肩を叩いて檄を送るが小湊春市は肩に残る強い感触に沢村の悔しさを感じ取っていた。だから、代わりに出たのだから。

—日本の高校野球で木製バット、余程ミートに自信があるのか。それに、ベースに覆いかぶさるような構え……だが、その構えでインコースをさばけるのか？

楊舜臣が投げた瞬間、小湊春市は体を開くように左足を踏み込んだ。

—知っていたさ、だが、そのコースは打ってもファールにしか……

今日初めて、金属特有の高音ではなく、木製バットから鳴る乾いた音が大歓声の中を駆け巡る。

ほとんど同時に、均衡の糸がプツンと切れる音がした。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
R

地方の差は大きかったものの楊舜臣は粘り強く投げぬいた、しかし、一度起爆した爆弾は勢いそのままに猛威を振るい、彼は力尽きてしまった。

5

「よお、手は大丈夫か？」

「ん……問題ない、と思う。痛くないし、腫れてもないから」

6 回に楊舜臣に狙い打たれたカウントを取りに行ったカーブを狙い打ちされ、セクターに抜ける強烈な当たりをあらうことか投げる方の、右の手で叩き落としその後ヒットとフォアボールを出し、同点、または逆転のピンチを作り出した投手に雨宮瑠偉は呆れながら問いかける。

「なら良かった、折れてたりしたら俺のモチベーションが下がる」

「俺の心配じゃないんだ」

「お前の心配って……あのなあ、ガッツは認めるけどお前ピッチャーなんだぜ？ 利き手で打球止めに行く場面じゃなかっただろ。当たったのが手の腹で良かったけどさ、指だつたらよくて爪、悪くて骨の可能性あつたんだぞ」

「あははは、ついうっかり手が出てさ」

「笑い事じゃねえよ」

「はい、仰る通りです」

配球を読んでいなければあの狙い澄ましたスイングができない、油断した隙を突かれたバツティングで、全く想定していない打球に体が反応してしまったのだから仕方はないことではあるが。

しかし、虹稀もバスの中で落ち着いて鑑みてみると幸運だったと改めて思い返す。

今彼の右手には氷嚢が握られており、打球を受け止めた場所が手の腹だったからよかつたもののおと数センチずれていたら、と考えると冷や汗しか出てこない。

「まあ、無事なら何でもいいよ。にしても勝ったって言うのにこうも雰囲気暗いんじゃないかな」

「あんな試合の後じゃナイーブになるのも無理はないと思うけど。正直に市大が勝つと思わずに試合を見てよかったと思う」

12対13という超ハイスコアゲームを制したのは優勝候補の一角、市大三高ではなく薬師高校。17安打13得点と選抜出場チームを打撃でねじ伏せた攻撃力は馬鹿には出来ない。

「それは間違いないな、全くノーマークだったダークホースがあそこまでやるとは思わなかつた。けど、正直負ける気はしない。だってあの4番抑えたら何も怖くないだろ？」

総合力では間違いないウチが上だよ。20回やったら19回は勝てる」

ただし、この流れが無ければという話だが。

「その一回が次かもしれないから、こんな雰囲気になってるんじゃない？」

隠れた意図を汲み取り虹稀は受け答えるが、天邪鬼体質、更には超のつく異常な樂觀さを持つ瑠偉とは話がかみ合っていないかった。

「ははは、ありえないって。お前か降谷、もしくは丹波さんが抑えれば問題ない。最悪歩かせればいいしな」

確かに薬師高校は強い、だが総合力で考えると青道や市大の方が上だ。しかし、一人だけ場違いなままでな力を持っている選手がいるだけに事態は余計に深刻なのだ。

今日の試合でも楊舜臣という周りから見れば明らかに突出した選手に苦しめられた、だが地力の差が開きすぎていたために後半は青道が圧倒したが薬師高校はそうはいかない。

「簡単に言ってくれるね、正直あの打者……轟だったけ、あれは凄いや。おそらく瑠偉と同等かそれ以上、もし勝ち方にこだわるんじゃないやなくて勝ちだけにこだわるなら歩かせられない。俺もそこは嫌だけれど腹を括ってる」

「……前言撤回だ、何があっても歩かせるな。完璧に叩きのめしてくれ」

それを込めた意味で虹稀は答えたが、瑠偉は自分と同等かそれ以上と評価されたことが少しだけ納得いかなかった。

「元よりそのつもりだよ。ただ、一也さんのリードには従うし、先発かどうか、試合で投げれるかどうかで言うのは別問題だけど」

虹稀も同じ考えだ、最強の打者は雨宮瑠偉だと信じているからこそ轟雷市には負けられないし負けたくない。

それに久々にねじ伏せてやろうという燻っていた感情を煽られた相手なのだからなおさらだ。

「それなら一つだけアドバイス。今日明日は体を休めてベストコンディションで試合に臨め、絶対に投げるから。明日までとは言わないがせめて今日だけは肩を休めて走るのをやめろ」

「わかってる」

「だといんだけど……にしても沢村達おせーな、迷子か?」

全ては甲子園に行くために、逸る気持ちを抑えて次の試合を確と見据えていた。

激闘：エキシビション

0

分かっていなかったことだった、知ってた上での行動だった。

こうなることぐらい誰でも予想のつくことで、それを踏まえて覚悟したはずだったのに。

頭は理性的だ、それくらいに忙しいことも、優先事項が野球だっていう事も、そんなことに興味がないという事も全部承知の上だった。

言い訳はいくらでも思いつく。

距離が遠いから仕方がない、忙しいから仕方がない、大会中だから仕方がない。

全部分かっている、この思いはいつだって一方通行であることも知っている。

けれども、感情は素直だった。

少しでもいいから声が聴きたい、くだらないことを聞いてもらいたい、一言頑張ってくださいと言いたい、名前を呼んでももらいたい。

けれども、それらは叶わない。私がいくら望んでいようと叶うことはきつとない。

積み重なる未読のメッセージ、戸惑いもせずに押せるようになった通話発信ボタンと聞き慣れてしまったリズムミカルな発信音、だんだんと短くなつていくコールの数、そして「お」と打つだけで真つ先に候補に挙がる「おやすみなさい」の一言。

少し前まではこうやってしているだけで満足だったのに、今はそれ以上を求めている。

我ながら卑しいと思うけれども、堰を切ってしまった思いは理性がどんなに歯止めをかけても濁流の如く溢れ出してしまふ。

そして遂に。

連日の暑さと、勉強の疲れで魔が差したのか、寂しさを紛らわせるために聞いていた音楽が災いしたのか今となつてもわからないけれど………

『私は、先輩のことが好きです』

送ってしまったが後の祭り、後には引き返せない。

やつてしまったという後悔と、穴があつたら隠れてしまいたいほどの恥ずかしさ、言葉で伝えられないもどかしさが止まることなく涙と一緒に溢れ出る。

そして遂に開き直つた私は、欲望に身を任せて不貞寝をした。

同刻、山元虹稀の同室の御幸一也があり得ない、否、あつてはならないものを目の当たりにする。

それは普段はガードが堅い後輩が無造作にベッドの置いていたスマートフォン。

面白半分で中身を覗こうとするも暗証番号は変えられており、生年月日や何かしら関連した数字を打ち込むが4ケタの電子の壁を通り抜ける出来ず、つまらねえと元の位置に戻した瞬間だった。

浮き上がる衝撃の一言を見て、一旦自分のガラケーで写真を撮り、文字通り固まった。「一也さんどうしたんですか？ 天井に虫でもいるんですか？ ……何もいないですけど」

そして状況を徐々に受け入れ、晴れやかな笑顔でぽつりと呟く。

「山元、アウト」

「何がですか？」

御幸は静かに部屋を出た、戦争の火種を撒くために。

そして、何も知らない虹稀は疲れた体を癒すために寝床に入った。

何も知らずに朝を迎える。

昨日に続いてグラウンドでは丹波さんが実戦感覚を取り戻すために実戦形式で投球をしていた、一昨日打球を手で叩き落としてしまい昨日は体を動かして汗を流すこととバツティング、守備練習しかやらせてもらっていない。

外野ノックで投げた感覚ではもう大丈夫だとは思うけれど、念のため今日は大事をとったほうがいいとのことらしく。

因みに瑠偉は紅白戦で丹波さんのカーブを完璧に捉えたことが評価されたのか、試合での好調も影響しているのか、どうやら丹波さんから直々に声がかかったらしくこの練習に加わっているらしい。

全くもって羨ましいものだ。

今日はブルペンには入れたけれどもキャッチャーを立たせたまま軽く80球くらい。あまりにも早く終わってしまい、まだ太陽がさんさんと輝く下で走っていた。

試合は明後日、まだしばらく時間があるため、丹波さんの投球を見ながら、先輩たちのバツティングを見ながら最近の日課になっているポール間を終え、一息ついたところ

で純さんからの呼びかけがかった。

というかほとんど強迫に近い文言だった気がするけど。

「山元オ！ 手はもう大丈夫なのか？」

「はい！ 問題ないです」

「ならマウンドに立てるな………10分待つてやる、その間に肩つくつとけ！」

「えつと、どういうことですか？」

「グシャグシャのボッコボコにしてやるつってんだよ！」

「投げていいんすか！ すぐ肩つくります」

と、ここまでは普通に先輩たち相手に色々試せるし、投げれるチャンスだと思つて喜んでいた。

けれども、満面の笑みで肩作りを手伝ってくれる一也さんやマウンドにいる丹波さんを執拗にボッコボコにする先輩方（+瑠偉）から醸し出される殺伐として雰囲気を感じ取りただ事ではないなという事だけは徐々にわかつていった。

「山元オ！ 準備できたか!?!」

「はい、いつでも行けます！」

「よし、ならマウンドに上がれ！ ケジメ付けさせてやる！」

「ケジメ？」

「山元……何をしたかは知らないが、頑張れよ」

疲労の中に哀れみの混じった微笑みで丹波さんに励まされた、御幸さんもここ最近では見ないくらいにテンションが高く、3年生と瑠偉のあまりにも殺伐とした雰囲気はベクトルは違うけれども、試合と同様の緊張感を急に実感する。

「一也さん、何事ですか？」

「それは後での話だ。けど、この状況最高じゃないか？ 全国トップクラスのバッターたちが本気でお前を打ち崩しに来てくれてるんだぜ？」

「打ち崩すって言うか、若干2名くらい今にも人殺しそうな、殴りかかってきそうな目をしてるんですけど」

「そりゃあ、自業自得だ」

「何も身に覚えがないんですけど」

「後でわかるから今は気にするな、今は目の前のバッター抑えることに集中しようぜ」

「……わかりました」

口車に乗せられるのは癪だけれど、このレベルの打者相手に投げられることだけは確かにありがたいことだった。

まずは血の涙を流している純さんとの対戦、無駄に力が入っている分タイミングを狂わせれば何とかなる。

ただ……………

「お前だけは許さねえ……………ミンチにしてやる」

身に覚えのないことを責められるのだけは腑に落ちなかった。

今日は体が軽い、特に肩は昨日投げなかったこともあるのか予想以上に調子がいい。調子が良すぎて怖いくらい、それに加えダツシュで身体全体が疲弊しているのが幸いているのか、余計な力は一切いらずに質の高い球がポンポン投げれる。

手の感覚もこの前の影響は一切ない、そして全国トップクラスの打者と試合関係なしに何度でも対戦できる（怖いぐらいに敵意剥き出しなのが気になってしまうけれども）状況はこれほどになく贅沢だ。

一瞬でも気を抜けば外野の最深部へ運ばれてしまう技量の持ち主たちに対し、学ぶことは沢山ある。全力で挑み、打ち返されることがあるからこそ修正点や改善点が露になり、それを修正するために試行錯誤する機会はいくらでも用意されている。

大きく振りかぶった、右足に乗せ切った体重も、そこからの体重移動も全てが無意識

で、且思い通りに動いていく。左足の踏み込みも、ボールをリリースする位置も理想的だ。

投げる度に洗練されていくのが理解する。

偶に陥る感覚がある、今までにないほど指先が熱くなっていて、その球が投げた瞬間に打たれることがないこともわかる。

その感覚があつた時は自分でも恐ろしいくらいに、圧倒的だった。

体は熱を帯びている、心臓は感情と共に昂り心地の良い音色を奏でている。少しだけ下半身に疲労感はあるけれどもコンディションは最高に良い。

特段何かを考えているわけでもないけれど、思い通りに、想像以上に体を上手く扱えている。

肌が焼かれそうな圧迫感、花田東以来の殺意にも似た剥き出しの敵意、一つ間違えば命取りになる恐怖、それを踏まえたくうえで湧き上がる闘争心。

このまま身を任せればどこまでもいけそうな気がした。

2

懐かしい、と率直にそう思った。

だけどそんなのは思い違いだとすぐに実感、そして訂正、レベルが違った。

あの時とは完全に別人であると気付いたのは打席に入つてのことだった。そういうばあの際は延長戦まで一人で投げぬいて最後の搾り滓のような、風前の灯火のように今にも消えかかりそうな線香花火にも似たような弱々しい爆発だったのだと。

戦慄を覚えた。

今まで感じたことのない威圧感、爆発的な成長を遂げている目の前の投手が酷く遠くに感じてしまう。

ボール球を哲さんが振つてしまう程キレているストレート、伊佐敷さんが手も出なかったカーブ、増子さんが短く持ったバットで詰まらせる球威、そして……あの夏に現れた満身創痍の化物ではなくて正真正銘の化物に会えたことに体が震えた。

虹稀と同じ学校を選んだ理由は最高の投手がいるところに行けば甲子園優勝も夢じゃない、そう言ったはずだが本当はあいつを敵に回したくなかっただけかもしれない。

心のどこかで、気付かないふりをして怖れていただけなのかもしれない。

欠片も思っていないがポツポツと湧き出てしまう。

「まったく、恐ろしいやつだよな。良い意味で気持ち悪いよ」

「俺も同感ですよ。けれど、想像以上です」

「哲さんや純さんですらろくに捉えきれないからな。意地で外野に運んでいるけど

内容はあいつの勝ちだ……丹波さんがキャッチボールし始めた、お前にとって最後になるかもしれないからねえからいいところ見せろよ」

「言われなくとも」

疲労困憊、満身創痍、前に出会った怪物は手負이었다。

だが今はどうだ？

獅子奮迅、意気揚々、爆発的に成長を続けている未知数の化物が堂々と佇んでいる。背中が見えなくなつたような感覚に襲われるが無理やり振り払う。確かに今は遠いかもしれない、だがそれならばここで追いつけばいいだけのこと。

細胞が敗北を拒絶していた、神経は異常なほどに敏感で僅かな動きですらはつきりと感知してしまう。

「ちなみに、お前は最後の打席だからな。本気で抑えに行くぞ」

挑戦的な言葉が火に油を注ぐ、上等。と小さく呟いた。

マウンド上で静かに虹稀が頷き、振りかぶつた。力感のないゆったりとした動き、全身を余すことなく使い、無駄のない体重移動から繰り出される爆発力と球の出どころが分かりずらくなるまでしなつた腕。

一瞬高く浮いた、抜け球か？　と思つた矢先に急速に地面に吸い込まれるように落ちる。

初球はカーブ、と判断したときにはすでに遅く、バットを出せないまま外角低めに構えられたミットに納まった。

「ストライク、だよな」

「……間違いないっす」

一度浮き上がって鋭く落ちた。あたかも消えたように錯覚してしまう虹稀の代名詞ともいえるドロップカーブがアウトローに突き刺さる。

正直、ここまでの変化は予想していなかったが一度はしつかりと見た。今日の最高のボールかもしれないが今のコースにそう簡単に決めれる訳がない。それが出来たら人間じゃねえし、軌道の残像は焼き付いてる、対応は難しくない。

次に投げたボールは内角のストレート。真つすぐに山を張っていたこともあつて躊躇なく、迷うことなく体は動いてくれたが思いつきり差し込まれた。

これで、完全に窮地に追い込まれた、四面楚歌つてやつだ。

現時点で理想的なバッティングフォームから想像通りのスイングができたのにもかかわらずボールの勢いに押されてしまう、すなわち理想的だと思っていたこの型は個々が限界だという事だ。

けど、あいつだつてこんな状況から這い上がってきた……俺に出来ないはずがない。

目の前の最強の味方を前にするとこれまで積み上げてきたものなど何の躊躇もなく

捨てられる。緩急と僅かな変化に対応でき尚且つスイングスピードを維持、もしくは向上させなければ次には進めない。

虹稀はロージンを少し触り、寧猛に笑った。こんなものか？ と挑発されているようだった。

あつという間に2ストライク、あつさりと追い込まれた。続く3球目フォームの改良しようとしたのを見透かしたようにワインドアップで振りかぶることなくノーワインドアップでタイミングを急激に変えて投げ込まれる球に対し、今度は手が出なかった。ストレートかと思ったボールの正体はカットボール。僅かな変化に救われた。

「これまた素晴らしい選球眼をもっているのか、それとも手が出なかったのか……どっちだろうな？」

外れた……いや、外したのか。

反応して今の球を打てるかと聞かれたのなら答えはNOだ……これ以上は頭で考えても無駄だとうやく理解らされた、あとは俺自身の野球センスと本能を信じるしかない。

体は混乱している、今まで培ってきた技術を放り投げ全く違う動きを試そうとしているのだから。

もつと感覚を研ぎ澄ませ。バットはどこに置くのが一番地がいい？ スタンスの幅

は？ 立ち方は？

打席を離れて模索していると、ふと思いついた。

偶然か必然か、今まで投げた3球は俺が完全敗北を味わった最後の打席と全く同じ配球だったのだ。虹稀と目が合う、雄弁に瞳は物語っていた……最高のボールを投げ続けるぞ、と。

次で終わらしてやるとも。

一切の容赦はなく、純粹に敵として向かってくれている。少しだけ、本当に敵として戦いたかったという思いはある、それが叶うのはあり得たとしてももう少し先の話だが今はこれで充分だった。

今度は大きく振りかぶる。流れるような体重移動から鞭のように全身を使い、天賦の才を持つものが努力をすることでしか得られない渾身の白球が投げ込まれる。

わざとらしく、あの時と全く同じ外角低めに寸分変わらず投げこんできた。

今度こそ、とバットを振りぬく。しかしそれでもまだ振り遅れた。

ライト線の右側に落ちたボールは次第に勢いをなくし、最深部に辿り着くことなく静止する。

驚きだったのは手に残った感触、ほとんど感覚はない……つまり芯でとらえたという事、なのに関わらず打球は死んでいた。

「ははっー」

思わず笑いが零れる。

目に焼き付いていたはずのストレート、イメージの中では完全に捉えたはずだった。しかし現実には俺のバットは振り遅れで、あいつの真つ直ぐが更に想定の上を越えていた。

ギリギリまでボールを見れるように最初からグリップを投手へ向けた改良型のフォーム。スイングスピードはやや従来のものと劣るけれども、確実性は上がったはずだ、なのに仕留めきれない……だからこそ面白い！

たった1球で段飛ばしで成長しているのが分かる、俺も虹稀も。これ以上にならない濃密な技術の研磨を俺はずっと求めていた。

中学校の時点で完全に完成した従来のフォーム、高校で強豪校の投手たちと対戦し多少の変化はあったものの、ここまで大きく変化させられたことは無かった。

ここからスイングスピードを上げるには、助走が、予備動作が必要だ。そうなれば連動の精度はシビアなものを求められる、振り込んで実戦経験を積みれば何とかなるが……今ここでそれをやらないと。

つたく、乗らせてくれるぜ………！

ここから先は未知の領域だ、あの夏のものかしたらあったかもしれない続きの投影。

あの時は、お前が倒れて終わってしまった勝負だが今日は思う存分やれる……終わりは近いが。

問題はタイミングの取り方、脚はいつも通り、だがバットは常に動かし続けないういざという時に巧く動かせない。

次に来たのはインハイのストレート。

タイミングは完璧だった、しかしボールはバックネットに吸い込まれていく。

というか、普通にボール球に手が出た。しかし、もうふり遅れはしない……あと一つ何か加われれば完全に対応できる。

寒気が止まらない、歓喜か恐怖かもわからない。クソ暑いものにもかかわらず鳥肌が収まらなず考えられることは虹稀の背中を必死に追いかけていくことだけだった。

2、3回打席を離れてバットを振った、未だ解決策は見えないが何の不安もない。

必死に食らいついていければ、おのずとその答えは得られるはずだから。

呼吸を整えて虹稀を見据えた、その眼には何一つ曇りのない、純度の高い闘争心が宿っていて相変わらず俺を焚き付ける。打てるものなら打ってみると目は口ほどにものを言う、あいつの厄介なところはこういう場面で、力と力の勝負という場面で躊躇なく否寧ろ嬉々として変化球を投げ込める普通では考えられないメンタリテイだ。

沢村や降谷であれば、というか大抵の投手が力で押ししたいときに直球を投げ込むとい

う感覚で変化球を使ってくる。

だが、珍しく彼の場合は直球に執着はなかった。たまたま一番自信のあるボールがストリートというだけで、その時の状況に応じて投げ分ける。本人曰く「カーブを自在に操れたら投球の7割はカーブを投げたい」と言っているくらいだ。

虹稀が最もこだわっているのはコース、つまり制球、ある程度の球威と速度、緩急と変化を持つ投手がそれを行うのは多少厄介くらいにしか思わないが、普通に良い直球と変化球を持つ投手がそれを実践するのなら話は違ってくる。

ましてやそれを指示するのが高校トップクラスの捕手なのだからそれは手が付けられなくなるのも至極真つ当なことだろう。

今日の対戦結果は3打数無安打、最初の打席は弱々しいセカンドゴロ、2打席目は三振、3打席目はサードフライ。完全に良い所がない、悔しさよりも虹稀に対する感嘆が漏れるのがもつと悔しかった。

何時から背中を追っていたのかわからない、随分と長い間だったかもしれないし、短い間だったかもしれない、決して自分が優れていると己惚れていたわけでもなかったがここまで差が開いているとは思わなかった。

嬉しくもあると同時に悔しい、複雑な心境だ。

けど、ずっと、ずっとこの瞬間を望んでいた。

俺に壁を見せつけてくれる最高の好敵手！

— 雰囲気が変わった？ いや……思い過ごしか。正直言っちゃ悪いけど、瑠偉には打たれる気が全然しない。釣り球を当てられたのは想定外だったけど次で終わりだ

やれることはただ一つ、今まで積み重ねてきたもの、そして俺の本能に後は任せるだけ。

配球を読む、コースに山を張る、そんな思考じゃ到底対応できない。攻略法はただ一つ、今まで培ってきた経験要素早く引き出す。

これまでの3打席、虚仮にされ続けひたすら頭を回しまくった。けれどもそれを越えた何かをここで掴まないと話になれない。

思考の限界を超えた先、考えなくても出来るようになることがきつとある。それだけの経験はしてきたつもりだし、今まで培ってきたものも決して無駄ではないはずだ。

今ここで壁を超える。

さあ来い

俺は………俺はどう打つ？

集中力が極限まで研ぎ澄まされると時間がゆっくり流れるというが、今回感じたのは真逆で、気付いたらセカンドベース上で悔しそうに首をかしげる虹稀とその様子を無駄に煽る先輩たちを眺めていた。

残っている体の感覚はいつもと違う事は確かだが、それでも僅かな手掛かりしか残されていない。残滓は体の違和感のみ、それだけに貴重な情報を忘れてはいけない。

ただ一つ確かなことがある、予感が間違いない確信に代わった。

山元虹稀は最強たりうる器で、こいつとならばどこまでも切磋琢磨しあえることを。

実戦形式の練習後、食事を摂り、風呂に入って完全なリラククスモードで部屋に戻った虹稀を待ち受けていたのは御幸一也によってプライバシーを侵害された山元虹稀の糾弾会であった。

「やるじゃねーか！ オラア！」

「中学時代の野球部のマネージャーで後輩だど!? このロリコンが! 見損なった!!!」
「とぼけても意味ねえぞ! 一生懸命練習している合間にそんな暇があったとはなあ
……見損なったぞ」

「山元……幸せにしてやれよ」

と言うのもただの妬みと僻みであり(若干一名、天然ぶりを発揮しているが)、ようやくあの実戦練習であれだけの殺気を向けられた理由を知ったわけだが、最近碌にスマートフォンを触っていない虹稀にとっては他人事のような話であった。

部屋の隅でケラケラ笑う御幸一也を睨みながらスマートフォンを確認すると、色々な思いは交錯し、流石の虹稀でも思うところはあるが。

—この上マネージャーとも仲良くて、同じ学年の女の子からも何度か告白を受けていると知られたら………こいつ終わるな

そんな好敵手の妬みと僻みによる勝敗の決まった糾弾を一度確認すると雨宮瑠偉は部屋を後にした、虹稀は弁解人が出ていくのを止められず曖昧な返事を返すしかなかった。

「いや……後輩ですって、ただの……。はい」

しかし、追及は止まらない。以前から怪しげな雰囲気はあったものの確固たる証拠が無かったため、そうであってくれるなという悲しい希望から根掘り葉掘り聞かれること

はあったがからかいや弄りの範囲でしかなかった。

だが確固たる証拠が出てきてしまった以上容赦はない、本気で攻めることでしか彼の心は救われない。

「そう言えばこの前も電話かかってきたよなア？　いったいどこまで行つたんだ？　アア、ン!？」

「この犯罪者が！」

「いや、マジで何もありません！　それに、今夏の大会中ですし、彼女には悪いですけどその気持ちに応える余裕はないです」

「テメエ……光ちゃんも勇気振り絞って気持ち伝えてるんだぞ。それを……○ねよ」

「今の発言は流石にないわ……し○よ」

「お前……最低だな」

ただ、虹稀には個人的な逆恨みはあるものの相手の女の子に対しては自分たちの勝手な感情で哀しい思いをさせたくはないためこのような矛盾した攻め方になっているのだが……

「……………」

何を言っても無駄だと判断した虹稀は大人しく先輩たちのありがたい言葉を右から左へと聞き流しながらどうしようかと考え始めていた。

先程久々にチラリと確認したが、知っている限り後輩の女の子は冗談でそんなことを言う子ではないことは既に承知だ。

律儀に送られてくる未読だった連絡の数々が彼女の溢れ出た気持ちをも物語っているのは十分すぎるくらいに分かっていた。

けれども今は、非常に酷な話ではあるが後輩の女の子に対する優先度は決して高いものではない。

それに、もしそういう関係になったとしても会える時間はとても限られてしまう。

それならば自分なんかよりもっと大事にしてくれる人と、俗に青春と呼ばれる時間を過ごした方が、きっと彼女のためにもなると考えていた。

「いなくなつたと思つたらこんなところでバット振つていたのか」

「そう言うなら先輩だつてそうじゃないんですか？ 真つ先に弄りそんな先輩があこの屋にいないんだから俺も驚きましたよ」

「まあ……な。正直今は気分じゃないからな」

「そうなんすか、まあそういう日もあるつすよ」

「ひとつだけ、聞いてもいいか？」

「答えられる範囲なら」

「すつげえ曖昧な言い方なんだけどよ、現状に満足しているか？」

「全く、何ひとつたりとも。守備位置、打順、結果、守備にバッティング、他にも言い出せば凄く長くなるくらい一切満足なんてしてないつすよ。今日の無様な姿を見ればわかるでしょ？」

「……それだけ聞ければ十分だ、頑張れよ。程々にな」

「ういつす」

その後時間を忘れるくらいに没頭し、バットを振り続けた。その後なかなか部屋に戻らない雨宮瑠偉の搜索隊が彼を探し出すまでひたすらバットを振っていたという。

「試合までに、ケジメはつけないと」

瑠偉の搜索のため部屋からようやく出て行ったチームメイトを遅れ気味に追いかけるながら虹稀はボソリと呟いた。

雨宮瑠偉も山元虹稀と同じくして段飛ばしで階段を駆け上がれるもの、その原動力は飽くなき向上心。そして、一度は高校野球の壁に阻まれ墜ちるとこまで墮ち、そこから這い上がるだけでなく更なる跳躍を見せた山元虹稀という劇薬に近い刺激を得て彼もまた新たなステージに立とうとしていた。

続く試合は市大三高を破った薬師高校、大きな爆弾を秘めた彼らとの決戦はどちらに転ぼうとも互いに大きく影響を及ぼすことは間違いない。

精密機械

0

早朝、だった。

俺にとってはいつものことだけれど、普通の生活をしている彼女にとっては大分早い時間帯だ。

先輩たちの質問攻めから解放された後、今日の試合のことで後輩の気持ちを失礼ながら9：1の割合で考えた結果、俺は……

「……おはよう」

少しばかり戸惑った、彼女がどういう気持ちであるのかはイメージでしかない。何せ経験がない。

だが、はつきりと気持ちを言葉にする勇氣はとてつもない事だと経験で学んでいるからどう切り出そうか戸惑った。

「おはよう、ごいいます。虹稀さん」

取って付けたような朗らかな声、馴染んだ声音、戸惑いの混じる挨拶。

結局考えたところで答えは出なかった、と言うか正直に言つて考える暇がなかった。ケジメをつけようとは思つたものの答えが出ない。はいと言うには些か考えが足りなすぎるし、いいえと言うのは心が躊躇していた。

気持ちは確かにうれしい、これまで2・3度程度はそういう経験があつたけれども心は少しも動いたことは無かつた。しかし、今回に限つては違う。

答えが出ない、何なのかわからない。この感情を何と呼ぶのかが理解できない。

ただ一つ、現時点で出た答えを手短に彼女に告げる。

心臓は早鐘を打ち、胸のあたりはモヤモヤしていて、無意識に、自分でもわかる程大きな音を立ててゴクリと唾を?んだ。

「時間が無いからはずきり言おうと思う。今は、気持ちに伝える事は出来ない、ごめん。けれど決して、慰めとかじゃなくて、嫌な訳では「あはは! どうしたんですか虹稀さん? ただの自己満足ですつて! そんなに深刻になんなくていいんですよ。朝から辛気臭いなあ。あ、そうだ! 忘れちゃいましょう! きれいさっぱり、忘れてしましましょう。いつも通りに戻るだけです、簡単でしょう? 試合に支障が出ちゃいますよ?」

あくまで朗らかに、しかし捲し立てるような言葉のつなぎ方がらしくない。

無理をしている、いやさせている。時折おかしくなる言葉のイントネーションが、く

ぐもった声が、朗らかすぎる声音が耳に響く。

痛いくらいに。

忘れちゃいましょう、彼女はしきりにそういった。

「……………忘れていいならそうするよ、本当にそれでいいなら」

本音を言うのであればどうでもいい、彼女と付き合うことになろうがそうでなかりうがどうでもいい。

そう考えていたけれども、光ちゃんと実際に話してみると心が戸惑った。

喉まで出かかった付き合ってもいいよという言葉が出てこなかった。

その結果、違う回答が出てきた。

綺麗な回答なんかではない。俺はあくまで返事をはぐらかそうとしただけの人間だ、それが彼女の要求ならば？むよりほかが無い。

その他の権利なんて持ち合わせていないのだから。

最終確認を取った、どちらにせよ俺が提案するのは答えの先延ばしだ。言い方が悪く、そのことは伝えられなかったけれども、普通に考えてその回答は彼女にとって断りを入れたものと変わらない。彼女が忘れていいというのなら、問題は解決したのも同然だった。

「……………私は、虹稀さんのことが好きです。返事はもちろん分かっています、これはただ

の、自己満足ですから。試合前に……ごめんなさい、自分の中でも、ひと区切りつけたくて」

この状況は前に何度か経験したことはある、とても悲しい出来事であるのは間違いない。実際に過去では断つた後に泣いていた人もいた。

もしかしたらという希望が叶うことのない現実になつてしまうのは落胆するのも、涙が出てしまう程悲しいのも無理がない。

けれども、彼女はとても悲しい筈なのに、俺が気にしないように努めてくれる（原因をつくつたのは彼女だけでも）。

彼女の悲しい声音が胸に嫌な違和感を残してこびりつく。

だからこそ、少し恥ずかしいけれど、本音で話をしようと思う。

全部伝えるのは厳しいけれど、無理かもしれないけれど、この理解らない胸の内を全部話させてもらおう。

もちろん分かつてもらえとは思わない、でもこれが俺に出来る精一杯の誠意の見せ方だから。

「前にさ、光ちゃんの応援は特に、凄く元気が出るつて話しをしたの覚えてる？」

「はい……っ……臆気ながら」

「光ちゃんは俺にとって特別な存在だよ。お世辞でもなんでもなく、本当にそう思つて

いる。でも今は、彼女とかそういう事は考えられない、答えが見つからないんだ、それを探す……余裕がない。もし、待つてくれるんだったら夏が終わるまで待つて欲しい」

「つ……いえ、大丈夫……つ……です。ごめん……なさい……ありがとう……ございます……約束してください。必ず、勝つて、勝ち抜いて答えを出すつて」

嗚咽が一層ひどくなった、自分勝手に我儘で、あまつさえ女の子に告白させたというのに関わらず返事を先延ばしにする最悪な男だ。

彼女のことより野球のことで頭がいっぱいで、おそらく彼女には人並みの青春の思い出すらも味合わせてやれないつまらない人間だ。

彼女の一途さに甘えた回答は、我ながら悪手中の悪手だと思うけれど仕方がない。そう言う不器用な性格なのは長い付き合いで自分が一番よく知っているから。

「ありがとう……自分でどんな答えを出すのかはわからない、引き伸ばして悪いけれどそこだけは先に謝っておく。本当に申し訳ない。そしてありがとう、こんな奴を好きになってくれて」

嬉しかったよ、とは言わなかった。過去形だとなんか終わったみたいで嫌だから。

「いい返事がもらえるように、頑張つて応援しますから……思う存分暴れてください」

「仰せのままに」

——本当に、ごめんなさい

電話を切る直前に何か聞こえたような気がした、多分頑張つてとかそんな感じだったと思う。

流石にこの雰囲気です「他に好きな人が出来たら全然付き合ってもいいからね」とは言えなかった、彼女の気持ちの本物だからこそ口に出せなかった。

1

7月27日、準々決勝。青道—薬師。西東京ベスト4を決める試合という事もあつて客の入りは多い。

市大三高を破り勢いよく試合に臨む薬師高校と6年ぶりの甲子園を狙う青道高校との戦いは、大きな注目を浴びるのは必然だろう。

共通点としてはどちらにも確かな潜在能力を秘めた1年生がいるという事。

勝敗のカギは投手が握つていると言つても過言ではない、市大三高戦のように薬師と点の取り合いを始めたなら勢いのある薬師に軍配が下りかねない。しかし投手陣がそれを止めることが出来れば青道の優位と勝利は揺るがない。

オーダー交換の時点から互いの監督の駆け引きは始まっている、薬師側だけではなく青道高校も同じくして。

薬師高校の監督、轟雷蔵は想定外の事態に少し黙り込んだ、がいつものように振る

舞った。

監督の動揺は選手に伝わってしまおうし、それは最も愚かな行為だと理解しているからだ。

「いいか！ ここから先はテメエらの仕事だぞ!! テメエのために打て!! テメエのために守備につけ!! そんな勝利の味ってやつをしこたま味わいあがれ!!」

一方で青道高校としても思い切った起用方法に幾何かの選手を除いて少なからずの動揺が生じている。

その淀みを払拭するかのように櫛を飛ばす。

「その一投に、その一步に、そしてそのひと振りにお前たちの全てが映る。迷いは要らん!! 自分たちの野球を貫き通せ!!」

互いの怒号が飛び交いセンターラインに沿うように睨みあう、青道の標的は自分たちを無視、眼中にないと公言した轟親子。

青道・薬師共に今大会初のオーダーで臨む準々決勝。異様な空気に包まれたままゲームが始まろうとする。

薬師

1 轟 三

2 秋葉 左

9	8	7	6	5	4	3	2	1	青道	9	8	7	6	5	4	3
倉持	白洲	山元	御幸	増子	結城	伊佐敷	小湊亮	雨宮		大田	小林	渡辺	三野	福田	山内	三島
遊	右	投	捕	三	一	中	二	左		中	遊	捕	投	二	右	一

「ここで言うのもなんだが、昨日はよく寝れたか？ 随分朝早かったみたいだけど」

「問題ないっすよ、野暮用を済ませただけなんで。今日はそんなに調子悪くないはずですよけど？」

「いや、何でもねえよ。ただ、確認だ」

「昨日のこと心配しているんだったらそれは俺を見くびりすぎです、この夏を勝つこと以外大事な事なんてありません」

あくまで見据えるのは轟雷市、御幸と話してはいるがベンチ前で素振りをしている彼に向けて闘志を放っている。

「その様子なら大丈夫だな……っつても、やってくれるよな、初端からコイツと勝負なんてよ」

「逆にコイツを仕留めれば流れを一気に持ってこれる。確かに手ごわい相手ですけど、関係ないっすよ。誰であろうとねじ伏せるだけっすから」

「流石分かってらっしやる……俺から言うことはもう無い。後は結果で示すだけだ、頼んだぞ」

「うっす」

御幸はトンとミットで虹稀の胸を叩くと自らのポジションに向かう。投球練習を済ませ、セカンドへボールを投げて「先頭集中！」とグラウンドにいるメンバーに向かつ

て叫びかける。

心配なのは立ち上がりだけ、状態は悪くはない。気持ちの入れ方も充分過ぎるくらい、だが市大三高のエース、真中の球を完璧に捉えた1番打者に対してどこまで通用するのかは完全に未知だ。

—まずはインロー、プレートはサード側目一杯、外れてもいいからしっかりと腕を振って投げてこい！

サイレンが鳴り響く中投げられた初球、球場を包む始まりの音を切り裂くように金属音が割り込んだ。

最初に審判が告げたコールはファール。

投げられた球の勢いをそのままにバックネット最上段に軌道を変えて飛び、ガシャンと音を立てて地面に転がった。

1ストライク・ノーボール。些か有利になったカウントではあるが轟雷市の存在に青道高校は戦慄する。

「ハハ……カハハハ……ギユ・ギユン、いやギユン・ギューンってボールが来た！ スゲエ、スゲエ!!」

—初球からタイミングばっちりかよ……次は、これだ

結果が表しているように、轟雷市という打者はかなり危険だとグラウンドを守る9人

が再確認した。

目を見張るのはスイングスピードと大きなフォロースルー。そして打席にいる彼に向けて向けられるベンチからの信頼の声。

虹稀は表情こそ変えないもの嫌な汗がにじみ出るのを感じていた。

続いて投げた球はカーブ、外角低めを僅かに掠る審判の采配に委ねられたボール。

一度浮き上がり、その後突き刺さるように落ちる回転数の多さによる独自の変化を持つ変化球はあつまり見送られた。

判定はボール、カウントは平行に。

「カハハハハ浮いて！ 落ちた！ スゲエ、スゲエ！ ポテンシャル高エー！」

—このバッターを一番に置いている時点で待球作戦で来るとは思えない、それにピッチャーがピッチャーだ。それはあり得ない、なら狙いはなんだ？

嫌な汗が御幸の頬を伝った。同時に虹稀も予め上げていた警戒レベルをさらに引き上げる。

尻上がりとはいえ体は十分に温め状態は最高に近い、けれどストレートはタイミングばつちり、自慢の変化球には体勢が崩れない。

沢村達から聞いた情報だが、後は相手になるのはこの西東京では成宮鳴ただだと豪語していたらしい。実際のところ正直領けると虹稀は底の知れなさに驚いた。

同チームの結城哲也、雨宮瑠偉を達人だとするのならば轟雷市は猛獣だ。

初めての緊張感と未知の敵との遭遇にドクン、と心臓が跳ねたのが分かった。

―狙いはその投手が一番自信を持っている球、その他なんてどうでもいいって言ったけど……こいつだけはなんか違うんだよなあ。珍しいことに自信を持っているのは制球、そして悪く言えば自信を持っている球種なんて何ひとつない。良く言えば突出しているものこそないが全て高水準。とは言っても球種は大きく分けてストレートとカーブの2種類、狙うのはもちろんスストレートしかねえだろ

その後真つすぐを外に外し、カウントは2ボールストライク。

―際どい所振ってこねえ、このまま歩かせるのは避けたい……場面が場面だが頼むぜ虹稀はサインを確認すると数瞬間固まったが、2度頷き、大きく振りかぶった。

そして自ら持つギアを最大まで引き上げる、勝負どころと判断し、更には公式戦の勝負所で投げたことのない球と言うのもあり、いつもよりゆつくりと、力を溜めるように振りかぶる。

大きく上げた足、地面に右腕が付きそうになるまで傾けた体勢から下半身の力を使い上からボールを投げおろす。

本人曰く曲がる気配を見せないスライダー、通称カットボール。

実際今まで御幸は公式戦では数回しかサインを出していない、故に投げる本人は見え

ない球種と勝手に勘違いしていたが実はその真逆、御幸が隠し玉として用意していた隠れた牙。

投げたことがあるのは先日の明川戦でほんの数球だけ、偵察に来ていたとしてもカツトボールを投げられると知らなければ変化も小さいため回転軸のずれたストレートとしか解析できない。

今まで多投しなかったのは秘密兵器として使用するためだ。準決勝、もしくは決勝で投げさせようとしたその球種は変化は微小、しかし並の打者であれば曲がったことに気付きもしない手元で激しくする変化球。

明川打線程度であれば芯を確実にずらしバントのような内野ゴロが転がる程。

その球種の使いどころは今と判断。思惑こそ両者一致してはいないが、想定通りに力を込めて投げ込まれる白球を目掛けて轟雷市は恐ろしい勢いでバットを振り下ろした。

狙い通りのストレートと判断した轟雷市は先程のイメージの軌道のままに一閃。

芯を外れた鈍い音。

反比例するように地を這う白球。

飛び込んだ先は4番結城の守るファーストミットの中。

そのまま自ラベースを踏み最初のアウトと流れを手繰り寄せる。

まずは最初の難関を潜り抜けた。

青道高校側のスタンドから追い風のように拍手と怒号の声援、そしてちらほら混じる黄色い声がそれをさらに後押しする。

試合は嫌な静けさを残したまま1回の表が閉幕した。

2

轟雷蔵は想定外の事態に崩れてしまった計算を必死に立て直そうとする。

まさか1番に据え、想定内であれば今頃出塁している筈の息子が「スゲエ！ キュガって、バットに当たる直前に曲がった！」と後ろで楽しそうに騒いでいるのを無視して必死に虹稀の想定外の力を情報の海から洗い出す。

「雷市がファーストゴロだ?!」あの程度の球速であいつが詰まるとは考えられねえ……ん？ 今バットに当たる直前に曲がる、つつたか？ 何がストレートとカーブだけだよ、投げられるじゃなえか！ おいおい、こりや聞いてねえよ

その後も相変わらずストレートに的を絞る薬師打線だがコーナーを丁寧に突くピッチング、御幸の技術によるキャッチングで多少のボール球はストライクになるため変化球を振らざるを得ない。

的が絞れていなかった。

静寂に包まれる薬師打線、一方で青道高校は1回の裏、1番に抜擢された雨宮瑠偉の内野安打から1回裏3点をスコアボードに刻み点数は0—3

「やってくれるぜアイツら……」

「これでまだ1年ですからね」

「真田ア、肩つくつとけ。これ以上は試合が決まりかねえ」

2回の裏、9番倉持がショートへ鋭いライナーを飛ばし、1アウト。

続く1番の雨宮瑠偉がフォアボール出塁、2番小湊亮介のエンドランが最高の形で決まり1・3塁のチャンス。

伊佐敷の併殺打の間に青道がまた1点スコアボードに刻み、4番結城にツーベースヒットを打たれたのち薬師はたまらず投手を交代した。

「三回の裏・薬師高校選手の交代をお知らせします。ピッチャー三野君に代わりまして真田君、ピッチャー真田君」

実質のエースの登板となり暗い空気が一気に消えた、反転し明るくなる薬師高校だが青道側からすればこの投手さえ攻略すれば勝利は確実なものとなる。

だが、この窮地を任された男は5番増子に死球を当てながらも6番の御幸をしつかり打ち取り点数をこれ以上刻ませない。

—真田、流石だぜ……勝負はこのあと2巡目だ、雷市の一発には流れを変える力がある。完璧な状態が続いている投手程、ちよつとした歪で大きく崩れてくれるからな。頼んだぜ雷市！

順調に力を見せる強豪・青道高校。しかし観衆が見たいのは強者が行う当たり前の勝利ではなく、格下・薬師高校の下克上。

これまでの試合無失点、完璧に近い内容で傷がつかないままマウンドに立ち続けた虹稀に最大の試練が降りかかる。

「4回の表、薬師高校の攻撃は1番 サード 轟君 轟君」

「そろそろ反撃が見たいぞ！ あの投手打ってやれ！」

「スゲエの打てよ！」

市大戦のような大波乱を期待している。

中学時代とは観客の人数も重みも違うマウンドで、虹稀は知らず知らずの内にプレッシャーを感じていた。

初回から今まで抑えれば抑えるほどに大きくなる薬師高校への声援、負けられないという強い思い。

厳しいコースを初球から突くことが出来るが、初球から突き続けるとその次はさらに厳しい所、その次は……と精神的な疲労が掛かり続ける投球を続けていた。

御幸が意図してそうしたわけではなく、比較的甘いコースから入ることもあるが、虹稀自身の判断でそうしていた。

“全てに対して全力で”

心意気は素晴らしいが、精神の磨耗は計り知れない。

愉しもう、という心意気はない。先輩たちの夏を終わらせたくないという責務で一杯だったのにもかかわらず、特別だと気付いた後輩に返事を返すための執行猶予、という名目で自らに課した責務から「勝たなければならない」という気持ちの方が楽しむという余裕は消え失せた。

故に調子上がり切らずにいた。心のストッパーが外れずれきれずにいたということか。

調子は悪くない、持ち味である制球に乱れはない、だが本来の持ち味である尻上がりに調子を上げるエンジンにスイッチが全く入らない。

嫌な汗が一筋、頬を伝わり地面に落ちる。

―同じ投手に2度もやられんじゃねえぞ

虹稀の内心の焦りを知ってか知らないでか定かではないが、轟雷蔵はあくまで不敵な笑みを崩さず息子を信じた。

4回表、未だ点は入らず、ランナーも出ず、完全に抑え込まれている。

勝ちへの光明が見えるとするならばこの回、轟雷市が流れを変えるしかない。

―調子は悪くない、制球も球威も変化も明川戦以上だ。けれど、哲さん達を圧倒していた時ほどじゃない……今日は落ち着きすぎている

御幸だけが虹稀の異変に気付いていた。

いつも通りのクオリティスタートを切りここまで一人もランナーを許さず投げ続ける好機を見て誰一人おかしいとは思わないだろう。

信頼が芽生え始めたいい兆候ではあるものの、この場面で吉と出るか凶と出るか御幸には判断がつかなかった。

背番号18番のピッチャーは最善を尽くしている、要求通りのボールを要求以上の意図も持つて投げ込んでくる。

だから、後は自分のリード次第だと御幸は不安要素をすべて拭いて轟雷市に挑もうと腹を括った。

4回表の初球、サインを出す前に御幸は拳で胸を叩いた。

球場の雰囲気は薬師一色であり、燻っている空気が一気に発火するのを防ぐのならばこの打者を抑えるしかないというのは共通認識で確認するまでもない。

きつとこの経験は初めてだろうと考え、御幸は気持ちを強く持て、とメッセージを込めて胸を叩く。ジェスチャーを送る。

気後れするな、気持ちを強く。

—負けられない、この場所を任されている以上1点もやることは出来ない。

約束をした、思いを背負った。この夏を、上級生を蹴落としてもらった番号を背負つ

てここに立っている以上、先輩たちとの夏を日本で一番長くするために。こんなところで躓いてはいけないんだ。だから、もつと厳しく、丁寧……！

入りの一球は打者との対戦の時に非常に大事になってくる。

ファーストストライクを取り攻めに行くか、外して様子を見るか、詰まるところ初球も大事ではあるのだが2・3球目も重要さで言えば劣りはするが大事なものだ。

山元虹稀という投手はその要望に応えられる選手であり、御幸は決して悪くはないリードをした。

左打者の轟雷市に対し、入りの初球。

内角ギリギリ、ストライクかボールか審判に判断を委ねなければならぬ微妙な位置から10人いればそれこそ10人が、100人いれば99人はボールだと判断するコースに投げた軌道を見せつけるためにわざと投げたカットボール。

僅かだが、確かにゾーンから外れたボール球なのだから、しっかりと腕を振って投げ込もうという意図はあれど、打者を抑えようとする気迫はない。

あくまで軌道を見せるためにただ投げた、そんな球。

思考の末か、本能で判断したのか、定かではないが轟雷市のスイングは間違いなくカットボールのみに絞った軌道だった。

轟雷市は虹稀が白球を弾き出した瞬間体を開き、従来よりも右足をファースト側に偏

らせて踏み込んだ。

コースは完全にボール、だが開いた体の向きの偏差を考えるのなら内角甘く入ったカットボール。

強烈な粉碎音。

一瞬の静寂、虹稀を押しつぶさんばかりに浴びせられる歓喜の声援。

初めて経験する逆境は点差は開いているものの逆風に煽られるのが確とわかった。

轟雷市がダイヤモンドを一周しホームベースを踏み点差は1点縮まり1―5、依然として点差上の余裕はあるものの青道側は不穏な空気を、薬師側は追い風を感じている。

虹稀は手の甲で汗をぬぐい悔しさと申し訳なさを齒噛みし自分のものではない歓声を浴びていた。

汗で濡れたアンダーシャツが急に重く、冷たく、押し掛かる、カランカランと音を立て何かが外れるような音がする。

ライトスタンドに飛び込んだ白球はその様子を嘲笑うかのように見下ろしている。

精密機械の歯車は間違いなく狂っていて、彼の中に潜む怪物は一向に目を覚ます気配がない。

崖つぶち

2

「悪い、俺のミスだ！ 気にすんな！ 次、集中な！」

ストライクゾーンのボールではなかった、打ち頃の、それこそスタンドに叩き込まれる予定は一切ない球だった。

しかし誤算と言えばそれまでで、結果論から言えば御幸の指示に忠実に従った虹稀が打たれたのだから非は投げた方ではなく指示した方にあり、点数が入った事実は何をどう言おうとも動かない。

気にするなと内心動揺しながらも御幸は新しいボールを投げ渡すと同時に発破をかける、虹稀はいつも通り無表情でコクリと頷くと帽子を深くかぶりなおし、鬱憤を晴らすかのように左足の着地点を深く掘っていた。

その様子に違和感を感じていた、直感的なものに過ぎず違和感にしか至らなかったが御幸の考えていることはほとんど正解に近い。

山元虹稀は現時点で決して調子が悪いわけではない。

だが、氣負い過ぎた気持ちだが本来の持ち味を引き出せずにいた。

早朝に後輩から気持ちを伝えられ、意識してはいないと言いつつ決して少なくはない時間をかけて辿り着いた不甲斐ない答え。

自分を鼓舞する意味でも使った夏が終わるまで待っていて欲しい、という宣言は想像以上に虹稀の精神を追い詰めていた。

マウンドに立つごとに、観客が増えるごとに、バスの中が緊張感で溢れるにつれてその重みを背負い過ぎてしまっていた。

楽しむだけではないけない、勝たなければ意味がない。

誰かのために、スタンドに見えるベンチ入りできなかった、後ろを守ってくれている上級生たちのためにも負けられないと……負けてはいけないと実感と使命感を持つて臨む初めての先発のマウンドはどこかいつもと違っていて、初めてにしては重過ぎる荷物がその身に食い込んでいた。

走り込みによる身体能力の向上、フォームの改善、体に染みついた制球力、そして御幸によるリードによって表面上取り繕われてはいるが今の一撃で余計に追い込まれてしまった。

ほんの小さな歪みが、精密機械の調子を狂わせる。

轟雷市に続く2番秋葉に一二塁間を破られるヒットを打たれた後、3番三島にライト

前に運ばれアウトカウントは依然と変わらずに1・3塁。

点差はまだ余裕がある、しかし異様な空気は確かに侵食している。

漂う空気は妖しさを秘め、青道高校としては喜ばしくないプレーが続く。

—もつと厳しく、もつと鋭く、もつと、もつと……もつと!

焦れば焦る程乱れる投球フォームと精彩を欠くコントロール、雰囲気にもまれ冷静を装う表情も仮面が剥がれはじめ丸裸になった1年生ピッチャーの姿がそこにはあった。

青道高校のベンチも虹稀の突然の転調により急に慌ただしくなり、既に入っている沢村の隣で川上もブルペンで投げ込みを始める。

内野手全員がマウンドに集まり虹稀に声を掛ける、点差はまだあり打たれてもいい、任せろと虹稀に声を掛けるがそれで収まる程精神状態は良くなかった。

野球に集中していたがゆえに舞い込んでしまった異質のストレス、そして度重なる勝ちから圧し掛かる経験したことのない重圧がここに来て遂に蝕んだ。

「いつも通り低めに集めれば心配ねえよ、腕をしっかりと振ってな。行けるか?」

「もちろん……!」

それぞれ内野陣から一言ずつ貰うが、励ましの言葉は意味をなしていない。

軽いパニツクに陥っている虹稀は如何にしてこの場を切り抜けるか、自ら抑えるのではなく完全な他力本願思考に囚われていた。

自分の状態が分かっていないわけではない、一度センター方向を見ながら滑り止めを余計なくらいに手に付けグラウンドを眺める。

—今日の球場はやたらと狭く感じるな……とにかく打たせてアウトカウント稼がないと

この上なく冷静に努めるが球場を見渡した感想が如何に先ほどのホームランを引きずっているのか垣間見える。

本来の持ち味である冷静さを履き違えたネガティブ思考が身体に影響し、思い切りの良い腕の振りを縮こまらせ、制球や球の質にも影響していた。

150km/hをも超す剛腕・降谷の対策を抜かりなく行っていたこともあり、1巡目に比べると大幅に投手としてのレベルが落ちてしまっている虹稀は薬師高校からすればどうすればいいかわからない投手から何とか打てそうな投手へと変貌していた。

大きく深呼吸を行い、手に付きすぎたロージンを息で落とすと覚悟を決めてマウンドへ登る。

下を向いて精神を整える虹稀を、ファーストへ戻る途中の結城哲也は違和感を覚えた。

マウンドに向かう背中があまりにも小さい、この前自分に対して自信満々に投げ込んできた様子とは全く違う。

最初の方の結果が出せず苦しんでいる時と重なり、咄嗟に出た言葉だった。

「俺たちがそんなに信用ならないのか？」

「……？ いえ、そんなことは」

—何をいまさら、信用していないわけがない

虹稀は困惑していた、結城哲也がわざわざ自分に何を言いに来たのかがわからない。外界からの刺激は落ち着こうと、冷静に努めようと必死な虹稀の鍍金を剥がしていく。

「それなら点数なんて気にするな、俺たちが何点でも取ってやる。だから……いつも通り元氣よく投げてみる、今日はいつもより大人しいぞ」

「大人しい、ですか……」

「こんなこと言うのも、違うかもしれないが、楽しく投げてみるのもいいかもしれない。安心しろ、点ならいくらでも取ってやる」

長く会話するわけにもいかず、ポンと背中を叩き駆け足でファーストへと戻っている。

「ありがとうございます、哲さん」

その背中に、小さな声で感謝の言葉を述べた。

結果で答えを示すのが自分に出来ることだと考えたからだ。

—俺は馬鹿か、何度同じ間違いを繰り返すんだ。信頼できる先輩たちが後ろにいるの

は間違いない、ただ頼り過ぎたらだめだ。あくまで支えてもらう、足りないところを補ってもらおう。俺がチームを勝たせるつもりでいなくて何ができるって言うんだ

蝕んでいた柵からようやくやく解き放たれた、マウンドに向かう足取りは軽くはない。

―やっぱ怖い。だから、戦わないと

汗をぬぐいながら空を仰いだ、雲一つないジリジリと太陽が照り付ける夏日和。投手としてはあまり好ましくないが虹稀の目を覚ますのには十分な暑さだった。

―保守的になるな、今までも挑戦し続けてきたからここに立っているんだ……大事なのはこの後、あと1点は仕方ないけど3点目は絶対にやらない。それでいて、流れをこっちに引き戻す

ノーアウト1・3塁、スコアは1―5、点差は4点。HRが出れば1点差へと詰め寄られる場面で迎えるのは4番山内。

サイン交換をして頷く、そして無表情から転じて初めて見せた表情は微笑。

爽やかな笑顔ではなく、獰猛な獣を思わせる殺気がこもった小さな笑み。自らの恐怖心を抑え込んで言い聞かせる、俺はまだまだ楽しんでるぞ、と。

体は既に温まり、準備が出来ている。ようやく現れた山元虹稀の本来の姿は遅すぎたかもしれないが、十分に効果的だった。

細かな制球はこの状態になると厳しく、大雑把な制球になるもののボールの威力、投

げるときの氣迫、威圧感の出てくるより高く引き上げられた足と体を捻じりトルネード氣味から繰り出される3種類のボールはほんの少し前のモノとは同じではない。タイムを取った後3球連続でボール球が続いた。

どんな剛速球も、キレの良い変化球もストライクゾーンに入らなければ意味がない。御幸は僅かばかり焦り一筋の汗が顔を伝う、だがここは腹を括り全てを託した。

―ストライクゾーンにとにかく投げ込め、そう簡単に打たれねえよ
意図を汲み取り、力強く頷く。

4番山内に投げ込んだボールは外より真ん中のストレート。御幸が要求した通りのボールではあるが、如何せんコースが甘すぎる。

故に打者は迷わずに手を出した。

しかし、再び快音が響くことは無かった。一・二塁間のやや詰まったあたりを結城が的確に処理、ホームで刺せないと判断しセカンドへ送球、倉持がファーストランナー三島の送球妨害を難なく避けながら一塁ベースカバーに入った虹稀に送球し2アウト。

サードランナーの秋葉が併殺の間にホームを踏み、スコアボードには2という数字が刻まれた。

「ナイスカバーだ」

結城哲也は悔しそうにスコアボードを見つめる虹稀に声をかけた、確かに点が入った

が薬師高校が不完全燃焼のまま攻撃にひと区切りつけたことの方が大きい。

「つす、キャプテンもナイスプレーあざっす」

結城哲也の激とランナーがいなくなったことがメンタルをリセットするきっかけになったのか5番福田に対してはインコースのストレートを詰まらせた。

ゆらりと上がったフライはいとも簡単に虹稀の左手に納まり、マウンドにボールを置いてベンチへと向かう。

厳しい局面だった、事実轟雷市のHRから動揺しランナーを出したが最少失点で切り抜き、崩れずに立て直す。

冷静沈着、頭腦的。そんな印象が消えるくらい元氣澆刺で荒々しく声を掛ける、必死に取り繕う姿を見て御幸は張り詰め過ぎた緊張の糸を少しだけ緩めた。

ー取り繕う元氣さえあれば十分だ

今まで順当だった彼の真価が問われる、点を取られた後、ピンチの時にどうなるのかという片岡鉄心が見定めようとした真価を見定めるには十分だった。

全身の力が抜け力を入れるべき時に最大限のパフォーマンスを発揮する投球フォーム、ゆらりとした体重移動から鋭い腰の回転と胸がはち切れそうなほど逸らした状態から鞭のようにしなる腕が爆発的な威力を持つ速球を生み出す。

何より恐ろしいのは身体面も精神面もまだまだ未熟という事だ。

— 偶にいるんだよな、崩れる土壇場で飛躍的に伸びる奴……アイツからは金の匂いし
かしねえ……さあて、どうするか

流れを完璧に捕まれた。おそらく、もう一度轟雷市の打席が来るまでは変わるこ
ない絶対的な流れを作られてしまった投手に、轟雷蔵はお手上げとばかりにグラウンド
を静観する。青道ブルペンに入っている10番と20番をつけた2人の投手を傍目に、
今は待つ時間だと腹を括った。

3

「4回の裏、青道高校の攻撃は1番 レフト 雨宮君」

本日2打席1安打1四球と数字では好調に見える彼だが、今までにないくらい自己評
価は低かった。初回到内野安打を放つも、シヨートの深い所にたまたま転がったポテボ
テの当たり。持ち前の俊足で出塁をもぎ取ったが本来であればレフト前に運んでいた
はずだった。

2打席目に至ってはボールを上手くとらえきれずにファールゾーンに飛び続け、結果
的に相手投手の自滅という形で1塁に出ることが出来たが納得はしていない。

— 今日ミスシヨットが多すぎる、フォームを変えたのが原因なのは間違いねえ、が
言い訳にしたらダメだ、何より倉持さんにも示しがつかねえ……

雨宮瑠偉自身も驚く程の大抜擢だった。あの夜に倉持が言った意味深な言葉を考え

るに、監督に直談判したかもしれないと瑠偉は考えていた。

事実スターティングメンバーが発表された際、誰もが動揺を隠せないでいた中で倉持だけは瑠偉の方を向き、こくりと頷いたからだ。

当然負い目などなく、雰囲気を読んでしやぎはしなかったが、心の中で盛大なガツツポーズはしていた。やったー、棚ぼただ！ という具合に。

なるほど、昨夜の意味深な話はこういう事か。と妙に納得していたくらいだ。

しかし、天狗の鼻のように伸びた傲慢にも似た気持ちは轟雷市のスイングにより一瞬にして失われる。

初見にして山元虹稀のストレートにタイミングをしつかりと合わせ、1打席目こそは凡退に打ち取られたが、2打席目にしてホームランをスタンドにぶち込んだ。しかも、甘いコースではなくボール球を。

遂に悟った、自分は確実に轟雷市よりも劣っている。現時点では間違いなく。

背中は見える、が結構遠い。少なくとも今日中には絶対に追いつけないのだと確信した。

身体能力も体の素質も野球センスも劣りはしない。ただ、バッティングに関しては現時点では敵わないだけのことだ。

——つつてもそれが一番悔しいんだけどな、認めざるを得ない。でもこれが俺の現在位

置、スゲエ奴がいるもんだ

今は私情は交えない、チームの勝ちが最優先なことくらい弁えている。薬師の実質的エースともいえる真田俊平が一度断ち切った青道の圧倒的な流れを取り戻す、その一点に尽きる。

現状では彼がマウンドに上がった後に点差の差はあれど勢いだけで言えば薬師高校が上を行く、それは観客がジャイアントキリングを望んでいるのが大きな理由ではあるが。

WE W I L L R O C K Y O U の音楽に準えた自らの応援歌に乗せて太々しく打席に向かう。

そして、ホームベースに覆いかぶさるように打席に立った。

—この野郎、ぶつけられてもいいって腹か！ いい度胸しているじゃねえか

—当ててくるんだったら当てて来いよ、塁上からいくらでもかき回してやるよ

薬師バッテリーはアイコンタクトを取り、迷わずインコースに構えた。もともとインコースを主体的に攻める投手、強気な投球によって輝くシュートとカットボールがあるのだからベースに覆いかぶさられようと怖気づく要素など何もない。

流れを取り返そうと応援で盛り上がる青道サイドに対し、真田も負けじと力投を行う。

特に初回から投げ続けている1年生投手と、目前にいる太々しい1年には負けられないと気持ちが一層に強くなる。

瑠偉に投じた1球目、インコースにカットボールを投じる。

鋭いスイングがボールをしつかりと捕えることは無く、ハーフライナーがファースト後方のフェンスに直撃する。

もしフェアゾーンに飛んでいけばヒットゾーンに落ちたはずだが、急激に手元で曲がる変化球にすぐさま対応するのは至難の業だ。

その後も厳しいコースを突き続ける薬師バッテリーに雨宮瑠偉も強振を続け食いつく。

しかし、カウントが2-2になるときに強振をすることを一度やめた。

—何とか当て続けることは出来る、今日は球も良く見えているし徹すれば暫く粘れると思う。けど、今求められるのは確実に塁に出ること……。この投手の投げ方からして守備範囲はそこまで広くないはず、それなら

鋭い当たりはファールゾーンに飛ぶがスイングスピードの賜物によるもので強振をした結果に過ぎない。初回から強振を続けてきたのもあり、今までの実績と今日の抜擢を含め内野陣は警戒して強い当たりには備えている。

雨宮瑠偉に対して投げた第6球

「よーいどん、だ

2ストライクから試みたセーフティーバント、グラウンドにいたほとんどが意表を突かれた。インコースに食い込むように投げたゾーンから外れるシュートにうまく合わせや強く勢いでサードへ転がす。

ほとんど同時に地面を抉り、瑠偉は猛スピードでファーストに疾走した。

良くも悪くも薬師側で唯一意表を突かれなかった轟雷市は迷わず突っ込む。

「雷市！ 触るな！」

ファールゾーンに切れればスリーバント失敗で1アウト、快足を飛ばす青道の1番打者を見るにこのままでは間違いなく間に合わない。真田から見てもこのままの勢いで転がればほぼ確実に切れるであろうと声を上げたが時は既に遅かった。

「カハハハハ！」

真田が叫んだ時には既にボールを掴みかけてしまっており、止まれなかった。グラブではなく直接右手で掴み猛進した勢いそのままに跳ぶ、体を上手く使いファーストに放るが僅かに上に逸れてしまった。

砂ぼこりを巻き上げファーストに頭から飛び込んだが、普通に駆け抜けても全く問題ないタイミングで1塁手三島の足がベースを踏む。

審判のコールは当然セーフ。

状況、演出を含め観客が沸く。

依然として観客は薬師の勝利を心のどこかで期待しているのは変わらないが、目の前で行われる魅せるプレーに対しては敏感に反応する。

10回の内の1回の劇的な勝利を起させないために、試合を凍結させる起点になればと、すぐさま片岡鉄心からのサインを受け取ると大きくリードを取った。

―サインはヒットエンドラン、戻ることだけに集中すればギリギリこのリードだったら戻れる

通常よりも大きくリードを取るだけではなく、わざとらしく足音を立てて真田の集中力を掻き乱そうと視覚と聴覚にノイズを混じらせた。

少しでも気になれば、集中を削ぐことが出来れば。4回裏、点差は3点。試合を凍結させて終わらすには5回までで10点差、7回までで7点差広がってなければならぬ。

最高の終わり方こそコールドゲームで終わらすことだが、戦術的に言えば真田俊平という投手の息の根を止めること。瑠偉のセーフティーバントからヘッドスライディングまでして塁上に出た意味を分からない面々ではない。

カン、と芯でボールを捉えた音を瑠偉は耳にした。やや詰まり気味なセンター返し、1・2塁間の真ん中あたりでその行く末を確認する。

セカンドが必死に手を伸ばすが無情にもポツリと、芝生の上に白球が零れ落ちた。その様子を見届けると快足を飛ばし砂煙を巻き上げスコアリングポジションへと踏み入った。

4

状況は無情にも進行する。

2番小湊亮がセンター前に弾き返し1・2塁の場面を作ると3番伊佐敷がライト前を放ち、その間に1番打者雨宮瑠偉がホームへ突入し1点をもぎ取る。

続く4番結城に対し厳しいコースを突いて攻めるも四球で満塁のピンチを作り出す。ノーアウト満塁のチャンス、5番増子のレフトへ犠牲フライで2点目を追加。6番御幸は外に逃げるシュートを上手くショート頭上に運びこの回3点目。1アウト1・3塁の場面で7番の山元がアウトコースのカットボールを引つ掛け4―6―3のダブルプレーで4回裏の攻撃が終了した。

5回の薬師の攻撃は変わらずマウンドに上がり続けた山元虹稀の前にレフト前ヒットを内ランナーを出すも7・8・9番を凡退に抑え淡々と攻撃が終了する。

2点を追加し、その後すぐにランナーを出したことから観客が沸くもその後地力の差をまじまじと見せられ反撃のムードは一変、願望に代わっていった。

それだけに、味気なかっただけに轟雷蔵は焦りを隠せない。

一度崩れて立てなつたはいいが、その裏に先に自らのチームの投手が崩れる、そして直後の自分のチームの攻撃は一度ランナーが出塁し盛り上がりを見せたのは良いが、後続が完全に抑え込まれ為す術がない

スコアは2―8の6点差、あと2点入ってしまったえば7・8回のどちらかで勝敗は明確になる。

ヤバいぜ、と雷蔵の嫌な予感は的中した。1アウトから9番倉持が持ち前の俊足を飛ばし内野安打で出塁するとすかさず盗塁で2塁へ、1番雨宮のセカンドゴロの間に3塁へと到達。

2番小湊亮のレフト前ヒットで1点を追加、3番伊佐敷をセンターフライで打ち取るも点差は2―9と広がるばかりだ。

点差は7点、7回までに薬師が1点でも取らなければ試合は強制終了となり敗北が確定する。

ほんの僅かな勝ち筋が見えるとするのなら轟雷市の最後の打席とも考えられる次回、すなわち6回表に決まっていると言つても過言ではない。

背番号18の1年生右腕は変わらさず準備をし続け、ブルペンで投げていた10番と20番の投手はベンチへ戻り代わりに1番が投球練習を始めている。

相手が手順さえ間違えなければ詰みだと、表情には出さないが轟雷市の打席が勝負だ

と腹を括った。

3度目の対決、3回に1回打てればプロでも凄いとされる中で2打数1本塁打の成績を収めている轟雷市は山元虹稀個人との勝負には勝っている。次に凡退したとしても個人的な勝敗は変わらない。

だが、この場面では次の打席が全てなのだ。前の打席で圧倒的に勝つていようと可能性がある6回表で1点でも取らなければお終い。総合力から考えて望みは、ない。

よつて轟雷蔵は本気でチームを鼓舞した。雰囲気でも、一瞬の勘違いでもなんでもいい。とにかく望みを繋げるために今思いつく限りの青道の1年生投手の攻略法を自信満々に力説する。

6回になり短くなった投球練習の最中、打席の横でブンブンバットを振り回す轟雷市と山元虹稀の目が合う。

この打席が命運を決める、首の皮一枚繋がったまま僅かな光に縋りつくか、最後の望みすらも絶ち切るか。

双方ともに睨みあう。轟雷市も山元虹稀も真剣そのもの、陽炎で空気が揺らぐ中、視線が交わり火花が飛んだ。

粉碎

5

託されるチームメイトの思い、観客の声援を一身に浴びる轟雷市はまるでヒーローのようだった。この状況を打破してくれ、このまま終わるなど今まで下克上の原動力になつていた彼に浴びせられる思いは球場全体を揺るがす。

だが、轟雷市に届かない。彼が考えているのは山元虹稀の球を打つことのみ。

山元虹稀も気後れは一切していない、投球練習で投げる球はどれも今日一番の球だ。

この試合の最高潮は今だと本能的に理解し、全身の神経が敏感に研ぎ澄まされていた。

ひり尽くような緊張感、信頼できるレギュラー陣、スタンドで怒号を上げて声援を叫ぶチームメイトの思いを背負う。

確かに重い、でも潰れない。

「プレイ！」

短く宣告されると御幸はアウトローに構えた。虹稀が最も自信を持っているアウト

コースへの真つ直ぐ。

頷いて振りかぶった。

肘の間から見える表情に笑みはなく、刀が反射した妖艶な光を携えて見据えている。プレートを踏み左足を大きく上げる、右足に重心を残したままスムーズに体重移動を行い足首から膝、股関節、肩甲骨、肩、肘と最高の状態で連動し放たれた直球。

唸りを上げてミットに辿り着く前にバットが遮った、刹那、爆音と同時にボールが飛んでいく。

打球はレフト方向最深部、ファールゾーンのフェンスへ直撃。

広い球場の中、2人の1年生に視線が注がれる。

……
——くそっ、差し込まれた……ボールがぐおおおおおつてきたらがつて溜めてバント

——馬鹿野郎、なんであのコースをあそこまで飛ばせんだよ。やっぱヤバイよコイツ
打球の方向を目で追って思わず笑みが零れる、素直に賞賛するしかなかった。

タイミングが数瞬早ければスタンドへ運ばれていた、脳裏をよぎる最悪の結果が一気に心拍数を跳ね上がる。嬉しさか恐怖かは判断できない。

——次はこれだ、外れてもいいから思い切り腕を振れ！

御幸が選んだ2球目はカーブ、一度浮き上がる独特の軌道を見せるボールにピクリと

身体は動くが振つてはこない、ベース上でバウンドをしカウントが整った。

——から先ほどHRを打たれたインハイへ明らかなボール球のカットボールを投げ込むが無理やり引つ張りファースト側スタンドへ飛び込んだ。

——さつき打たれた場所にも思い切り投げ込んでいる、その意味では安心だな。ここからは全休勝負球だ、気抜くなよ

意思を込めて強い球で虹稀に投げた。そんなことはわかり切っているとばかりに力強く領きサイン交換を交わした。

要求したのは大きく縦に割れるのではなく斜めに变化するカーブ、構えはインロー。

——何が何でも抑えてやる

——また何かくる！

殺気に近い殺伐とした雰囲気かじみ出る。一瞬たりとも気が抜けない極限の状态が2人を更に研ぎ澄まし一時的に互いが互いに実力以上のモノを引き出していた。

相手が凄いかからどんな球でも打つてみたい。

相手が凄いかから何が何でもねじ伏せたい。

交錯する視線は一層熱を帯びる。

全身を鞭のようにしならせ、いつもより半歩短く左足を踏み込んだ。

体重の大部分を後ろに残したまま上体を十分に使い通常時より若干高くから放たれ

るウイニングショットは最高の軌道で内角低めを掠めようとすることもかなうことは無い。心地良い音を奏でボールの上部分を擦っただけの打球は弱々しく薬師ベンチの前に転がった。

「く・く・きゅって3回変化した！ スゲー！ やべえ！ ぼんってきたらぐぐぐつとためてぎゅん！」

「カハハ！ こうか？ いや、こう！ こうだ！」

——多少外れても構わず振ってくる。少しでも甘く入ると持っていられるぞ

——インハイの真つ直ぐ、ストライクは要らない、勢いで振らせる、か。上等つすよ何度決まったと思ったか。

何度捉えたと思ったか。

たった4球のやり取り、だが今日の試合のどの場面よりも濃厚に進んでいく。

希望を断ち切るか、それとも繋げるか。2人の1年生に全ての視線が注がれ、会場の熱気は絶望と希望の狭間で爆発寸前まで膨張していた。

薬師高校は轟雷市に全てを託す、お前が打たなければ為す術がないとわかり切っているからだ。

青道高校は山元虹稀を見定めている。これから熾烈を極める戦いを任せられる器かどうか慎重に見定めなければならない。

虹稀が頷くと再び緊張の糸が張り巡らされた。この2人の対決の幕切れを目に焼き付けようと固唾を飲んで一挙手一投足に神経を張り巡らす。

2ストライクボール、終わりは近い。

今度は振りかぶった後、十分に間を取ってゆったりと投球動作を始めた。

嵐の前の静けさ、ゆったりとした動作から一転しギリギリのところまで下半身の力を股関節を経て上半身へ伝えた渾身のストレートを放る。

文字通り魂を込めて一直線にミットへと飛び込んだ。

「ボ……ボール！」

審判の判定はボール、だが一瞬轟雷市のバットが出かかった。

戸惑い方からして手が出せなかった、に近い中途半端な見送り方だった。

「スイング！」

御幸は三塁審にすぐさまバットを振ったと判断を求めろが審判はゆっくりと両手を広げる。

つまり、判定は覆らない。

想像以上のボールで応えてくれたことを考えるとストライクに入れるつもりで投げさせれば理想の結果で締めくくれたかもしれない、そんな考えが思い浮かんだ。

今までの配球を踏まえて今回の真つ直ぐはコース、威力、投げるタイミング共に完璧

だった。

御幸の手に残る痛みは悔しさと共に尾を引くけれども、切り替えなければならぬ。

—こういう場面で実力以上のモノを出せると知っていながら、守りに入った俺のリードミスだ。こうなった以上、プランは変わらない。もう一度アウトローに縦のカーブ、決めにこい

—今のはヤバかった……ごおつてきたらがって溜めてどん。ぽんつてきたらぐぐつて溜めてぽん

今度こそ決めに行く。

小さく首を縦に振り頭の後ろにグローブが来るまで背筋を伸ばして振りかぶる。

半歩小さく、僅かにリリースを高くし大きく縦に割れるカーブは心地の良く指から離れた。

—完璧！

—浮・溜

ぽん、と一度浮く。

たった一瞬の出来事をほとんど反射的に分析する。

—高

見たことのないコースからの変化を見抜く。極限まで圧縮された時の中で、撃墜体制

に難なく移る。

放物線の頂点に位置したボールは今までのみたどんなボールよりも高い。

轟雷市の体勢は崩れない、このボールがストライクゾーンに落ちてくることを信じて疑わないからだ。

―曲・違

ストレートとは真逆の球種、回転と重力によつてやがて急速に落下を始めたカーブに標準を定めバットを振り始める。

―落!!!

点と点がぶつかった。

打球は地面につくことなく舞い上がる。

山元虹稀は苦笑いをしてその行く末を見つめていた。

轟雷市は手に残った重い感触を振り払うように走り始める。

「あれを打たれちゃ、どうしようもない」

3度目の勝負、これまでの全てを出し切った。悔いがないわけではない、だがこれから2年間同じ地区で勝負出来ると考えると、怖いような、楽しいような意味の解らぬ感情が湧き上がり、苦笑という形になって表れた。

シヨート頭上を飛び越え左中間を破ろうと突き進む。

—とつさに手首だけ返してあそこまで持っていくのかよ

タイムイングはシビアだ、右中間に落ちたボールの勢いは死んでいる。

「行け!! 雷市!!」

観客の声援が、仲間の声援が轟雷市を後押しするかのようにはファーストベースを蹴つた。

センター伊佐敷とレフト雨宮はアイコンタクトと状況判断により素早くボールを取る方とカバーに回る方を決定する。

急造の左中間ではあるが判断は早かった。

「オーライ!」

「伊佐敷さんお願いします!」

伊佐敷の打球に対する回り込み方、捕球体制、スローイングは完璧だった。打球が予想よりも勢いがなく想定した跳ね方ではなかったが瞬時に対応し最善を尽くしたと言える。

故にどうしようもなかった。

セカンドベースのカバーに入った倉持にボールが渡る、その時にはもう轟雷市は到達していたのだから。

「タイム、お願いします」

御幸一也は審判にそう告げるとすぐにマウンドへ駆け寄った。あくまでバッテリー間のタイム、今後の試合運びのことを考えると山元虹稀の精神状態を計ることが最重要事項だからだ。

頭が割れそうな歓声が降りかかる、青道高校ではなく薬師高校に。

原因を生み出してしまった、何より2度に渡り打ち砕かれた虹稀の状態を把握するのは当然のことだった。

いずれにせよ片岡鉄心は6回まで虹稀にマウンドを任せるゲームプランでいたし、幸いにもブルペンではエース丹波、沢村が準備している。点差は充分にあるが大逆転がないわけではない、マウンドへ向かう途中御幸の心境は穏やかではなかった。

だが、その心配は杞憂に終わる。

「一也さん、安心してくださいよ。今回は大丈夫ですから」

不敵に笑う、雰囲気は飲まれておかしくなつたかとも一瞬考えた。

「轟雷市、あいつは凄い。けれど、それだけ。後続に打たれるつもりも観客の望みを叶えるつもりもないですから」

「……ならいい。いい球は来てる、怖気づく必要はないぞ」

「了解」

虹稀と御幸の会話は短く終わった、どちらかと言えば追い返されるように定位置に戻った。

表面上は何の問題もなかった、むしろ清々しくもあり大丈夫だと判断したが、念のために片岡鉄心とアイコンタクトをし、いつでも次の投手を用意してほしいと合図を送る。

球場の雰囲気ごと重くのしかかる、本当に何が起こるかわからない。

1度の敗北も許されない過酷なトーナメントにおいて嫌な流れが十二分に充満していた。

次の打者は先ほどヒットを打っている2番・秋葉。先ほど打たれたときも轟雷市に打ち込まれた後だ、当然警戒しなければならぬ。

サインを交換し、プレートを外した状態で一度轟雷市を視界に入れる。

この回1点入らなかつたらもうすぐ試合が終わるというのに、そんなの関係無いという顔で笑っている。

本当にわかっていないのかもしれないが。

—轟雷市、お前はスゲエよ。今日は完全に俺の負けだ

気持ちに一区切りつける。思い返せば夏になってから今日という日まで順当過ぎたのだ、順当過ぎたが故の過剰な自信のままではきつとこの先の戦いを勝ち抜けなかつた

だろう。

サインを確認し再び覚悟を決める、プレートを踏んだ瞬間、虹稀の存在感が増した。

―けどな、俺は負けても、青道は負けねえぞ

内角ギリギリ、打者が思わず仰け反る厳しいコースにストレートの決まった。

御幸の不安、チームメイトの心配すら吹き飛ばす魂の籠った直球は虹稀の意思を何よりも物語っている。

打たれてしまったのだから何を言い訳しても仕方がない、だけどこれで通じるならと投げた“任せろ”と言いたげに。

打たれた直後の強気なリード、当然のように応える投手、1年生らしくない振る舞いは先ほどの崩れた投手と同一人物なのに重ならない。

味方からの心配も、逆転を待ち望む膨らんだ期待も全て背負い込んでマウンドに佇む。

1年生にとっては経験を積むことがどんな練習よりも効果的と言われる。事実この試合中にも虹稀は成長しており、もともと実戦で伸びるタイプではあったが、本当の意味で負けられない戦い、今までいかなかった頼りになりすぎるメンバーの中でマウンドに立たせてもらっているという自負が心を成長させていた。

このアウエイの中でも動じることなく気迫の投球で立ち向かう姿にはエースの風格

すらも感じさせる、不思議と心配する気持ちは無かった、寧ろ安心して任せられる。

刀のように鋭く練り上げられた集中力、持ち味の制球力を残した上で勢いのいいボールを繰り出し続ける。後ろを振り返り、アウトカウントを確認する。その時に笑顔は見られるが打者に向かう表情は集中しているが故に何も感じ取れない無表情。

炎を携えた相貌が打者を射抜き、一步一步着実に希望の道を潰しにかかる。

2番・秋葉をサードフライ、3番・三島を空振り三振で沈め、あつという間に2アウト。

4番・山内が体勢を崩しながらも何とかカーブに喰らいつくもサードの増子に難なく処理され結局無失点で切り抜け虹稀は吠える。

1度目は崩れかけた、しかし2回目は崩れなかった。空気は一転、波乱を待ち望んでいたオーディエンスは夢から目覚めた。

薬師高校には一縷の望みを背番号18の投手が刈り取ってしまったと理解したからだ。

7

野球は基本的に時間で勝敗が決まるスポーツではない、アウトカウントが規定数に満たない限りどれだけ差がついても追いつくことは可能だ。

時間に制限はないが、アウトカウントに伴う終わりへのカウントダウンは時間よりも

残酷に終わりを告げ、アウトカウントが重なれば重なる程、終わりが近づけば近づく程不安をかき消すように喉を潰さんばかりの怒号が薬師ベンチから絶え間なく飛び続ける。

6 回裏・青道高校の攻撃を真田はなんとか無失点で切り抜けるも、7 回表からここまで好投を続けた山元虹稀に代わり丹波光一郎が追加点を許さなかった。

7 回表が終了した時点で点差は2-9と7点差、規定によりコールドゲームが成立。正式にゲームの終わりを審判が告げた。

——1年にしては良い投手、降谷って奴の方がよっぽど厄介だと思っていたが、甘かった。すべて高い水準の投球技術を持ち合わせて尚且つ尻上がり調子を上げていくタイプ、猫被っているとは読み切れなかった。そもそも、4 回裏にマウンドから下ろせなかった時点で……………

試合に入ってから勝ち筋が最初から見えずにいた、一矢報えたのは4 回表の2 得点だけ。開き続けた点差と無情にも淡々と過ぎてしまうイニングを前にして何も対策が出来なかった。

紛れもなく完敗だ。轟雷市だけが一人だけ勝負の土俵に立てていただけで、覆せるはずと思っていたチームとしての力の差があまりにも大きすぎただけのことだ。

轟雷市はネクストバッターズサークルに入ることも出来ず、試合が終わったと告げら

れ悔しさに顔を歪めたチームメイトに囲まれてようやく夏が終わったのだと理解が来た。

頭では分かっているが実感が追いついていなかった、とてつもない悔しさも悲しさもなく、ただ茫然と泣き崩れる背中を、追い越して列に紛れる。告げられる現実を左右のチームメイトの反応を見ることでしか受け入れられなかった。

自分もつと打てばチームは勝っていた、充分に打ったはずだが結果は、スコアボードに刻まれている事実はいつまで見ても変わらない。

始まりと同じ音が終わりを告げ、ホームベースを挟んで両チームが一礼した後僅かばかりの交流が行われた。

「ナイスバッティング、次は打たせない」

轟雷市の前に手が差し出された、勝ったというのに横にいるチームメイトと違い涙こそ流してはいないが悔しそうな表情が言葉よりも重く語りかける。

「あ……………」

痛くはないが、それでも握手にしては強く握りしめられている。虹稀の悔しさを滲ませての賞賛を含めた握手だった。

確かに結果としては自分が上だ、チームを勝たせることが出来なかった自分とチームを勝たせることの出来た男を前にして初めて悔しさが湧き上がった。

「次は……次は！ 負けない！」

知らず知らずのうちに力が籠り強く手を握り返し、涙と共に言葉が溢れ出した。

虹稀に対する宣言、自分に対する戒めを込めて力強く握り返す。

予想外に強く握られた手に虹稀は「痛いよ」と苦笑いするも決して振り払おうとはしなかつた。

夏が終わる。

皆と一緒に野球ができる夏が終わる。

轟雷市にとって初めての高校野球は準々決勝で敗退、と自らが原動力となり素晴らし
い結果を修めたが苦く、つらいもので、時間を増すごとに悔しさと悲しさが嗚咽に混
じって止まらなかつた。

ダイヤのエース：RISING

1

稲城実業の勝利で準決勝の組み合わせが出そろい、青道高校の準決勝の相手は泉仙学園高校に決まった。

部員数80名を超えるベスト8常連の強豪校、春の大会では青道高校が敗北した市大三高との投手戦の末、1点差の僅差で敗北している。

そして、もともと特徴的なのは1年生の時からエースナンバーを背負い、その計り知れない将来性にプロも目を付けている大巨人・真木洋介

長身から投げ下ろされる角度のあるストレート、日本一高い所から放たれると言われるカーブ。

「明後日、準決勝の先発だが……俺は丹波で行こうと考えている。いけるな？」

初めてのエースの先発と聞かされ場は盛り上がる、3年生にとつては最後の大会でようやく青道高校の本来の姿での試合となるのだ。

怪我から復帰したのはいいが状態はベストではない、今大会ではまだ1イニングしか投げておらず決勝戦をかけた戦いで登板するのは客観的に見れば心中行為ともとれる。

本気で勝ちにいくのであればこれまでの試合好投を続けている降谷と山元虹稀を中心に組み立てるのがリスクの最も少ない最善手であるのは間違いない。

だが、頭角を現した1年生がいなければ、本当のベストメンバーで初めて試合ができる。アクシデントに見舞われ、悲観的な状況から復帰した同じ世代のエースの初めての先発はチームの士気を上げるのに充分だった。

「川上、大変だと思うがいつも通り準備していきなさい」

当然、丹波だけで1試合投げ切れるとは断言しづらい。そのためここからは特に投手陣に関していえば総力戦に突入していた。

「はー」

片岡鉄心のプランとしてはもし、丹波が早々にマウンドを降りることになった場合、次に任せるのは川上で試合運びを進めていこうという試合の流れを想定していた。

「沢村……そして降谷、山元。お前も機会を見て登板させる。準備しておけよ」

「はー」

出来れば丹波・川上・沢村の3投手で試合を終わらせることが出来るのなら最高の状態で決勝戦へ臨める、だが相手はベスト8常連の強豪校。実力的に見れば優位に立つのは青道で間違いないが、一瞬たりとも気が抜けない。

「知らないうちに溜まっている疲れもあるだろう、長いイニングを投げている降谷と山

元を休ませておきたい、「頑張ってくれ」

トーナメント戦の特徴として勝てば勝つほど試合と試合の間隔も短くなる、リカバリーに当てる時間が短くなる中投手5人がベンチにいる青道高校としてはこれまで主に投げてきた2人の1年生に休みを与えることも勝ち抜いていくうえで大切な条件の一つでもあった。

その一方で想定外の危険な状況になったのなら、この大会主軸となつている2人の1年生を登板させることも考えている。

降谷は北海道から上京し、夏の暑さになれておらず試合中も全力で投げるので体力の消耗が激しい。

山元虹稀も薬師戦で100球近くほとんど全力に近い形で投げており、対戦相手がジャイアントキリングを繰り返していることもあり精神的に疲弊する状況にほとんど一人で立ち向かっていたため肉体的にも精神的にも疲労は溜まつている。

現実には降谷はウトウトしているし、虹稀も欠伸を噛み殺しながら話を聞いていた。

「レギュラー陣はこれで解散、早めに休んで疲れをとるように」

試合が控えているのは明後日、直接的には対戦したことのない相手エースの対策を各々で考える。ビデオを見たり、想像でどのような軌道で来るのか考えてみたりと三者三様に過ごしていた。

「山元は監督室へ来てくれ、少し話がある」

神妙な面持ち返事をして虹稀は片岡鉄心の後ろをついて行く、御幸やクリスが同伴ではなく太田コーチ、高島礼すらいないサシの状態で話すのは初めての事で落ち着かないまま歩みを進めた。

2

「疲れているところ悪いな、今日はナイスピッチングだった。立ってないで座っていいぞ」

監督と2人きりの状況、これ以上気まずいシチュエーションは野球をやっているものにとつてはなかなかないだろう。

怒られる訳でも咎められるわけでもない、寧ろ褒められているのに自然と背筋は伸びてしまう。

直立不動で動かなかった虹稀は片岡鉄心に促されて初めてソファに座った。

「それでは失礼します……今日の試合に関していえば何とか務めを果たすことが出来て良かったです」

表情は晴れなかった、2失点に何とか抑えるも傷口を広げる可能性は十分にあった、実力差が明確に分かれていたのを知っていたのにもかかわらず、我を失いかけた。

結城哲也の助言が無ければと思うと当然表情は晴れない。

「一度は崩れかけたがその後の立て直し、轟雷市にこそ打たれたが素晴らしい……正にエースらしい立ち振る舞いだっただ」

納得いかない気持ちは片岡鉄心もよく分かっている、だがそこから、その後の投球は立派なものだった。会場全体が敵という中で潰されかけられるも最後まで踏みとどまり、遂にはプレッシャーを跳ねのけチームを背負って投げ切った。

その姿をベンチを見ていた片岡鉄心は入学し僅か数か月しかたつてない投手に理想の投手像を重ねてしまっていた。

故に、チームの命運を委ねる。

「……だからお前にだけ言っておく、まず次の試合は投げさせない」

「……………それは決勝戦に備えての調整をしろつてことですか？」

状況の飲み込みは早かった、わざわざこのような話をされたのだから覚悟はしていたが次の試合を投げたい気持ちがないわけではない。

体力的にも、精神的にも戦闘準備は整っている。

「そうだ。丹波、川上、沢村が打ち込まれるような状況であれば準備を頼むかもしれないが基本的には体を休めておけ」

片岡鉄心もこの場面は腹を括った、決して手を抜くつもりはないが泉仙学園に最高のカードを使わずに勝たなければならない。

準決勝が終わって息もつかぬまま決勝戦を迎えることになる、最高のカードを切るのは決勝までに取りつておきたいというのが理想。

それに、最高のカードでなくとも強力な手札で勝負できると踏んでいるからだ。

「了解しました」

「ここからは決勝戦の話だ。先発は降谷で行こうと思っっている」

驚きの表情を虹稀は見せたが一瞬で繕う。

「……………なるほど」

いずれにせよ9回を稲城実業相手に投げたいという気持ちはあるが、実力から考えて抑える自信はない。

妥当な判断だと素直に思った。

「正直5回まで投げ切れるかわからん、この暑さも含め力押ししか出来ない降谷では長くもたないだろう」

「つまりは、いつでも行ける準備をしておけと」

感情を抜きにして考えたときに、稲城実業に勝つ最も勝率の高い方法として、第一条に如何に点数を取られないかが鍵になる。

誰しもが勝つことしか考えていない中、自らがエースナンバーを与えた選手を信じるのは当然のことだ。1番を背負う丹波は気持ちは強い、だが客観的に見たときに攻略す

るのは容易い投手であることは明確だ。

気持ちで補えるものは確かにあるが、実力が拮抗した場合でしか上回れないことが多い。

現実を前に盲目的に信じるといふ行為はあまりにも危険だ。

そうすると必然的に青道で最も力のある降谷、山元虹稀の2投手が4〜5イニング全力で投げ試合を進めることが最も良い作戦だと言える。

虹稀も9回を無失点で抑える自信は無いが、5回もしくは4回ならばその自信はたっぷりと持っている。勝つための最善の作戦に私情を挟むつもりは欠片もなかった。

「ああ、そしてマウンドに一度上げたら俺はお前を下ろすつもりはない」

片岡鉄心の期待と覚悟だ。捉え方によつてはお前と心中する、そう言っているのと変わりは無い。

たった1人にしか話していない覚悟という作戦をぶつけた。

「まだ1年生のお前にとつて重いかもしれないが、俺は出来ると信じている」

本来であれば……、片岡鉄心の脳裏に過るものはある。

しかし、目の前にいる投手は今まで見たどんな原石よりも光り輝いていた。

短期間での爆発的な成長、持っている潜在能力の高さ、チームを鼓舞する投球、そしてまだ内に秘められたままの底深い能力。

決勝戦の舞台でぶつけてみたかった、昇華するのか凡庸に成り下がるのか。

1年生に全てを任せる、酷なことだとわかっていながら片岡鉄心に迷いはなかった。「もちろんやり切りますよ。あくまで目標は甲子園出場なんかではなく、甲子園優勝なので」

表情に迷いはない、あたかもそうなるかと解っていたかのように肝は座っていた。

「頼もしい限りだ、甲子園行きの切符を自分の手で掴んで来い」

「みんなの力で手に入れますよ」

3

試合を明日に控えた日の夜、安息日として練習を御幸とクリスの監視のもと本当に軽く終え、やることもないしストレッチでもしてみようかという時にバツタリ雨宮瑠偉にあつた。

雨宮瑠偉としては探していたためタイミングは最良なため直ぐに話を持ち掛けた。

「虹稀、ちよつとボール投げてもらつていいか？ あと確認して欲しいこともあるしな」
「轟の事とバツティングフォームのことでしょう？ いいよ」

瑠偉が神妙な顔をして頼みごとをするというのは稀有なことだ、基本的に努力を人前

では絶対にしないし、表に決して出さない。

才能だけでやっていける奴は良いよな、と誤解を受けることも少なくはないのだが左掌のナイフエッジと呼ばれる場所にあるタコを見れば彼が如何にバットを振り込んだかは簡単にわかる。

まめが出来にくい体質と、必要最低限の力でバットを握り当たる瞬間だけ力を入れられる彼のスタイルでは轟雷市のような岩のような掌になることは無いけれども、見せないだけで努力の結晶として輝いている。

「話が早くて助かる、ちよつと薬師戦いいところなかったからな。せめて決勝までには感覚掴んでおきたい」

「確かに……：瑠偉には哲さんレベルになって貰いたいからね。時間がある限りは手伝うよ」

「ありがとな」

瑠偉が聞きたいのは実際に轟雷市と対峙しての感想と自分との比較、新フォームに取り組み完璧なものに仕上げるために投手の視点から見た虹稀にアドバイスをもらいたかったからでもある。

本来であれば自分で時間をかけて作り上げたいと思ったが如何せん時間がない、背に腹は抱えられないと思い一番頼れる虹稀に頼んだのだった。

「……とまあ、こんな感じなんだが見てて気になることはあるか?」

1ケースに入った200近いボールを打ち終え、アドバースを求める。

「うーん、そうだね。バットが身体の連動に対して少し遅れてる気がする、テイクバックを浅くする、もしくは先に手から動かしてみたら?」

「成程、おもしろいなそれ」

良いと思つたら受け入れ違ふと思つても一度は試し微調整を加えながら徐々に仕上げていく。

結城哲也のバツティングと轟雷市の打撃を何度も繰り返し見返し、ネットに上がつているプロ野球選手のフォームをくまなくチェックし頭に叩き込み自らの糧に変換する。

昼にあつた片岡鉄心直々に真木洋介対策として投げた時も3年生に引けを取らず捉えたのもあり、完成は近い。

お世辞にも頭は良いとは言えないため、感覚から入り辻褄合わせのように理論を組み立てるといふ手法で徐々にフォームを安定させ完成に近い状態に持つていく。

「そろそろ上がろうか、お風呂が閉まる時間も近づいて来てるし」

ボールを打つた数は1000を超えるもフォームは崩れない、汗がトレーニングウェアを滴らせる頃にはほとんど完成に近い形まで昇華していた。

実戦で投手と相対した際に同じことが出来れば全く問題がないだろう。バットが風

を切る音も、ボールを捉えた音も素晴らしいの一言に尽きる。

ただ時間は待つてくれない、このまま続けてもいいが集中力とパフォーマンスは近いうちに低下し、フォームを固めるという目的で行っているためこのあたりで切り上げるのがベストだと虹稀は考えた。

「おお、もうこんな時間か……サンキューな、おかげでだいぶ掴めてきた」

瑠偉も疲労がたまった下半身と腰を一度休めると時計を確認し納得した。

今までと全く違う打つ感覚になれながら全身を使いボールを捉えるフォームに手ごたえを感じている。重心の置き方、トップの位置、タイミングの取り方どれを取っても今のところは納得がいくとここまで突き詰めたことに安堵を覚える。

「全然いいよ、これでいい結果残してくれるならね」

虹稀から見てもしつかり練り上げられたものだと思直に感じた、以前やった時とは比べ物にならない。

もう一度勝負してみたいという感情よりも、これで打ってくれたらめっちゃ頼りになるな、としか捉えていないが。

甲子園に向けてあと2つというところまできてより一層チームとして固まった今、仲間内で勝負をしたいという気概は流石に芽生えていなかった。

同じくして瑠偉も虹稀に対してはそのような気持ちは無かった。気持ちはチーム一

丸となり見据えている場所は同じだからだ。

「プレッシャーかけんなよ……まさか1年目でここまで来れると思ってなかったけど。あと2つで甲子園、だな」

忘れていないよなど虹稀に目で訴えた。もちろん、とほほ笑んで答える。甲子園に出ることが目標じゃない、足元を掬われるといけないから一応確認しているけれども本来の目的を忘れていないよな？ と互いに確かめ合った。

今はひたすら前を見ている、甲子園に出るためにはあと2つ必ず勝たなければならなかったためそこに集中をしているがあくまで通過点。

目的は日本一。頂点に立つために瑠偉は己の惚れ込んだ才能に自分の高校生活を全てオールインして青道高校に入ったのだ。

1番でレフトの定位置を掴み取った雨宮瑠偉、背番号は18番ながらその背中にエースの器の片鱗を見せ始めた山元虹稀。

鬼才と奇才、2人の傑物が飛翔する日は刻々と近付いている。

「……まで来たら行くしかない、それに先輩たちと長く野球したいし」
「どうせなら笑顔で引退して欲しいもんな」

もちろん自分が出ていいるからではあるが、言葉に嘘はなかった。打算的な考えもなくは無いが、本当に実力があるチームの中でもっと野球をやっていたいというのが本音

だ。

「間違いない、なんて言うか……初めて強いチームで野球やってき、滅茶苦茶楽しいんだよね。そりゃ、迷惑かけることが多かったけど、無責任に好き勝手にやるんじゃないかって責任を持ったうえで常に緊張感のある試合をするってのはきついけど、凄く充実してる」

「俺はずっと2軍にいて、お前も1軍にいたものの結果は出ず。1年の夏はスタンドで応援かもしれないって本気で思った時期もあったよ」

過去を振り返る、2人とも初めての挫折を味わった。

実力がないままもがき続ける苦しみ、結果は出ているがなかなか認めてもらえなかったジレンマ、悔しさを発条にひたすら練習した。

誰にも負けないように走り続けた、バットを振り続けた。

才能があるからと陰口を言われる度に思った、言い訳する暇があるなら最大限やってから文句を言えと。

よくやるな、と笑われて思った。まだまだ足りないのになぜそう思うのだろうと。

互いに孤独な戦いを潜り抜けてようやくやくつかんだチャンスをしつかり握って話さなかったからこそ辿り着いた今がある。

まだまだ満足したわけじゃない、枯れることのない飽くなき向上心が2人の才能を生

み出した。

「瑠偉、あと7つか8つ……勝つぞ」

「当たり前だ」

いざ口に出すと気恥しい、背中を向け合いボールを拾い上げて再び誓う。

運命は大きく胎動していた。誰かを祝福するかのよう、夏の夜空に星々が煌めいている。

敗北か勝利か、試合の果てには結果という答えが待っている。夏が続くのはたった一校だけ、いかなる理由があろうとその柵からは逃れられない。

甲子園まであと2つ。

群雄割拠の東京で強者が散ってゆく中、運命の悪戯で巡り合った2つの一等星がどんな軌跡を描くのか、今はまだ誰も想像できない。

4

『ベスト8おめでとうございます』

『私の我儘もあつて、調子を狂わせてしまったらどうしようと思いましたが、無事に試合に勝つてよかったです』

『次の試合も、その次の試合も、ずっと応援しています。頑張ってください』

【ありがとう、ここまで来たら行くところまで行くよ】

【次の試合は投げないから時間があるんだったら決勝戦見に来なよ。めちやくちや頑張る予定だからさ】

『是非とも行かせて貰います！』

嵐の前：万事順調

5

「準決勝第一試合、両チームエースが先発したこの試合、先制点を挙げたのは泉仙学園。ツアアウトながら尚もランナー2塁、この夏初先発の丹波はこれ以上の失点は避けたいところですが泉仙学園が見事に主導権を握りました」

青道高校VS泉仙学園高校のカードで組まれた準決勝、静かなまま始まった序盤、3回裏に試合は動き出す。

泉仙学園は甘く入ったストレートを確実に叩き、僅かヒット2本で1点を先取した。

難しい球は捨て、甘く入ったストレートを狙う。状態が上がり切っておらず、更には大きな弱点として挙げられていたウィークポイントに的確に絞られているのだから厳しい戦いを強いられていた。

「なんで2塁で止まってんねや、3つ狙わんかい……ま、ええわ。これで主導権は手に入った。ええか、向こうのピッチャーは浮ついとる、今がチャンスや！ バッティングはねちっこくな」

「「はー!!」」

「けど、ほんま若いな……準々決勝で1イニング無失点で抑えたからと言っていきなり先発復帰は選手を信じすぎやろ。あの投手、前の試合でも甘い所に真つすぐがいつてたし、18番か11番で来られた方がよっぽどやりにくかったで、ほんま侮られてるわあ……舐めてかかってくるんやったら、その隙付け入らせてもらうだけやけどな」

丹波の状態は決して悪くない、甘い所にいく真つ直ぐという大きな欠点を持ち合わせていながらも真つ直ぐ、変化球の状態ともに良い。だが、真ん中付近に集まればこのレベルでは通用しないというだけのことだ。

丹波光一郎と真木洋介、互いに長身で高い所から得意のカーブを放るスタイルではあるがドロロンとしたカーブを操る真木洋介とキレのあるカーブを操る丹波とではカテゴリーズは同じだが全くもって違う投手同士だ。

そして、丹波のストリートが狙われているのを分らない御幸ではない。2アウトラッナー2塁の場面、打席に立つ打者に対してはストREETを1球も投げることなく三振に抑え失点を1で止めた。

ストREETだけに絞るといっても、その姿勢が顕著であればあるほど他の球種に対応しにくい。そう言った意味で新球種のフォークを覚えたことは丹波にとつて大きな利点だった。

—確かに選手が自分で考えてプレイしとる、あんな選手がおるんやったら確かに信じたくもなるな

泉仙学園高校監督は基本的に選手を信頼していない、人間だからこそ調子がいい時も悪い時もある。そこに信頼など持ち込んだところで何も変わらないのを知っているからだ。

しかし、そんな考えの持ち主から見ても、自軍のエース・真木洋介の調子は良かった。気持ちが違う、もともと持っていた素質に備え強い気持ちが合わさることにより発揮される力は格段に上がる場合もある。

しかし、青道高校に対してはそれだけで通用するわけではない。

確かに3回までは点を取ることも出来ず、淡々と攻撃を終えてしまった青道高校ではあるが、マウンドを盛り、監督直々に対真木洋介としてレギュラー陣に対策をさせたためにイメージを合わせるだけで攻略可能などころまで来ているのを泉仙学園はわかっている。

誤算だったのは僅かな角度の違いからくるボール、身長195cmの体で投球の際のステップ幅は短い、そうすることでリリースポイントは高くなり角度が付く。加えて気持ちが入って入り、低めをガンガン攻め切れている。打ちにくいのも当然だ。

しかし1打席見ればおおよその修正が効く選手ばかりそろっている。

青道の選手たちに焦りはなく、主体となつて攻略法の共有を行う。監督にとつてこれほどまで頼もしいチームはない、自ら考えて動くチームだからこそ片岡鉄心は泉仙学園高校監督とは全く逆の選手を信じるといふ方針でここまで登つて来ている。

甲子園まであと2つ、残つた4チームどこが勝つてもおかしくはないのだ。そう簡単に試合が決まってしまうレベルではない。

だが、徐々に、しかし確実に青道高校は真木洋介に食らいつき始めた。

4番結城の2塁打から5番増子の意表を突くセーフティーバントで1・3塁とし6番御幸を敬遠で満塁を作り出す。

データで判断するならばスコアリングポジションにめつぼう強い御幸を相手にするよりも7番の倉持を相手にした方がチャンスはある。

データに基づきとれるアウトを確実に取り試合を進める、長期的に見た場合データを基にした戦いは強い、短期決戦の場合は何が起こるかかわらないという不確実性が含まれるのは間違いないがそう簡単にイレギュラーな事態が起こるわけではない。

左打席に入った倉持はなんとかランナーを返そうという意識を持ち内野にゴロを転がすも結城のはホームでアウト。続く白洲はレフトフライに倒れ1アウト満塁の場面を乗り切つた。

流れを刈り取つたかのようにも見えたが、青道高校は次の回1アウトから雨宮瑠偉が

センター前に綺麗にはじき返し、2番小湊亮のセカンドゴロの間に2塁に進むと3番伊佐敷のライト前ヒットで1・3塁とし4番結城の犠打により1点を追加、5回表に1-1に追いついた。

泉仙学園も気迫の投球を見せる丹波を前に3回以降得点の兆しが見えない。変化球で躲しストリートは浮いて危険な状況ではあるが何とか気持ちで抑えていた。気持ちだけで確かに限界がある。

汗の量も増えていつもだったら弱気な表情が浮かんでいたはずだがその気配は一切ない。夏大前、練習試合で受けたデッドボールを乗り越えてから丹波は投手として成長していた。

一進一退の攻防を繰り返す中、遂に試合は動き出した。

6

6回表、6番・御幸から始まったこの回の攻撃は御幸、倉持の連打から8番白洲の送りバントにより1アウト2・3塁を作り出す。一打逆転のチャンスで片岡鉄心は動いた。

9番の丹波に代わり代打に起用したのは背番号19番・小湊春市。今大会2度の代打でヒットを2本放っている代打の切り札を丹波の代わりに切った。

「信頼」によってなせる片岡鉄心の判断だが嵌まれば流れを一気に引き寄せることの出

来る采配ではあるが、失敗すればただバッティングの良くないエースが疲れたので他の選手に任せてエースが降板します、と言ってるようなものだ。

ブルペンに居るのは背番号10番と20番の投手、変則サウスポーと右の技巧派。1番の剛腕・降谷と18番の実質的エース・山元がなにも準備していないだけで泉仙学園の気持ちは楽だった。

伝令を飛ばしてエース真木洋介を落ち着かせる、試合を動かす大きな分岐点の一つに差し掛かる。

選手を信頼した思い切った采配をする青道高校に対してデータに基づき論理的な采配をする泉仙学園。青道高校のトップバッターを務める雨宮瑠偉は1年生ながらも2打数1安打と2回ともバットから快音を響かせているためこの9番で勝負するのが1番だという趣旨を伝え勝負に臨む。

小湊春市は状況と監督の意思をしつかりと把握している。

当然の如くお互いに負けるつもりはない。特に青道高校に個人的な憧れを持って居る真木洋介は1年生から憧れのユニフォームを着てプレイをしている小湊春市に対し私情を含めて負けられないという気持ちは強い。

しかし、現実は無情にも結果を告げるだけだ。

勝敗を分けた原因は、投手としての欲で三振を狙った投球をした真木洋介に対し、持

ち前のセンスで反応しきった小湊春市の打撃だった。

左中間を破る2点タイムリーヒット、続く雨宮がライト前ヒットに綺麗に返しもう1点追加。小湊亮と伊佐敷純は鋭い当たりで弾き返すも運悪く野手正面に飛びこの回は3点で攻撃を終えた。

しかし6回表攻撃を終えた青道高校は4―1で中盤盛り返し、主導権を握り返す。

そして丹波の代わりにマウンドに上がったのは背番号20の変則サウスポー沢村。攻撃的継投ではあるが、裏を返すと繋がらなければ愚策になり果てる。

これまでの試合で沢村に変化球がないことは周知の事実だ。意図的か無意識かどうかは判別できないけれども動くストリート1本しか持ち合わせておらず、球速もそこまでない、確かに出どころは見づらくテンポは速いが、芯が広く高性能な日本のバットを使えば攻略など容易い。

だが、沢村はそれだけではない。一番の武器は変則フォームでもなく、テンポの速さでもなく気持ちの強さ。まだ大まかな制球しか効かないけれども気持ちの乗ったインコースへの投球は短期決戦であればあるほど、初見であればあるほど、レベルが高くても通用する。

事実、その後泉仙学園が青道高校に追いつくことは無く、1本出れば追いつく場面をちらほら見せるが逆転劇は実現することは無く、青道高校は3年ぶりに決勝戦へとコマ

を進めた。

7

終わりが近い、勝とうが負けようかあと2日でひと区切りついてしまう。

トーナメントを勝ち上がることが増える球場を満たす観客の多さも、学校で話しかけられることが多くなる度に、決勝戦が近いんだなど実感させられる。

練習を見に来る観客の数も、最上級生の必死に落ち着こうとしている感じも終わりが近いことを遠回しだけど伝えてくる。

稲城実業の分析も終えて準備は万全に近い、ビデオも何度か確認して対策は充分整えた。

一番怖いのは勝利への執着心、強く、個々の力が高いメンバーが勝つために、点数を取るために手段を選ばない。

確率的に最も点が入りやすいと言われていた先頭打者へのフォアボールを避けなければいけないのは勿論、ヒットを許すことも出来ればしたくない。ランナーを出さずに試合を終わらせるのが理想ではあるが……ほとんど無理に近い。

だから、思いついた2つの新しい武器が実用できるか確かめなければならぬ。

1つは薬師戦で学んだ、もう1つは中学の時からずっと考えていたけれど結局実現しなかった。降谷のストロークをビタ止め出来る一也さんだったら少し練習すれば実戦

でもすぐ使えるだろう、問題らしい問題と言えば正々堂々としたことではないという事だ。

諸刃の剣だ。上手くいけば強力な武器に、失敗してしまえば印象を悪くしてしまい不利になる。出来れば上手くいかずとも無効化で終わってほしいものだ。

もつとも高い技術があるから出来る誤魔化しで、個人的な意見としては全く問題ないと思うのだけれど……

監督は丹波さん、川上さん、沢村に準備をしておけと言った、けれども前の話だと俺から変えるつもりはないという。流石に明言できないだろうからみんなの前で言った言葉だろうけれど、もし先輩達や沢村の出番が来たのなら敗戦処理という事になるのかもしれない。

いつでも行けるように準備をしておかなくてはいけない、降谷の立ち上がり次第ではもしかすると初回から、なんてことがないわけではない。

綿密な準備をするに越したことは無い、それが例えば秘密裏にやらなければならぬ事であつても。

「一也さん、ちよつと付き合ってもらえませんか？」

「お前……今日はノースローって頑なに言つてなかつたっけ？ 別に良いけど」

予想はしていたんだろうな、と思う。昼間もわざわざ詰めてこなかつたしクリスさん

が何か言おうとしても朗らかに誤魔化していた。

「すいません、試したいことがあつて沢山投げるかもしれないので昼は投げなかつたんですよ。観客とか多くて、変な話やろうとすることがばれたら嫌ですし、それに……王道のことではないので」

あくまで裏技のようなものだ、技術が伴つて成立するいかさまのようなものだけだ、これ以上短期間での肉体的成長が見込めない以上技術に頼るしかない。

それに……

「なんか、含みのある言い方だな。探りを入れずにちやんと言つたらどうだ？」

「一也さんは、勝つためだったら多少のいかさまを厭わないですか？」

「構わねえ、ルール内で人に危害を加えることじゃなければ何でもやる。それこそ、鳴の奴にデッドボールぶつけて試合から弾き出すとか言い出したら殴つてやろうと思つたけどな」

それだけは思いつかなかつた、やっぱりこの人性格悪いなあ……でも、だからこそ成り立することもある。

「最も有効的な手段かもしれないですけど、流石にやりませんよ。あくまでルール内の範囲で、です」

「なら付き合つてやるよ、大体予想はついているけどな」

「それならよろしく頼みますよ」

やれることは全部やる。

明日の決勝戦、こちらに分が悪いのは客観的に見ればどうしようもない事実だ。エースの成宮鳴を相手に青道高校の打線と言えども何点も取れるとは限らない。逆に青道高校の投手陣、降谷にしろ、俺にしろ、丹波さんにしろ、川上さんにしろ、沢村にしろ、付け入る隙は沢山ある。

分が悪いのは間違いない、10回やって3、4回ぐらい勝てればいい方か。

降谷が4回か5回まで、俺がその後最後まで投げ切ることが出来れば勝敗に関わらず最高に近いシナリオで終わらせることが可能だ。

たった4ヶ月、学んだことは沢山あった。自分が野球をしていた場所のレベルの低さ、精神的にも肉体的にも全く出来上がっていなくて、我武者羅に取り組んだ。

フォームも見直したし、チームメイトの大切さにも気付けた。自分が助けられているという状況にも初めて対面したし、悔しい思いはあったけれど厳しい環境でやれることの楽しさと苦しみを知らることが出来た。

この4か月、色々なことを学ばせてもらった。その恩返しは結果でしか示せないし、何より負けて終わるのは性に合わない、どうせ終わるのなら勝手終わらせる。

次がある時点で準優勝は確約している、だが、準優勝という響きの良い称号は敗者の

証だ。次のないチームに送られる健闘を称えた慰めに過ぎない。

とにかく勝つ、それだけだ。

夏の続きを手に入れるためならば、どんなことになろうとも構わない。

覚悟はとつくの昔に出来ている。

8

〈やっはろー！ 元気そうだね！ いやー、頑張っている弟を見るとおねーちゃんは誇らしいよ〉

「つたく……そんなデカい声出さないでも聞こえているって。姉ちゃんこそ勉強大丈夫なの？ 俺に電話してる暇あつたら頑張りなよ」

〈奏虹さんを甘く見なさるな、なんとか大学在学中に予備試験くらい受かつてみせるよ。それに弟の晴れ舞台だもの、電話もしたくなつちやうじゃん？〉

「ま、さらつと決勝戦勝つて甲子園で活躍するから今までみたいに応援よろしく」
〈うんうん、素直でよろしい！ ま、そんなことはどうでもいいんだけど〉

「どうでも良くはねえだろ……結構見に来ているくせによく言うよ」

〈あはは、バレてたか。こつそり見に行っていたんだけどね〉

「まあ……姉ちゃんは良くも悪くも目立つからな。で、話つて？」

〈ああ、光ちゃんのことな「悪い、寝るわ」切ったら球場で恥ずかしいくらいに騒ぐぞ〉

「おおっと、一気に目が覚めた！ 悪い悪い、で何の話だっけ？」

〈はあ……私としても口挟むことじゃないんだけどさ、相談受けている身としてはちよつと心配にもなるってわけだし、こういうことに疎い虹稀に変なところ使わせるのも状況的に悪いとは思うんだけど、女の子待たせているんだからカツコイイとこ見せなよ〉

「姉貴に恋愛事情知られるのは俺でもきついものがあるってことを知ってもらいたいね。どちらにせよ今はそんなこと考えられないし……っか、そんなこと話すためにわざわざ電話してきたの？」

〈そんなことって……虹稀らしいっちゃらしいけどさ。あれだよ、発破って言うか、頑張ってほしいな一的な？ おねーちゃん頑張って応援するぞー！ 一的な？ 〉

「はいはい、ありがとう。頑張るよ、日焼けにだけは気を付けてね」

〈なんかあれだね、女の人の扱い上手くなった？ 〉

「いや、マネージャーさんたちもぼやいていたし、クラスの子とかも言ってたから姉ちゃんも気を付けた方がいいんじゃないかなって」

〈君も罪な男だなー、いずれにせよ頑張れしか言えないけど応援しているよ〉

「ありがとう、おかげでぐっすり寝れそうかも」

〈それならよかったよ、おやすみ〉

「うん、
じゃあね」

V S 稲城実業・開戦

1

西東京大会、青道高校VS稲城実業高校の決勝戦は神宮球場で午後1時から始まる。開始1時間前からたくさんの人が席を取っていて、私は運よく前の方に座れたけれど、それはそれで日差しがきつい。

受験勉強で部屋の中に籠っていることもあり、吸血鬼に妙な親近感を感じながらシートノックを眺めていた。

やはりというか、当然というか、レベルが高すぎる。

当たり前だけれど、まずミスがない。その上、体の基礎能力が違い過ぎることがはっきりとわかる。

場内アナウンスでは水分補給と日差しには十分気を付けるようにと繰り返し流れている。それくらい日差しは痛く、雲一つない青空が凄く眩しい。

「お、スタメン発表されたね……先発は虹稀じゃないんだ」

隣でそう言うのは虹稀さんのお姉さんである奏虹さん。透き通るような綺麗な肌に

日焼け止めを塗りながら不貞腐れたように呟く。まるでセレブか芸能人かのようにかけているサングラスと真つ白な帽子も相まって声音だけでしか判断できないけれども、釈然としていないのだろうなと思う。

「でも、投げるって言っていましたし、大事なところで……それこそ一番盛り上がるところできつと出てきますよ」

「ん〜……まあ、わかってはいるんだけどね。なんかやつぱり、姉としては最初から最後まで投げ切るところを見たいなってワガママなのかな」

「ふふつ……でもわかります。私もそう思いますもん」

中学生になりたての頃、野球はあんまり好きじゃなかった。お父さんが私の見たい音楽番組やドラマと同じ時間に流れる野球を見ていることもあつて、いい思い出があんまりなかったからだ。

けれども、それは中学生になるまでの話だ。虹稀さんと出会って野球が嫌いじゃなくなった。純粹に虹稀さんが野球をしている姿を見るのが好きだった、憧れのようなものかもしれない。

取り繕う事をせず、ありのまま、飾らない強さを持っていた虹稀さんに憧れた。もちろん、野球が上手だったことも関係しているかもしれないけれど、誰よりも考えて努力して、周りの環境に流されずに積み重ねてきたのを1年と半年程度だけけれど近くで見て

いたつもりだ。

気に入られたらいいと思いたいことも言えず、周りに流されるまま自分を持つていない私なんかと正反対で、尊敬していた。

「あ、整列してるよ。始まりそうだね」

ほのかに香る懐かしい匂い。砂の匂い、独特の匂いのベンチ、夏の匂い、全部覚えてる。もう2度と体験することは無い、寂しさはある。あの日の思い出は今も胸の宝箱の中に大事にしまつて、眺めることしか叶わない。

青道高校に勝利の女神がほほ笑みますようにと、信仰もしていない女神様に頼るのだった。

2

——一也、これがお前の望んだ戦いなんだろう？ 言ったよね、後悔しても知らないよつて

——鳴、これが俺の望んだ戦いだ。お前は後悔しても知らない、そう言ったな。だから結果で示してやるよ、青道に来て正解だったつてな

『全国高校野球選手権大会西東京大会決勝、夏本番を思わせる青空のもと両ベンチから選手が出てきました。夏2連覇を狙う去年の覇者・稲城実業、去年の雪辱を果たし6年ぶりの甲子園出場を狙う青道高校。ともに全国に名の知れた強豪同士、この戦いを制す

るのはどちらチームか』

ベンチ前で整列し、審判の準備が整うまで睨み合う。

甲子園を賭けた最後の決戦、勝てば次へ進み敗ければ終わる。勝ったとしても引退まで1か月程度しか伸びないが、天国と地獄の明確な分かれ道に両雄が鬨ぎあうのだ。

『勢いよく飛び出してきた両チームの選手たちにスタンドから大きな声援が浴びせられます！ ここまで勝ち上がってきたチームへの敬意と、これから行われる試合への期待でしようか』

バックスクリーンには表示されているが再びウグイス嬢の笛のような音色で場内にアナウンスが歓声に負けじと響き渡る。

『1回表、守備につくのは稲城実業。マウンドに上がるのは勿論この人、今大会未だ失点0、2年生エース成宮鳴。そしてその球を受けるのは4番で主将の原田雅功、スタメン9人中4人が2年生と言うのが今年の大きな特徴です』

青道

1番 左 雨宮瑠偉

2番 二 小湊亮介

3番 中 伊佐敷純

4番 一 結城哲也

- 5番 三 増子透
 6番 捕 御幸一也
 7番 投 降谷暁
 8番 右 白洲健二郎
 9番 遊 倉持洋一
 稲城実業

- 1番 中 神谷カルロス俊樹
 2番 遊 白河勝之
 3番 三 吉沢秀明
 4番 捕 原田雅功
 5番 投 成宮鳴
 6番 一 山岡陸
 7番 二 平井翼
 8番 左 梵勝美
 9番 右 富士川慎也

「追い込まれるまで甘い球以外には手を出すな、三振を畏れず自分の狙い球に絞ってい
 け。この気温だ、成宮とはいえ球数を投げさせると失投が増えてくるぞ」

青道高校はここまで無失点の成宮鳴をどう攻略するのが一番大きな課題となる。

絶対的エースがいる稲城実業に対して、エースが定まらず2人以上の投手を駆使して勝ち上がったってきた青道高校。

投手力が勝負の鍵を握っている。

『1回の表青道高校の攻撃は、1番レフト雨宮君』

—へえ……雰囲気あるじゃん

サイレンと歓声が混じり合う中投げた初球、唸りを上げたストレートは内角を厳しくつくがセーフティバントの構えを見せるだけであつさりと見送った。

初っ端から奇襲のつもりでかけた構えに動じる素振りを見せずに、サードとピッチャー両方ともプレッシャーをかける。想定内だと言わんばかりのダッシュだが、瑠偉も驚く様子は一切ない。

—動揺すらない、当然か。立ち上がりってこともあるのかボールは見やすい、甘く入ったらいけるな

どんな投手でも初回、特に立ち上がりは難しい。ストライクを取りに甘く投げて打たればあつさり失点することもあるし、厳しく攻めればフォアボールでランナーを出してしまう。その結果打ち取れるのならば問題は無いが、本人にさえ結果がどうなるのか計り知れないのだ。

そして、成宮鳴といえども例外ではない。

甘く入ったストレートを真芯で捉えた、迷いのない躊躇のないスイングに乗せられレフトへ大飛球が飛ぶ。

だが、芯を食い過ぎたあまりファールゾーンへ切れそのままスタンドへ飛び込んだ。

—完璧に捉え過ぎた！ 俺としたことが……！

—この野郎……1年のくせに！

頭に血が上った成宮鳴の体に余計な力が蓄えられた。彼は青道高校の打者を結城哲也を除いて全員侮っている。良くも悪くも相手を上から見下したピッチングは成宮鳴の持ち味ではあるが、一気に頭に血が上つてしまい次の投じた1球に大きな誤差が生じた。

本来なら内角を厳しく決る真っ直ぐだったのだが、力が入りすぎたあまり本人の想像をはるかに超えた軌道で放たれ……

「あ、」

「い、つつつ!!」

雨宮瑠偉の左腹部へ吸い込まれるように直撃した。

「ボール・デッドー！」

予想外の始まりに場は一旦ざわめくも、瑠偉は直ぐに立ち上がり1塁に駆け足で向か

う。

青道のリードオフマンである雨宮瑠偉に対し四球で出塁を許す、すなわち状況が青道高校へ僅かばかり優勢に回ったのだ。

—くそつ、マジで痛え。けど、これで……！

『テッドボールでの出塁となりましたが、稲城実業は出したくないランナーを出してしまいました』

『彼は非常に足が速いですからねー、2番の小湊亮介くんは非常にいいバッターなので青道高校は何でもできますね。稲城実業としては何としても失点を阻止したいところでしょう』

成宮鳴を挑発するかのような大きなリード、加えて地面を足で叩き音でも集中を妨げようと瑠偉は勤めていた。

—マジで痛え……ああ、クソツ！ オラ、さっさと牽制投げてこいよ

目論見通り、成宮鳴はランナーを気にして牽制をするも瑠偉は臆することなく、相変わらず大胆なリードを取り続ける。

そして打者の小湊亮介は最初からバントの構えを見せるも何をされるかわからない、攻撃の青道という看板が数々のパターンを原田雅功に巡らせる。

様々な思惑がグラウンドへ飛びかうも、成宮—原田のバッテリーには迷いはなかつ

た。

—ほんつとだるいな、こいつら

成宮鳴は牽制は上手くはないがクイックは早い、試合の前から入念にビデオをチェックした瑠偉ではあるが、癖と断定できるものは見つけることが出来なかった。

走れなくもないが、いまいち確実性に欠ける。しかし、瑠偉の頭に失敗の2文字は存在していない。成功のイメージしか浮かべていない。

片岡鉄心のサインは待て、当然小湊亮介は次の1球手を出すことは出来ない。力んでしまった末のデッドボール、次の1球は神経を使ってしまう。

そして、まだエンジンのかかり切っていない状態。打席に立ってみて瑠偉は成宮鳴は本調子とは程遠いと断定し、チームの命運をかけ左投手が牽制を投げれない状態になる数瞬間、果敢に走り出した。

「スチール！」

—この野郎！ 当然のように走りあがって！

もとより、チーム内の練習の時に御幸一也相手ですら盗塁を決めてしまう瑠偉には何の恐れもなかった。とは言え、原田雅功も優秀な捕手であることには間違いないのだ。

速球派の投手は1. 3秒前後で捕手にボールが届く、捕手がボールを捕ってから、送球して2塁に到達するまでに2. 0〜2. 2秒。合計タイムは3. 3〜3. 5秒で足

の速いランナーでもストレートならば計算上間に合わない。

成宮鳴が投げたのはストレート、計算上は間に合わない。

折角のチャンスを目を自ら潰しに行く、傍目にはそう映る。

玉碎覚悟の大博打、だが完全に近い形で走り始めた本人は確かな手ごたえと共に滑り込む。

判定までの一瞬の静寂、緊張でグラウンドが凍り付いた。

「セーフ!!!」

判定のジェスチャーを審判が行った瞬間、青道高校は歓喜に湧いた。

成功に導いた大きな要因はギャンブルに限りなく近い、雨宮瑠偉の反射神経と分析、そして幾重にも重ねたイメージトレーニングの積み重ねが全て上手く噛み合った絶妙なスタートだった。

1点入るか入らないか、試合を決定する要因の一つとしても挙げられる初回の1点の重みはどちらも知っている。初回到1点取れば勝率は6割を超える、あくまで確立の話ではあるも統計的に見ても、初回の1点の重きは馬鹿には出来ない。

エンジンがかかりきる前の成宮鳴の立ち上がり、何としてでも点を取らなければこの先も活路を見いだせない。

スコアリングポジションにノーアウトからランナーを置きながら点を取れなかった

となると士気にも影響してしまう。

2番小湊亮介はきつちり送りバントを決めてランナーは1アウト3塁。

スクイズに犠牲フライ、そして先ほどの大胆な走塁から見られるように、緩い内野ゴロなら突つ込む気満々のサードランナーだ。

立ち上がりは悪いけれども、エンジンが掛かれば青道と言えども点を取ることが出来ない信頼していることもあり、1点は覚悟、それ以上与えなければどうにかなると原田雅功は踏んだ。

強力打線の一角を担う3番・伊佐敷純。彼が逆方向に打つことを得意としているのは稲城実業バッテリーも頭に入っている。だからアウトコースの甘い球はこない。

本人もそのことをよく知っている、だから狙うのは

—来い……来い……オラア！ インコース来い、オラア！

狙い通りのコースにボールは来る、しかし球種はストリートに張っていた。狙い通りのコースに飛んできた予想外のスライダーに差し込まれた。

予想外に戸惑うも、伊佐敷の強い気持ちは本人の動揺に影響を受けることなくバットを思い切り振りぬいた。

『初球打ち上げてしまった！ ……………だが、セカンドは必死にボールを追う！ 面白い当たりだ！』

「ぶつつつ飛んでいけ！ オラア!!」

『あー！ 落ちた！ セカンドとセンターのちようど真ん中、サードランナーの雨宮は打球が落ちたのを確認するとホームイン！ 青道高校、なんと今大会無失点の成宮くんから見事1点を勝ち取りました!』

今大会一度も得点を許していない成宮鳴からあつさり得点を奪う。とても大きなタムリーヒット、そして続くは4番・結城哲也。

青道高校のボルテージは一気に高まる。ここで息の根を止める、試合を決めるために勢いのままに押し潰す、だがそれが出来ればどれほど楽だろうか。

何れにせよ、強力打線の最強の男の登場に青道高校はスタンド側も含め期待を込めて熱量が増幅する。

やけにあつさりと取られた1点、今までの相手とはわけが違う、そして結城哲也を前にして成宮鳴はようやくエンジンに火を灯す。

顔つきが全く別物に変化したのを感じ取る、ゆったりとした姿からは殺気が滲みだしていた。

マウンドから文字通り見下ろす、顎を高く上げて見下すもそこには油断の気持ちは欠片もなく、投手としてのエゴが前面に溢れ出ていた。結城哲也に投げ込んだ初球はど真ん中。

がしやりと音を立ててバックネットにボールが突き刺さる。

タイミングは寸分の狂いもない、しかし成宮のストレートは結城哲也の想像よりもボール1個分上を通過する。

強気というよりも、力んで力まかせに投げ、ボールに力はあるも制球は疎ら、ストレイトで力押しをし続け、しかしながら結城哲也は甘く入ったボールをいまいち捉えきれずにカウントは2ボール2ストライク。

再び甘く入ったストレートはサード側のスタンドへ勢いよく飛び込んだ。

フェアゾーンに入っていれば長打は間違いないし、成宮鳴といえども鼓膜を突き破ろうとする高音に危機感を覚えた。このままではやられると、長年の経験が告げている。

—鳴、わかっただろ。今のまま投げ続ければ間違いなく打たれるぞ、それに、頭を冷やせ……出し惜しみは無しだ

—確かにね、りよーかい

絶対的エースVS絶対的4番、決勝戦に相応しく1回表から会場は熱気に包まれる。
2ボール2ストライク、この打席6球目に稲実バッテリーが選んだのは……………

「ツトライク！ バッターアウト！」

『三振！ ……で成宮くん緩い球でタイミングを崩しました』

『結城くんもしっかり対応していたように見えました。がボールの上を振りましたね』

140キロ後半のストリート、キレのあるスライダーとフォーク。それだけでも厄介だが、緩急が加わった。それに、チェンジアップもただのタイミングを外すボールではなく、歴とした変化球。

青道ベンチに戦慄が走る。結城哲也がストリートをフェアゾーンに飛ばすことなく、チェンジアップは彼の予想を超えて空振り、信頼されている4番を完全に封じ込めた成宮鳴に軍配が上がる。

5番増子はスライダーを引つ掛けサードゴロに打ち取られ慌ただしさを残して青道の攻撃はスコアボードに1を刻み終わった。

3

『1回裏守備につく青道ナイン。マウンドには背番号11、1年生投手降谷が上がります』

誰もが憧れる剛速球を武器に周囲を騒めかせる1年生右腕の登場に会場はわかりやすく盛り上がる、1点先取した後の守備がいかに重大か降谷自身も理解している。

主導権を握るためにもしっかりと抑えなければいけない場面だ。

ペース配分は考える必要はない、悔しいが後ろを継いでくれる投手がどれだけ凄いか知っている。

「打球が飛んだときは、よろしくお願いします」

マウンドで、頭を下げた。

準決勝で休ませてもらった意味、この大舞台で先発を任せられた意味、初めて見せた行動に全てが表れている。

ベンチで声援を飛ばす虹稀を傍目に降谷暁はより一層集中力を高めた。

—打たれるつもりも、点を取られるつもりも、監督はああ言ったけど君と変わるつもりもない

自分の体力の無さ、投球術の未熟さを考えたうえでの継投だという事はわかってい
る。しかし、それを上回る結果を9イニング続ければ現実はまだ違ってくると思った。

—決勝のマウンドなのに落ち着いているな、安心したぜ。あとはどこまで通用する
か、だな

降谷はデータ上立ち上がりは良くない、初回の失点率は高く制球もまばらである。だ
が、それは自滅しただけのこと、打ち崩されて入った失点というのはほとんどないに等
しい。

高め振らすことのできる剛速球、そして高速で落ちるスプリット。たった2つの球種
が降谷暁の生命線。

高めに手を出さず、カウントが悪くなったところで甘く入ったボールを強振。稲城実
業の作戦はいたってシンプルだ。

1回の裏、稲城実業の攻撃は降谷の剛速球とスプリットを前に三者連続三振に終わる。

たまに大きく外れることはあるが、それでも杵は捉えている。球は走り、思ったより浮いてはいない。

あつさりと取れた先取点、文句なしの立ち上がりを見せた上々の出来前の降谷。成宮鳴のチェンジアップに動揺を隠せないでいるベンチの横で、勝利を掴み取るマウンドに上がるために試合を俯瞰しながら準備を始める。

あまりにも上手く行き過ぎた始まりに胸騒ぎを感じつつも虹稀はブルペンでキャッチボールを始めていた。

1点は取ったが、それだけで勝てるほど甘くない。何より、全力投球の降谷に対して稲城実業の成宮鳴は点こそ取られはしたものの余力は残りすぎている。

それに、この熱さだ。体力の少ない降谷がどこまで行けるか想像できない。降り注ぐ焼き付くような夏の日差しが、戦いの行方を嘲笑っていた。

VS 稲城実業：出陣

4

成宮鳴の立ち上がりを上手く捕まえ青道が1点リード、試合は硬直したまま序盤が終わろうとしていた。

稲城実業は依然として降谷暁の球を捉え切れてはいない。彼の全力投球の賜物ではあるが、9回は絶対に持たないペースでの力投が稲城実業の攻撃力をねじ伏せていた。

3回が終わり、降谷が投じた球数は56球。9つのアウトのうち三振で6つ奪うもそう簡単にはアウトにならない、ファウルで粘りただでは転ばない気概で向かった結果は順当だった。

一方で成宮鳴は着々と調子を上げていく。4回表4番結城を2打席連続の三振で切り伏せた。

驚くべきは投球の巧さ。甲子園を賭けた戦いであるのに抜いた投球で青道打線を難なく抑え込む、球数を減らし試合全体の流れを見据えての投球。悪く言えば4番の結城哲也以外に対しては手を抜いている、だがその上で簡単に抑え込む非常にレベルの高い投球を難なくこなしていた。

果たして青道高校レベルの相手に対し、このような投球ができる投手がどのくらいいるのだろうか。

間違いなく言えることは、成宮鳴の投手としての力は高校生の中でも頭一つ抜けている。何より恐ろしいのがまだ2年生だという事。

一方で派手に見える降谷の投球で球場は盛り上がるが、野球をある程度知っているのなら偽りの雰囲気は感わされず、敏感に流れの変化を読み取っていた。

4回裏、2巡目に入った稲城実業打線はようやく牙をむき始める。充分三振を取られたもののここまでただで、というわけではない。

じわじわと効いてくる毒を孕ませた作戦がようやく効果を発揮する。

—さて、どこまで持つかな？

マウンドの熱さを降谷と同様に知っている成宮鳴はほくそ笑む。

もともと制球が良くないタイプ、ある程度神経を使いながらの全力投球は確実に体を蝕んでいる。

4回裏のトップバッターに対し遂に出塁を許した。瞬足が一番の武器である神谷カールロスは青道が最も出したくないランナーの1人であり、それをフォアボールで出すという嫌な予感のする出し方。

『稲実』はバントを選択、2番白河くんが堅実に転がしました。初回の青道とは対照

的に堅実な策を取りました。そして俊足のランナー神谷くんを2塁に置きクリーンナップを迎えます』

3番吉沢は初球から迷いなくバットを振り切った、サード増子のファインプレーで2アウト2塁とするもセットポジションになつてから明らかに球威が落ちたのは誰が見てもあきらかだ。

『4番キャッチャー原田君』

―バットは短く持ったまま、2塁に俊足のカルロス。2アウトだし歩かせるのは問題ない、厳しく攻めるぞ……長打もあり右打ちも出来る、稲実で警戒しないといけないバッターだ

御幸は強く気持ちを持って、と胸を叩いてジェスチャーで伝える。

1巡目のストリート主体の投球とは異なり、初球から変化球で入るピッチング。

原田のバットは空を切るが、そのスイングに迷いは見えない。

厳しくコーナーを突くことも、緩急でタイムイングを狂わすことも出来ない。技術で翻弄することは元より考えていない、構えたミットはすべてインコース。徹底的に近めを攻め3球で2ストライク1ボールへ追い込んだ。

ウイニングショットを変化球にするか、ストリートにするか絞りにくい嫌らしさが前面に出た良いリード、御幸の想定通りに事は進んでいた。

『相手投手の特徴も、成宮の相棒としてここがどういう場面かも充分頭に入っているな……ならば監督として一言だけ言っておこう、この場面キャプテンでもキャッチャーでもなく4番打者として打席に入れ』

不意に甘いコースに飛んできたボール、ストレートかスプリットか迷ったまま振り始める。

スプリットと知覚するときには判断するのでは遅すぎる。一瞬の思考時間、反射とよく似た刹那の時間、浮かんだのは国友監督の言葉だった。

『4番打者としてあの投手と勝負してこい』

その言葉が僅かな迷いをかき消し、思い切りに油を注ぎスイングに力を宿した。

グラウンダーの当たりが降谷の左を抜けた。

セカンドの小湊亮介のミットは僅かに届かない。

「抜けたー!!!」

「走れカルロス!!」

2アウトと後がないカウント、ボールが前に飛んだ瞬間からカルロスは快足を飛ばしホームへと突き進み、センターの伊佐敷が前に突っ込みそのままホームへ返球するも、神谷カルロスは颯爽とホームベースを通過した。

『体勢を崩しながらも執念でセンター前へ！ 稲城実業高校初めてのヒットは主砲の夕

イムリー!』

「まだ1点だ気にするな」「2アウトバッター集中」と味方からの声援が降谷に投げかけられる。

点差は1―1と同点ではあるが、成宮鳴によるテンポの良い投球から生まれたりズムにより、流れは稲城実業に傾きつつあった。

2アウトで先ほどタイムリーを打った原田を1塁において打者は5番成宮、ファールで粘りフェンス直撃のタイムリーを放つも暴走気味に狙った3塁で刺され4回裏の稲城実業の攻撃は終了した。

あつという間に同点、そして追加点を奪われイニングが終わる。起伏の激しい球場の空気がはさながらジェットコースターのようだ。

そして降谷の球数は4回終わって68球、成宮を3塁で刺せたのは良かったが、それでも青道に分が悪い。

片岡鉄心は決断を迫られていた。出来れば5回まで投げてほしかった降谷に限界が見え始め継投を本格的に考えなければいけなくなつたためだ。

現状ブルペンで準備をしているのは背番号18の山元虹稀とエースナンバーを背負う丹波光一郎。顎の骨を骨折しここまで状態を上げた丹波光一郎ではあるが、状態は万全とは程遠く、どうしても不安が残ってしまう。

1イニング、もしくは2イニング持てば問題はないのだが。

背番号18を背負う山元虹稀には先日も言ったように、マウンドに一度上げたら下すつもりは本当になかった。入学してからたった4ヶ月で急激な成長を続け、最も期待している……エースに相応しいと感じるようになってしまった投手だからだ。

指揮官として冷静な判断を下さなければならない、個人的な思いを抑えて客観的に、冷静に次の1手を考える。

1―2と点差は離され、成宮鳴相手にこれ以上の失点は出来ることなら避けたい。そして、彼を相手にとれる点数はそれほど多くはない。

5回表の攻撃、逆転され試合が動いた次の攻撃は降谷のツーベースヒットから8番白洲の送りバントで3塁に進ませる。9番倉持がショート深くに打球を転がすもショート白河の好守に阻まれ3アウト。

降谷は打撃では申し分のない活躍をしており、ベンチに下げるのはもつたいない。かといって守備のことを考えればセンターの伊佐敷はもちろん、ライト白洲、レフト雨宮のどちらとも安定性という点では程遠い。

5回裏、稲城実業の攻撃に入る合間に片岡鉄心は腹を括った。

「山崎……………山元を呼んでくれ」

『青道高校選手の交代をお知らせします。ピッチャー降谷くんに代わりまして山元くんが入ります。7番ピッチャー山元くん』

今大会降谷と並び注目を集める1年生投手がマウンドへと向かった。背中を押す声援は信頼と期待が入り混じったものだが、グラウンドの熱さに混じって消える。

ベンチから飛ばされる声には背中を後押しするような声しかなく、1年だから頑張れ等という優しい気持ちは一切ない。

そこにあつたのは確かに青道高校をここまで導いてくれた投手に対する期待の表れでもあつた。

片岡鉄心も先日の言葉を忘れていないわけではない、そして送り出される前に一言だけ言った「すべての力を出し切ってこい」という言葉は虹稀を後押しするには的確な言葉だった。

自らを鼓舞してマウンドへ走って行った姿に迷いは一切なく、1年生らしい初々しさは消え風格のある佇まいは荒れた試合を落ち着かせる効果が十分あつた。

『青道高校は投手をここでスイッチ、今大会青道高校の大躍進を支えている2人の1年生投手のうちの1人、背番号18番を背負った山元くんがマウンドに上がります』

『降谷くんはランナーが出た途端に打たれ始めましたからね、この暑さもあって相当消耗しているでしょう。この継投は悪くないと思いますよ』

山元虹稀は決勝の舞台だというのにずいぶんと落ち着いていた。確かに集中はしているが、体に余計な力が入っておらず、適度の緊張感で投球練習に臨んでいる。

バックの野手からも緊張をほぐそうと守備練習の合間に「打たせていいぞ」「思い切り投げろ」と激励の言葉を笑って受け止める。

—球速は130中盤、降谷に比べたら全然遅い。継投するんだったら普通に考えて順番が逆だろ

打順は6番山岡陸から始まる5回裏の攻撃、打席横で投球練習を眺めていた山岡は素直にそう思った。しかし一方で警戒は怠らない。

球速差を考えると速い降谷に対して遅い虹稀を持つてくるのは得策とは言えない。だが、青道高校はあえて虹稀を後ろに持つてきた。ならば間違いない理由があるはずだ。

そうでなければただの愚策というものだ。甲子園を賭けた戦いで愚策を弄する指揮官がここまで勝ち上がれるわけがない、1—2と逆転し投打ともに稲実を苦しめた降谷を完全にベンチに下げた、その代わりに投入した投手が凡骨であるわけがない。

山元虹稀という投手は球速を生かして打者を打ち取るタイプの投手ではなく、全体的

に能力は高いが突出しているのは制球力、そしてキャッチャーの御幸と組み合わせると最大の効果を発揮する。

とはいえ、150 km/hを投じる降谷暁の方が稲城実業メンバーは厄介であるという認識には変わりはない。

130 km/h中盤の選手などいくらでも攻略してきたし、ちようどよい球速だ。それに対策してきた丹波と変化球の構成もほとんど同じ、狙うのは時折甘く入るストリートという攻略法は通じないと考えてはいるが、基本方針のカーブは捨てストリート狙いという大まかな戦略に変化はなかった。

投手が変わつての投球練習、ストリートは勿論カーブを織り交ぜて投じ、稲城実業に對して見せつけるように投げていた。

プレイ、と審判からコールがかかり6番山岡は打席に入る。

―さて、最初の球は……アウトコース、真っ直ぐから入るぞ

だが御幸のサインに對し、虹稀は首を振った。

―マジよ……じゃあ、カーブか？

2回、3回と首を振る。稲城実業が把握しているのはストリートとカーブ、もしかすると小さなスライダー、もしくはカットボールがあってもおかしくないという認識程度。

ようやくサインが決まり代名詞でもあるワインドアップを大きな動作で行う。

―首を何度も振った、選んだ球種がこれとはな……面白い作戦だけど、吉と出るか凶とでるか

ドン、と際立つ音が鳴ると一拍置いて「ストライク」と審判が判断を下す。

初球アウトローにストレートが突き刺さった。

首を振ることににより山岡の意識が変化球に大きく割かれてしまった、そして惚れ惚れするようなアウトローへ直球が飛んできては捉えることは難しい。加えて、虹稀の球質が空振りさせることもなく、見送らせてストライクを獲得したのだ。

―ボールの威圧感は降谷よりかはない、けど低めなのに伸びてくる

まだ様子見の段階ではあるが、この時点で稲城実業は山元虹稀は予想以上にクレバーな投手だと認識を改めなければならなかった。

御幸の要求に素直に従う事が出来れば一筋縄ではないかない、それでも十分凄いととは思っていたものの付け入るスキは充分にあると考えていた。ただ要求を素直に飲む、自己主張をしない投手ならばこの異様な空気でどこか綻びが生じる、その時が息の根を止める時だと想定していた。

だが、実際に初球から自ら仕掛ける、考えて事を起こす。結果的に1球で山岡が心理的に追い込まれたとなると、予想以上の苦戦を強いられる可能性も考えられる。

成宮鳴がピッチングでリズムを作ったように、もしかすると全く同じことをやられることがないとは言いい切れないのだから。

真つ直ぐ2球であつという間に追い込み、3球目は僅かに外れる外角の球に食らいつつもファーストの結城がファールゾーンで捕球し容易く1アウト。

7番平井翼に対しても外角を執拗に外角を攻め、最後は外角寄りのカーブにタイムニングを狂わされピッチャーゴロに打ち取られた。

明確に行われる外角中心の攻め、ストレートとカーブの2択でコースはほぼほぼ限定されているのにも関わらず抑えられているのは初見ならではのアドバンテージが虹稀にあるからではあるが、御幸と虹稀は先を見据えていくつかの伏線を張っている。

試合の残りイニングはこの回を含めて5イニング、仮に1回打者4人で平均的に終わるとすると20打者、約2巡程しか回らない。

そのため、1巡目は小細工なしで抑えられれば、というのが山元―御幸バッテリーの基本方針だ。

5回の裏、稲城実業の攻撃で見せつけたいのは外角中心の攻めをしますよと言うアピール。

御幸のことをよく知る稲城実業のメンバーなら疑ってくるだろうが、それでこそ意味がある。まずは徹底した外角攻めで稲実の下位打線を抑え込み、外角を打とうと踏み込

んだ時、厳しく内角攻めを行う布石だ。

さらに先のことを見据えた話で行くと、虹稀が自ら判断し、プレート幅を大きく使ったピッチングで投げる球に角度を付ける。

薬師戦で投げ合った真田から学んだ技術ではあるが、糸を引くような伸びのある綺麗なストレートに左右の角度が付けば厄介であるのは間違いない。

そして2巡目を見据え、ひたすらストライクゾーンを広げる作業を行う。

テンポの良いピッチング、ほとんど真つ直ぐとカーブであれば審判も球筋が見やすく、出来ることであればボール1／4個でも広くなれば最後の秘策が十分に使えるというもの。

明川戦で楊舜臣も行っていた手法ではあるが、虹稀と御幸が用いれば稲城実業相手でも決定打になり得る武器となる。

あとは、1年生投手を盛り立てようと打線がどこまでついてきてくれるかが勝敗の鍵を握っていた。予定ではこれから1点も取られるつもりはないが、何が起こるかかわからない。何よりまだ1点差で負けていると点数を入れなければ勝ち目はない。

成宮鳴相手に青道打線がどこまで食いつけるか、山元虹稀も点数を取られる気は更々なく、それを実行できるだけの十分な実力と相棒と戦っているのだ。

決勝の舞台だというのに、スイッチして投げてきた虹稀は余裕を見せながら投げている。

る。

あくまでそう見せているだけであって心の中は集中と緊張でいっぱいいっぱいではあるが、その態度を見せることが大事だと経験からわかっていた。

稲実の選手は当然いい顔はしない、頭に血が上るのは当たり前で変に力が入ってしまえば虹稀の思う壺だ。成宮鳴のように見下した投球はまだできないが、1年相手にいいようにやられているという印象を植え付けることが出来れば後々良い方に作用する。

順当に8番の梵勝美を三振で打ち取り、勢いづいた稲城実業の推進力を打ち消した。大きな流れは稲城実業にあるのは変わりがない、しかし山元虹稀が精一杯のピッチングで僅かに流れを手繰り寄せる。

—想定通り、けど……思った以上に熱いな

10球程度しか投げていないものの、アンダーシャツには結構な量の汗が染み付いた。

この試合で登板させてもらえる意味、重さは覚悟していたが深遠で待ち構える異様な雰囲気疲労をより促進させているのかもしれない。

しかしそれは降谷や虹稀だけではない、成宮鳴も同じこと。

「……ナイスピッチ」

「おお、ありがとう。あとは任せろ」

降谷から差し出される水で薄めたポカリを受け取ると、すぐに飲み干し1番の雨宮瑠偉に対し、ベンチの一番前から声援を送る。

とにかく、早く追いついて、そして点を取らなければ勝てない。本人が気づいていないうちに焦る気持ち体がグラウンドへ向かわせていた。

「山元、はやる気持ちはわかるが今は影で休んでおけ。これからもっと熱くなるぞ」

片岡鉄心が虹稀に休むように誘導する。気持ちだけで十分とはこのことだろう、今とはかく休むことが何より大切だった。

マウンドの熱さは投手にとって脅威でしかないのだから。

「ほら山元！ 氷で首を冷やし、タオルで風を送ってやるから早くこっちに！」

ベンチの一番奥かで虹稀を迎えたのは水を持った小湊春市とタオルを持った沢村が待ち構えている。

「ほら、ボスも言ってるぞ」と沢村に半ば引き摺られるように後方へ連れていかれた。

沢村の意味の解らない激励は御幸の一声によって収まり黙々とタオルを仰ぎ続け、風を送り続けた。

虹稀は感謝の念を表すと思考を切り替える。

自分が任されているのは3年間の思いが募った決勝のマウンド、結果を出すために今はリカバリーに努めなければこの先どう影響してくるかわからない。

2・3度大きく息を吸い、呼吸を整えた。

「はつきり言つて、今までで最高だ。低めの球も手元で伸びてくるし、カーブの曲がりも申し分ない」

「あざつす……一也さんから見て、1巡目なら2つだけで抑えられそうですか?」

「多分な、ただスコアリングポジションにランナー出たらカットボールは使おうと思う。上位打線にはプレートを使つて幅を出しても構わない」

「わかりました」

「先は長いぞ、休めるときに休んでおいて損はない。お前の応援がないくらいでみんな打てなくなったりしねえよ」

成宮鳴の恐ろしさは御幸が良く知っている、気休めかもしれないがこれからグラウンドが最も熱くなる時間帯を迎えることになる。

その暑さの中では流石にパフォーマンスが落ちる、それは互いに同条件ではあるものの途中登板の虹稀の方が影響は大きく受けない、と考えた。

とにかく今は我慢の時間、もう一度流れは青道に来るはずだ。その時を信じて耐えしのぐ。

夏の太陽は容赦なくグラウンドを照らしている。

充満する熱さは温度か熱気かわからない。

準優勝は敗者だ、そんな言葉があるようにこの舞台で勝つのと敗けるのでは意味が違い過ぎた。

この試合の結末がどうなるか誰にもわからない。

だが、少なくとも、誰かの勝利の女神は彼が勝利することを微塵も疑う事はしなかった。

VS 稲城実業：均衡

6

「だあ——！——！——！畜生！」

そう叫びたい気持ちを抑え、次は打てるな、という雰囲気醸し出しベンチに戻る。甘く入ったスライダーを左中間に運ぶも、レフトの好守に阻まれバックボードの右上に赤いランプが灯った。

読み通りの狙い打ちであつたが、それだけで簡単にヒットが打てるほど野球というスポーツは甘くない。

コンマ数秒単位の僅かなズレが凡打か好打を左右する場合もあるように、ほんの少しの誤差のような事柄が結果という明白なものを簡単に覆ってしまう。

ほとんどの場合、その例外はあり得ないが。

野球においてこの例外が連続して発生するとき「流れが来る」等の表現をする時がある。打ち取った当たりのボールが野手間の間に落ちる、イレギュラーなバウンドに変

化する、ほとんどミスをしないう選手がエラーをする、等々。

普通の凡退がエラーによりランナーを出塁させた、連打が続く、自分のチームにとって都合がいい事象が連続して起こることを流れが来るとも言うが、そう言った意味では青道に流れは依然としてきていなかった。

かと言つて稲城実業高校にその流れがあるわけでもない。

このまま何も起こらなければ青道高校の敗北が決定し、3年生の引退が決まることには変わりがないままで。

背番号18の1年生投手が青道高校に作り出した小さな波をかき消すかの如く、成宮鳴は今までと比べてギアを上げ1番から始まる青道の打線の目の前に立ちはだかつていた。

2番小湊亮介、3番伊佐敷も順当に打ち取られランナー出すことはなく、リズム良く6回表の攻撃が終了した。

この回の攻撃で良い点を挙げるとするのならば初めて成宮鳴のチェンジアップが外野まで飛ばされたこと、の1点のみ。

3番の伊佐敷が辛うじてバットに当てここまで誰も当てることさえ叶わなかった緩い球が初めて飛んだ。

彼が力を抜いて投げていることを青道側は知っているため、打った本人たちからは悔

しさしか現れないが、スコアを付けていたクリスだけはチェンジアップが外野まで運ばれた時、成宮鳴が地面を小さく蹴ったのを目撃していた。

外野へ飛ばされたことに對する苛立ちか、はたまた他の理由か今は定かではない。

余計な推測が時に墓穴になってしまいう事を知っている、果たしてその行動の理由が何なのか見極めるまでは迂闊に話すことは出来なかつた。

明らかに配球の変わつたこのイニング。見せつけるかのような緩い球は青道高校側へ嫌でも印象に残る。

スコアを付けると同時にこの試合から得られる情報全てから筋の通つた、説明のつく正解を導き出そうと頭を動かす。

全ては勝利のために。

◇◇123456789

青道1000000

稲実00020

7

一抹の不安が過る。

これまで投げる試合で躍動してきたのは間違いない。

投げるたびに何かを学び、打たれるたびに変化し、勝つたびに飛躍した。その道のは決して平坦ではなかったけれども、全てにおいてあまりにも上手く行き過ぎていた。嬉しいことではある、しかし苦渋の道の末に用意された華やかな舞台でこうも完璧すぎると少しだけ、何かが気にかかる。

今まであまり強風に煽られることのなかった花が、もし嵐に遭遇したら。

そのような仮定の話だが、後がない3年生の気迫を目の当たりに、最終回が迫るにつれて異様としか言えなくなる雰囲気の中で何かしらアクセント起こってしまうような予感を御幸の頭の片隅に数瞬過ってしまう。

—後のことは考えるな、今はバッターを抑えることに集中しろ

自らに言い聞かせてミットを構えた。

—外側にカーブ、斜めの方……今まで全部ストライク入れてきたし、一也さんはストライクゾーンに構えているけど、ちよつと外ぞ

プレートと蹴り、ストレートを投げる時よりも1歩近く歩幅を狭めて綺麗に抜いた。

ストレートとは真逆の回転で一度浮き上がり、そこから地面に向かって落ちていくような軌道を見せる。

9番富士川はコンパクトに振りぬくが当たったのはバッツの先。サード増子が軽快な動きでファーストに投げて易々と1アウトをとる。

—次はカルロス、降谷のストリートにも初見で合わせてきたしな……つつても山元は威力勝負じゃなくてコース勝負のところあるから関係無えか

外のカーブ、アウトロー真っ直ぐを続けて2球、4球でテンポの良く2ストライク1ボールと追い込んだ。

—次が勝負球だ、多少甘くても問題ない。腕を振れよ

—やつとですか……インコース

これまで構えを見せなかった内角に初めて構える。

3球目のアウトローを仕留めれなかった時点で勝負は決まっていた。

互いに良く知りえてはいるが、頭脳戦では御幸に軍配が上がる。だからこれまでのアウトコース攻めですらいつ内角が来るのかと考え迷ってしまう。

いつ投げてくるのか、投げてこないのか考えても無駄だと思腹を括った次の球で思わず体を引いてしまう真っ直ぐが目を覚ますような厳しいコースに決まった。

「ストライクツ、バッターアウト！」

ここまですべて大きく外れたボールはない、ベースとバッターボックスのライン間を通り、審判のジャッジに委ねられたコースに臆することなく投げ込んだ虹稀を褒めるしか他はないだろう。

悔しさを滲ませ幾ばくかその場で固まるも、神谷カルロスはあくまで虹稀には嫌な顔

をせず潔くベンチへ戻った。

ここで審判に抗議しても印象が悪くなるだけ、加えて点差的には1点勝っているという現状が彼の冷静さを保つのを助けていた。

―にしても、あのコースを今後とられるとなると面倒くせえ

「真つ直ぐ思ったより伸びるぜ、あとカーブは思ったより落ちる。内角使ってくるぞ」

すれ違い様に端的に告げる、2番白河はある程度狙い球を絞って打席へ向かった。

ベンチへ戻ると成宮鳴が「そんなんじやピッチャー休めないよ!」と愚痴つてはいるが全くその通りだと苦笑する、「そんだけ言えてれば大丈夫だろ」と軽口を叩くも夏の炎天下だ。

洒落だけで済ませてはいけない発言。

互いの投手に言えることではあるが、途中登板した虹稀と成宮鳴では経験とペース配分に成宮鳴に軍配が上がるうとも虹稀の方が有利だった。

あとは雰囲気にも呑まれることさえなければ、投手としては残りのインニング虹稀の方が些か余裕があると言えるのかもしれない。

ただ、温存して投球している成宮鳴とほとんど7〜10割での投球を続けている虹稀とではそう遠くない回で形勢が入れ替わってしまう可能性は十二分にある。

稲城実業2番白河は粘りを見せるも、最期甘く入ったコースを仕留めきれずにこの回

もあつさりと3人で攻撃を終えてしまった。

—クソつ、詰まった……粘つてくれるのをあえて見越しての甘い球？ それとも俺であれば甘い球でも抑えられると？ 次は確実に捉えてやる

—今日は球の質がいい、いつもより格段に力感のないフォームとしなること出所が見にくくなった勢いの良い変化球と真つ直ぐ。この調子で行けばそうそう点を取られることはない……後は俺たちが点を取ることだけだな

青道高校の投手交代により、試合に引き締まりが生まれた。

成宮鳴・山元虹稀の両投手が、ある程度制球に優れ、ストライクゾーンで勝負できる投手であるためだ。

均衡を保ちつつ、着々と試合は進む。

風船が静かに膨らんでいくように、針が刺されれば一瞬ですべてが崩壊しかねない危険を伴つて。

この場合、風船に突き刺さる針と言うのは、どちらかの投手が崩れる瞬間だろう。

—さてと、行きますか

そんな中、さも当然かのように成宮鳴は立ち上がる。

修羅場と言うにはほど遠い、これ以上に苛烈な局面なんて何度も潜り抜けてきた彼にとつては、まだ生温ささえ感じていた。

◇◇123456789

青道1000000

稲実000200

8

「4番・ファースト・結城くん」

打順は2巡目以降に入り、ウグイス嬢のアナウンスも簡素になる。

現状のまま試合が終われば、甲子園の道が立たれることになる青道高校にとっては、この回の攻撃は大きな意味を持つだろう。

4番で主将の結城哲也がトップバッターで始まった終盤の入り口、成宮鳴の攻略の糸口を掴むためにも何としてでも先頭打者をファーストに置きたい場面だ。

それを知って、スタンドの応援も一層盛り上がる。

鬼気迫る雄叫びが、結城哲也に降りかかるも、彼の耳には届いていない。

それほどまでに研ぎ澄ませた集中力、全国屈指の攻撃力を誇る青道の4番。

当然、稲城実業バッテリーも警戒はしている。

その中で、結城哲也も賭けに出た。

1点ビハインド、1点が欲しい青道と、1点もやりたくない稲城実業。

点数が入りやすい打順と言うのは、そう簡単に回ってこない。この7回表、結城哲也は自分から始まるこの打席がどれほど大切かは理解している。

直感的な判断でリスクは当然高いが、結城哲也はこの打席に限り制約をかけて挑んだ。

―チェンジアップは考えない、ストレートの標準を絞る

本人に聞いても、なぜそんな結論に至ったのかと言う論理的な説明は無理に等しい。答えられるのであれば“感”としか言いようがない。

妄信的な強固な決意、繋がらない点を無理やりつなげて出した結論は、あまりにもリスクが大きい。

しかし、一方で全球種に対応するなど、この試合中に出来るかわからないのだから、あの意味理に適った判断だった。

初球からフォーク、スライダーと変化球を続け、カウントは2ボール1ストライク。徹底的な変化球の攻め、ストレイトもストライクに投げてくれるかわからない。

しかし、この男が揺れることは微塵もない。

―チェンジアップがチラついているだろうな。ここで、厳しくいくぞ

原田が構えたのはアウトコース、前回の打席同じ所に投げられたチェンジアップが脳裏に残っているだろうという思惑の配球だ。

更には前の回で多投し見せつけた分、結城哲也の対応しなければならない。その一瞬の迷いは、スイングを鈍らせる。

『カウントは2―3、ウイニングショットにチェンジアップを持つてくるか!? サインを交わし、6球目——』

その迷いを抱えたまま、成宮鳴のストレートは打てる筈がない。

伏線は引いた、あとはエース成宮を信じるだけ。

バッテリーともに意思の一致したウイニングショット。

裏をかきすぎたのか、結城哲也の直感がたまたま当てはまったのか。歓声と悲鳴が大音量で奏でられる。

所詮結果論でしか語れないスポーツにおいて、過程を悔いることなどあまり意味がないのかもしれない。

稲実バッテリーは明確に意図を持った上でその球種を選んだわけで、結城哲也はリスクをとった結果が出ただけで。間違いなく言えるのが、勝負に軍配が上がったのは、今回は結城哲也だったという事実だ。

『捉えた! 右中間に飛んだ当たりは大きい! 長打になるか?!』

気にしないと決め込んでも、残像は脳裏に焼き付いていた。

それを振り払うシャープで鋭いスイングは、僅かな振り遅れをもともせず白球を

外野の奥深くまで誘う。

『悠々とセカンドへ！ 青道高校・4番の結城が均衡を破る2ベースヒット！ 我慢の時間が長かった青道高校に、反撃の狼煙が上がりました！』

振り遅れたのが功を奏した。技術と力を兼ね備えたスイングが、ボールの勢いに勝った結果、セカンドの頭上を軽々と超え、右中間を突き破る。

積もりに積もった鬱憤を晴らすように、青道スタンドは神宮球場を割らんとする大音量で青道へと声援を飛ばす。

ただ、青道高校の好機は裏を返してしまえば、落胆への大きな入り口でもある。

ここで攻撃を終わらせてしまえば、嫌な印象は残すものの、稲城実業を勝勢に導く材料になるだろう。

だからこそ、この回で次につながる1点を挽ぎ取らなければ青道高校は敗北の一途をたどる可能性が、敗北の2文字が濃く漂ってしまう。

セオリー通りならば、送りバントも十分考えられる。だが、片岡鉄心の作戦はどこまでも攻撃的だった。

5番増子に送った指示は送りバント。

ランナーを3塁に置き、そこからプレッシャーをかけるといふものだった。

特に左投手の成宮鳴の視界には3塁ランナーは嫌でも目に入る。

牽制には気を付けなければならぬが、目の端でウロチヨロされると彼とて煩わしいだろう。

当然、それは稲城実業にも手に取るようにわかる。

バッテリーとしてもセオリー通り仕方がない、と思つたくらいだ。

それならばと、初球はインコースに構えた。

成宮鳴も結城に投げていたギアのまま投球モーションに入る。この場面出し惜しみしている場合じゃないのは目に見えて明らかで、制球は大雑把になるものの速球と変化球のキレは更に上がった。

『おっと、青道高校は5番の増子君がバントの構えをしています』

『ここはなんとしてでも1点欲しいですからね。いや、ここはバッターしつかりと決めなくてはいいけません』

増子とて、このチャンスの重大さはわかる。そして強豪校の5番を打つ打者として、ヒットは打てなくとも、内野に転がすくらいは平然とやつてのける。

3球目のスライダーをサードに見事転がし、その間に結城は3塁へ。

『1アウトランナー3塁。ここから1点欲しい所で御幸くんに打席が回ります』

1アウトランナー3塁、確率的に言えば60%で1点が取れる絶好の場面。

ここまでヒットがない御幸に対して、稲城実業の内野は前進守備にシフトをチェンジ

する。

青道からすれば、何としてでも欲しい1点。稲実からすれば、何が何でも渡したくない追加点。

—ここは、決めないといけない場面だな

そう多くの点は取れない試合でのチャンス、両校ともに言えることではあるが、成宮鳴擁する稲城実業を相手にする青道からすればここは絶対に点が欲しい場面。

スクイズも考えられるが、読まれればサードランナーを殺してしまう。

『スクイズも考えられるこの場面。御幸くんはバントの構えを見せません』

『稲実バッテリーは外と内に1球ずつ外して、カウントがきつくなっていますからね。青道高校がいつ勝負を仕掛けるのか見ものですよね』

ランナーを3塁においての揺さぶりは、効果的だった。

結城は第2リードを大きく取り、すぐに3塁に戻ることを2度繰り返し、御幸のバントの構えから成宮も前に出なければならぬ。

—スクイズをやりたいならすばいい。鳴、潰すぞ

—逃げてても仕方ないしね、りょーかい

『さあ、2ボールノーストライクから注目の3球目……おおっと、振って来ました！』

『サードランナーはスタート切っていますね。ミットに入った後に振りま

したから、もともと空振りするつもりだったんでしようけど、いやはや、攻撃的ですな』
片岡鉄心のサインは「待て」1球様子を見る、という算段のサインだった。

バスターの空振りは完全に御幸の独断、ストライクゾーンに來たためミットに入った後でのスイングだったが、スクイズだけじゃないぞと印象付ける素振りには十分だ。

—さあ迷え迷え、何を仕出かすかわかんねえぞ？

驚く成宮にしてやったりと意地の悪い笑みを浮かべる御幸。内心イラつきながらも冷静さは崩さない。

サードへの牽制を1球挟み、ランナーの意識を僅かでも帰塁に向けさせる。

投げる球自体も素晴らしいが、こういった小技も難なくこなせるところが2年生にして高校最高と呼ばれる所以なのかもしれない。

バッテリー間のサインが決まり、青道は攻撃のサインが決まる。

成宮がプレートを踏み、数瞬止まる。

『さあ注目の4球目……』

ゆったりとしたプレートを外さず、体を傾ける牽制の後、一級品のクイックモーションで4球目を投じた。

その瞬間、結城はホームへ脇目も振らず走り出す。

『やってきたー!!! スクイズー!』

だが、稲実バッテリーも読んでいた。

—こちらとて、読んでたんだよ！

大きく外に外れるボールに御幸は横っ飛びで食いつく。

『転がした！』

ベースに覆いかぶさるように倒れるも、ボールはしつかりとフェアゾーンに転がって
いた。

弱々しく転がる打球はサードよりのキャッチャー近く。

しかし、原田が取りに行ける距離ではない。

必然的に、成宮鳴と結城哲也の競争となる。

1点奪取かまたはまた死守か。

御幸はバットを持ち結城が心置きなく滑り込めるスペースを空け、ファーストへ走り出した。

丁度並走となる形で結城と成宮がホームへ向かう。

そのまま駆け抜かれる攻撃側と、グラブでボールを拾い投げランナーにタッチしなければならぬ守備側。

極限の状態で互いにベストを尽くした結果は、審判のコールを聞くまでもなくファーストにボールを投げた原田の行動が全てを物語っていた。

『トスが出来ないちよつと遅れた——！ 2対2、青道高校スクイズで1点を挽ぎ取りました！』

素直に転がした御幸を褒めるしかない。それに、点差はまだ同点で勝ち越されたわけではない。

いかに優れた投手と言えど2〜3点は試合で失う機会はある。

ランナーはおらず、打線は下位打線。

7番虹稀はレフト前ヒットで出塁するも、白洲がライトフライで3アウト。

たった1本のヒットから1点を奪った青道高校が試合を振り出しに戻した。

ロースコアが続く投手戦、このままいけば終わらないのかもしれない。

そうなれば先に潰れるのはどちらか。

変わったとして、先に掴まるのはどちら側の投手か定かではない。

少なくとも、成宮と山元の投げ合いが今しばらく続くことは間違いなかった。

◇◇123456789

青道10000001

稲実000200

快刀乱麻とはまさかこのことだろう。

2年の成宮鳴に変わってマウンドに上がった1年の山元虹稀は勢いそのままに稲城実業を苦しめる。

投球回数だけで言えばまだ3イニング目。余力は十分にあるだろうが、それにしても出来過ぎな投球内容に稲実是我慢の時間が続いた。

思い切りのいい腕の振りから厳しいコースに投げ込まれる快速球。緩急と駆け引きを用いた技術的にみれば1年生らしくない、思い切りと独創的さでみれば1年生らしい勢いのままに突き進む姿は成宮鳴と並んでも遜色がない。

3番吉沢を5球で三振、4番原田にライト前に運ばれランナーを1塁に置くも慌てた様子はなかった。

どちらかと言えば、実際にセットで投げたらどうなるかを確認したかったかのような様子。

——1年前の俺もこんな感じだったのかね。こりやあ、鼻っ柱折りたくもなる打席に立ち、構えると虹稀を見据えた。

打者としては初めて対峙するも、不思議な苛立ちがある。

徐々に重なる1年前の自分かもしれないし、急成長を見せる若い芽への警戒からなのかもしれない。

事実、球筋を確認すると納得せざるを得なかった。

降谷暁のストレートが実際よりも大きく恐怖さえ感じるストレートだとするなら、山元虹稀のストレートはゴルフボールのように小さく感じる。

どちらかといえば、技術が詰まったような球。

そして、絹の糸のようにスツと伸びる直球は質量を密集させたかのように当たると重たい。

失投らしい失投もなく、あつさり追い込まれた。

「こりゃあ、雅さんでさえも詰まるわけだ。けど、こんだけ見せつけられればこの程度
の直球…………！」

降谷暁の速球に向けて対策をしてきた稲城実業にとって、虹稀のストレートは単体だけでみると大したことがない。

だが、厄介なのは御幸のリードと合わさることによる他の変化球との組み合わせ。

1ボール2ストライクから放った5球目は、外角に納まる弧を描くカーブ。

タイミングを外され、バットを振り切るも力のないゴロが小湊亮介のもとに転がった。

「あー、なるほど……これは厄介だわ

真つ向から向かってくるのではなく、意識の外から止めを狙うスタイルは成宮とは似

て非なるものだ。

それは、真つ向勝負が出来るボールを持っていないことの裏返しでもある。

つまり、成宮が虹稀の攻略法を思いついた瞬間でもあった。

6番山岡をピッチャーゴロに抑え込み、3イニング目も無失点でマウンドを去る。

「さあさあ落ち込まない。見つけたよ、あのピッチャーの攻略法」

それはたつた一言、そして稲実打線にも簡単に出来ることではない。

我慢の展開が繰り広げられる。虹稀がマウンドに上がり、試合のテンポは整い始め終盤へ突入した。

たつた1つのかけ違いで積み重ねてきたものが崩れる。独特な球場の雰囲気の中で、場数を踏んでない選手が終盤のプレッシャーに耐えれずに普段のプレイが出来なくなるなど珍しくはない。

―随分熱くなってきたな……

―まだまだ生温い……

対照的な2人の投手の感想。

既定の9回まであと2イニング、我慢比べが続く。

大観衆の感情の起伏のエネルギーは馬鹿には出来ない。均衡が続き募る思いが、得体のしれない何か育み、それは確かに胎動を始めていた。

稲実	青道	◇
0	1	1
0	0	2
0	0	3
2	0	4
0	0	5
0	0	6
0	1	7
		8
		9

V S 稲城実業：好機と試練

8 回表

成宮鳴をと神谷カルロスを中心に、稲城実業は内外野それぞれが中央へ集まった。

それは稲実のピンチを意味しており、青道高校はノーアウト1・3塁と絶好の機会を作り出すことに成功していた。

7 回表に結城の2 ベースから送りバントとスクイズで1点を返し、7 回の裏には山元虹稀が追加点を許さず、非常に良いリズムを持ち込んだ8 回の表に流れを呼び込んだのかもしれない。

先頭打者、左打席に入った倉持が外のストレートをレフト線上に2 ベースヒット、続く1 番の雨宮はインローのスライダーに三振を喫するが、そのボールは幸か不幸かスパイクにあたり、ボールは大きく逸れ1・3 塁を作り出した。

球数は100 を越え、疲れが見え始める終盤に追い越されるのは厳しい。

点差のリードがない中で、次の1 点は仕方ないのかもしれないが、この1 点が明暗を分ける決勝点になり得るかもしれない。

集まった内野陣の元へ、伝令は1点は仕方ないと告げる。

どんな形でも最低1点は欲しい所。

「内野は中間守備、外野は前に出さず長打を警戒。無理せず取れるところでアウトを取っていいよう」

「はい、監督も言っていました。最少失点で乗り切れと……」

「ふーん、最少失点ね」

「何か不満でも？」

「つまりさ、0つてことですよ？こっちは俺が投げてるじゃん、全然問題ないって。さあ散った散った！」

「鳴、初球厳しく入るぞ。それで向こうの出方を見る」

「わかっているって、しつこ「言わせる、俺の役目だ」

「とにかく1点はいいからな。バッター集中で3人で終わらせよう」

「わかったよ」

『青道高校選手の交代をお知らせします。2番セカンド小湊亮介君に代わりまして、代打小湊春市君』

『8回表、青道高校は前回に続き絶好のチャンスを作り出しました。ノーアウト1・3塁。そして代打の切り札小湊春市君が打席へ入ります』

『1年生ながら代打成績2打数2安打打率は10割、チームのラッキーボーイ的存在になつていますね』

厳しい夏の大会で、セカンドに居続けた小湊亮介に代わつての代打。兄弟だからと言えば、繋がりはあるものの、現段階での総合力は小湊春市はまだまだ亮介には及ばない。しかし、本人がこれ以上は無理だと、涙を吞んで自ら告げた選手交代。片岡鉄心も迷いはない。

何れにせよ、どこかで使おうと思つて準備させていた。決めてこい、そう短く告げて全てを託す。

代打成功率100%を誇る小湊春市の1年生らしくない配球の駆け引き、木製バットを使いこなすセンス、そしてそれによる成宮鳴の感情へ大しての揺さぶりを含めた彼の起用だった。

――1年で、木製バット……舐め腐つてんのか、あ、？

心情とは対照的に、いつもなら激昂していたはずの気持ちは不思議と落ち着いていた。

山元虹稀が成宮鳴に自ずと引つ張られるように、成宮鳴もまた山元虹稀に何かを感じていたのかもしれない。

随分とベース寄りに立ち、デッドボール覚悟の上、アウトコース狙い。そう見せかけ

たインコースへの誘い。

ストライクは要らないぞ、と原田はインコースにストレートを要求する。
しかし、成宮は首を振った。

—球種、の首振りじゃない……コースの問題か？それならアウトコース……
強く、横に首を振る。

2、3度サインを交換し、ようやく領きセットポジションに入った。

—1年で木製バット、ベースに覆いかぶさるような立ち位置、インコースに投げて折ってやろうか。なんて思っていると思っただが、それを逆手にとった高めのボールか……

投手としての勘か、勝利への執念か本人すらもわからない。

ただ、頭に血が上る筈の局面で冷静さを欠いていない自分に本人が一番驚いていた。

2—2の同点の場面、1点やれば窮地に追い込まれる場面にギアが上がると同時に知らないうちにスイッチが入る。

己の力を見せつける奔放な投手の姿はそこにはなく、勝利へただ貪欲な、エースの姿。
小湊春市に投じた初球。

—来た！

狙い通りに来たインコース。

だが、小湊春市はバットを振り切るも、かすりもせず原田のミットに納まった。

『ベースに覆いかぶさるように打席に立つた小湊春市君に対して、インコースの強気な攻め、この場面でも成宮君は強気です。そして次は何を投じるのでしようか!?!』

―誘いに乗ってくれる人だと思っただけ……

確かに張っていたインコース、だがストライクゾーンを大きく外れた高めの球に小湊春市は振らされた。

狙いどおりのコース、だが打席でしかわからない予想を遥かに超える成宮鳴のストリートが小湊春市の更に上を容易くいく。

それでも彼はスタンスを変えなかった。

再びベースに覆いかぶさるように構えを取る。

―この餓鬼が……まあ、敢闘賞つてとこだな

次に投じた1球は、外角ギリギリを掠めるスライダー。

ピクリと、微動はしたもののそれ以上の動きを見せることなくボールを見送った。

元よりインコース狙いだった小湊春市は手が出せなかったというのが正しいが。

ミットに収まった瞬間に告げられたコールはストライク、成宮が手を上げさせたとも言える、そのくらいのボールだった。

―今のは仕方ない……

春一は割り切っていたつもりではあるも、心のどこかに初球を悔やむ気持ち拭いきれなかった。

たった2球で追い込まれ、完全に後手に回ったのは青道高校で、成宮鳴は青道の応援が逆にプレッシャーを感じさせるかのようにつつぷりと間を取る。

嫌がって打席を外すも、成宮鳴が放つ威圧感はずっと増したように感じさせる。

緊張の続き、張り詰める空気を切り裂くような素早いクイック。

遊び球は一つもなく、勢いそのままインコースにクロスファイアのストレートが投げ込まれる。

小湊春市にも意地がある、プライドと言い換えてもいいのかもしれない。

チームを背負ってこの場にいることに、負傷してもそれを隠し、ここまで戦力になり続けた兄の代わりに今打席に立っている。

ーパキヤツ

と高校野球では聞きなれない嫌な音は、成宮鳴のストレートが小湊春市のバットをへし折った音。

ー折られた、けど！

緩やかなゴロがショート正面に転がった。

あわよくばホームゲッツーを狙おうと、ショート白川は前で打球を取るも、倉持が

ホームへあと数瞬のうちに到達するところが目に入る。

もとより、1点は仕方ないと敷いていた中間守備。

雨宮瑠偉も必死に砂煙と体をギリギリの範囲で送球の邪魔をし、小湊春市も必死に頭から滑り込む。

そんな必死さを対照的に、セカンド、ファーストへと鮮やかに送球が送られノーアウト1・3塁から2アウトランナーなしへと状況が変わった。

チャンスは消えた。

それでも青道にとってはありがたい勝ち越し点、稲実にとっては痛すぎる追加点として、8回表に追加点「1」が刻まれる。

6―4―3のゲッツーで稲城実業スタンドは僅かに沸くも、塗りつぶすかのような青道ベンチ、スタンド含めた歓喜の渦が神宮球場を埋め尽くしていた。

手痛い追加点を饒に、3番伊佐敷を打ち取り8回を潜り抜ける。

稲城実業のメンバーは、敗戦の色が濃くなる現実を前に、微塵も負けるとは思っていない。

土壇場に来て、更なる飛躍を遂げた成宮鳴。

けれども、土俵際に追い込まれて殻を破った彼には、敗北へとつながる可能性の高い重い負債が押し掛かる。

ギアの入れ替えを上手く行い、体力を温存していた彼だが、良くも悪くも1段階上に知らず知らずのうちに設定が塗り替えられていた。

それに、ここまで来て温存など勝てなければ意味もない。

最高出力は勿論、最低出力も1段階上がったことに当人も確認は出来ておらず、底が見えてきた体力の消耗は更に激しくなる。

5回から投げ始めた山元虹稀とは対照的に、つらい場面を乗り越え、酸いも甘いも知った。

高校最高左腕と謳われる成宮鳴を前に、1点のリードを守り続けなければならない。それはつまり、山元虹稀含め、青道ナインにとつても重すぎる数字となった。

◇◇123456789

青道100000011

稲実0002000

8回裏

心は熱く、頭は冷静に。

それを心がけて振舞うも、根本的などころで、自分でも驚く程落ち着いていた。

浮足立った最初のイニング、だいぶ慣れてきた2イニング目。そして3イニング目の

8回裏、気持ちは落ち着き、飛ばしていた為、体の温まりもだいぶ早い。

充分な休息と疲労のバランスによってか、体の状態が手に取るように理解る。

自分でも気を抜くと制御が出来なくなる程、力に満ち溢れていた。

感覚がいまいち掴めなかったピッチングフォームの核心にようやく触れた。余計な力が入っていた箇所や、リリースポイント、体の使い方の違い。

下半身の力の入れ方、腕の振り、自分で納得がいくと言いついて聞かせていた僅かな違和感が取れた今、ようやく結果を振り返る時間が出来た。

完全に集中しきるまで戦っていたマイナス方向の雑念が一切ない。

たった数か月ぶりのことなはずなのに、随分と懐かしい。

電光掲示板の球速表示からすると、球速が急に上がったわけではないけれど、キレや伸びと言った感覚的なボールの質というのは大きく違うのが自分でもわかった。

指にかかった真つ直ぐと、中指で引いて親指で押し出したカーブは間違いなく稲実相手にも通用するし、精度も上がっている。

予め練っていた作戦も、上手くいっている。

主にはプレート位置による投球角度の変化と駆け引きだけで、1回目は完全に抑えることが出来た。

予想以上にあっさり。

あとは一也さんのキャッチング技術を信頼して、ここぞという時にフレーミングが生きてくれば3巡目も4巡目も、慣れられたところで立ち向かえる。

小細工を使って、駆け引きを使って、ようやく背中中に手が届いた確かな感触があつた。あの日遠くに見えていた背中が、思いのほか近い。

高校最高、そう謳われた投手に追いつき、追い越す感覚さえある。

所詮こんなものかと、無機質な感想と少しの落胆だけが残つた。

そう簡単ではない。

でも、体を着実に大きくし、強度を維持したまま柔軟性と感覚を失わないようにするだけ。

それだけで、追い越せる。

まあそれがどれだけ難しいかは自分でもわかるし、成宮さんも成長するから時間はかかるんだろうけれど、近いうちに必ず……。

テンポも思い通り、受け取ってすぐにプレート右側から見せつけるように左側に移動する。2・3球目はそのまま、最後はサード側目いっぱい立つて、外角を掠めるストレート。

投げた瞬間、アウトがとれる、と確信した。

次の8番打者も、9番打者も、特に苦勞はせずに2つ打ち取って8回の稲城実業の攻

撃が終わった。

9番の人に、指にかかったストレートを外野まで飛ばされたのが気になるけれど、弱々しい打球だったし良いか。

◇◇123456789

青道100000011

稲実00020000

9回表

俺は、俺自身を最強の投手だと思っているし、それだけの才能はある。

当然、努力を惜しんだことはない。

けれども今、初めて俺に迫れるかもしれない才能を持った投手たちに出会い、短時間で感覚が更に鋭く研ぎ澄まされるのが分かった。

限界だと、極限まで仕上げ挑んだつもりがこの大会。

さつきまで目前で投げていた、急速な成長を遂げる1年生投手の波につられるかのよ
うに引きずられる。

文字通り、命を懸けた技術が同レベルで、あとは気持ちの差と運が勝敗を分ける限り

限りの勝負。

そして、敗戦が確かに近付き、土俵際に追い込まれた。

それと同時に、拮抗し続ける高いレベルの投手との投げ合いというのが、どれほど実力を伸ばすのか、体感した。

上から目線の投球、舐めていると言いつてもいいのかもしれないが、その投球はこの試合の後半に入ってから違っていた。

体力温存のためのギアの入れ替え、4番結城に対して全力で、あとは打たせて取る。

とは言っても、普通に投げて打てるかどうかすら厳しい投手。それだけで十分だった。

これから先を見えて、球数による疲労と質を上げることによる疲労。彼がとつたのは後者だった。

4番結城にはこの打席は成すすべなく三振に打ち取られ、5番増子に至っては1球、6番御幸にも2球で片を付ける。

この回僅か7球でイニングを終え、ほとんど休む間もなく山元虹稀を再びマウンドへ引きずり出した。

度重なるヒットの中には、交通事故のような読んでいた球と球種が同じで、甘いコースに入ったボールを打たれる、という事が多かった。

しかし、この回に至っては意図的に甘いボールを、力を込めて投げ込んで打者を圧倒し続けた。

青道高校からすれば4・5・6とチームの軸である結城から始まる好打順だったが、成宮鳴の前にいとも簡単に3つのアウトを重ねる。

熱さと疲労が蓄積し、暑いと文句を垂れそうだったが、相応しくないと喉元で飲み込む。

調子がいい時ほど、ほんの些細な亀裂が大きな罅となつて今まで築き上げてきたものが、簡単に崩れてしまうという事を、彼は充分に知っている。

そして、近いうちに山元虹稀にも降りかかるだろうと、希望的な未来を予想して。

いや、そんなことがなくとも

「さあさあ、反撃！反撃！この回大事だよ！」

負ける気など一切しなかった。

気休めのような攻略法も通用するかわからない。

少なくとも、この回では絶対終わらないという確信が彼の中にはあった。

◇◇123456789

青道1000000110

稲実00020000

9. 25

「光ちゃんはさ、どんな恋愛したいって思っている？」

奏虹さんと合流して、夏の日差しを掻い潜りながら神宮球場へ向かう途中、急に飛んできた質問が体温を更に上昇させた。

よくパソコンを使い過ぎると熱くなったりするけれど、そもそも熱さでへばっていた体に、唐突過ぎる情報が流し込まれると、あつという間に脳は動作不良に追い込まれた。

「ええっ!?!急にそんなこと言われても……」

「なにになに? 誰か意識しちゃってんの? 全くわかりやすいなー。まあまあそれは一旦置いといて、誰と、なんて考えなくてもいいんだよ。光ちゃんの思う、普通の恋愛ってどんなものなのかなあって」

奏虹さんは時折、凄く大人びている。

外見は綺麗で大人びているのに、普段は少女のように無邪気。

こうやって、論すように言う時は必ず、誰かを思いやっているのかもしれないと、最近になってようやく思い始めた。

最後の方だけ、朗らかな声から鈴のような涼しい声音に変わる。

「そ、そうですね……一緒に他愛もない話をしたり、お祭りに行ったり、出かけたり、とかして、告白があつて付き合つて、それから一緒に色々なことを楽しむとか、です」

「おおーなるほど！ いいねいいねー。青春だなあ」

だけど、その一瞬だけだった。

私の思い違いかもしれない。

「急にどうしたんですか!? え、なんか試されたりしています?」

「ん〜試している訳じゃないけど、忠告……じゃないや、注意みたいな?」

何が言いたいかわかるでしょ? と伏目がちに悪戯っぽくほほ笑む奏虹さん。

私はたぶん、そんなに出来の良い人間ではないんです。

この気持ちだつて、恋か憧れかすら区別がついていません。

正直、これからもつと凄いだ道を歩んでいく人を好きになつたんだと思います。

私より可愛くて性格の良い人なんて、世の中にはたくさんいることくらいわかつてい
るし、本当なら真剣に私のことを考えてくれることすらありがたい事なんです。

でも、私は、忙しいとわかつていても、連絡が来なかつたら悲しんで迷惑かけちゃう

し、勇気を出した告白をはぐらかされて怒ったり。

奏虹さんの言いたいことはわかります、虹稀さんは他の人に興味がない人だから、私だけ頑張っても疲れるだけだし、何より私が思い描いていたような恋愛なんて、高校生の時は厳しいでしょう。

もしかすると、プロ野球選手になって、もつと時間は無くなってしまふのかもしれない。

「純愛だね、これは。あー尊い……浄化される」

「そんなことないですよ、私って性格良くないんです。他の人に目移りしたり、我慢できなくなったら、同じ星に存在したくないくらいには人を好きじゃなくなるので」

「そりゃあ、大変だ」

ようやく報われそうな思い、けれども心が満たされることは少ないと思う。

それでも私は、この人が好きなんだって。

せめてこの夢が醒めるまでは、好きにさせてください。